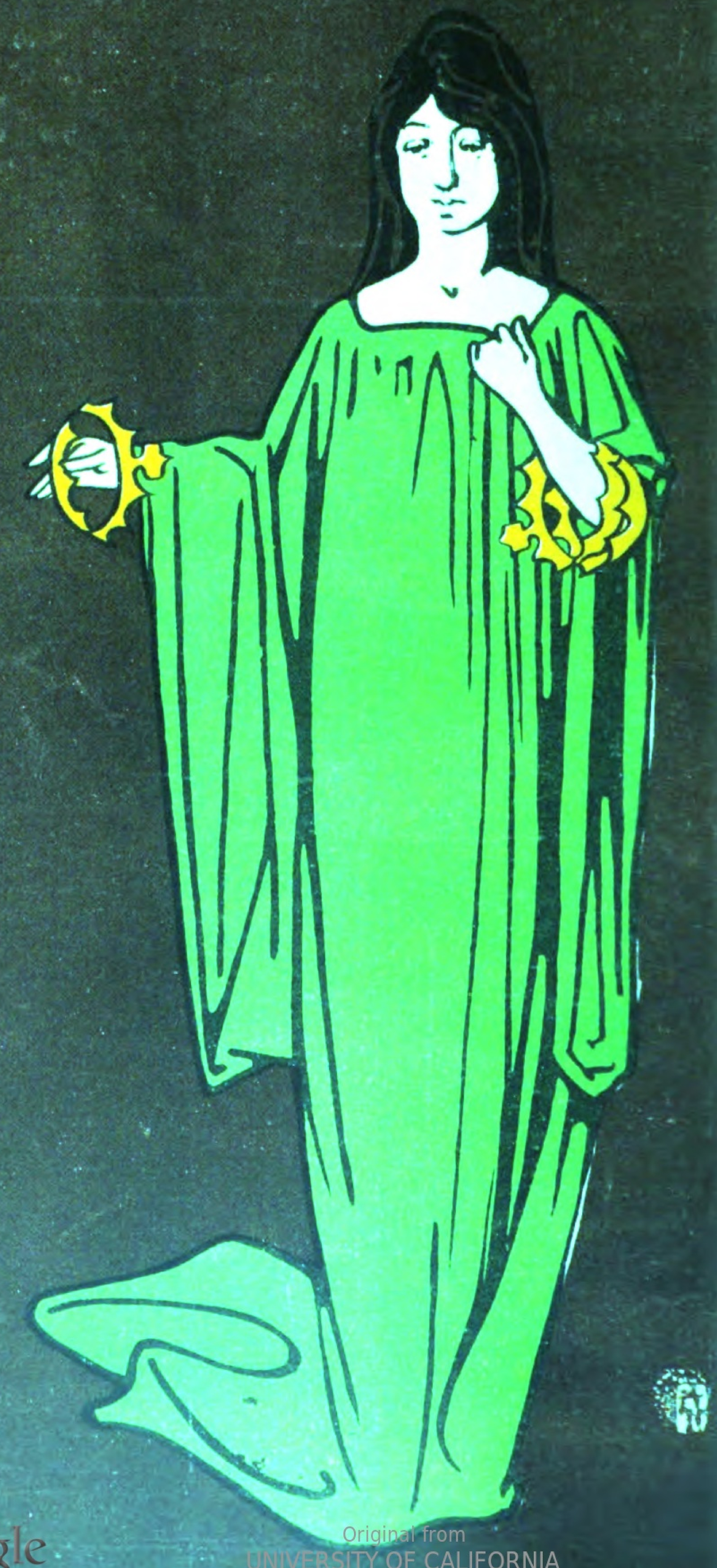
明治四十年六月五日発行(毎月一回五日発行)

女學世界

第七巻 第八號



博文館發行

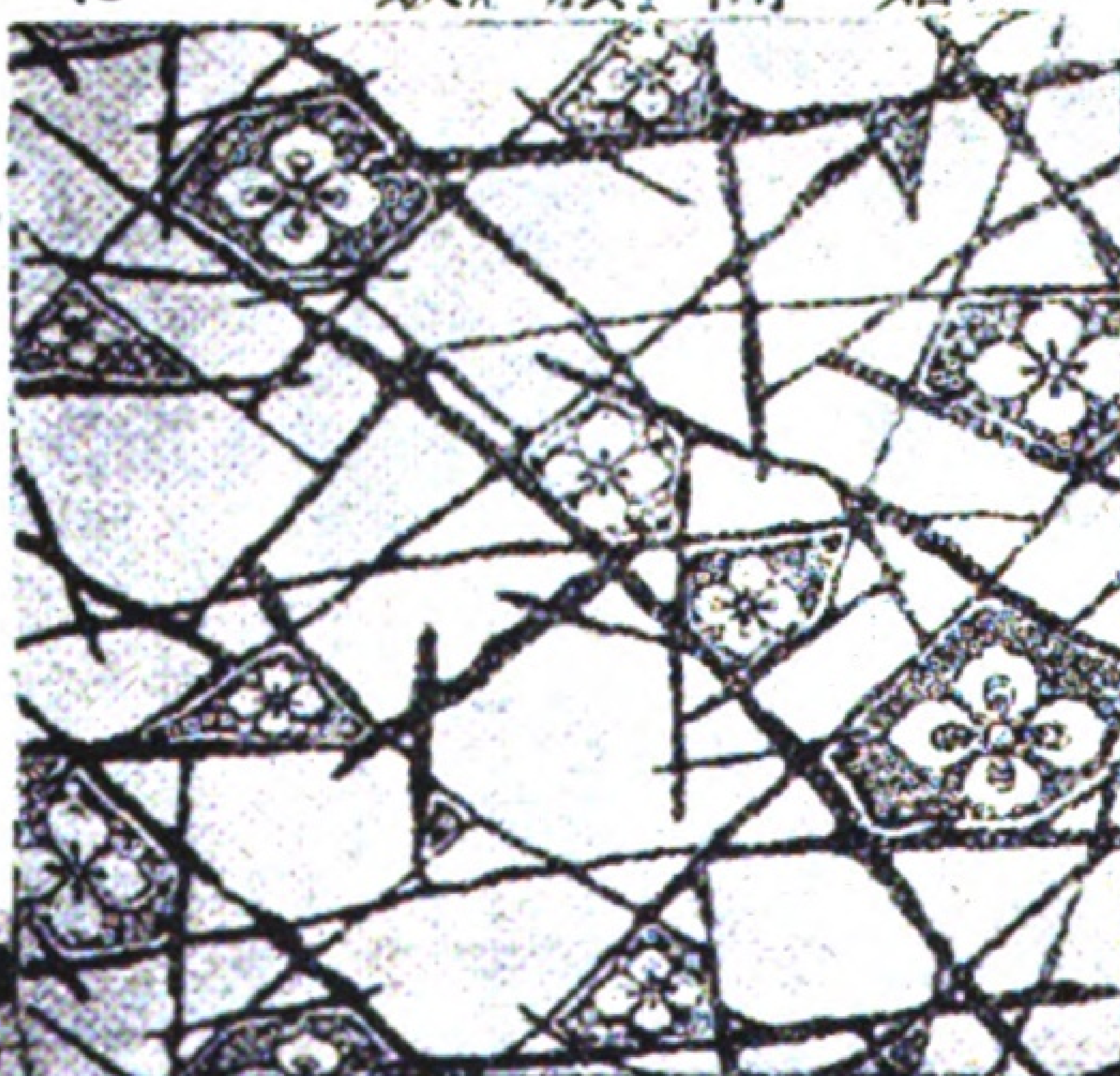
化粧用美顔水は品質最もよろしく方今満天下の貴婦人令孃佳人爭ふて之を用ひ賞賛の聲囂すし色を白くしきめをこまかに光艶をだしうつくしくなる殊に化粧に用ゆればおしろい意のまゝにのりむらにならず常に用ふれば「花の顔せ雪の肌となり」眞に玉を欺く美しき顔となるべし

（本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ）

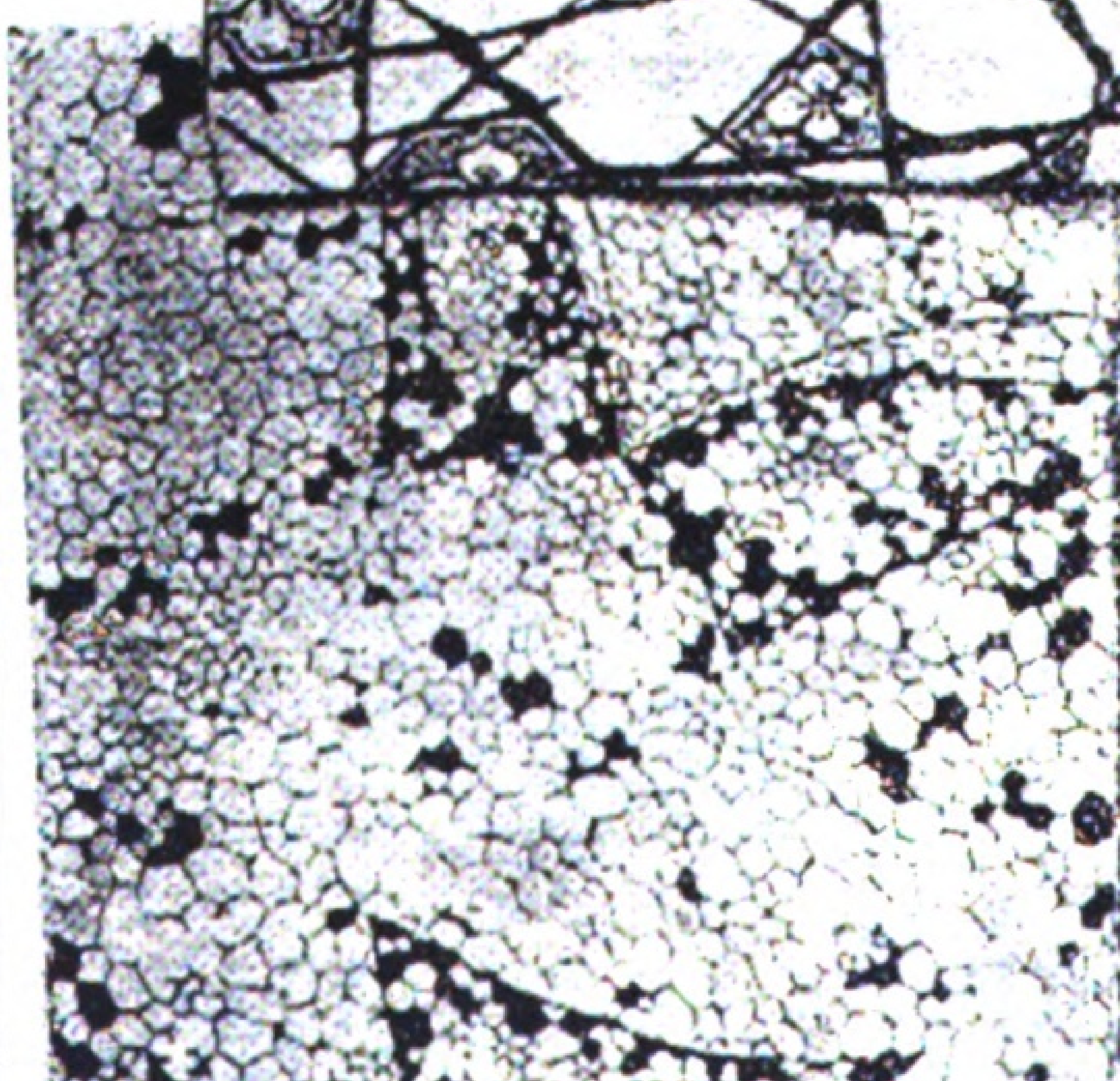
▲東京市は勿論日本全國各地いたる處の有名なる小間物店にて販賣す

◉美顔水は天下唯一の美白光艶剤なり◎





（い）壹圓六拾錢



（ろ）壹圓七拾五錢



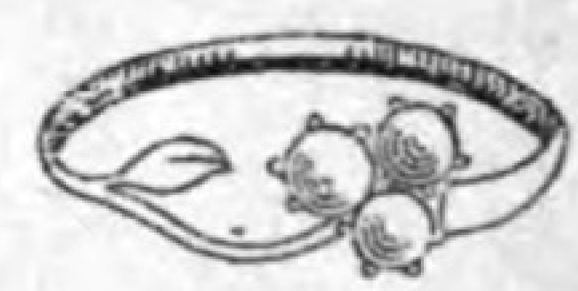
（は）貳圓五拾錢

女學世界 第七巻第八號 目次


美術造花
附属品材料
装飾一式

東京市南傳馬町　大西白牡丹　電話本局三十番

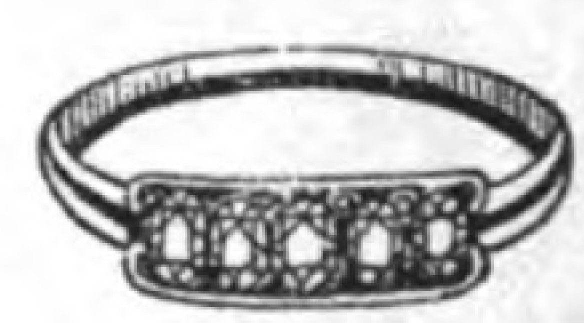
イ號
十八金眞珠三個入指輪
甲價拾五圓
乙價拾二圓



ロ號
十八金眞珠ルビー六個入指輪
價貳拾五圓



ハ號
十八金ルビー又ハサフハヤ五個入指輪
價拾八圓





ニ號
廿金櫻の圖ルビー入彫刻指輪
價拾二圓



ホ號
廿金及白金百合の圖ルビー入指輪
價貳拾三圓



ヘ號
純金及十八金禿菊の圖眞珠入指輪
價貳拾三圓

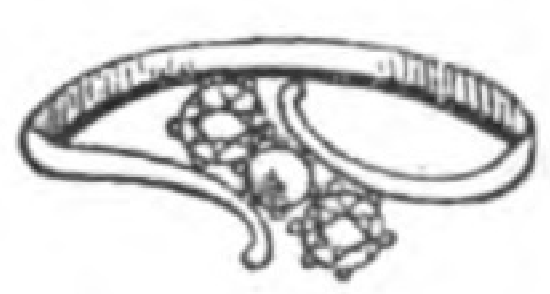
ト號
十八金ルビー眞珠入指輪
甲價拾六圓
乙價拾三圓



チ號
十八金眞珠ルビー入
甲價貳拾圓
乙價拾五圓



リ號
十八金眞珠ルビー入
甲價拾五圓
乙價拾二圓



(甲の一)

大西白牡丹營業案內

送料郵券四錢御送付次第發送す

新刊 ヴァイオリン音譜 報告

◎前宮内省樂師
◎前東京音樂學校講師
◎大阪女子音樂學校講師
大村恕三郎先生編

箏曲 新八千代 附山里 實價貳拾錢 郵税二錢

箏曲 茶おんと 實價四拾錢 郵税四錢

田島羽堂先生編
最新ヴァイオリン教本 定價六十錢 郵税六錢

新箏曲 八段の曲 實價十五錢 郵税二錢

箏曲 六段の曲 附替手 實價二十錢 郵税二錢

箏曲 松つくし(山田流) 春のとぶき(生田流) 實價十五錢 郵税二錢

箏曲 松の壽 實價十五錢 郵税二錢

箏曲 末廣福壽草 實價十五錢 郵税二錢

鳥山啓作歌 恒川鐐之助作曲 尾竹國觀畫
新曲 四條畷 實價廿八錢 郵税二錢

右は何れも音樂大家の編纂せられたるものにして目下好評を得て流行しつゝあり乞ふ陸續御購求あらんことを

東京下谷徒士町三丁目四十九
啓成社

發行所 大阪市南久寶寺町四丁目
前川書店

見落す勿れ

定價金八十錢
東京市内は無料にて御届け可申候

造花用染料

品質純良
着色堅牢
色澤鮮美

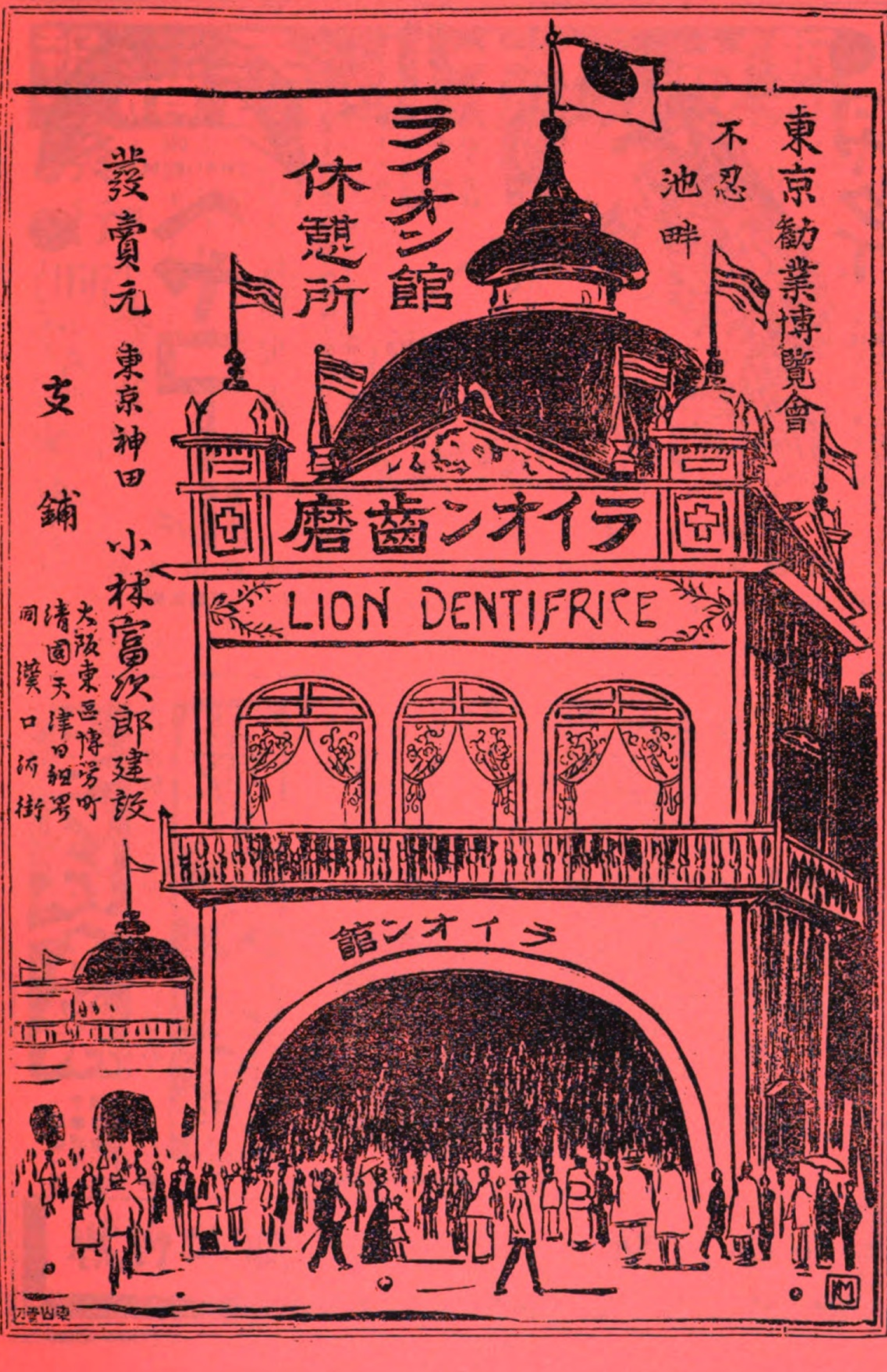
赤、黄、青、樺、鼠、茶、綠、紫、
各濃淡色數種宛て美麗なる箱入となす

各職業學校及女學校御用

發賣元 東京市本所區茅場町三丁目六番地
宮崎金藏

御販賣相成度向は御相談仕るべく候

女(甲の三)


東京勧業博覧會
不忍池畔
ライオン館
休憩所
發賣元
東京神田
小林富次郎建設
支鋪
大阪東區博労町
清國天津日租界
同 漢口河街
ライオン齒磨
LION DENTIFRICE
ライオン館
(甲の四)

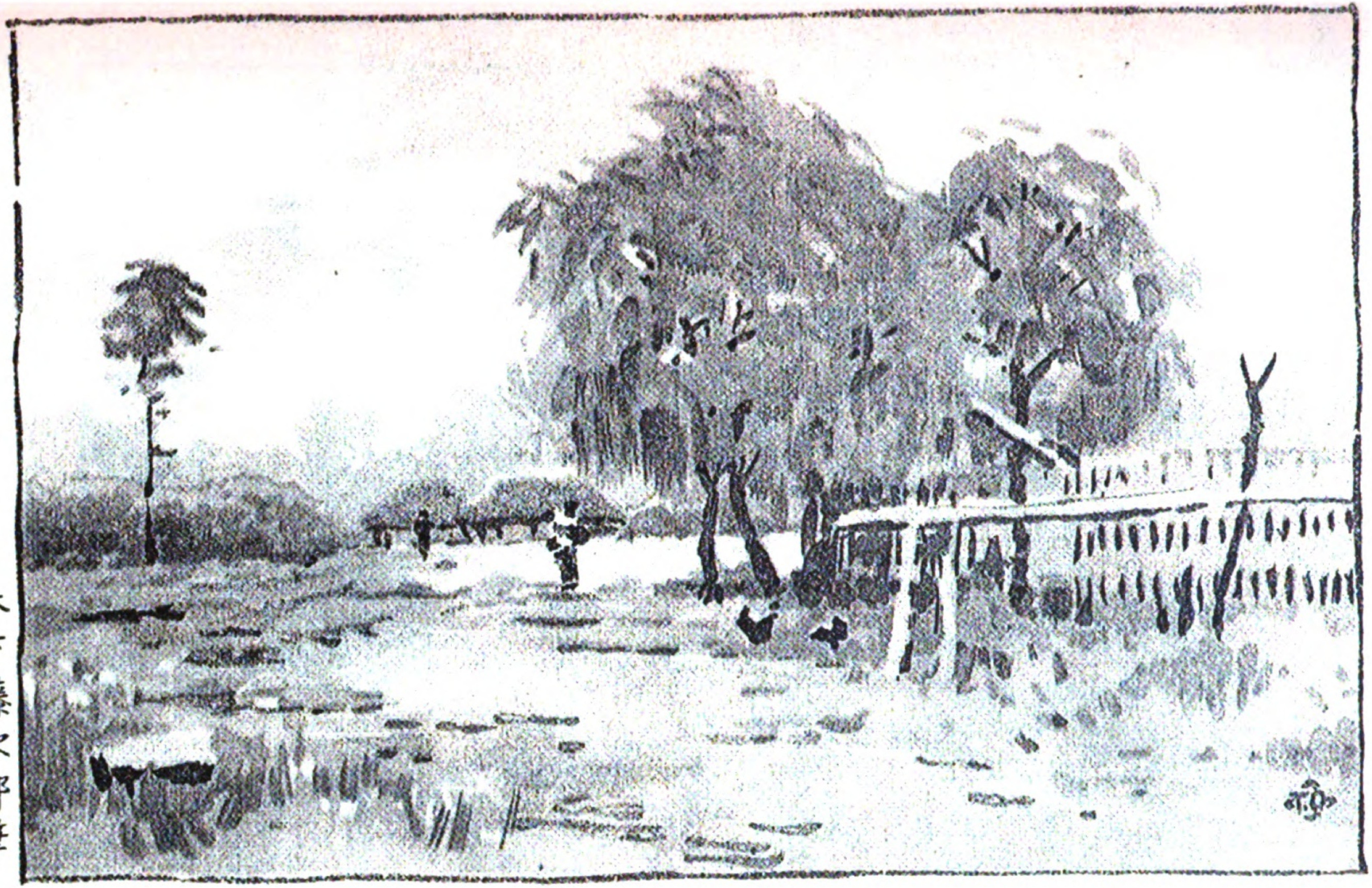
池の汀



女（乙の二）

女（乙の二）

新緑



大下藤次郎筆

登録 高木 商標

近來同名類似之品數多相見へ候に付御愛求の節は人魚の商標と高木與兵衛の名義に御注意被下度候

定價

箱入 金一圓
同 金五十錢
同（ニッケル入） 金三十錢
同 金十五錢

紙包 金二十錢
同 金十錢
同 金五錢



宮内省御買上の光榮を得



世界ニ冠タル逸品ニシテ
毛髮ノ凡テニ特効ヲ有ス

女（丙の一）

（丙の四）

梅雨



戸田玉秀筆

水鄉



福田麥僊筆

（切取線）

◉營業目錄御入用なれば此切取を添へ御申越被下度候（女學世界第八號）◉

縣　郡　町　村

女（丁の一）

数年難治の慢性胃病を根治し消化機能を强壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグチシヤ)、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的姑息式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ眞藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價) 壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割増し

新輸入 肉體美容料

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓七拾錢

以上貳藥**專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

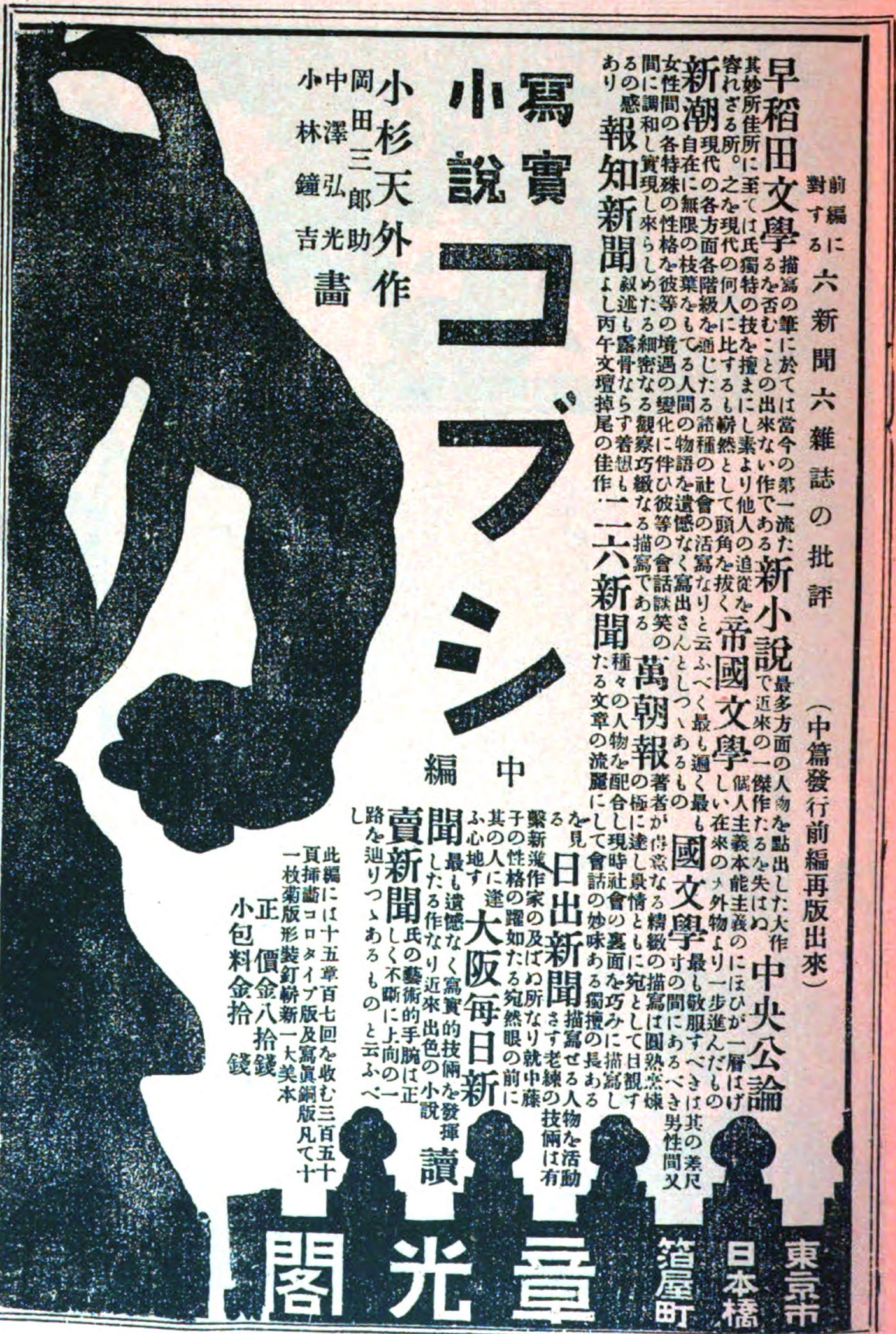


わきが 腋臭

根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢 頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢 着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増のこと

以上貳藥**專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)


前編に對する六新聞六雜誌の批評
（中篇發行前編再版出來）
早稲田文學 描寫の筆に於ては當今の第一流たるを否むことの出來ない作である
新小說 最多方面の人物を點出した大作で近來の一傑作たるを失はぬ
中央公論 其妙所佳所に至ては氏獨特の技を擅まにし素より他人の追從を容れざる所。之を現代の何人に比するも嶄然として頭角を抜く
帝國文學 個人主義本能主義のにほひが一層はげしい在來のゝ外物より一歩進んだもの
新潮 現代の各方面各階級を通じたる諸種の社會の活寫なりと云ふべく最も遍く最も自在に無限の枝葉をもてる人間の物語を遺憾なく寫出さんとしつゝあるもの
國文學 最も敬服すべきは其の差尺寸の間にあるべき男性間又女性間の各特殊の性格を彼等の境遇の變化に伴ひ彼等の會話談笑の間に調和し實現し來らしめたる細密なる觀察巧緻なる描寫である
萬朝報 著者が得意なる精緻の描寫は圓熟洗煉の極に達し景情ともに宛として目覩するの感あり
報知新聞 叙述も露骨ならず着想もよし丙午文壇掉尾の佳作
二六新聞 種々の人物を配合し現時社會の裏面を巧みに描寫したる文章の流麗にして會話の妙味ある獨擅の長あるを見る
日出新聞 描寫せる人物を活動さす老練の技倆は有繋新進作家の及ばぬ所なり就中藤子の性格の躍如たる宛然眼の前に其の人に逢ふ心地す
大阪每日新聞 最も遺憾なく寫實的技倆を發揮したる作なり近來出色の小說
讀賣新聞 氏の藝術的手腕は正しく不斷に上向の一路を辿りつゝあるものと云ふべし
寫實小說
コブシ
中編
小杉天外作
岡田三郎助
中澤弘光
小林鐘吉 畫
此編には十五章百七回を收む三百五十頁挿畫コロタイプ版及寫眞銅版凡て十一枚菊版形裝釘嶄新一大美本
正價金八拾錢
小包料金拾錢
東京市日本橋箔屋町
章光閣

女(丁の三)


衛生家必携 懷中良藥
THE GEM
ゼム
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を增進し消化を助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾癘食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價 七十五粒入十錢 四百卅粒入五十錢 一容器入ゼム
百六十粒入廿錢 九百粒入一圓 二十錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舖 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

女(丁の四)

ほたる



加藤南山筆

燕子花



一条成美筆

女(戌の一)


美術造花材料
造花用材料一式
刺繍用材料一式
摘細工用材料一式
東京市本郷區眞砂町十五番地
百花堂
地方御注文ノ節ハ代金引替
小包郵便ニテ御送リ申上候

●流行に後るゝを厭はるゝ
婦人方の一覽を望む

佛國パリー歸朝婦人の土產（原名ブランドヘーヤ）

束髮前髮じん

特別大形一個 金三十五錢 送料金八錢

一般の束髮及びヒサシ髮用●詳しくは本誌前號第七卷第七號廣告欄を（ほの一）見玉へ數に限りあり御望みの方は至急申込あれ

東京市京橋區廣小路町 佐藤

希望者に特に分與す 佛國パリー製

世界無比
最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日目に必らず美麗に除去すること

保險附 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥價は壹劑分壹圓叁劑半分三圓六劑分五圓拾貳劑分拾圓 送料各拾錢宛必ず添送の事 郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）着金即刻小包郵送す

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

大阪高等醫學校長兼病院長 醫學博士佐多愛彥序
元大阪高等醫學校病院小兒科醫長 長濱宗佶著

增訂三版

小兒養育の心得

全一冊 正價金八拾錢 郵稅金八錢 郵券代用一割增

小兒の健康は家庭の最大幸福なり本書は益好評にして再版既に賣切れ更に三版を發行す本書は小兒の健康時と疾病時とに於ける育兒の心得を細大漏さず懇切叮嚀に說明したる者なれば何づれの家庭にも缺くべからざる良書なり

〇本書は進物として適當なるものなり
〇本書は結婚の祝物として最も適當なるものなり
〇本書は出產祝物として最も適當なるものなり

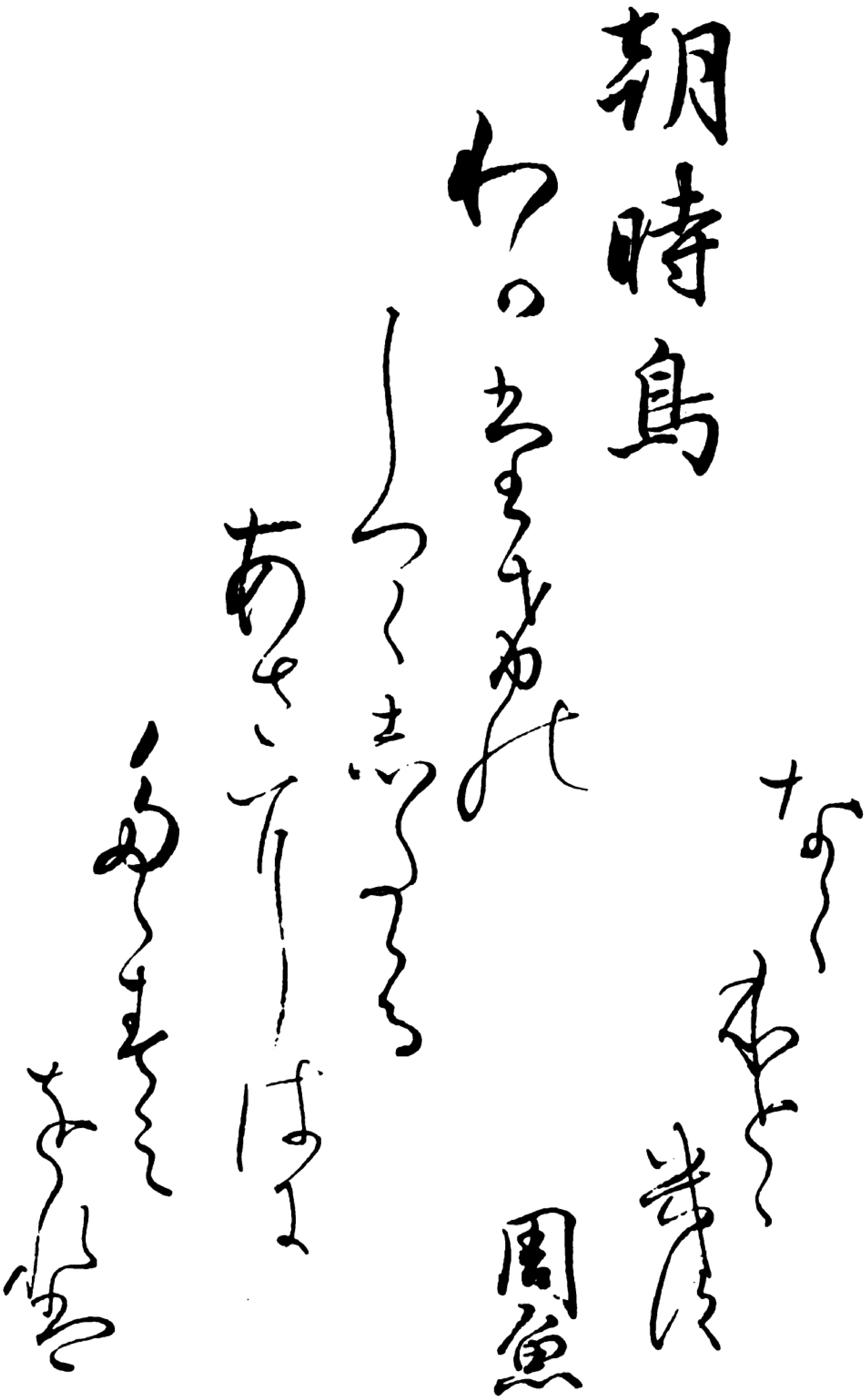
發賣所 東京日本橋通り三丁目 丸善株式會社● 大阪東區博勞町四丁目 丸善株式會社支社● 全國有名書肆販賣

女（戌の三）

友

周魚

ましきみあやこれた
やりけるを人にいかを
こころのいはしく
ともなり
[illegible]



大口鯛二筆

大好評
佛國製

ケーバ香水

有名なる各和洋小間物化粧品店にあり

◎中瓶一本……金壹圓
◎小瓶一本……金五拾錢



化粧品雑貨直輸入商

竹間商店

東京日本橋橘町二丁目　電話浪花(一六一四番)

婦人世界第六號（昨年六月三日發行）婦人の日常生活中「十五」の條に**弦齋居士**が（髪の油は何を用ゆべきか）の題目の下に其の効能を確認せられし**贊辭**あり參照あれ

純粹椿 三宅油



◎近來僞物販賣する商店あり御買求の節は三婦人の商標に御注意を乞ふ（◎升賣は本舗のみに御座候）

定價

	定價	小包料（内地）	小包料（滿韓臺灣）
改良大瓶	一壜金八拾五錢	拾二錢	卅五錢
中瓶	一壜金四拾五錢	拾二錢	卅五錢
小瓶	一壜金貳拾五錢	八錢	三拾錢

◎爲替は東京蛎殻町郵便局宛郵券代用壹割增

本舗　東京市日本橋區人形町通り水天宮際　**間宮三宅堂**（電話浪花六二〇番）

◎其外みやけ香油、みやけおしろい、みやけ油製すき油發賣仕候

女（己の一）

女(己の三)

皇后陛下　御料
東宮妃殿下

御料
みそのおしろい
御園白粉
無鉛

長谷部仲彦發明
日本一の無鉛品

◎御園白粉は忝くも　皇室の御用命を戴いて調進する日本無比の無鉛白粉であります、衛生を重んぜらるゝ婦人達は必ず『御園白粉』を用ねばなりません。

◎煉製『御園白粉』は純白と淡紅色との二種あつて濃淡随意に用ひられます膚に乗りの好い事は勿論、幾度重ねて附けても際立つ事がありません。

◎水製と粉製　矢張白と淡紅の二種ありますが水製は薄化粧に用ひます、粉製は煉製や水製を用ひた上に附けても又洋風の濃化粧用としても随意です。

◎御園なでしこ　は懐中用打白粉として製した物で顔直しをする時に下の化粧を崩さずに用はれる輕便品です。

◎御園の蕾と『とき水』『御園のつぼみ』は洋風化粧下に用ひるクレームで『御園とき水』は煉製を薄化粧に使ふ時溶き伸る外普通の化粧水として特効があります。

◎四季の花　は濃厚化粧水として天下一品の白粉下でありますが是に調合した藥は皮膚の荒れを直すは勿論日燒、凍傷、皸裂等も直す功能を有つて居ます。

發賣元　東京橋町　丸見屋　電話浪花四四八番

（己の四）

古稀の壽筵を張れる松方伯と同夫人





男爵後藤新平氏の家庭



前列右より 一、令弟夫人みどり子 二、叔母山本清子 三、北堂利恵子 四、夫人和子 五、令孃佐野夫人

後列右より 一、令弟彦七氏 二、主人男爵 三、令息一藏氏 四、次令孃愛子 五、令姉初瀬子

女（廣の一）

女（庚の二）

流行繪葉書を買はんとせば
博文館發賣品に注目せよ

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵劵二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井
川名助次郎

優美高尚極薄手形
米國形銀時計



本品は小店特約東洋一手販賣の時計にして價は頗る廉價なるも機械の精確なると形狀の優美高尚にして而も側の銀質等總て米國ウォールサム製に遜色なき良品なり

價拾三圓半　銀側兩蓋中蓋附16 17 18形機械金梨子地寶石入二枚車別爪石巻上向アンクル龍頭引出針廻し
價拾貳圓半　右同品乙號
價拾圓半　銀側兩蓋機械ニッケル惣寶石入別爪巻上向アンクル
價九圓半　右同品乙號
極薄手形太文字　鐵針

◉保險三十ヶ年
◉送料内地拾錢　臺、清、韓參拾錢
◉代金引替は卅錢前金〇振替爲替口座百七十三番

注意　大景品附此廣告を切拔き御注文書同封の御方には鍍磁石、一切の附屬を添へ景品として進呈す　注意

東京銀座壹
伊勢伊時計店

美術造花鏝類專門

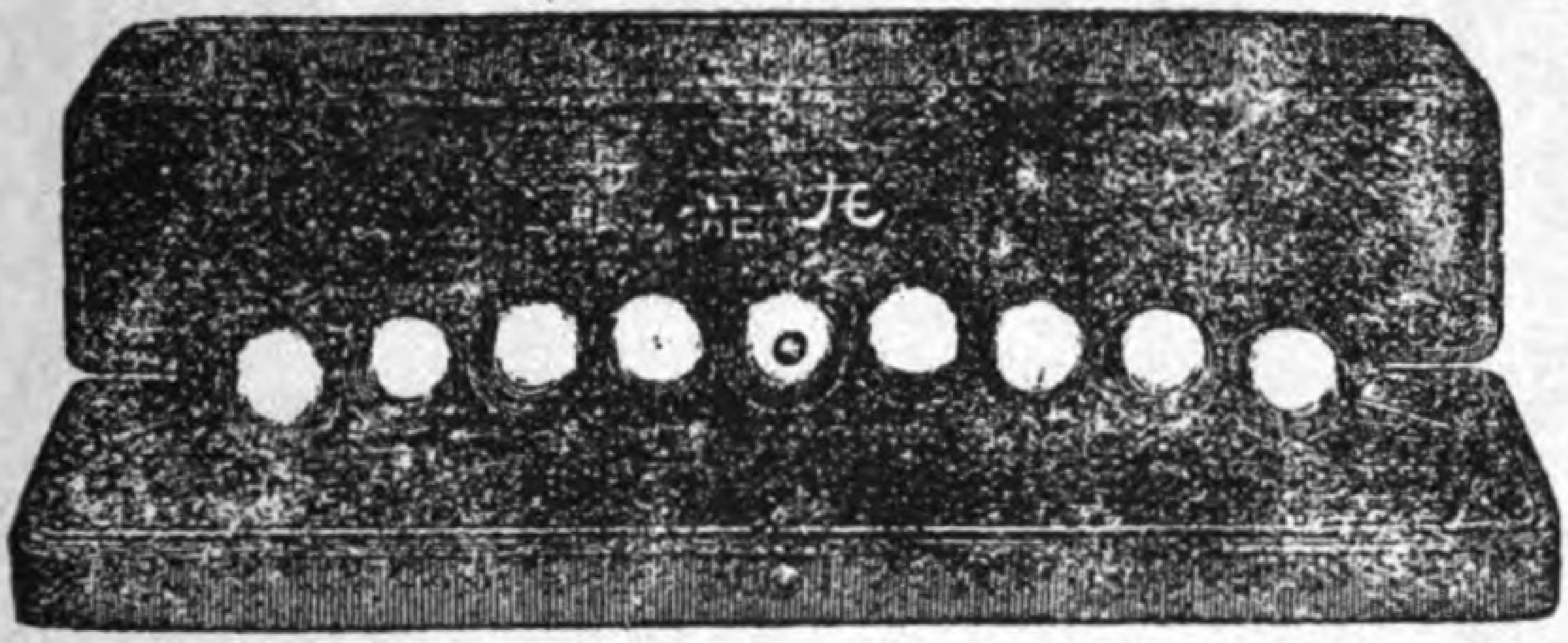
▲打拔。▲袋物鏝類。
▲摘み用器具
及ビピンセット類
(其外諸道具御好みに應じ製造仕り候間多少に不拘御注文被下度候)
市内は御一報次第直ちに持參可致候

東京淺草區田町二丁目二番地
美術造花道具製造販賣　松浦製作所

女(庚の三)

翡翠硅裝身具

(1)



(1)
根掛
丸玉附
三分五厘丸　金貳拾圓以上七拾圓
三分丸　金拾五圓以上五拾圓
四分丸　金貳拾五圓以上

(2)
帶〆
金裏拵
拾圓以上
貳拾圓
内外
メッキ裏
五圓以上
八圓

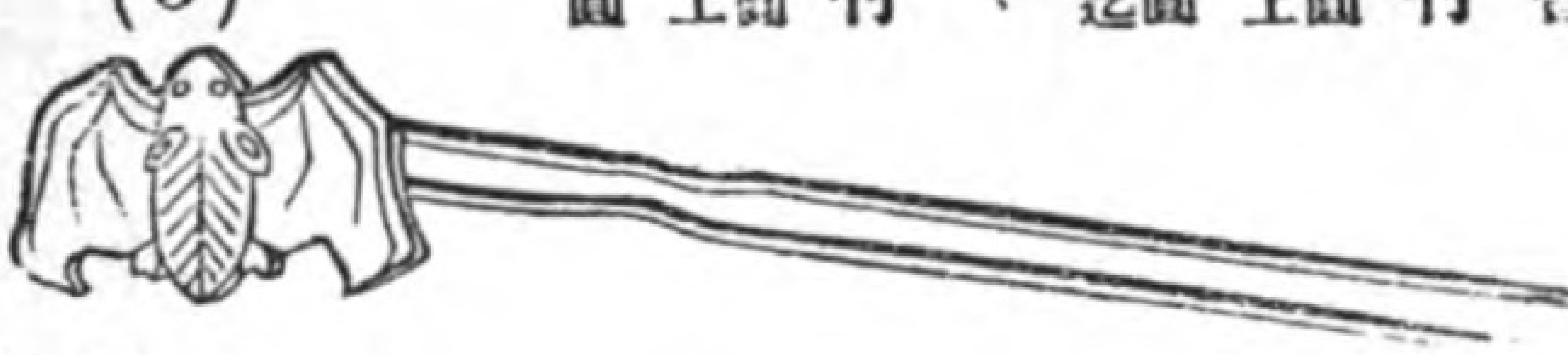
(2)



簪玉
甲　金壹百圓以上
乙　金五拾圓ヨリ七拾圓迄
丙　金拾圓ヨリ參拾圓迄

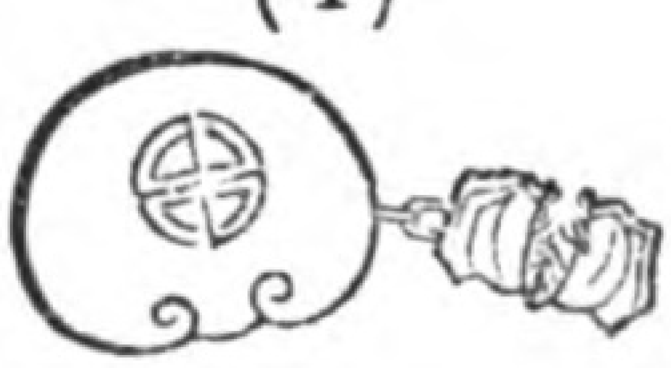
(3)
束髮簪
金足付
拾圓以上
廿五圓迄
メッキ足付
六圓以上
拾圓

(3)



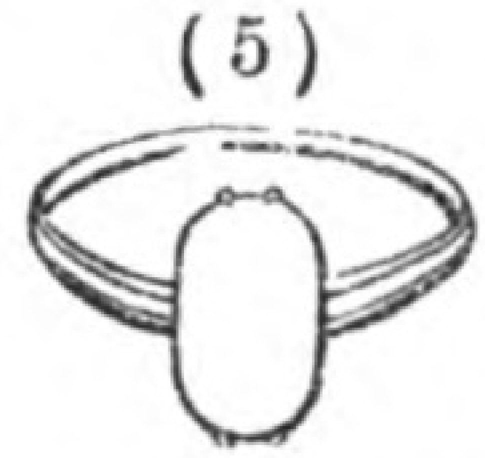
(4)
カフス釦
十八金附屬拵
十五圓以上
貳拾五圓迄
メッキ附屬拵
拾圓以上

(4)



(5)
指環
十八金拵
拾五圓以上
貳拾圓

(5)



增補再版商品目錄出來郵券貳錢

封入御注文次第直ニ御送申候

◎翡翠硅

製品、清國より珍らしき品數々着致しました流行に魁給ふ紳士淑女方弊店へ駕を枉げ御用命奉願上候

貴金屬彫刻品
婦人用裝飾品
寶石美術裝粉
商
東京市日本橋區若松町
嘉
尭嘉
特 電話浪花七六八番

（庚の四）

穂積博士の一家



後列右より三男貞三氏、次男健之助氏、澁澤元治氏、同令息重遠氏、四男眞六郎氏

前列右より澁澤元治夫人孝子、三女晴子、穂積陳重氏、夫人歌子、次女光子

同胞十一人の家庭



前列右より二女八百子、七女清子、父作造氏、八女幸子、母しづ子、長女かづ子、六女さだ子

後列右より五女花子、四女とし子、三女千代子、二男正幹氏（工學士）、長男元藏氏（法學士辯護士）、三男直接氏（商業學士）

元群馬縣警部長原作造氏の一家

女(辛の二)

女（辛の四）

大町桂月君著

桂月 雜木林

大町桂月先生の文名天下を動すと久し 抒情に叙事に議論に何くに往くとして可ならざる無し 或は雍容或は洒脱 或は豪放或は悲涼氣宇寛裕にして情感痛切區々たる技巧の域を超脱して人格の美直に文字の美となる文の仙なる者なり

全一冊

洋裝菊半截紙數三百頁
正價金貳拾八錢
郵税金四錢

◎近日發行

東京 博文館 本町

新式造花獨けいこ

特女中が校閲 無學の女中に本書を讀んで聞かせた丈けでも實に立派に造り得

色標本お分與 全く初心者には造り上げた花と各材料の實物標本とを上げます

三百餘の書を以て平易に親切に説明し尚實物標本さへ分與するのですから如何なる初心者でもはつきり分り容易に熟達す

材料は少し 材料は求め易く造り易い新工夫がしてありますから實用極少し

道具は不用 最初の道具一組三拾五錢で揃ふ 定價表書中にあり實際親切な本

日本造花研究會著

挿畫三百餘頗美本机上の飾となる

定價金五拾錢 郵税金六錢

振替貯金口座番號六六五

最新刊にて初版二週間賣盡し再版

發行所 東京牛込納戸町六 明治の家庭社

女(辛の五)

女(辛の六)

清裝



大河内子爵夫人



郵船會社支配人春田源之丞氏令孃

淡路高等女學校卒業生

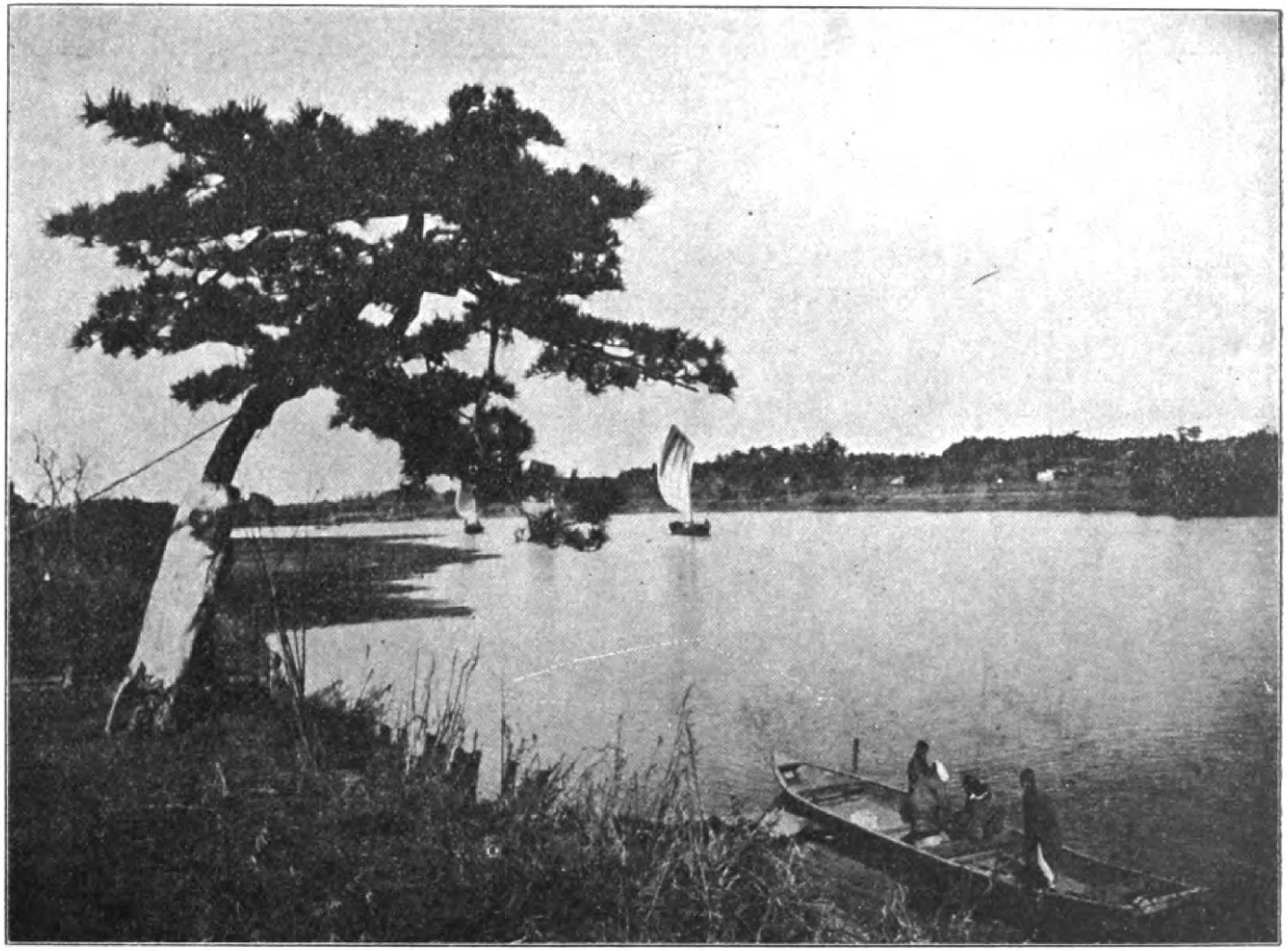


實踐女學校校友會



同校所在地澁谷御料地內

江畔



女（壬の一）

醫學士 田村貞策君
朝夷孤舟君 譯述

（既刊）

衛生指針

妊産婦の務

全一册和裝美本
紙數四百五拾頁
密畫數十個挿入
正價七拾五錢
郵稅拾錢

妊産は妻たる者の第一の天職であるから、淑女諸君は必ず此知識を得なければならぬ。世間には此知識を疎略にする爲め、免れる事の出來る困難や危險などに陷る者が多いのは、甚だ遺憾である。されば、一家の主母たる者は、是非とも本書一册を家庭に備へ置きて參考に供し、新婚せんとする令孃は、約束を極め衣服調度などを支度する以前に、豫め本書を一讀して、自己の身體が其天職を完くするに足るや否やを詳かにするが宜しい。本書は妊産に關する身體の適否、妊娠の有無、分娩の難易、産後母子の手當等に就きて、妊産婦又は産婆の心得べき總ての事項を親切平易に委しく説明したものである。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（壬の二）

女（壬の三）

博文館創業二十週年紀念

六月十五日發行

明治名著集

全一册洋裝四六判二倍
紙數五百六十二頁
正價金六拾錢
郵税金六錢

●明治の思想界を導きたる大著述集也
●維新後の文明を師導したる大家の著述集也
●今日の文明は如何にして發展せしか、本書は政治法律文學教育經濟其他總ての方面に亘りて文明の先驅者たりし大家の著述を集む
●明治年間に於て新時代を作りたる名論集也
●諸先輩の一世を動かせし名著は容易に求め難し
●本書は悉く此れを網羅す
●思想界の一大紀念の書籍也
●本書無くして思想界を研究するは極て困難也
●口繪は二十に因みて珍奇なる寫眞を登載す
●本書頁數は定期太陽の二倍也紙質優等製本美麗
●思想界の大著述を最も廉に最も多く蒐集せんとする機會は此時也

（五の五）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

博文館創業二十週年紀念

お伽共進會

六月十五日發行

全一册洋裝菊判
紙數二百七十二頁
正價廿錢郵稅二錢五厘

お伽共進會は開かれたり、博文館創業二十週年の紀念日を祝賀せんが爲に、我少年世界は遍く賞を懸けて天下の同好諸君より、お伽噺を募集し、其傑作十篇を撰びて掲載するの外、表紙には渡部審也氏の彩毫を以てし極彩色縮葉書は武内桂舟岡田三郎助兩氏の意匠に成る、其他三色版及び寫眞版等も、悉く善美を盡し、少年机邊の珍たらしむ、特に懸賞お伽噺に附するに、左記の諸篇を以てしたれば、錦上更に花を飾るの感あり。

少年世界 第十三卷 第八號 定期增刊

- 懸賞審査談……各撰者談
- 當代名流お伽噺……約八十名談
- お伽口演 鬼の宿……巖谷小波作
- 明治少年文學史……記者編
- 紀念お伽噺……諸名家作

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

(壬の七)

大日本淑女學會

會員募集
規則書進呈す

第四回新學期開始

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を御勉強しようとする人は本會におはいりなさい。本會は文部省令によりまして高等女學校と少しも違はぬ講義錄を發行します。講義の親切で丁寧で何人にも分り易いことは申すまでもありません。卒業は貳ヶ年で會費も僅で濟みます一ヶ月都會に居るたけの費用があれば澤山です。

本會は右に申した講義錄の外に **姫百合** と申す面白くて爲になる女學雜誌を發行し本會々員に限り毎號無料 **進呈** します。

◉博覧會開會中入會金**全免**す

◉東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

▲報知新聞評　本講義錄は高等女學校の全學科を知名の專門女子敎育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜錄五十頁の附錄あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衞生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小說あり凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

（壬の八）



女學世界

六月

第七卷第八號

△滿地綠翠

節は梅雨に入りて、何れの窓も青葉に暗く、降つては止み、止みては又た降り、幽鬱の天地轉た人を懊惱せしむるものあり、乃ち雨の絶間に出でゝ野路を辿れば、田は半ば植ゑられぬ、綠樹の村愈よ暗く、見渡す限り滿天滿地の碧翠、滴る水を落さば、綠融けて將に流れんずる光景を呈し、宛も一幅宇宙の大水彩畫を見るが如き心地す、而も仔細に點檢すれば、濃翠あり、淡綠あり、茶褐色あり、微卵色あり、其の色彩に於て云ふべからざる妙趣を見る、既にして梅雨絲の如く、青々たる新秧の田に注げば、蛙聲閣々として之に和し、恰も天地の美を歌ふが如し、誰れか梅雨を鬱陶しと云ふや、ラスキン曰く、雨天とは美の別の種類なりと、知言なる哉。



思潮

女性特有の心理狀態

三輪田元道

△愛と嫉妬心

婦人の心理狀態に於て最も著しく發揮せられてゐるものは愛（Love）である。で愛は一體如何いふ性質のものかと言ふに、彼の同情とか或は博愛とかと云ふものとは大に趣が異つて居る。同情或は博愛は博く衆に及ぼすことの能るものであるが、愛は之とは反對で、狹き目的に向つて深く動作くと云ふ性質がある。即ち、同情博愛は博く淺く動作くが、愛は目的の狹い丈夫れ丈深く動作くのである。

婦人に就て之を具體的に言へば、婦人の愛の目的は、第一は良人である、第二は子である、此の二つを外にしては他に其の愛を傾注すべきものが無い。故に、其の愛は深さに於て度を加へて、其の最も熱中する場合に於ては全く己を忘れて、身を殺し、身を犧牲に供しても尙且つ愛を捧げんと決心するやうになつて來る。夫れ然り、愛は實に婦人の魂である。從つて、婦人に於ては、愛に伴ふ性癖として、時には「可愛さ餘つて憎さ百倍」の感も起るであらう。否、起るのが自然である。若し、自分の良人が如何なる行動を爲すも、平然冷靜に構へて些も之れに頓着しない婦人があるとも、そは婦人としては何等の價値も無いものである。所謂嫉妬心なるものは、或る場合に於ては如何しても起き

ざるを得ないものかと考へる。

△人木石に非ず

然るに從來東洋諸國に於ては、學校の敎員或は社會の敎訓等に依つて、婦人に向つて嚴に『嫉妬心を去れ』と訓へてゐる。例へば、我が『伊勢物語』の中に、『風吹けば沖つ白浪立田山宵にや君は獨りこゆらん』と云ふ歌があるが、之れは學校に於ても家庭に於ても女の敎訓として非常に愛唱されてゐる。で、無論御承知でもあらうが、之れは、昔一人の女があつて、自分の愛する男が夜々家を留守にして他の女の許へ通ふたけれ共、女は何時も男の意の儘に送迎をして何等嫉妬の氣色も見せなかつたので、男は女を奇しと思ひ、或る月の夜に他の女の許へ行くまねして窃かに前栽の中に隱れて見てゐると、女は夜の更る迄琴搔き鳴しつゝ打歎いて此の歌を詠んで寢に就いたので、件の男は之を聞いてより又他の女の許へ通はなくなつた、と言傳へられてゐるもので、如何にも美しい談である。然れ共、縱し假う云ふ女があつたにしろ、世間の人が之を理想的の婦人として之を今日の婦人に要求するのは、婦人の立場を省みず、愛の性質を無視する話で、甚だ不自然極まることかと思ふ、人木石に非ざる以上は、斯る場合に嫉妬心の起るは人間心理の自然の數ではあるまいか。

△政策的の敎訓

儒敎は實踐道德としては固に立派なものであるが、其れにも矢張り痛く女の嫉妬心を戒めてゐる。が、之れは大に斟酌して受けなければならぬと思ふ。蓋し儒敎には餘程政策的の觀念を加味した敎訓がある。嫉妬に就ての敎訓の如きも亦其の一である。即ち儒敎の嫉妬に對する敎訓は、『嫉妬心を去れ』と訓へて置けば其れで僅かに好い程加減に行かうと云ふ政策的の分子が含まれてゐるので、其の眞意は强ち全く之を去れと言ふのでは無い。此の事を覺らず、文字通を眞に受けて實際其の通に爲せやうとするのは大なる誤である。

△女の虚榮心

第二に述べて見たいのは婦人の虚榮心である。獨逸の大學者ショーペンハーウエルは、『婦人は最も虚榮虚飾のものである、若し婦人より虚榮虚飾を除くならば、婦人の行動は恐らく零になるであらう』と、言つてゐるが、之れは隨分酷評である。勿論今日でも婦人に實際其の傾はあるに相違無いが、而かも婦人は決して本來虚榮虚飾のものとは言へぬ。たゞ社會の事情が婦人をして當然斯くならざるを得ざらしめたので、其責は寧ろ社會に在らうと思ふ。

今婦人の地位を見るに、其の活動の天地は極めて狹い。漢語に良人の事を「所天」と言ふ。婦人の天地は卽ち一人の良人である。從つて其の實力を發揮す場合は甚だ稀れで、自分の地位、勢力、富貴、榮華は、自分の實力に依るに非ず、一に良人に依らなければならぬやうになつてゐる。然れば婦人としては、其の處世の要件として他人の力を計算に入るゝは、固に止むを得ない次第である。或は虎の威を借る狐の如しと言はゞ言へ、今日は是れで無ければ婦人は實際立つことが能ぬ。之れが虚榮心の原因であるので、斯る事情が慣習となつて、婦人は恰も本來虚榮虚飾のものであるかのやうに思はるゝに至つたのである。

然れば世間には、婦人の虚榮心に對して色々攻擊あるにも拘らず、たゞ虚榮虚飾を去れと言ふのみでは、何時になつたとて其の効驗の擧らう筈は無い。之を去らしむるには、たゞ婦人の爲に其の活動の天地を拓き、少くとも之れに或る自由、權利、名譽等を附與して、婦人をして男子と等しく自分の力の貴きことを自覺せしむるの途あるのである。根本的の治療を施さずして徒らに病弊を嘆くは余輩の採らざる所である。

△模倣性と流行

第三に述べて見たきは、婦人の精神活動は總て模倣的であると云ふことで、之れも著しい事實である。先づ流行に就て言つて見れば、之れは最も多く婦人に關係

あるが、其の本質は皆模倣である。髪の結振、衣服の模様、其他装飾品に關する時々の變遷は悉く模倣である。勝山が流行る、島田が流行る、庇髪が流行る、何が流行る、と言つて自分も之を結ふのであるが、之れには何も深い理由は無い。たゞ隣近所の者が結ふから自分も結はうと云ふ單純なる模倣に過ぎぬ。衣服にしても人が元祿模様を着るから自分も着やう。桃山が流行り出したから早速元祿を打棄てると云ふは、たゞ〳〵人を模倣するに過ぎぬので、決して自分の工夫に出でたものとは晳へぬ。

△生花、茶の湯、琴

又婦人の遊藝に就ても然りである。彼の生花は昔其道の達人に依つて始められたものを全く模倣してゐるのである。其の枝振や撓方などに色々異つた遣方があるが、婦人は頭から其の法則を改められぬものゝやうに思ふてゐるから、やれ流派だ何だと面倒なものばかりが出來て、一向進歩の跡が無い。早い話が、昔は生花は床間に置いて眺めて居たから、花は一面丈のもので宜かつたらうが、近來卓子の上にも置いて兩面から眺めねばならぬやうになつて見ると、花に表裏があつては甚だ不都合である。が、模倣一天張で怎んな事すら改良することが能ぬのである。

又茶道は千利休が武人の趣味生活を優美ならしめやうと云ふ考で開いたものが何時の世にか婦人の手に移つたものであるが、それを今日の婦人は女とお茶は何か深い因緣でもあるかのやうに思つてゐる。而して之れにも色々法則があるが、其れを改められぬと信じてゐることは生花の其れに於けると同じである。又琴に就ても然うである。其他婦人の遊戯藝能となつてゐるものは、殆んど總て模倣であつて、何等新軌軸を出して居らぬ。即ち一を聞けば一、十を聞けば十の働きをしか爲さぬと云ふが今日我が多數婦人の狀態である。

△模倣性の原由

然れ共、之れも恐らくは婦人の本性にあらずして、

たゞ慣習の結果に過ぎぬと思ふ。蓋し人間の智識は經驗と觀察とに依つて形成らるゝ者であるが、從來婦人は極めて小天地に跼蹐して經驗の機會も乏しく觀察の必要も無かつたので、自然在來の模型を襲踏して以つて自ら滿足するやうな傾になつて來たのであらう。故に余輩は今後婦人の活動範圍を益々擴めて我が婦人をして成るべく多くの經驗と觀察との機會に接せしむるやう我が經世家に向つて望まざるを得ない。是れ婦人の模倣性を打破する唯一の手段である。經驗と觀察との機會を得れば、茲に新規獨創の見識も生じ、從來の模倣性のいよ〳〵薄らぐに至るは燎々火を睹るよりも明かである。

　婦人の心理狀態に就ては、尙は述ぶべき事多くあるけれ共、最も研究を要し且つ世人の解釋を俟つべきものは先づ以上の如くである。餘は又機を得て更めて之を述ぶることゝしやう。（文責在記者）

女子を健全にする法

女子高等師範　下田次郎

▲女子の都會生活

健全なる婦人を造らんとするに就て第一に考へて見たのは女子の都會生活である。抑々人が田舍生活を見棄て、追々都會に集ると云ふヿは近世の文明社會に於ける一般の傾向であるが、此の都會生活と云ふヿは甚だ不健全な生活で、國民の體格に及ぼす影響から言つても、又潛勢力を養ふ上から言つても、決して望ましきヿでは無い。特に青年女子にあつては、其の虛榮心の強い所から、忽ち都會の華奢なる風に感染して、田舍へ歸へるヿが嫌になる、都會で何か遣つて見たくなる、廣く交際もして見たくなる。其れのみならば尙だ可いが、其妙齡なるまゝに往々魔風に襲はれて遂には濟ふ可らざる墮落の淵に陷る者があるので、實に寒心すべき次第である。

▲理想的の女學校

女子の都會生活は、斯の如く面白からぬ結果を生ずるに拘らず、我國今日の有樣を見れば、女學生の多數は滔々として我が東京に集つて來る。是れ何故であるか。惟ふに、今日の處ろ地方に於てはまだ時勢の要求に應ずる程に女子教育の機關が完備して居らぬからであらう。果して然らば右の不都合を避ける爲に、地方に多くの高等女學校や女子技藝學校を設けて、女子が態々上京しなくとも濟むやうにすることは實に今日の急務であらうと思ふ。

瑞西や墺太利などへ行くと、都會附近の紅塵を避けた處とか、或は遠く離れた片田舍に、廣い田地を擁した女學校が立てられて生徒をして牛を飼ひ野菜を作らせて自活を爲せ乍ら教育をするところが澤山にある。我國に於ても此種の學校を多く設けたならば經費を少くして却て健全な婦人が出來はせぬかと思ふ。亞米利加などの有樣を見ても、女子大學の在る處は多くは其の學校が中心となり、基礎となりて出來た市街であるから、その町は極めて片田舍である。是亦參考とすべきであらう。

我國今日の有樣で見れば高等の教育となれば講師の都合もあつて學校を地方に設けることは或は容易で無いかも知れぬが、高等女學校程度のものでは講師に不足することも無いから、各地に澤山之を設けることに致したい、全くの田園でなくとも小な町の近傍などに之を設けて、而して男子よりも一層土地の狀況に應じて選擇せしむる隨意科目を多くするならば、庶幾は健全なる實際的婦人が出來やうと思ふ。

▲不健全なる教育法

右はその一手段に過ぎないが、尙ほ一方に於ては、今日の女子教育の方法は餘りに甘過ぎるやうであるから、之れも又速かに改めたいと思ふのである。先づ學校教育に就て言へば、今日は何れの女學校でも、相手が女子だからと云ふので成るべく學科を簡易にする方

針を採つてゐるが、之れは大なる誤解であらう。成程心理的だとか生理的だとか言つて生徒の骨の折れぬヿを考へるヿは強ち惡い事でもあるまいが、而かも今日はたゞ其の一方に偏して人物を造るとか機巧を附けるとか云ふ考が足らぬから、只贅澤な儒弱な婦人ばかりが出來るやうになるは當然の話である。故に若しガッシリとした婦人らしい婦人を造らうとならば、今日の教育方針を根本的に改めて、縱令女子であつても矢張り時には睡らずに勉强せねばならぬ位に苦めて、今少しく頭腦を鍛へるやうに爲なければならぬと思ふ。

▲娘時代の家庭教育

若い娘の家庭に於ける樣子を見ても、昔と違つて其の骨折方が餘程尠なくなつてゐる。所謂家事の實習なるものを見るに、たゞ傍から差圖をして僅かに其れを爲る位のもので、自ら進んで香の物を漬けるとか釜下を拭くとかと云ふヿは滅多に無い。實に甘い實習を遣つてゐるので、其れが習慣となつて、娘は家で樂をするヿを殆んど當然のヿのやうに思つて居る。世の辛酸を知らぬ若い娘のヿなれば、其れは無理からぬヿでもあらうが、之を默つて見てゐる親の氣が知れない。家で苦しむのは大した苦痛でもあるまいが、家で樂をして居て他へ嫁した後に家事を營めぬと云ふので舅姑から小言を聞く時の苦痛は如何であらう。之を思ふたならば、親たる者は娘を安閑と遊ばせて置くヿは能ぬわけで、若し眞に娘が可愛いならば、家に居る間に十分苦しませて、嫁いた後に樂な思を爲するやうに心掛けねばならぬのである。

▲女子の運動

又女子の運動法にしても左樣である。矢張り女子だからと云ふので今日は恰度舞踏のやうな力の要らぬもののみを遣らせて一向汗の出るやうなものが無いが、斯の如きも我が靑年女子を益々柔弱ならしむる所以であるから、今後は今少しく活潑なる運動らしき運動を奬勵したいと思ふのである。

（文責在記者）

上京女學生に對する注意

下田歌子

女子教育の隆盛を極めまする今日、地方に居らるゝ女學生方が都に上りて學問いたさなければ立派な人に成られぬと心得て中には家庭に無斷などで飛び出して續々と上京する女子さへあるやうになりました。成程明治七八年頃教育がはじめて開かれました時には、男子が志を立てやう學問をして一人前に成りませう抔といふ目的で、兩親に止められれば出奔しても都へ參り學校に入るとか、權門名家の保護を仰ぐとかして孜々と螢雪の勞を積み、錦を衣て故郷に歸つた例が隨分あつたかのやうでありますが、方今地方の女子方は僅か學問に志せば、親兄弟の許諾は一向に關はず東京に行きたい學問がしたい、お友達が都の何々女學校に入つて勉强して居るのに私のみが田舍者で朽ち果てるのはいかにも口惜しい、都にさへ行けば何にでも成られるとつまりは空想に驅られて出京はいたせしもの丶、さりとて保護する人のなければ途方に暮れ、正路を歩む者が少なく、中には都の華奢に染込んで、田園の生活を嫌つて我も／＼と都會の生活を空想に畫いて、子供の折に歩いた山も、遊んだ川もつまらないものに思はれます。

勿論、多年都に住つて都會生活に馴れて居られる御婦人方は、一寸出の女學生の如き弊害はないのです、都鄙の懸隔が甚しうございましても、長く住へば其間によく都會の狀態に精通して參りますから、利害の取捨に誤りもありますまいが、兎角生かじりと云はれる所が丁度危い頃であります。

近頃私の許に毎月平均二三名の女學生が出京して尋ねて參り、先生何うかお頼みいたしますと申されますが、父兄の承諾を受けて、其方から依賴せられる者か、村長が證明して其方から世話を願はれる者でない以上は、一切歸國して田家の生活を樂しみ、親讓りの生產業に趣味を持つて其土地、其地方に嫁して樂しき家庭

を作る事を勸めては歸らせます。

尤も都は敎育の中心でありますから是非都に上つて勉强して見たい、一の業を修めて智識を磨きたいといふのはけなげな心懸ではありますが、男子とは違つて女子が家を飛び出して一人よるべなき都の空にあこがれるのは餘り同情されません、其理由は自分勝手に出京いたした女學生は十中の八九はわたり者か兩親のもてあまし者か、兎に角餘り感心の出來ぬ者の方が多いやうであります、一體女子が學問して豪い者になるのは先づ格外であります、今更改めて申迄もありませんが、樂しき家庭の主婦となり、夫を助け、子女に完全なる家庭敎育を授けて、玆にはじめて社會有益なる人物を作る所の隱れたる家庭敎師となるのであります、樂しきホームを作つたり、或は人物を生んだりするは必ずしも都に限る譯ではありません。

ワシントンは實に世界的偉人でありますが、其お母さんの事を見ますると、いつも生地の小村に潛んで、家事を整理し、愛兒を撫育するの任を重んじて、一度だに都の地に足蹈みした事はありませんでしたが、其子は英名を世界に轟し又米國をして、今日の如く富强ならしめたる大政治家と成つたのであります諸葛孔明の妻はさぞ豪い行でもあつた者のやうに思れますが、さうではなく片田舍に多くの桑畑を所有して婦女のする業に就て居りました、又我國では楠公の母公は河內の生地を離れた事のない方でありますれば、古今東西英雄の母たり妻たる人は唯々女子の本分をよく務めたと云ふ一點であつて、其結果として世界的豪傑歷史上有名の人物を出しました、學問は結構なものでありますが、洋學が我國に入つてから、一種の贅澤になりまして、學ぶ者の中には浮華に流れるのもあります。

往時、畏くも仁德天皇は漢の文筆をお採りになりましたが、只今のやうに浮華の學問はお嫌れになりません、歷史を繙いて見ても、彼の漢織吳織又冶工を招聘遊されましたのは國益を增進するもののみをお選びになつた故であります、一家が豊になつて後一村富み、一村富んで後ち一國を利する譯でありますから、地方

の女學生方が前後をも顧みず無暗と學問の熱に浮かされて都をさして飛出すことは宜しくありません、之れは斷然止めて頂きたうございます。

もう一ッ注意いたしたいのは、或は學校とか講習所とかいふ立派な名義のもとに開かれてあるものゝ中には全く營利的であつて半年か一年で無くなつてしまふものもあるやうです、此等は誠に危險です、又講習會などいふものは休暇を利用して諸種の學術を攻究するのではありますが、これも中には單に田舍出の人から利を貪らうとする目的のものもあるさうですから是又善良のもののみとも申されません、私の希望いたして居りますのは妙齡の女子達が無暗に都に來て不知不識の間に心身を害ふよりは寧ろ田舍の清新な家庭を愛して嗚呼如此な小村にも模範とする婦人があるか、山里に住まひ居つた彼の女子がさても英雄の母となりしかと讃嘆されるやうになりましたらばこれこそ日本國を富ます潛勢力でありませう。

（雪子筆記）



教育家の見たる
日本の風俗

英人　マーシャル、フエルド

英國教育界の大家マーシャル、フエルド氏は今回中央政府の命によりて各國教育視察の途次本邦に來遊されしを以て記者はメトロポールホテルに訪問し氏の眼に映じた日本の風俗觀察を伺ひました。

△日本の交通機關

私は來朝してから未だ三週間にもならず、其上見た處と云へば僅に横濱、京都、東京位のもので其他の風俗や事情は皆目判らぬ上陸したてのホヤ〳〵であるから、日本觀などとは以ての外であるが、折角の御希望ゆえ私の眼にチヨツト寫眞的に映じた部分だけお話し致します、それも美點は後廻しとして先づ缺點の側から申上げると、上陸早々横濱の波止場の小さいのと不整頓なのには少々驚きました。それから汽車に乘つて感じたのは車中に於て乘客の不規則な事と喫煙の盛な事です、尤も日本人は一般に煙草を好むとは豫豫聞いて居りましたが、恁うまで老人も若者も婦人までも嗜む事とは思ひませんでした。それに車中の不規則と申すのは、普通なら一人の座席を正しく占めて居るべき處を、或者は横臥し或者は荷を置きなどして後から乘つた客に席を藉さうともせねば又老幼を援けやうともせぬ事を不幸にして見ましたが、之は禮義に篤く溫厚の聞えある御國の民としては少々意外であります。次に食堂の不潔なのと料理の不味いのには頗る辟易いたしました、日本で洋食の不味いのは其需要者が少い爲め自ら設備や原料が不揃な譯であるから、それは止むを得ぬと致しても、せめては不潔な點だけ改めて食卓には多少の裝飾を施すやうにしたなら大に旅中の勞苦を慰むるに足るだらうと存ます、之は單に吾々外人の希望のみではなく日本人とても御同感でせう。元來日本の食堂車は受負人に任してあるのか、それとも會社でやるのかは知らぬが、直接に會社でやるよりもそれ〴〵適當の商人を擇んで受負はせたならば相當

に責任を以て自然と清潔に取扱ふ様になりませう。歐米では大抵請負人に任せてあるから何れも競爭して掃除に怠りません、併し日本の食料は案外に廉い、歐米では普通旅宿料の三倍位を要するが此方は左程の高下がなく、これで調理法さへ上手になつたら申分なからうと思ひます、それから電車に乘つて見ると之は比較的に整頓して居て、殊に内部の規則の掲示してあるのは感服する處でありますが、唯だ遺憾と思ふ點は、汽車の乘客と同じく、老幼と婦人を保護する事が十分でないのであります、そして車掌が絶えず乘客に注意を促して居る様ですが、爾那に度々注意をしないと何か不都合の事でも起るのかと不思議に感じました。

△履物と道路

日本に來て第一眼に着て奇異に感じたのは日本人の駒下駄足駄であります、隣國の支那人でさへ吾等と略ぼ同型の靴を穿くのに、それよりも歐化的なる日本人が特に世界に類のない下駄を用ふるのは、道路が惡い爲め降雨期抔には到底これならでは叶はぬ譯もで御座いませうか、然し履物は先づ可いとしても、道路の良否は公衆の利害に關係するもので、殊に政府及び市の經營に屬する事ですから之は適當の方法を以て改良を施すに左程困難ではありますまい、見たところ東京の道路は人道と車道との別があるといふ名のみで其實確然たる區劃が定まつてないから、ドウしても混雜を免れません、せめて銀座通りのやうに人道がタヽキか敷石になつて居ると幾干か便利ですが、其他の街々に至つては殆んど歐米に於ける村落の道に齊しいから動もすれば車馬の危險や衣服を穢す虞れがあつたりする上に衞生上の設備も甚だ不完全です、歐米では人道に痰を吐く事を禁じてあると共に、各家の間口丈は其持主の負擔で人道を整理する規定になつて居るで家を建築すると同時に其軒前の道路を修理する責任があるです。

△旅館に於ける雜觀

總じて日本の宿料は非常に安價であるけれど其代り不

整頓の點も少くない、室内の裝飾其他の不整頓は別問題として最も意外に感じましたのは、ボーイが如何にも不馴れで加之不作法です、歐米諸國ではボーイは一の職業になつて居るから、種々經驗のある上に外人に對する一通りの禮儀作法を心得て居て、客の欲する處は命せずとも辨ずるといふ風ですが、日本のボーイは柔順であると聞いて居ましたがホテル等で見受くる所ではそうでない樣です、と申すのも畢竟外國語に通じないのと外人に接する呼吸が分らぬからかも知れません、それと今一つ閉口したのは旅館内の騷々しい事で、例へば客の出入する場合に夜が夜中でも大聲あげて車夫や馬丁を呼ばつたり、或は時を關はず客の荷物などを變な調子をとつて廊下を引ずり廻したりする爲に、折角寢床に就いても外部が右の如く喧ましいのと寢具の不潔なのとで、容易に枕を安んじて睡眠することが出來ません、是等は無論宿主の管理の如何に因る事でせうから、何とかしたいものと存じます。

△美術國に不似合な事

英國でも米國でも凡て外人の宿泊するホテルでは、日常の必要品は勿論其他の特産物を備へた販賣店があつて客の需めに應じて居りますが、日本は元來美術國で他國に見る事の出來ぬ優異の製作品があるに拘はらず、其等の販賣店を旅館内に見ないのは聊か不思議の次第です、で夫が無い爲に折角紀念の品を買求めんと切望する外來の客をして空しく金を懷にしたまゝ歸らしむるの憾みがある、之を市中で求めやうとすれば一々通辯を要する事だからッと買はぬ樣になる譯ですが、若し其設備の宜しきを得たならば、主客共に尠なからぬ便益があるだらうと思ひます、次に食卓へ就く度毎に感ずるのは、前にも申す通り日本國は多くの美術品、漆器、陶器類を遠く英米にまで輸出して居るにも拘はらず産出地の食堂に使用する裝飾品や食器を見れば大抵日本製の品ではなく、却て不美術的なる外國製の安物を使つて居る樣ですが、之は抑も本末を顚つ

た事と不思議に堪えません、又日本人は一般に潔癖てあると聞いて居りました、それ故米國などで日本人を雇入れる第一の條件は其點であると聞きましたが、實際來て見れば市街や家屋の內外其他人の身體の觸るゝ處にまで塵埃が堆くなつて居るのには一驚を吃しました。

△日本婦人の服裝評

日本婦人の頭髮及び服裝は非常に優雅な上に美術的であるとは書にも見れば話にも聞いて居りました、それに近來我英國でも日本婦人を眞似たのを見ましたが、固有の日本婦人を見るのは始めてゞす、如何にも噂に違はず婦人の頭髮は美術的に見えます、けれども不足を云へば油を少々濃厚に用ゐすぎる事で、而も其油氣多き毛髮に何等の覆ひもなく暴風や日射の間を往來さるゝ結果、隨分塵埃だらけになつて汚れた髮を見受けます、殊に夏分などは臭氣を發せぬとも限らぬから之は衞生上何うあらうかと思ひます、或は炎天に洋傘さへあれば別に冠物はなくとも油でもつて日光を遮る事が出來るとの習慣上から然うしたかのは知りませぬが、兎に角日本婦人の頭髮に適當な帽子を用ゐたならば一層美しさを增すだらうと信じます。それから婦人の服裝ですが之は頭髮よりも更に美術的で、近來英米の婦人社會では盛に日本服の假裝會などが行はれて大に持囃されて居りますが、惜しい事には餘りに開放にすぎるので往々婦人の肉體が顯はるゝ處があります、尤も腕や胸部の見はるゝ服は、歐米にもありますが、下脛の露はるゝのは他に全く類のない事でせう、されば一般に米國式のスカーツ、か若くは日本現在の袴に多少改良を加へたものを用ゐたならば此缺點はありますまい、昨今布哇に居る日本婦人は凡てナイトガウン風の衣服を用ゐて居ますが、之は上下の二つに別るゝ仕立方故米國女子の樣にコーセットを用ふる弊もなければ腰部を冷す憂もなく、而も立居振舞に便利で頗る優美のものであります、で私は盛裝した日本婦人の服裝に感服すると同時に布哇に於ける日本女子

の服装をも大に感服して見ました。

△感心せざる男子服

日本には固有の筒袖、股引などを着けた人を見受けますが、これは餘り實用的に偏して少々見苦しい難があります、そこで男子の服は何が最も適するかと云ふに先づ洋服が一番でせう、是は在來の日本服のやうに横になつたり足を投出したり兎角だらしのない風體が出來難い爲め自然活動せずには居られぬ事になります、要するに日本服は概して優美ではあるが其代り不經濟、非實用、不活潑等の缺點は免れません、寧ろ其點に於ては、支那服の方が遙に優つて居る樣に思はれます、曾て露國に於て世界中に何國の服裝が最も良いかと普く募集した事がありましたが、衛生的、美術的實用的共に多數の投票を得たのは朝鮮服次は支那服で、それから歐米といふ順序であつたやうに記臆いたします。

以上の如く永々と私は日本の缺點のみを述べましたが、長所も亦數へ切れぬ程あります、第一に風景明媚なる自然の眺望、人種の純朴更に轉じて人巧の美術的建築、美術工藝品等到る所外遊客の耳目を新鮮にし、歡喜の情を起さしむるには、世界中他に比なしと信じます。

夜の上野

月淸ければとて、家を出で行くに、ふと思ひ立ちて、博覧會の、夜景をさぐらんとて、電車にのる。コスメチックに美しく、髪を分けたる人、或は田舎者は、東京見物に、出で來りしと思ふ樣な人、孃もあれば書生も乘れり。月やう〳〵斜になりて、市ケ谷の土手の松、面白く水に影あり、牛込見附すぎて、お茶の水を行ちがひ、我がのりたるは、かなたに行く。山下にて電車を降りれば、歩を左に取りて、不忍地畔に出づれば、誰も見れば、我も見る片側の賣店、陳列品も尠からず、行く人歸る人、買ふ人見る人、さながら泉の流れて、又淀むが如し。我もをしつもまれつ、いつしか博覧會の場所にいづ、機械館、外國館などあり、折から日曜日なれば、何處の家根も、イルミ子ーションを以て、きざまれ其麗しさ、不忍の池に漂よひ銀葉を流したる如し。其後方には、觀月橋、懸れり、さらば橋をわたりて、辨財天女の境内に入る。御堂には我れ一度も、行きて拜みし事なければ、老若男女も行く故、我も共に行きて拜みぬ。夜はふけゆくまゝに、思ふ〳〵明るき、道より別れて、家路に向ふ。（近藤撫子）

勇氣ある未亡人

北村みな子の事

北村美那子は自由黨の名士故石坂昌孝氏の女にして、亦た實に高蹈派の詩人として、一時文壇に盛名を馳せたる、透谷氏の未亡人なり、透谷氏が純潔多感の性情、到底現代の濁波に游泳するに堪えず、彼れが如き悲慘の最期を遂ぐるや、女史は猛然として決する所あり、最愛の良人に別れ、孤獨の涙未だ乾かざるに、蹶然一子を遺して、天涯三千里北米の地に渡り、獨立自營、辛酸を嘗めつゝ九星霜、學成り業遂げ、本年二月二十三日を以て、愛出度錦衣歸朝せられたり。當時記者は石坂氏の宅なる牛込の寓居に女史を訪ひぬ、女史の書齋には嚴父(昌孝氏)の靈位在ますがごとく、香煙縷々として立ち昇れり、かくて其の敎訓に富める辛酸の話、趣味多き人生觀、偖ては又た感慨深き良人觀や波瀾多き經歴談を聞くを得たり。

女史は幽鬱なりし透谷氏に似合はず、頗る快濶にして、些の修飾なく、何事も腹藏なく語り、甚だ少く女性的の分子を含む所、米國婦人の感化もあるべしと雖も、女史が性來活潑の人にして、且つ多年の辛酸生活に、深く世態人情について、悟入する所あるに由ると覺えたり、殊に女史が、年齒四十歳なりと云ふに拘らず、三十歳を經る多からず見受られしは如何に其の向上心の旺盛なるかを察すべかりしなり。此の間或は記者に茶を侑め、或は佛前の世話をするなど、始終女史の傍を離れざる花の如き一少女あり、是れぞ透谷氏の忘れ形見なる、花子孃(十四歳)なりける、女史は先づ花子孃を顧みて、是れも透谷に似て幽鬱性で困りますとて談緒を開かれたり。

▲感情深き追懷

透谷が變死當時のことを考へますと、萬感胸に沸いて、感慨に堪へられません、透谷は彼の通り、幽鬱性

で始終物思ひにばかり沈んで居ましたから、萬一のことがあつてはならぬと、私も絶えず氣をつけては居りましたものゝ、變死の當夜は全く氣がつきませんでした、透谷は何時も夕方になると、散歩に出て時によると、夜中時分に歸るのが常でしたから、其の晩も私は格別氣にも懸ませんで、知らず〳〵翌朝まで寢込んでしまつたのですが、朝起きて見ますと、彼の騷ぎでせう、其時は私も隨分狼狽しましたが、竟畢私の不注意の結果彼あ云ふことになつたのだと思ふと、誠に一生の心殘りて御座います。彼の晩透谷が、細い身に兵兒帶をグル〳〵巻きにして、飄然と門を出た光景が、今でも歷々と目に見えるやうで御座います。今更ら申すまでもありませんが、最愛の良人に別れる位辛い事はありません、夫れで私も一時は、氣拔がして仕舞つたやうで、暫時は味氣ない月日を送つて居りましたが、是れではならぬと覺悟をして、何か一つ世の爲めになる仕事をしやうと其所で洋行することに致しました。

▲超海の動機

私の洋行しやうと決心した動機は、只今申す通り、最愛の良人を失つて、此の世の中の唯一の慰藉を奪はれたから、何か事業に慰藉を求むると云ふが、重なる動機で御座いますが、併し今一つ有力の動機は、透谷の感化であると思ひます、夫れは透谷が在世の時から、常に申した事は人間は何か一つの仕事を成就して、世を救ひ社會の利益を謀らねばならぬと、始終申し聞けられたもので、御座いましたので、殊に透谷の死後、其の原稿などを見まするど、矢張り同じ趣意のことがありますから、其處で一つ敎育家になりて、社會の爲めに働らいたならば、佛の希望にも副うことだらうと考へました、夫れには足手纒ひの子供もありましたが、幸ひ子供は親戚で引き取りて、育てゝ與れると云ふことでしたから、勇んで出發致しましたやうな譯です。

▲九年間の苦學

私が知り合ひの宣教師について米國へ參りましたのは、明治卅二年の六月で、歸つたのが今年の二月で御座います、其の中インヂアナ州に四年半、次にオハイオ州に二年半、何れも修學に費しました、最初インヂアナ州に參りました時は、語學は少々心得て居りましたから、話を聞き取るには、さ程不便を感じませんでしたけれど、此方から話しをするのに困りました、折柄夏期休暇中でしたから、地方で開催されて居る、講習會に入りましたが、同じ勉强するなら、初歩からが好いと申すのでＡＢＣから修めましたが、敎育法は男女混淆でした、併し幸に先生達が、非常に善い方でして、私の爲めに特別科を設けて下さいましたので、前後六ケ年と云ふ者は、一生懸命に語學を勉强致しました、次でオハイオ州のカレッジコースに入學して、昨年六月卒業致しました。

▲修學中の事ども

在米中は、重に女子寄宿舍に入舍しまして、苦學をしたので、御座いますが、素より貧書生で學資などはありませんから、學資は敎會其他へ招待されて、演說をした報酬で支へて行きましたが、一時は隨分困りまして、一日御飯を食べずに居たことなども御座いましたが、併し夫れは極く僅かの間でして、概して申せば其の他は餘り困るやうな目には、逢ひませんでした。何故かと云ふに當時米國人は日本人に對して、極く親切で私が困つて居るのを見ては、色々の物を贈つて下さりますし、中には握手をしながら、十弗の金貨や紙幣を下すつた方も御座いましたし、亦た困つた時は、何時でも來いと云つて呉れる人もありましたが、併し日本人として、猥りに貰つたり、借りたりするも心苦しいですから、苦しいのを、我慢して堪へて居ると、却つて怒るので御座います。斯う云ふ次第で私は餘り困つたことはありませんでした、加之米國は金の在る國で稼ぎさへすれば、幾何でも金になりますから、誠に結構で御座います、殊に日露戰爭中などは、米人の日本贔屓熱が、絶頂に達しまして、やれ講演、

やれ演說で、私は引張り凧にされましたから、隨分收入もありました。

▲寄宿舍生活

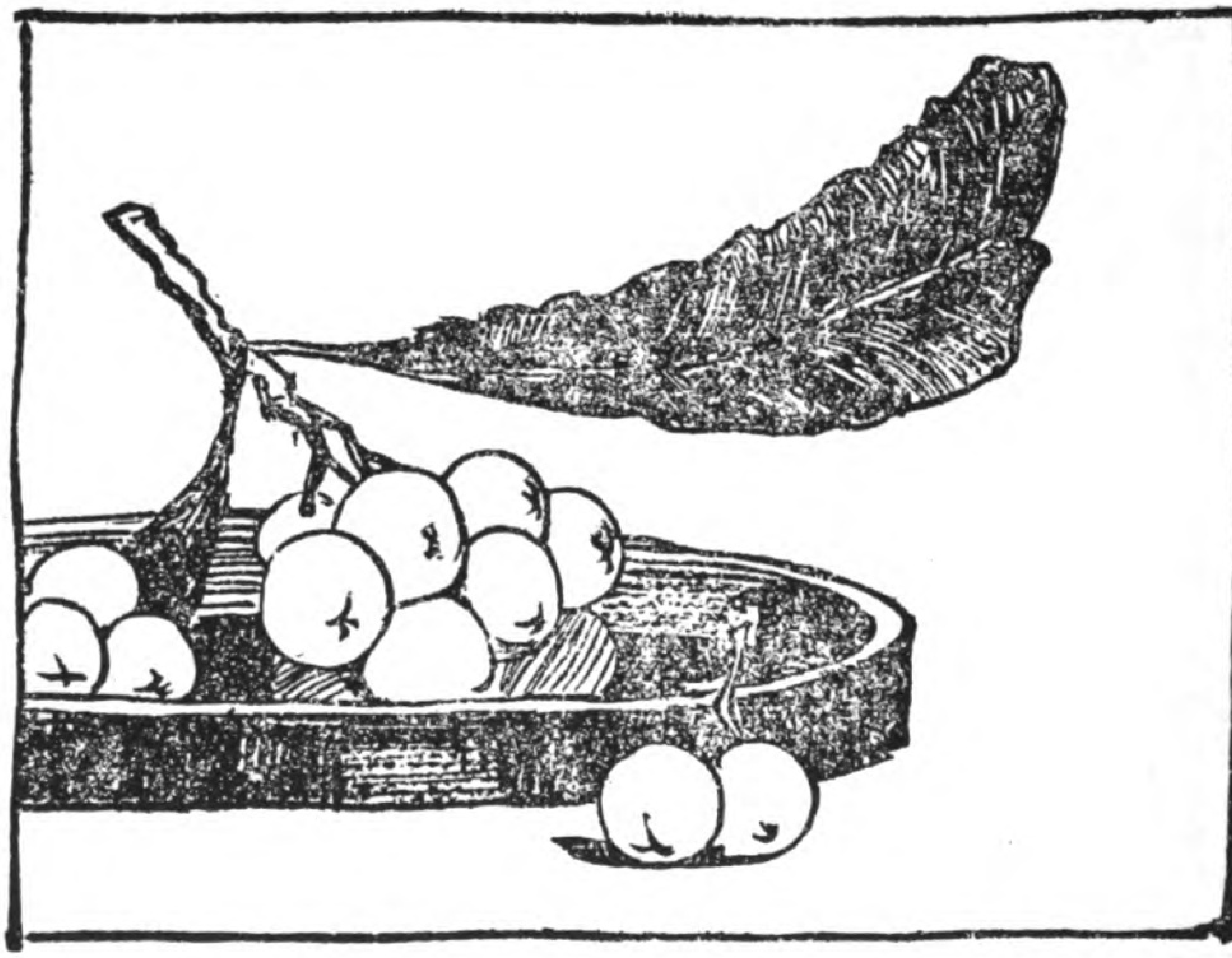
米國の寄宿舍生活は、實に快活で御座います、寄宿舍に居る學生の中には、寡婦もあれば、夫人もあり、娘もありと云ふ風で、年齡には定りがありません、で中には大富豪の娘もありますが、夫れだからと云つて、貴族的の所は少しもありません、親から相當の學資を貰ひながら、別に自分で色々な勞働をして、金を儲ける人も少くありません、また夫れを不思議がる人もありません、而して其制度は、全然宗敎的で、萬事自分の良心に訴へて、事を行ふと云ふ自由制度でありますから、隨つて相互の制裁は極めて嚴重で御座います、米國は男女混合敎育で、且つ男女交際の極めて盛んな國柄ですから、男女學生の交際も頻繁で御座いますが、併し寄宿舍では、男子の訪問は中々嚴重で御座います、金、土、日曜の晩は特別で御座いますが、他の日は午後四時を過ぎますと、面會を禁止致します、寄宿舍の主義は自由主義で御座いますから、朝は何時起床、夜は何時に臥床すると云ふ規則も御座いません、朝は午前六時半の朝食の時間に、食堂へ參れば可いので御座います、で私が居ました時には、二食衞生論が熾んで御座いましたので、私もツイ此の論者に捲ぎ込まれて、二食で通して參りました位で、實に呑氣な愉快の生活で御座いました、殊に私は日本人だけに非常に珍しがれらて、親切にされ嬉しう御座いました、で寄宿舍の食料は、一週間インヂアナ州では七弗、オハイオ州では十弗でした。

▲男女學生の交際

男女學生の交際は、極めて頻繁で御座いますが、併し其交際は勿論、心的交際で、手を取り合つて散步など致しますもの丶、一點汚れたことはありません、道の分らぬ時、夜遲うなつた時などは、男子の義務として、宛で擔ぐやうにして送つて來て吳れますが、決し

て男子一人では來ません、屹度男子二人以上で送つて來ます、夫れから彼方の父母は娘が十八歳の時までは、種々と干涉致しますが、其後は歳頃になつたと申して、もう云ふだけの事は云ひ含めて、夫れからは干涉しませぬが、併し一般に女子の讀み物の制限は、頗ぶる嚴重で御座いまして、其點に於ける、圖書館の書籍の選擇なども嚴しいやうです、ですから滊車中でも猥褻の小說などは、持て行つては可んと云つて居る程です。

▲親和會と文學會



米國の學校では、教場以外の交際研學と云ふものが盛んで御座いまして、何れの學校でも、若婦人會と云ふやうな團體があります、是れは一切校長職員の支配を受けぬことになりて居まして、役員も皆な生徒より選擧して、每水曜日に開くので御座いますが、夫れは頗る愉快の親和會であります、右の親和會の外に、私の居た學校には、文學會と云ふものが御座いました、是の會は又た前の親和會より一層盛んで、文學の研究は勿論、それに伴ふ音樂、演劇などを行つて、所謂米國婦人氣質を發揮して居ります、此の

文學會で文學研究の方法は、先づ其人の著作を研究すると同時に、其人の生れた時代を研究すると云ふ風で、夫れには圖書館が、文學會にも學校にもあるから、數多の書籍を渉獵して、研究をするので、而して文論を書くやら、創作をするやらで、夫れを持ち出して、互に批評研鑚を爲る、誠に有益の會です、此の文學會で一度面白いことが御座いました、夫れは丁度此の會に一人の日本の男學生が來て居ましたから、其人に劍舞を行らせ、私が詩吟をして、旁た劍舞の說明をする、所が非常の喝采で、是非にと强ゐられて、同じ劍舞を幾度も繰り返したと云ふ珍談が御座いました、夫れから又た米國は自由天地ですから、少しも窮窟と云ふことがありませんで、誠に面白ふ御座います、私は此の三年と云ふ者は、夏期講習會で諸方を巡回して居りましたが、招かれる所は何れも米國上流の團體で其の交際は隨分面白う御座いました、米國婦人は英國婦人のやうに質素でなくて、見得を飾ることが好きですから、コート一枚でも二十弗以下では出來ませんが、私は負けることが嫌ひですし、又た日本婦人として輕蔑されるのが、厭ですから、矢張り夫れ相當の服裝をして、交際塲裡に立つて居ました、總じて米國人は金使ひが荒いから、一所に交際して行くとなると、隨分金がかかります、ですから一ケ月の學資は、幾何と定りがありませんが、今申した通りの交際の費用や、文學會其の他のゲームなどで私は一ケ月三百五十圓も費つた月が御座いました。

▲日露戰爭と米人

米國の或る部分では、日本人を卑しんで、ジヤプと申しますけれど、私は英語も繰れますし、多少の教育も受けて居ますお蔭で、何時も日本の貴婦人と呼ばれて、到る所大歡迎を受けました、殊に日露戰爭以後と云ふものは、非常の大持てで、汽車に乘つても、全車中の視線が悉く私の身邊に集まりまして、「ソラ日本の婦人が乘つて來た」と大騷ぎで御座いました、で一つ日本軍の捷報の傳はる毎に、恰も自國の勝利の如く、

喜び祝しました、米人の日本贔屓熱は、斯う云ふ次第でありますから、日本品とさへ云へば、一器一物何んな詰らぬ物でも、夫れは非常の珍重で、金満家の家に入ると座敷一ぱい日本の器物を羅列して、得意がつて居るので御座います、中には随分大金を出して買つた花瓶などもありましたが、大抵イカサマ物で御座いました、殊に九谷焼などと称して、輸入し來る陶器の如きは、必ず贋物に違ひなく、其の赤色の焼きつけの拙さ加減は、殆んど嘔吐を催す程で御座いました、で是等を日本品ですかと差し出される度びに赤面致しました、併し聖路易に博覧會が開かれまして、其の陳列品の善美なること、日本と獨逸が一番でしたから、大に肩身が廣くなりました。

▲立地に六百五十圓

日露戦争のお蔭で、私のやうな者までが、米人に歓迎せられ方々の會へ引張り凧にされたことは、前に申し上げた通りですが、私が演説會へ出席すると、云ふ時には、多くは日本の貴女が、日本服を衣て、演説するとの新聞廣告を致しますので聴衆は一種の好奇心に駆られて、雲の如く集つて参るので御座いますが、私が洋服で居ますので落膽して何うか、日本服を着て呉れと要求しますから、私は會の終りに日本服を見せて、一々其の着用法を教えるのが例で御座いました、丁度私が歸朝の際、加盟の教會の大會に出席して、種々と親切になつたお禮や、日本へ歸つてから、女學校を創立して、聊か諸氏の恩に報ひます積りですとのことを述べて、お別れの演説を致しますと、誰れ云ふとなく、懐郷病の貴女を、我々から歸して上げやうと云ふて、十五分と經たぬ間に六百五十圓の旅費を集めて呉れまして、寸心ながら受けて呉れ、餘りは歸朝後に於ける活動の費用に遣つて呉れと申しましたが、私は歸つた後で我々の同情で旅費を拵へて遣つたなどと、云はれるのが嫌でしたから、三枚襲ねの日本服と、繻珍の帯とを取り出し、是れは私の寸志であるから、紀念として取つて置いて下さいと申しますと、夫れには及ばないと

申す方もあり、那樣心配は無用である、强つて吾等に呉れるとあらば、私等は貴女を、私等の娘として、更に貴女に着せやうと申す方もありましたが、無理に置いて歸りました。

▲澤庵と海苔一枚

以上は在米九年間の私の經歷、いや見聞の一斑で御座います、夫れで歸朝の途に就いたのが、二月の上旬ですが、丁度シヤトルを發して、四五百海里の所で、颶風に出逢つて非常に困りました、併し是れは一時の出來事で、二週間の航海中、然程障りもありませんでしたが、家に還つてから、却つて疲れが出ました、米國で九年間、洋食ばかりして居たのが、久し振りに日本船に乘り込みましたものですから、急に日本食が戀しくなつて、料理人に賴みますと、船夫の喰つて居る黒い飯に、頗る鹽ツ辛い、澤庵と海苔一枚と梅干とを出して呉れましたが、其の甘しかつたこと非常で、夫れ以來非常に食が進んで參りました。

▲教育上の主義

今後の私の志望は、多年の宿望と申すも如何ですが、一女學校を創設して、教育上に有する自分の主義を實行して見たいと思つて居ります、その主義と申しまするのは、我國固有の美風と、米國の長所とを調和させて見たいのです、人は米國とさへ云へば、直ぐ浮薄、輕躁、お轉婆を連想しますが、私は米國は米國で、また好い所があると思ひます、即ち生徒を教育するのに、我國のやうに餘り束縛を加へずに、一々自分の良心に訴へて、行動させる自由主義などは、慥に學ぶに足る長所であると信じます、夫れから又た私は、教育の精髓は、各自の天稟の靈能を發揮させるにあり、と思ひますから、彼の十人十色で、各々の天性の異る人間を何か鑄物でも慥らへるやうに、同一の模型に鑄らんとする關渉主義は餘り好ましくないと思ひます、此の世の中は、柳は緑り花は紅いで、色々の人があつて始めて趣味を生ずるもので御座いますのに、千篇一律同じ

毛色の人ばかりでは、何の趣味もありますまい、私の教育上の主義は、何れかと申せば、寧ろ放任主義ですが、併し只今の日本の女學生の理想する、自由結婚には贊成が出來ません、夫れは米國の自由結婚には、中々好い所もありますが、併し國情習慣の異る我國に直ぐ其の儘應用するのは危險です、殊に我國には其の點について、嚴乎した制裁もありませんもの、教育上に對する私の意見はまだありますが、詳く御話し申せば、長くなりますから、其の他は實行の上見て頂きたいものです、若し不幸にして此の目的を達する事が出來なければ、亦た米國へ行かうと思ひます、彼方へ行きさへすれば、食うに困るやうなことがないばかりでなく、會心の友達も澤山ありますから、誠に懐かしく思はれるのです、ですから歸る時に是等の友達に、是れが永久の別れではないと、固く再會を約した位です。



▲良人に對する感想

最後に私の良人に對する感想や、人生に對する感想やを述べて見ませう、御承知の通り、透谷は彼の云ふ死に樣をして、色々の世評がありますが、私は透谷に

嫁したことを、一度も後悔したことは御座いません、併し私が今日獨身で居るのは、何も透谷に對する義理立でもなければ、亦た貞婦兩夫に見えずと云ふやうな、舊道德の束縛を受けて居るのでも御座いません、透谷は彼の通り、進歩した思想を持つて居りましたから、在世中でも決して私に向つて、寡婦を立てなければいかぬの、二夫に見えてはならぬなどと云ふことは云ひませんのみならず、常に未亡人再婚說を唱へて居りました、故に私は自分と思想が一致する適當の男子があれば、何時でも再婚する積りですが、何うも今日まで然う云ふ人がありません。

▲人生に對する感想

夫れから私の人生に對する感想で御座いますが、御承知の通り、私は誠に山あり河あり、紆餘曲折の波瀾多き徑路を辿つて來ました、夫れで人は私のことを男性的だとか、快活だとか云ひますが、是れで私は非常に多感で御座います、亞米利加に居た時などは、故國の山水を慕ひ、一人きりの娘を夢み、親や兄弟のことを考へて、到頭懷鄉病に罹つた位で御座います、懷鄉病に罹つたからとて何も笑つてはいけません、私は天涯萬里の異鄉にありて、懷鄉病をやらぬやうな人は、人間ではないと思ひます、夫れは兎に角、私は斯の通り、多感で御座いますのに、其の上多事多難の半生で、色々の困難に遭遇しましたから、思想の上にも色々の變化がありました、で或る時は、懷疑說に陷り、又た或る時は、無神無靈魂說を信じ、ユニテリアンとなり、厭世的悲觀論者となり隨分思想上の危機に陷りましたが、此の危機から私を救ひ出したのは矢張り、基督教と奮鬪的生活で御座いました、で私は爾う思ひます、人間は宗教なり何なり何でも一つ信ずる所がありて、其の上奮鬪的生活を遣れば、懷疑や煩悶などと云ふ、不健全の思想に襲はれる憂いはないものだと、夫れから、又た私のやうに、最愛の良人を失と云ふ樣な、人生の最大打擊を受けた場合には、矢張り慰藉を功名心に求むると云ふことも必要だと思つて居ります。



宮仕へせし婦人の閲歴談

婦人記者

現に奥平伯爵の御邸に御奉公をして居らるゝ近藤とく子と云ふ老女は、今年八拾歳の高齢に達しながら矍鑠とした元氣毫も衰へず、主君の御爲には水火も辭せぬと云ふ昔堅氣で居られます。此老女は妙齢より奥女中の經驗を積まれし上に、中年には小身代の財政を掌つてよく良人を補佐し、尚女子師範學校創立當時同校の舍監に招聘され、熱誠な教育家たりし事もあるので、奥平邸には十三年前、幼主の御守役として採用されたさうで御座います、此老女の經驗談を少しく御紹介申しましやう。

▲刀自の初奉公

私の父は松前藩の小さい侍で、母は東京の者で御座いました、私は東京で生れましたのですが、三人姉妹の惣領でありながら、私の性質が偏屈である故か、何樣も親に可愛がられませなんだ。少い内から遊藝の方は大嫌ひで、唯手習ばかりを好いて致して居つたのですが、何卒して御邸奉公でも致しながら讀み書や裁縫を學びたいと存じて居ました。丁度十四歳の時市街を歩いて不圖口入屋に御邸奉公周旋と云ふ掛札が出て居るのを見て、何處でも宜いから稽古事の出來る御邸へ世話して呉れと賴みました處、三千石取の御旗本で御隱居の御附が要ると云ふ事で、其家へ世話致して呉れました、私は未だ子供の事ですから、夢中で勤めて居ましたが、後で考へますと此御邸は却々立派な家風であつたと存じます。御當主は時の將軍に一つの年上で其時四十歳餘でしたが、御小姓頭を勤めて居られました。一體此御役は餘程窮屈で滅多に自由の外出は出來

ず、ホンの御濱か、抱邸か佛參位に止まり、親類の交際も伯叔父とは出來るが、大伯叔父には逢ふ事も禁ぜられてありました、是れは畢竟親類緣者から將軍に接近する此御小姓頭取に將軍へ內訴の賴み込でも致す憂を防いであつたのだらうと存じます、何に致せ斯樣風で役柄上自然沈着になる次第でもありませうが、元來此御當主は沈着で步くにも極徐かで、大聲擧げて笑はれた事のない方でしたから、自然家庭も整然として禮儀正しく、御當主が時々私の御附申した御母堂の御部屋へ御出になつた折も、平伏して御機嫌を伺はれ、御母堂は僅かに頭を下げて答禮され、格別の御話もなくて引退がられると云ふ風で、初奉公の私は御邸は何處も斯樣ものかと存じて居ました、一度私が意外に感じて可笑かつたことは、或日御當主が御子息の御退出を待たるゝとて御座敷の御掃除を爲されるのを一寸見ました處、其箒の使ひ方が御上手な事、丁度私が始終敎へられた通りでした、まア殿樣が斯樣事まで御上手なのか不思議だと存じ、御母堂に御話し致すと、『夫れは御役柄だもの慣れて御出の筈』と笑はれた事が御座いました。私も望み通りな御奉公で裁縫や手習など致す暇もありましたが、實家の都合上、十六歲の暮に遺憾ながら一先づ此邸を下り、翌年又出ましたのは、御成街道の某大名の邸で御座いました。

▲磊落な大名邸

御名前は明かに申し上げられませんが、此御大名は前の御旗本と大違ひで、先づ磊落とでも申しませうか、至つて緩かな家風で御座いました。殿樣も御固い一方でありませんから、折々妙な噂も女中達の間に御座いましたけれども、奥方と側室との權利の差はチャンと立て居りまして、一寸例を申せば御坐りの際にも殿樣と奥方とは何時も相列ばれ、側室二人は御前に向つて餘程下座に控へ、又古い側室（是れは以前側室で御役御免になつて居る婦人）は現側室より質素な裝飾を致して御夫婦の御後に控へて居ると云ふ風で御座いましたが、奥方も却々度量の濶い御方で一向御家庭に風波



も起らぬ御樣子でした。而して此奥方は女中達の食事を御覽なさるのが御好で、御食事が濟むと御下りの品を當番の女中に與へ、御前で頂かせ、御自分はヂッと御覽になつて樂んで居られましたが、女中達も馴れぬ内は窮屈がつたものの追々平氣になつて戲れ乍ら頂くので、御豆なぞ頰張つて食べこぼし、ころ〳〵と轉るのを他の女中が直ぐ拾つて食べるなどと云ふ滑稽も御座います、尤も他人の食べこぼした豆を拾ふのは其人の智慧を取込むとか申す諺があつて、大騷を致して居ました。

▲御手紙書振の苦心

此御邸へ御奉公中際立た御用とてはなく、時時御手紙を認める位で御座いましたが、未だ年若で經驗も淺く書式を悉しく心得なんだので大層困つた事がありました。或式日奧樣が他家へ御越で饗應を受けられた御禮狀を、其御邸へ差

上る事を仰せつかり其書式がどうも不案内ですから、相部屋のまつと申す年上の女中に尋ねました處、何の彼のと胡魔化して何時まで待ても教へて呉れず、本當に意地の惡い仕方と腹が立まして、それから自分一己で種々參考物を引張り出しどうにか草稿を纏めて老女に見て貰ひました處、是れで宜いとの事で漸と安心して認め差上げたのですが、後で皆に聞けば、彼のおまつが何を知つて居るものか、知らぬから胡魔化したのだと笑はれました。萬事不案内の間は斯様詰らぬ事で隨分苦心致したので御座います。此御邸に一年ばかりも居りましたが、前の嚴正な御旗本に比べて、何樣も自分の心に服さぬ節も感ぜられ、暇を取つて暫らく實家で暮す内、父の藩主松前侯が東京で御婚禮遊ばすに付き其御待受の女中に上るやうにとの御内意がありまして、二十一歳の時又々御奉公に出たので御座います。

▲女中の給料

是は家風と財政との都合に依り一定致しません。松前家は先づ質素の方で、其頃老女が二人御側女中が三人、御次が四人、御小姓が二人、御末が五人總計十六人、是に御側女中が使ふ女中即ち部屋方と申すのが七人で御座いました。女中の御手當は矢張階級があつて、上が一ヶ月に男扶持二人、薪代廿五錢、給金が年に七圓位です。女中は是を以て各自の生活を營むのですが、勤務上自分の召仕ひが是非必要ですから部屋方を雇ひます。此食料及び給金年に七拾五錢を自辨せねばなりません、夫れですから却々一人で一人の部屋方を使ふわけには參らず、大抵二人で一人か三人で一人位を相持にして使ふのです。尤も御邸に依り又役に依ては一人で專有の女中を使ふのも御座います、先づ女中でも部屋方でも實家の有福な人は始終足まいして貰ふのです。私なぞのやうな、實家から足しても貰へず、又自分も一錢でも補助を受まいと決心して居た者は、却々油斷も出來ず、切ない塲合も隨分在つたので御座います。

▲御奉公中の勤儉

御承知の通り邸の女中は當番非番が御座いまして、女中の役柄に依つて二日勤めて一日非番のもあり、隔日の勤もあり、私は隔日勤で御座いましたから、割合部屋に居る暇が多かつたので、私に取ては都合が宜しかつたのです。好な古書の調査や寫し物も致す外に、朋輩からチヨイ〳〵縫物なぞ頼まれ、御小姓衆は小さい人形の着物まで頼みに參るのもあり、閑居の嫌ひな性分ですからせつせと斯樣仕事を致しますと、御金で無くても小切れなぞ禮に貰ふので幾分か助かると云ふ風で一寸内職見たやうなもので御座います、何んだか邸者に似合はぬ可笑な事ですが勤にさへ障りがなければ、喋舌たりぶら〳〵と非番日を暮すより、働く方が正當だと自信して居りました、小遣錢も出來る限り節儉いたしたので。私は總てチビ〳〵と買ふのが嫌ひで纏めて買物を頼みましたから御とくさんは家が餘程有福だと見へ買物が大たばだと御表の方が評した相ですが實際とは大違ひで可笑ふ御座いました。

▲部屋方は主婦の如し

御側女中の暮し向は部屋方が司つて居るので、此部屋方の經濟の巧拙に依て女中達に損得があるのです。日々の御菜は御錠口へ參つて出入商人から求め、共同の臺所で別々に煮焚致すのです。奥の御勝手の他に女中達のために細長い共同臺所が設けてあり、銅壺附の小竈がずらりと並んで小釜が掛けてあります。(此銅壺の御湯は女中達の朝水に用ひます)、早起の部屋方は用の運びに都合は宜いが、晩起の部屋方は他の燃へ跡を使ふから薪が儉約に付くなぞと云ふ呼吸もあり、隨分細かしいものです。御米は各々擂鉢で磨ぐのですが、其磨ぎ方が一と風違ひ、御米を手の甲へ跳ね上るやうに擦り之を上げ磨と稱へます。私は物好によく臺所を見廻りましたが、部屋方が並んで『米を磨ぐなら上げ磨やよしやアれ、米が碎けて損になる』とか歌つたり、誰されが戀しいとか云ふ戲歌をうたつたり致し乍ら米を磨ぐ有様は誠に面白さうで賑やかなもので御座いま

す。御奥の御下りは大抵御末が頂きますから側女中達は平常旨い物も頂きませんが、隨分家から結構な物を屆けらる人もあり、又折々朋輩同志相談して珍らしい物でも拵らへる事もあり、御配りの致し合をする事もあつて丁度御長屋交際と同じ樣です。而して召使ふ部屋方が主婦の如きもので御座います。

▲御末の境遇

當今では御邸の御飯焚は毎日暇の無い勤めですが、昔の御末は當番非番がありましたから、心掛のある者は稽古事が出來たので、大大名へ奉公して家の有福な御末は非番日に活花の師匠を招いて稽古して居るものもあるさうです。出世で御座いますか、是は御三之間までは登れますが、御側女中には登れぬ事になつて居ました。其代り氣樂な境遇で隨分晝寢など致す女も在ります。御側女中の長局は、二階に在りまして御奥へ上り下りの節は御末の部屋前を通つて參るので、私は少し八釜しやでしたから晝寢を致して居る御末を見ますと必らず起しました。夫れで御末達が「おとくさんの御引にならぬ内ぐつすり寢て置う」なんて申合て居た相です。

▲主君御夫婦の御飯料

是は邸々で違ひますが、松前家では殿樣一日の御米高が三升、奥方が一升五合の定りでした、此米高は主君の威光を付けるためと、殘餘を御末の食料に當るためとでせう。而して焚方が普通とは違ひまして、釜の中で米がプーッと吹き上ると直に大笊へあけ、赤味ある米粒なぞを叮嚀に選り分け、極々奇麗な處だけを蒸籠に入れて蒸すのです。左樣です子焚いたのよりむらが無つて結構のやうで御座います。奥方の分は米高が少いから普通に焚て差上ました。副食物は御邸に依て奥から一々御注文なされる所もありますが、松前家では總て御賄ひ任せで一向御好の御注文も御座いませんでした。

▲髪結化粧

女中の髪形は家々に依て必らず邸風とばかり定らぬやうでした。御成街道の某大名では緩やかな家でしたから平日は皆下方風の丸髷に結ひました。松前では平日でも片はづしか下げ下地に結ひましたが、片はづしより下げ下地の方が頭が楽で御座います。私は非番日にも不意の御召が屡々御座いましたので。一日も髪を解いて櫛巻になぞ致して置く事が出来ず、頭を休める暇がないから大抵下げ下地に結て居りました。結方は何れも根元を假結に致して丈長で留めるのが正式ですが、餘程熟練しなければ難しいので、大抵元結で結へて其上へ丈長を掛て置きます、髪結ふ者は定て在りますが、女中達が御互ひに結ひ合ふ事も在ります。奥方の御髪は隔日に御髪上げを致しますが、奥方のは根元を結ぶ時に決して元結を口で喰へぬ規則ですから、御小姓が元結の片端を引張るので、御髪上時は是非二人の手が要ります。萬事斯様工合で人手が多く要つたわけでせう。女中達の髪飾は下方のやうに種々の品は要らぬのですが、矢張年若の人や華美好の人は、笄や平打に御金をかけるのです。御本丸の御女中は平打の簪もゆるされず、唯笄一本と足許りの黒鼈甲の簪を根元へグッと差し込んで置くのだ相です。是は頭の痒い折用ゆる簪で目立たゝぬやうに黒甲を差すのだ相で御坐います。入浴は松前家では一週に一度で、毎日の化粧には朝水で濟せましたが、寒い折は随分厭で御座いますよ。御白粉は矢張各自の好みで色々の品を用ゐました。

▲黛の置き方

式日に裲取を着る女中は皆黛を置きました、此黛の格好も邸々で違ひますが、先づ南天の葉が斜に向合たやうな形に置くのが通例として在りました。材料は白際と稱へる白粉を、普通に化粧仕上た額と眉の間へ定つた黛形に塗り込み、其上へ火箸の尖位の煉墨を輕く置き周圍をぼかすので、此塗ぼかしの道具は象牙でへ

らの様な物が出來て居ります。御本丸へ上て居つた妹がわざ〳〵此道具を私に持て來て與ましたが、氣短な私は斯様道具を用ゐるより指先で致す方が早いと存じ、獨り考でやり出しました處、案外容易に旨く出來るので、他の女中達が私にも置いて下さいと時には三四人位の黛置を頼まれました。黛は自分で鏡と睨くらを致して置かないと顔に似合ぬのに他人のを置くのは却々面倒で、其人の膝の上へ私がだかるやうにして置てやりました。黛は容易に落せるものですけれども、置た日には終日落すもので無いと致して在ります。元日に黛を置いた際など『面倒だから今年は三元日持越にしやうじやアないか』なんて其儘三日も置く不精を致す事も御座いまして、黛から下だけ顔を洗ひ化粧を仕直して濟せますが、黛は整然として少しも剝げません。唯塵埃が墨へたかりますから互に吹き合つて置き



ます。御小姓達の黛は白際ばかり置いて墨は用ゐませ
ん。

▲奥方の平生

松前家の奥方は御十七歳で相馬家から御輿入爲されたのですが、誠に賢淑な御婦人で御口數も少く、物軟らかで萬般の事情に通せられ、殿樣への御仕へ方から女中達を愛撫せらるゝ事まで一點の隙もない奥方でしたから女中達も皆敬服して居りました。唯今と違つて外向の御交際もなく閑暇に御暮しかと申すに却々左樣では御座いません。常に刺繍とか御細工物とかを熱心に爲れ其間に御稽古事も可なり爲いました。是れは相馬樣が質素な御家で、御遊藝に於ても琴は仕込れず、三味線ばかりと云ふやうな風でしたから、奥方になられてから琴の御稽古も爲されました。斯樣事の他、殿樣への御仕へも始終油斷なく御氣配りで御座いました。

▲奥方の御供

奥方の外出は御實家へ年に一度位、其他は神佛の御參り、御庭の御花見、御物見臺の花火見物なぞで御座います、女中達も外出の御供は物珍らしく樂しみでは在りますが、其際の役柄に依て隨分骨の折れるものです。當役の女中は御出の場所へ先へ出張して御待申すので、或る神社から又他の神社へ御廻參の都合にでもなりますと、御急で先方へ先廻り致さねばなりません。平生邸にばかり居る女中共が驅足を致すのが一寸骨が折れます。私は御小姓の頃此驅足を致した際、鼈甲の差込簪を振り落して了つた事が御座いました。御庭内の御花見は無禮講で隨分面白ふ御座います。

▲女中の宿下りと觀劇

女中が宿下りを致すのには、歸邸の節女中達一般へ夫々相應の土產物を出さなければなりませんから、實家が困窮では宿下りが出來兼ます。私なぞは滅多に宿下りを致した事は御座いませんでした。芝居には隨分熱心な人が在つて、非番日に都合して參りたがつて居

ますが、奥向なり御表の役人が彼是と咎めます。私は『おとくさん貴女が何卒相槌を打つて御許しの出るやうに取計つて下さいな』なぞと度々女中達に頼まれた事があります。申し出しの工合に依り案外役人も容易く承知致したのです。ハイ矢張誰が愛願だとか何とか夢中になつて居る人もあり可笑ふ御座いました。

▲歌加留多

松前の殿様は歌加留多が大御好で、女中達は御相手に飽る位で御座いました。毎度非番の夜御相手に御召がありますので皆閉口いたし、今晩は頭が痛むとか歯が痛むとか申して御免蒙むる人も御座いました、私は大抵お召に應じて出ましたが、或晩十時頃御使の際、私は最早寢床に入て居ましたので、今晩はふせりましたから御免蒙むりますと一旦は御斷り致したのですけれども御使が氣をもみますから上りますと殿様が何故直に參らぬかと御不興の御様子。私は『非番の夜で御坐いますから臥りました』と正直に申し上た處『左様かまア頭や歯が痛むより宜からう』と御笑ひになりました。女中達の遁辭はよく御存じで在ると見へます。歌加留多の盛んな時は主從亂戰で、殿様の御手を引搔く粗匆も隨分御座います。私も一度どうも粗匆致したと存じ『御手を痛めは致しませんか』と申上ても『イヤどうも爲ぬ心配ない』と仰有つて御手を袖の內へ隱して御出でしたが、翌朝白羽二重の御襦袢の袖が眞赤になつて居るのを見まして吃驚致した事が御座いました。

▲主從の間柄

昔は例へ主君の御無理と知つても默從致さねばならぬのが御奉公の習ひでは御座いましたが、時としては案外樂にすむ事もありました。『今晩は殿様が御酒を一升召上りました』と私が申上げた處ナニ一升飲むものかと御怒りになつたので、『夫れでも此御德利四本ですから丁度一升になります』と申上げましたら、直に升を取寄せて御試しになりイヤ成程左様であつた是は閉

口〳〵と御笑ひの事も御座いました。又或時御土瓶を强火の御火鉢へ御掛けになりますので『夫れは奥様が御持參になつた大切の御土瓶で御座いますから、ひゞが入るといけません』と申上げ乍ら火へ灰をかけますと、ムツと御立腹で『ナニ大丈夫だ』と灰をはね返へして御出になる內御土瓶がピン〳〵とひゞが入りました『夫れ御覽遊ばせ』と申上げた時は『ヤ閉口〳〵』の御言葉が出て果は御笑ひですみました。斯様風で心配なやうでも却つて朋輩の氣樂より樂な塲合も御座いました。

▲御夫婦の御交情

大名は御承知の通り大抵一年代りの參勤で御座いますが、松前では御國勤の間が永く、一年に百日だけ東京に御住ひでした。御夫婦は一年に僅か百日御同棲と云ふわけで、唯今と違ひ奥方が御國元へ御一所にと申す次第に參らず、御留守居勝で入しつたのです。奥方は御留守居の際も始終殿様への贈物に御注意なされ、其荷拵へ詰物なぞ私の役で御座いました。蜜柑箱は鴨居まで積み上たのを三側分位御贈りになり御國の家中一般へ配與さるゝのですが、一個〳〵調べて紙へ包み箱へ詰めました。私の詰たのは仕合にいたみが無いとか云ので御信用になりました。御同棲の際は、奥方は殿様の御起居に細かく注意なされまして、朝夕の御飯を初め、(御晝飯だけは大抵御表で上ります)御遊の際まで何時も御兩方御並びで、歌加留多の時なぞにも整然と御並で爲ると云ふ風ですが、奥方は殿様に始終御煙草を附けて出され、又殿様が一寸御目配せ爲ると御用筋を直ぐ悟られ、御自身立て御用の品を持ち來られると云ふ鹽梅でした。御仲合は唯外見ばかりでなく、殿様もよく奥方を愛され相互に禮ある內に和氣藹々として誠に瑕瑾なき御情交と感服致して居りました。

▲松前邸の火災と刀自の落膽

私の父は國詰となつて、母と妹二人東京に住ひ、大きい妹の方は御本丸へ御奉公致して居りました。父は



國元で妾を置いて居つたのですが、素より豐ならぬ家計で、東京に居る母と幼妹とへ送る費用も不足勝になりましたから、親戚とも相談いたし、母と妹を國元へ歸しました處、父は大ひに迷惑いたし、皆私の入れ智慧だと憤り、彼之紛紜が起つた相で、母も妹も又東京へ逃げて參りました。夫れで據ろなく幼妹を水野樣へ御奉公に上げ方法を付けたのです。其内父が重病で危篤との報知があつたので親戚は私に歸國を勸めましたが、奥から御暇が出兼るのと、幼妹が心細がるのとで躊躇いたし母だけ歸國致す事になりました。父死去の後國元の殿樣から是非參れと御召がありましたが、父死去の上は歸國の必要もないと存じ御斷り致して相變らず御奉公いたす内、安政二年(私が二十八歳の時)二月に松前邸内の御長屋から出火して丸燒となりました。丁度稻荷祭の濟んだ深夜でしたが、私は非番で

部屋に臥して居りますと、老女の聲で火事ダーと叫びました。私は飛起て手早く單衣をひろげ大切の書類だけ包んで相部屋の女中に（私は再び此部屋へ來られまい）と申殘し、雪洞を携へて御廊下から奥方の御寢間へ驅け付けました處、奥方を初め女中達の影も見へませんので、御部屋〳〵をぐる〳〵探し廻りました。相部屋の女中も私の跡を追ふて共々探しましたが見えませんので、御庭へ下りた時は最早御緣の庇が燃へて居りました。奥方は御庭内にも御出なく仕方がありませんから、せめて彼の書類だけ取出して參らうと致した處、相部屋の女中が危い〳〵と袂にすがつて離しません。左右する内役人も追々集り早く御中邸へ立退けと急き立てられ、若黨を連れて裏門から出ますと、兩國橋は黑山のやうな人込で却々通れません。私は着のみ着の儘で唯妙見の掛地を帶へ挾んで居ましたから、是で道を開いて呉と若黨に渡しますと、若黨は卷物を振り閃めかしたので、武器と見違へた衆人はサッと道を開きまして、漸く御中邸へ着きますと奥方を初め女中達は疾に此處へ立退かれて在りましたのでホッと安心致ました。後に御役人衆が貴女の立退が正當の立退であると云つて下さいました。斯樣に丸燒となつた私は年來貯へた衣類其他に對して少しも未練はありませんが、唯淚の出る程惜しかつたのは彼の書類でした。是は好な道とて古書の拔寫、傳授物の寫し、短冊式紙の書振等種々雜多の物を、永い年月の間に集め貯へ自分の寶物と秘藏致して居たので、灰燼と爲した落膽は喩へやうもありません。唯今人から賴まれましても憖い式紙なぞの書式を調べた事のある爲に、參考を失て不安心の心持が致し、認める事が出來ないで、困つて居ります。

▲厚き君命に感泣して決心を翻へす

火災の後、御國詰の殿樣から度々の御召で御座いましたので私も父の墓參旁一寸歸國致す事になりました。不便な道中の上に風待に逢ひ廿日餘りで漸く松前

に着し、早速御城へ上つて御目通り致すと、私に是非結婚せよとの仰せで吃驚いたしたのです。是は私は婿を取して父の後を立させる親戚の相談が殿樣に漏れ聞えて、殿樣にも頻りに此御思召が在たものと見えます。私は斯様不器量ではあり、自分の性質から考へても良人を持つに不適當であるし、又父母の間柄を見るに付け熟々感じた事もあり、素より一生を君に捧げんとの決心は鐵の如くでしたから、折角の御懇命も平に御斷り申上げました處、再三再四御前に召されては御勸めで、私も困じ果て『實は神樣に一生涯斷ち物を致して居ります』と申上ると『夫なら余が其方に代つて何か一とつ生涯斷ち物を致さう、夫でも厭か』と仰られた時は勿體なくて涙が先立ち御返事も出來兼た位、最早絶體絶命で決心を翻へしました。

此時刀自は懷舊の感極りて落涙止めあへず、暫く御話も途切れました。

▲刀自の良人

私は存じなかつたのですが、殿樣は兼てから私の配偶にと目差れた或る御側侍が在つたのが、仰せ出されぬ內、已に妻を迎へたので失望遊ばした相で御座います。再び御自身御撰びで媒酌され、遂に結婚いたした侍士は、殿樣は大層御自慢で居られましたが、私は誠に不幸を感じました。此良人は極正直ではありますが毫も働きがないから御扶持だけで御役が任りません。從つて收入も少い。素より儉素に慣れた私ゆへ貧乏は厭ひませんけれども、因循にして氣慨なく、妙に廻り氣が強くて男らしからぬ此良人に、邪々馬の私は萬事心服が出來ません。加之御酒が好で、規律なく頂くのが厭で〳〵對座致すも辛い位で御座いましたが、主君の厚き思召を考へ自分の運命とあきらめて忍耐したのです。私は近所から頼まれて一二人の子供に習字を敎へました處、追々聞傳へて頼み人が殖えて參り、可なり多くの子供を預りました。是れで少しは家計の不足も補ひましたものゝ、良人は敎子の家へ出掛ては御酒を頂いて參るのが心苦しくて堪りませんでした。

此憂鬱な生活は二十九歳から殆んど二十年、其間に良人が箱館の戰爭に出陣中獨りの男兒を十歳で亡った悲しい歷史も御座いました。後に養子を貰ひ嫁も迎へて孫も出來、折折は孫を連れて御城へ上たりなぞ致して兎に角月日を過して居りました。

▲女子師範學校に招聘せらる

東京で御奉公致して居つた妹二人は有難い事に明治八年女子師範學校創立の際敎師に招聘されました。處が誰樣から御聞込で在たか、私を舍監にと校長中村先生から開拓使へ御申越になり御招がありました。何の才藝もない私は意外に存じて御斷り申上ましたが御許しなく、妹からも是非との申越に最早家計も養子に任せて後顧もない身體ゆへ、良人は養子に託して出京いたし、不肖も顧みず御召に從ひました。重き責任



は負ひましても境遇一轉して愉快だと喜んで居る間もなく國元の良人は直に出京致しました。是れは私が堅く斷つて出ましたのを、養子夫婦は幾分かよい幸にして本人の意に任せたものと見えます。參つたのは致方もないのですが、例の働き嫌ひで御酒浸りと云ふので私も閉口いたしました。良人は何か籠細工の内職なぞいたしぶら／＼暮す内、學校の方は追々方針が變つて他に一人私と同職の方を招聘される事になりましたので、私は辭職を決心致しました。就職中は幸ひに生徒の取扱上信用を得ては居りましたが、斯く姉妹三人一所に榮職を奉じて在る事は、昔からの歴史を見てもよき結果が無からうと始終考へて居つた際、今度他の御方が來られて一寸無用の如き私は一日も在職致すべきでない。私が辭職致せば家計の困難も知れてはゐれど元來決心を飜へす事の出來ぬ性分ですから、皆様や妹達の止めるのも聽かず遂に身を退きました。

▲宗教に感ず

辭職後或る私塾から頼まれて少しづゝ教授を致して居る内、計らず基督教に入る事となりました。師範學校に居た折、竹村耕靄さんからよく教への本を頂いて少々見ては居りましたが、傳導師となつた妹の養子からとつくりと說教を聽て深く感ずる處があり、早速洗禮を望みました。妹の養子は「叔母さん未だよく分らぬ内に洗禮を受けてはいけますまい」と止めましたが、「私は神が天地萬物を造られたと御前から聽いた。天地の主宰者たる神の事を悉しく解得するには私が死ぬまで調べても分り切るまいと思ふ。今迄奉じた宗教に比べて自分が宜いと感じたのに、何方付かずに一日でも暮す事は厭だから洗禮を急ぐのです」と申して此道に入りました。

▲今昔の感

昔の邸奉公と申す者は清々とした心持の日は少く始終グヤ／＼と悶へて暮すのが先づ一般女中の通例のやうでした。畢竟嫉妬とか邪推とか云ふ婦人の弱味から

起るので、境遇上無理もない次第でせう。私なぞ此煩悶が少い方の性質では在りましたが、宗教を信じた唯今の精神から考へますと隨分無益な苦勞を致したものと存じます、左樣ですネ盆暮の瀬戸際がどうか漕ぎ抜けられゝば家庭を作つた方が宜からうと存じます。

私が此奥平邸へ上りましたのは、今より十三年前、殿樣御幼主の頃から不肖の私を御用ゐ下され、八十歳の今日まで樂々と老を過ごさして下さいますのは、誠に勿體ない事と存じて居ります。

奇警なる禽

米國セントモール夫人の鶩は小さい時から婦人の手で養成せられたので、愚なる鶩は夫人の仕込みにより極めて奇警なる藝術を有するものとなつた、先づ此の鶩は毎朝七時に至ると其の食卓に就かんことを求めて食堂の戸をたゝく、主人が其の入堂を許すと小卓子の方に進み其の傍の椅子に上り嚴粛なる態度にて其の嘴を食卓の端に附して坐し、徐に呟くが如き聲を發する、蓋し食前の祈禱の意であらう、然る後其の首を擡げて供せられたるオートミールに嘴を加ふ、此オートミールも人間の食に供せらるゝ如く調理を加へよものである、此の鶩の猶幼い時夫人は之を仰向けにして手中に置いて戯れて居たが、鶩は何事にも滿足せる如く其の不思議なる態度のまゝ眠るを常として居た、生長の後は廊下に來り食堂の入口なるマットの上に蹲りて其の兩眼を見開き、家族の來る毎に聲を發して之を呼ぶのである、奇妙なる形を有せる此の鶩がマットの上に登りて樣々の身振りを爲すのは頗る滑稽で殊に夏期休業の時に當り多くの少年の來り宿する時は其の歡樂絶頂に達し少年はチヨコレートクリームを鶩に與へあらゆる藝當を演ぜしめて悦び遊んで居る鶩も亦これ等の來客を喜び、氷砂糖を得る望みあらば如何に長時間と雖も其の場を去らぬ、かくして鶩は常に小供の侶伴と爲り、翼の一方には黑人の人形を一方には水兵の人形を載せてポンを飾り馬車を引きアイスクリームを食ひ、コーヒーを飲み、玉を擲ぐれば犬の如く之を追ひまはすなど其の面白さは言語に絶するとの事である



梅雨季の注意

家政子

本月十日から梅雨期に入ります、一年中最も不愉快で且つ不健康なはこの期節ですが、こゝで家庭衛生を懈るといろ〳〵な病氣を醸すに至りますから萬事に注意せねばなりませぬまづこの心得となるべきことを左に

△霖雨の影響

霖雨の爲めに生ずる害は何であるかといふに濕氣と光線の不足とです、雨中は衣服器具や家屋の壁等に水分が多くなるから總ての温度を奪ひ又光線に伴ふ温度をも遮つてしまひます、そこで自然に寒くなるのみならず濕氣の爲め人體が直接に受ける害は人體から起る新陳代謝の働きが薄くなる事です、早くいへば衣服が濕つてゐるので體氣の蒸發を妨げ、炭酸氣が出で新らしい酸素が入るといふ交換の力が鈍つて來ます、隨つて身體が弱るのと今一つは時ならぬ寒涼及び光線不足の事が人體に影響して感冒、レウマチス、胃腸カタル、氣管支病、肺病及び、ペスト等種々の病氣の基となるのです。

△光線と人體

光線といふものは我々が平素想像する以外に偉大なる効力を持つてゐるものです、動物や草木や共に光線のお蔭で營養を保つて行く、其上日光の力は種々の傳

染病のバチルスを殺す事が出來ます、病毒に汚れた衣服にても石炭酸などで不完全に消毒するよりも一日十分に日光に晒らした方が餘程効力があります、是ほど有力な光線が梅雨中には滅多に中らぬ黴菌なども此の期節には大に繁殖しすま光線不足の恐るべきは此の爲で座います。

△赤痢と胃腸病

大概な病氣は梅雨中に發生しますが、殊に赤痢などは梅雨晴になつて俄かに擴かるのが常です、一體黴菌といふものは濕氣の中に投ずると生活力が恐ろしく強くなり、梅雨中は誰れも知る如く食物の腐敗する程が、極暑よりも酷しく、直ぐに黴菌となるからは腐敗した食物は何よりも恐ろしい、ですから食物の注意が肝要です、餒かゝつた飯などは勿論、



魚や豆腐なども稍もすると腐敗し易いから奴豆腐、刺身などは用ひぬがよろしい、すべて肉にまれ、魚にまれ、新らしいものをよく燒き、よく煮る樣にせねばなりませぬ、又梅雨中は外へ出られませぬから退屈まぎれに寄つて集つて飮食するその爲め自然病氣を招く譯です、それに梅雨の質として天氣がよくなれば暑くなるから水や氷を遠慮なしに飮みます、夏期に腸胃病者の多くなるは之が爲です。

△ペストと肺病

梅雨中は空氣が濕つて日光が中らぬばかりでなく兎角室内を閉切にするのと戸外の運動をせぬのとで身體の爲めには種々の不攝生の原因が出來ます、同時に室内に於て傳染する病氣即ちペストや肺病は自然この時季に跋扈し易いので、ペストは重に初夏、初冬の二季に流行します、其一は五六月頃即ち梅雨の期節、其二は十一月から翌年一月中で、殊に初冬よりも初夏の方が激烈ですから大に注意せねばなりません。

△梅雨と小供

梅雨になつて一番困るのは小供です、小供は大半此の時期に入ると娛樂を奪はれるから自然食ふ方ばかりに走る、又腕白盛りの中は少々の雨を苦にせず、外へ出て泥濘いぢりなどをして遂に雨と汚水の爲めに感冒を惹き起すことも多ければ兩親はよく帽子羽織などを注意して乾かしてやり、足袋や靴下なども始終心掛て濕れたものは直ぐ取かへてやる樣にせねばなりませぬ。次に赤兒には氣候の激變に備ふべき必要の爲めに常にフラネルの腹卷をさするがよい牛乳なども早く腐れ易いものであるから少し重曹を入れて冷たい水或は氷の中に入て置き、飮水は成丈け煮たのを冷して飮ませる樣にせねばならぬ又彼の煉乳は梅雨になると一度蓋をあけたものは四五日位しか持たぬからその心で取かへねばならぬ、嘗めて見て酸味があつたり、沸して見て泡が出るのは腐つてゐる證據で厶います、每年梅雨の季節に入と幼兒のある家で尤も困るのは襁褓ですが氣候が順當でないから之を汚す度數が多い爲め洗濯にも、之を乾かすにも隨分手數がかゝり、假令一



且は乾いても直ぐに濕つぽくなり、扱に中々困るものです、されば大抵これを火に温め火氣のある内に用ある樣であるが、これはどうもよくない、なせならば幼兒の身體の抵抗力を弱くする爲め、兎角感冒などに罹り易い恐がある、面倒な事をいへばいろ〳〵ありますが、まづ一般を申せば火で乾かしたのを振つて溫氣を去るか濕氣の通り難い風呂敷に包んで置く樣にすればよい、平生は兎に角此の季中は成可く新らしい襁褓を用ゆる樣にしたいものです。

△衣服の注意

これは別段大人と異つた事はありません、まづ毛織物たとへばチル樣の衣服を用ゆることです、併し直接に身體に觸れしむるとチク〳〵して厭がるものですから晒木綿の下衣を着せしむる樣にしなければならぬ、それ

に下腹を冷さぬ樣に腹掛をさせるのを忘れてはならぬ。經驗によると衣服の仕立は簡單な改良服が一番よい樣ですそれから腹掛は股引仕立で肩から吊るのが多いが、どうも工合よくはゆかぬものです、

△夜具の手入

着る物の中で一番手を入れて奇麗にせねばならぬのは夜具です、これは着物のやうに度々洗へるものではなし、梅雨時などは濕つぽい上に疊んだ儘で押入へ入れて置くとすれば自然黴や惡い臭が出るものです、天氣のよい時に精を出して始終日光に曝らす樣にせねばならぬ、殊に汗になつたものを藏つて置くのは甚だよろしくない、尤も黴の生へるものは夜具に限らず濕氣のあるものは何にでも生へるから餘り濕る時には火鉢で室内を乾かすのもよし、又衣服に黴の生へたのは日光に晒して乾かした上刷子で掃きアンモニヤの薄い紛をかけて置くがよろしい。

△梅雨と衣服

梅雨時の衣物は容易に濕氣を導かぬ樣な物がよい、夫には何よりも毛織物が第一で、まづ紀州チルかソラチルなどがよい、一體毛織物は濕氣を導かぬ上空氣を含んでゐる爲めに梅雨時のやうに氣候の激しく變る時には最もよい譯で殊に小供などには下着のシヤツやおしめなどを澤山用意して置き成可く濕つたものは着せぬ樣にし天氣になつたならば乾度乾かすことを忘れてはなりませぬ。

△家具其外の洒掃

勝手元に不斷使用する、茶碗や、茶飲道具は毎日熱湯で洗ふの外に押入、戸棚なども熱湯で拭くやうに心掛け、勝手などは始終水を使ふ所であるから不浄にして置くと茸が生へたり、蚯蚓が這つたりする事が多いゆゑ時々熱湯をそゝぎつとめて乾かして置くやうにせねばなりませぬ又柱や、壁にも惡くすると白い菌が生へて自然他の場所へも犯すことがある、又家の周圍殊に便所など雨天には臭氣がして衛生上に惡いから石炭を蒔いて消毒しなければなりませぬ。それから掃溜箱を注意してなるべく汚物を長く溜めて置かぬ樣にせね

ばならぬ、下水、洗し元の掃除は勿論の事です、兎角病氣は不淨不潔から來るものでムいます。

患者に供する食餌

病は口からといふ諺さいありて健康の人すら食物は撰ばざるべからず、況して病床にあるものに供するに於てをや、されば病人の爲めに食物を撰むは實に重要の事柄にして看護人たるものゝよく心得べき事とす、殊に大患者に與ふる食品に於ては一層の吟味撰擇を爲すべき事なり、世間洋食は滋養多きものなれば患者の食物として適當のものならんと思ふ人もあるべけれど是れ大なる誤なり、例令ば胃病患者に屢々肉食を與ふれば不消化の爲めに却て胃痛を起し、或は大便の秘結を來して大に惱むことあり、又心臟病患者にして肉食すれば病狀俄かに變動して往々大患に陷ることあるが如し、されど又一方よりいへば病者は兎角營養不足なるものなれば滋養物を與ふること最も肝要なり、而してその滋養物は牛乳、スープ、及び鷄卵等の如き流動物若しくは病症によりて脂肪分を去りたる牛、鷄の良肉を與ふべし、但しこれとても成可く醫師に問ふて後與ふるをよしとす、唯此所には一般の患者用食物として看護人の心得の爲めを記するのみ。

▲米スープ

上白米三合を能く淘ぎ之を沸騰せしめたる湯の中に入れ凡そ十分間煮たる頃味噌漉又はザルの中に揚げ別にスープ鍋に清水一升を入れ之に脂肪分なき牛肉又は黄雌鷄の肉少許を賽目に切りて加へ、右の煮米を投じ適宜の鹽を和し凡そ三十分間温火にて煮るべし此スープは病人又は病後衰弱したる人など之れを吸へば大に榮養の効あるものなり、但し病人に與ふる飲食物の鹽加減は甘き分をよしとす、又當人若し之を好めば少許の胡椒あるひは他の香料を和して與ふるもよしと雖もなるべくは之を和せざるをよしとす。

▲大麥水

五勺程の大麥を水にて能く洗ひ、ソース鍋に入れて程

盃の熱湯を注して凡そ十分間煮たる後湯をこぼして再び麥を洗ひまた之れを鍋に入れて水六合、白砂糖七匁と少許のレモン皮細かく剉みたるものを加へ、其水の凡そ半分に至るまで文火にて煮詰めるべし、既に熟したる頃粗きすいのうにて漉し少許のレモン汁を加へ冷して與ふべし。

▲大麥粥

大麥をよく洗ひコップ半杯ほど取りて六合斗りの冷水に入れ三時間煮るべし、清淨なる器にて漉しよき加減に甘味をつけ肉桂の粉を少し加へて香氣を付くべし。

▲バナダ

食卓用ビスケット二三個を五六合の鉢に入れこれに徐々に熱湯をそゝぎかけ悉く膨張せしめ、少許の砂糖をふりかけ、若し患者の衰弱せる者ならば大匕一杯の葡萄酒をコップ一杯の熱湯と混じて加ふべし。

▲鷄肉羹

稚き骨付の鷄肉二斤を骨とも細かく截り之に六合ばかりの冷水をそゝぎて骨より肉の悉く離れ去るまで半時間ほど文火にて穏やかに煮るべし、それを漉して文火にて煮たる大麥を大匕一杯入れ一つまみの鹽を加ふべし

▲燕麥の粥

牛乳三合の中に大匕三杯の燕麥粉を投じ凡そ三十分間時に攪きまぜつゝ乳に漬け置きたる後之を漉じてソース鍋に取り滓は粉の中に含める乳をもよく絞り文火にかけて凡そ十分間攪動しながら煮るべし既に熟したれば適宜の鉢に取り少許の牛酪及び砂糖を和して能く攪拌し熱き中與ふべし

▲牛乳スープ

上等白米一合を能く洗ひたる後五六時間水に浸し置きて之に少許の鹽を和し文火にて凡三十分間徐々に煮たる頃三合の牛乳を注し大匙一杯の牛酪と同量の白砂糖とを加へて更に煮ること三十分間を用ふべし是れ亦少許の乾パン又は食パン少許を細かに切りて投れるもよし

庖厨

季節魚料理二十種

俊翁

六月は鱗介類の產卵期に屬することとて、何れも相牽ゐて沿岸近く產卵所を求めて來るものなれば、尤も漁り易く、且つ古より蓬の枝に舟繋ぐと言傳へし如く海上は一年中一番穩なる季節とて、旁々不漁などのあらふ筈もなし、故に世に魚縞と稱へて此時節を喜び鯖や鯵が大根、蕪より廉價に供せらると云ひ囃す位なれば、其實大根や蕪の如く味なきにあらで臨月のことゝて全身には十分に膏ものり魚の本來の美味を齎らすはこの月なり。

鯛や鯖は鱗界の尤、いきの總菜と爲すと云はゞ一寸吝過ぎの樣に聞ゆれど、彼の江戶兒が褞袍を典して初鰹を稱味すると同じく、地方人は此魚縞季節に、豐漁の時に又一番美味な時に賞味することそ經濟を知るものといふべし。

◎鯛の刺身

鯛の鱗をふき腹を開きて汚物を洗除し、三枚におろし、血合、(脊骨に接せる血の如き色ある肉)及び皮を去り、薄く揃へ作りになす、或は角作りに爲すもよし海松又は獨活など取合せ、山葵を添へ、醬油若しくは二杯酢にて用ゆべし。

又角作りには、炙りたる淺草海苔を揉みて振掛け山葵を添へ二杯酢にて用ゆることもあり、或は肉を山葵醬油にてあへ、其上へ海苔を揩きて出すもよし。

◎鯛の潮煮

潮煮、古はこれを海鹽煮と云へり、能く水洗したる鯛を三枚におろし、適宜の大さに切り、食鹽を振りかけて暫く置き、その後水にて能く洗ひ笊に入れて熱湯を注ぎ鍋にて湯を沸かし其湯の中へ右の切身を投じて戾し鹽にて加減し(戾し鹽と云ふは湯呑の茶碗の如きものへ食鹽を入れこれに水を張りて置き、その上浮の水を流し捨てたる殘りの鹽水なり)次に上等の醬油數

漸加へて煮、上へ泡立ちて白水の如くになりたる時、金杓子にてその泡を掬ひ取りて、火氣なき處へ鍋を卸し置けば汁は自然と透明に澄みて頗る上等の風味となるものなり、木の芽の吸口にて出すべし。

又鹽したる切身を水にて能く洗ひ右と同様になすも可なり。

殊に潮煮には引皮、眼球、唇、其他腹部にて肉薄き白き部分を用ゆれば其味頗る旨し。

◎鯛の照焼

鯛を能く水洗ひして庖丁目を深く入れ、少々食鹽を振りかけ、又腹を割き腸を出したる跡へ少々胡椒を塡め、且椎茸、鳥の叩肉等を味淋味噌に擂り交せたるものを十分に塡め込み、腹の合口を止串にて尾の方より頭の方へ縫ひ指し、さて徐々と火に炙るなり、軈て十分火の通りたる時を見て火より下ろし、皿に載せ小皿に取り分けて用ゆ。

◎鯛のスッポン煮

能く水洗したる鯛を三枚におろし、一寸餘りの角、或は少し縦長く切り、胡麻の油を少々鍋におとし入れ火に掛け烟の立ちたる頃味淋を加へ、敷笊の上へ右の切身を並べて入れ、牛蒡の一寸四五分計りに切りたるもの及び蓮根などを見つくろひ、小さき鍋蓋を落とし入れて暫く煮、その間度々醤油をさし加へて汁加減を鹽梅し、成丈け汁を煮つめて照りの出る様に煮るなり。斯くて程能く煮上りたる時、粉山椒或は胡椒等をかけ深き器物に盛りて出すべし。

◎鯛の櫻干

三枚におろしたる鯛を皮を引かずその儘二分計りの厚さに小口切となし、醤油に上酒少々加へたる中へ一夜浸し置きたる上にて目の細き笊などに並べ日に乾して貯へ置くなり、斯くて時々取出して火に炙りて用ゆ小皿盛などには最も妙なり。

◎鯛しんじよ

三枚におろし、肉をかき取り、よく俎板にて擂りつぶし、且つ擂鉢にて十分に擂り酒と鹽とを少し入れ又別に少々の饂飩粉又は山の芋を加へて十分に捏ねたる

上、煮立ちたる湯の中へ入れて煠で敷味噌、敷葛何れを用ゐて食するも佳し、摺山葵を添ふべし。

敷味噌とは摺りたる味噌を器に敷きて其上へ右の肴を盛るを云ひ、又敷葛とは調味したる葛餡を敷味噌の如く用ゆるを云ふなり、葛餡は鰹の煮汁を醤油にて加減よく調味し葛を引きて拵へるなり。

◎松笠鯛

三枚におろしたる鯛の身を四角に切り、縦横に切目を入れてザッと煮、その切目のはせるを度として直に上げて蒸すなり、横計りに切目を入れたるを初瀬山といふ、敷味噌、敷葛にて用ゆるも餡を掛けて用ゆるも佳し又、吸物或は清汁の實となすも妙。

◎鯖の照焼

鯖を能く水洗にして片身おろしとなし、程能き大さに切り、三十分以上生醤油に浸しおきそれより金串を打ち火にかけ、中途で両三回醤油をかけて、こんがり燒、さらに両面へ照り汁を薄くなすり一寸炙り燒にすれば照燒本來の美味を生ずべし。

さて何魚に限らず照燒をするには照汁を拵へて置きて魚に塗るものなれば、一寸その製法を記さんに、先づ味淋二合程の中へ白砂糖一匙計りを加へ、深鍋で煮詰めながら醤油を少しづゝさし入れ、一面泡の充分吹き上りたる頃器物へ移し冷し置きて、刷毛或は羽毛にて塗るなり。

◎〆鯖

鯖を三枚におろし、腹骨をすくひ取り両面に食鹽を振り置き、さて充分鹽の廻りたる頃毛拔にて小骨を拔き去り水にて洗ひ、酢に漬けその色の白く替りたる頃皮を剝ぎ適宜に作りて皿に盛り、次に大根卸を澤山に拵へ、毛水嚢又は布巾の中へ入れ上より水を掛けて絞り、酢に食鹽を加へたる中へ漬け、再び絞りたるを甘酢にて交せ合せて前盛とし、鯖に甘酢を掛けて出す。

甘酢の拵方は、煮切へ少しの食鹽を加へ適宜に酢を入れて、少量の醤油をさして色をつくるものとす。

◎鯖の煮付

子持鯖を能く水洗ひして、子のまゝ一寸乃至一寸五

分計りの筒切となし、實山椒を加へて生醤油にて小鹹く煮つむるなり一體鯛の肉は極軟かなれば多くは一鹽あてゝ燒くべし、酢の物として用ゐ・又味噌煮となす習ひなれど、殊に味噌煮とすれば其肉が味噌の如くベソ／＼となるゆゑ面白からず、先づ世話のなきは右の煮付なり。

◎海老の葛粉蒸

海老の皮を剝きて、葛粉と味淋とを固めて溶きたる中へ入れ、衣を着せて蒸すなり、おろし山葵にて用ゆれば最も妙なり。

◎海老の鬼殼燒

成るべく大なる車海老を取り、脊を割き開きて金串を打ち、味醂醤油にて付燒にするなりその皮の狐色になりたるを度として下し、酢漬にしたる薑を添へて出す。

◎鮟鱇の味噌煮

鮟鱇を水洗して能く湯がき、その肉を切取りて味噌に入れ、金柑を切込みて煮るなり、味噌は味淋にて摺り和らげたるを用ふ。

◎章魚の櫻煮

章魚の頭の下部へ指を入れ、其處より頭の處を半分計り切りて、頭を裏返して能く洗ひ、眼と鳶口とを去り、鹽を振りかけてよくもみ足のぬめりを除きよく洗ひたる後、よく煠で、足を二三寸計りに切り、疣を取らずに皮を剝き小口より薄く二三枚程づゝ繋ぎ切りにし、これを程能く味付けた、煮出し汁にてザッと煮るなり、若し十分にせんとおもへば煮切を用ゆるなり煮切とは濃き鰹の煮汁に酒を四分計りと少量の醤油を注ぎ燒鹽にて鹽梅したる汁を云ふ。

◎章魚の二杯酢

二杯酢章魚は大蛸に限るべし、その湯煮したる足を切り、小口より斜に薄く切り放して二杯酢に浸し、おろし生姜にて用ふ。

◎芋章魚

芋章魚は酢章魚と、反對に小さき蛸にて充分なり、食鹽を振りかけよくもみて其ぬめりを除り、頭を裏返

して墨汁ふくろ等の汚物を去りて元との如く直し、脚を長さ一寸乃至一寸五分位に切り、又里芋は皮を剝き厚さ二三寸つゝに輪切となし、共に交せて煮るなり、そして其煮頭を計り醤油、砂糖にて程能く味を付くべし、木皿などに盛りて出す、料理は最も容易にして風味佳く、殊に婦人の口に叶へり。

◎鰶の三杯酢

鰶を能く水洗して、三枚におろし、(此魚は小骨の多き質なれば、皮を引がす斜に細長く糸作りとなすをよしとす)三杯酢をかけ生姜或は山葵を添へて用ゆべし。

◎鰶の田楽

鰶を能く水洗して串を打ち、炭火に炙りて白焼きを爲し、再ひ甘味噌の擂りたるを兩面に塗り付けて炙るなり、味噌は砂糖を加へて鹽梅よく仕立つるを佳しとす、火より下ろすと直ぐ、温き内に用ゆべし冷ては風味を失ふ。

◎干海鼠の二杯酢

干海鼠を一日水に浸け煠でゝ極く薄く切り、酢と醤油との二杯酢を掛けて、紅葉おろしを載せて出す。

さて紅葉おろしとは、大根の切口の中央に箸を刺し込みて穴を明け、その穴の中へ蕃椒を丸のまゝ箸にて押し込み、之を擂りおろすなり、大根の白き中へ赤き蕃椒が擂り砕けて恰も紅葉か雪か霜の中へちら／＼と交つて居る風情ありとて此名あり、「又の名を龍田おろし雪の梅」と呼ぶ。

◎あなごの蒲焼

あなごを二つに脊割になし、骨を除き串を打ち、味淋醤油にて付け焼となす、

温き飯に右の蒲焼を切身にしてのせ、その中へたまり醤油即ち付焼の掛醤油を少々おとし、茶を掛くれば所謂あなごの茶漬にて鰻などのごとく濃膏なく淡泊として頗る妙なり。

◎烏賊の照焼

烏賊の脊に庖丁を入れて甲を去り、中の墨汁などの汚物を除き、皮をむきて表にこまかく碁盤の目を入れ暫時醤油に浸しおき金串を打ち火にかけて燒く、中途

にて一二度醤油をかけ、その狐色にこげたる頃、更に両面へ照汁を薄くぬり一寸炙りて下すなり。

◎鱧のつけ焼

鱧を水洗ひして片身おろしとなし、四五寸の大に切りて、暫らく味淋醤油に浸しおき、粉山椒を振りかけて焼くなり。

◎海鰻の骨切

はもを腹より二つに開らきて脊骨を除き、又脊鰭を抜き去り、頭の方より一分位づゝ置きに切目を入れ、此の切目は成るべく深く皮に達かせる位をよしとす、金串をうち味淋醤油にて付焼にするなり。

◎泥鰌のかばやき

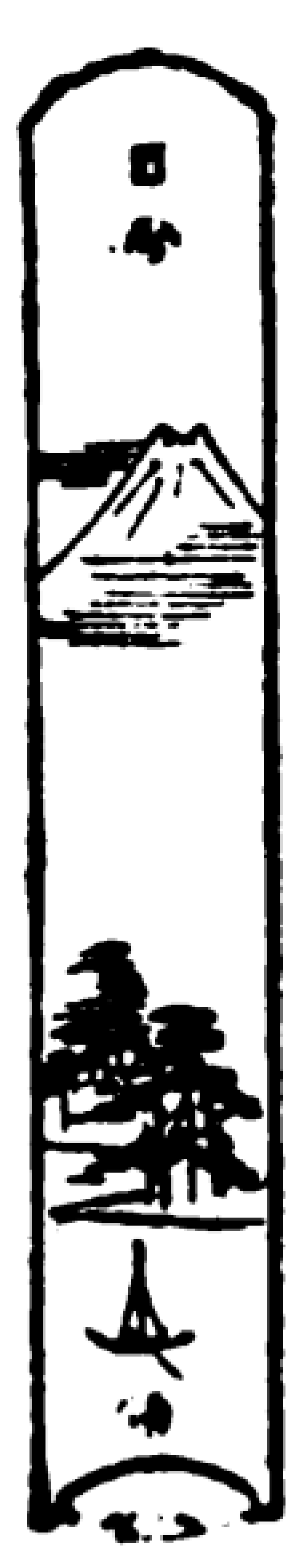
あまり大ならざる泥鰌を撰び、之を開きて淡鹽水にて洗ひ、横に二本づゝ金串を打ち、鐵架にかけわたし、先づ肉の方より焼きはじめ、蒲色となりたるとき裏返し皮の方を焼き、上りに掛汁を両三回注ぎかけ炙りて串をぬき器に盛るべし、又掛汁は、味淋六分と生醤油四分とを合せ之を六分に煮詰めたるものなり。

◎生節の汁

新しき生節の皮を去り、鍋に水をいれ、火にかけて沸りたる時、その生節を一寸位にむしり入れ、程よく煮、醤油と鹽にて味をつけ、煮立ちし時、豆腐を入れて直ぐにおろすなり。

◎生節の餡かけ

生節の皮を去り厚さ五分の切身になし、ザッとふかして餡をかけるなり、さて餡の作り方はまづだしを取つて冷し置き別に味淋二杯に醤油一杯の割に合せた汁を半分になるまで煮つめ、冷めただしの中に入れ葛を水にときて入れ火にかけどろ〳〵加減に煉り、前の生節にかけ、芥子を煉りて少し添へるなり。





輕便 西洋菓子の製法

▲アップルスノー

林檎三個を皮の儘二十分程蒸す時は柔かになるべし之を皿の上に取り出し、「ホーク」にて皮と核心とを去り、別に卵の白味を充分泡になし、鹽一摘を加へ、兩者を一緒にし、暫時攪き混せる時は林檎はどろ〳〵になる、之れに砂糖を大匙に二杯加ふ。

又は林檎丈けを先にどろ〳〵になし、砂糖を加へ、最後に卵の白味の泡を加へて攪き混せるも可し。

▲ショダンプッディング

卵の白味　二個
コーンスターチ　大匙二杯
レモン液又はワニラ液　二三滴

コーンスターチを水にて溶き、コップ二杯の熱湯を注ぎ、猶五分間程煮立て、之れに卵の白味を充分泡にして加へ、香液を落し攪き混せ、一人前づゝコップか又は小皿に取りて冷す、左の「カスタード」をかけて出す。

コーンスターチ大匙に一杯を牛乳二合にて溶き、砂糖コップ一杯を加へて暫らく煮立て、之れに前の殘りの黄味二つを能く攪き立てゝ加へ、更に香液二三滴を加ふ、此「カスタード」を前の「プッディング」にかけて出せば、黄白寫りて美なり。

▲エッグノア

牛乳　コップ半杯
卵の黄味　一個
香液

卵の黄味と牛乳を能く攪き混せ、之に香液二三滴を落し、若し好みなれば砂糖を少し加へ、(此の時は少し温めて砂糖を溶かすべし)之をコップに一人前づゝ入

れ、其上に殘りの白味を充分泡にして、粉砂糖を加へたるものをかけて食す。

▲夏蜜柑のジェリー

砂糖　大匙二杯
ゼラチン　二枚
夏蜜柑　一個

コップ一杯の湯に砂糖を溶し煮立て置き、ゼラチンを五分間程水に浸け置き後、之を前の煮立てたる砂糖湯の中に入れ、攪き混ぜ乍ら暫らく煮る、其微温湯位に冷えたる時に、夏蜜柑の凡ての皮を剝き肉のみを入れ、放冷するなり。

▲クリームシウ

粉　コップ一杯
バタ　大匙一杯
玉子　二個

「バタ」をコップ一杯の湯に溶かし、之に粉を入れ、急に「ホーク」にて攪き混せ、能く練り、之に卵一個づゝ割りて加へ、能く〳〵攪き混せ、匙にて少しづゝ掬ひ取り、(此時匙に付かぬ樣、匙を一寸熱湯に浸けるを良とす、又右の分量にて十二個出來る、)「バタ」又は「ヘッド」を引きたる淺き「パン」に並べて、テンピにて三十分間に燒き上ぐ。

之を食するには、「クリームソース」を新聞紙喇叭にて突き出してかけて出す。

▲キャンデーメープル

バタ　大匙一杯
砂糖　コップ三杯
牛乳　コップ半杯
香液

「バタ」、砂糖、牛乳を鍋に入れ火にかけ煮立てる、(煮立ち始めたる後は攪き混せるべからず、)然る時は漸次固まり始む、此時に「レモン」又は「ワニラ」四五滴を落し、深き鍋に移し、放冷して固まらせ、後切りて出す。

▲アップルフエージス

林檎を輪切にし、核心を拔き、衣をつけて「ヘッド」を

沸したる油にて天婦良にす。
之を食ふには砂糖を付けて食す。
右衣の作方左の如し。

粉　大匙三杯
ベーキングパウダー　小匙半杯
卵の黄味　一個

右の三品を共にし、少々水を加へ乍ら攪き混ぜ、後に殘りの白味を泡にして加ふ。

附。オレンヂフエーヂス。右と同法を蜜柑にてなす。

▲ベークドアップル

第一法

中徑三四分位の管にて林檎の中央を突き抜き、「トンネル」を作り、斯の如くなしたる林檎を淺き「パン」の中に並べ、各其孔に一パイに砂糖を詰め、其上に「バタ」を少々載せ、鍋に僅かに水を張り、之を「テンピ」に入れ、一時間燒く、然る時は、林檎は柔かになりてつぶれ、皮は焦色を呈して美なり。

注意。「鍋」に水を張るは、林檎を煮る意味にあらず全く水なければ林檎は「鍋」に焦げ付く故なり。

第二法

林檎の皮を剝き中心に孔を作る。

粉　大匙二杯
ベーキングパウダー　小匙四分の一
バタ　小匙一杯
鹽　少々

右の四品を兩手にて能く揉み、水を少し加へてざつと混せ、熨板の上に取り出し、（先きに熨板の上に粉を少し振り散き置くべし）「ローラー」にて薄く熨し、之を以て前の林檎を包み、（林檎の孔の中に砂糖とバタを詰め）皿の上に載せて一時間湯にて蒸す、之を「アップルダンプリング」と言ふ。

第三法

林檎の皮を剝き、核心を抜き、中に砂糖と「バタ」とを詰め、「パイクラスト」にて包み、（「パイクラスト」の製法は「パイ」の部に示す）「テンピ」の中にて四十分間燒く。

▲ゼラチンケーク

砂糖　大匙一杯
水　コップ一杯
ゼラチン　二枚
香液

コップ一杯の水にて砂糖を煮立て、「ゼラチン」二枚を十分間水に浸けたる後搾り上げて之れに加へ、能く攪き混せ、「レモン」又は「ワニラ」二三滴を落し、適宜の型に入れて放冷すれば固まる。

▲コーンスターチブラーマンヂ

牛乳　コップ一杯
砂糖　大匙一杯
鹽　少々
コーンスターチ　大匙一杯
香液

牛乳、と砂糖と、鹽とを鍋に一所に入れ煮立て、之に「コーンスターチ」を水に溶きて加へ、固まり始めたる時「レモン」又は「バニラ」二三滴落し、適宜の型に入れて放冷すれば固まるなり。

▲パイ

「パイ」とは、粉を練りて作りたる「パイクラスト」と称するものにて、餡を包みて燒きたる菓子の總稱なり。故に其用ふる餡の種類に依て各名稱を異にするなり

▲パイクラストの製法

第一法

メリケン粉をコップに一杯半を篩ひ、之に約一握の「ヘッド」(ラード)を加へ、鹽一摘み入れ、兩手にて能く々々揉み混せ、全く「ヘッド」を粉に混せ、之れに水を注ぎ、手又は木篦にて最も徐かに、最も輕くざつと攪き混せ、「ビスケット」を作る時位の固さにす。次に熨板の上に先づ粉を振り散き、其上に取り出し、半分に切り、先づ其一半を「ローラー」にて熨す、此際決して強く押し延す事なく、殆んど「ローラー」の重みにて延ばす考にて可成薄く熨す、而して之を徐かに「パイプレート」にかぶせ、四方より讓り合せて皿の底に沿ふてぴつたりと附かしむ、次に此中に餡を入れ、他の

一半を前同樣にして熨し、餡の上よりかぶせ、皿の緣に沿ふて指又は「ホーク」にて押へつけ、上下「クラスト」を密着せしめ、猶周圍に食み出して居る部分を「ナイフ」にて切り落す。而して表面に牛乳又は牛乳と卵の黃味とを混せたるものを塗り、直ちに「テンピ」に入れ、三十分間に燒き上ぐ。

此第一法は「ヘッド」を少なくし、手際を以て上手に作り上ぐる法なり、凡て「パイクラスト」は其燒け上りたる時は、ぼく〳〵と薄き層何枚にも剝げるを良とす、餅の如くねち〳〵する「クラスト」は下手の極なり、之れ水を加へたる時、餘り練り過ぐると、「ローラー」にて熨す時に餘り押し付る故なり。

第二法

此法は、全く手際を要せず、其代り多量の「ヘッド」を要す、即ち粉に「ヘッド」を多量に、寧ろ「ヘッド」に粉を混せる位の考にて、若し「ヘット」餘り固ければ少量の水又は牛乳を加へ、何程練りても差閊へなし練れば練る程良し、之を熨板の上に取り出し、少し延しては畳み、畳みては延し、四五回繰り返し、（畳む時少しづゝ粉を振りかけるを良とす、而して二つに切りたる時其切り口に就て見よ、此時已に數層をなすを見ん）以後第一法と同じ。

「クラスト」殘りたる時は、之れに又粉と「ヘッド」を增し、濕布に包みて次回の爲めに貯存て置くを良とす、古くなる程良き「クラスト」を作るを得るなり、之れ俗に所謂粉が寢る故なり。

▲アップルパイ

其　一

林檎の「スチウ」を餡にして燒きたる「パイ」。「アップルソース」を作る時の如くし、唯水を少なくして煮、べと〳〵に煮つめ、砂糖を適宜に加へたるもの、之を「スチウアップル」と言ふ。

玆に注意すべきは、燒く前に「ホーク」にて上に一二個處孔を穿ける事なり、之れ漸次溫まるに從ひ水蒸氣並に空氣を拔く爲めなり。

其　二

生の林檎を餡にしたる「パイ」。
林檎の皮を剝き、(「パイ」一個に對し、普通大の林檎三個を要す)縱に六個位に割り、核心を去り、各々を薄く切り、「パイ」の中に將棋倒しに並べ、砂糖を振り掛け、第二の「パイクラスト」を掩ひ、「パイ」を作る。「ホーク」にて一二個所孔を穿けて燒く可し。
注意「パイ」は通常中心を通して六個に扇形に切りて、「ホーク」を添へて出す。

▲アップルカットパイ

干杏子の「スチウ」を入れて作る。
生杏子なれば、二つに割り、種子を去り、鍋に入れ、水少し加へて煮、最後に砂糖を入れる。

▲ピーチパイ

干桃實の「スチウ」を入れて作る。
鑵詰の桃を入れて作るも良し、其時は實のみを用ひ、汁は不要なり。

▲ブラックベリーパイ

ヂヤムパイ

黑苺の鑵詰を用ふる時は其儘入れて作る。
生の黑苺を用ふる時は、他の「スチウ」を作る時の如くして「スチウ」にして入れる。
「ヂヤム」は何種の「ヂヤム」にても宜し、其儘入れて作る。
上一面に「クラスト」を掩ふ代りに、「クラスト」を幅二分位の條に切り、之等を以て網形に掩ふ時は、體裁も甚だ美なり、條に切るには、「ナイフ」にて切りて良けれども、緣をぎざ〳〵切る道具、西洋食品店にあり。

▲ルバーブパイ

「ルバーブ」の「スチウ」を入れて作る。
「ルバーブ」とは芋殻の如き野菜なり。薄く皮を剝き、短かく切り、少し水を入れて煮る時は直ちに溶けてどろ〳〵となる、最後に適量の砂糖を加へ、「スチウ」とす。

▲レモンパイ

「レモン」の「カスタード」を入れて作る、分量左の如し。

コーンスターチ　小匙一杯
砂糖　コップ半杯
レモン液　小匙半杯

コップ一杯の水に右の「コーンスターチ」を溶き、砂糖を加へて煮、黄色食用繪具耳かき二杯加へ、（「レモン」の色を呈せしむる爲めなり）固まりかゝりし時、「レモン」液を加へ、攪き回し、「カスタード」とす。

▲苺のチェリー

苺を水にて奇麗に洗ひ、へたを取り去り、適量の水を入れ三十分以上煮たる後、苺と同じ重量の砂糖を加へ、充分に煮詰めるべし。

之を長き間貯ふるには、（硝子罎を最良とす）固く詰め、上に西洋紙をぴつたり帖り、其上に砂糖を塗り付け、又其上を紙にて掩ひ、卵の白味を塗りて空氣の流通を止むる樣にすべし。

▲苺のアイスクリーム

苺の汁　コップ四杯
砂糖　大匙四杯
牛乳　大匙四杯

苺を潰し、其汁のみをコップ四杯取り、之に砂糖と牛乳を加へ、機械にかける。

苺の汁少なき時は、砂糖と牛乳とを增し、潰したる實も共に入れて宜し。

又は「コーンスターチ」を牛乳又は牛乳と水とにて溶き、紅色食物繪具にて桃色にし、一度煮、機械にかける時苺を潰し實も汁も共に加ふ。

▲カスタードパイ

これは「パイ」の中にて最も上品なるものにして、最も六個敷き方法なり。

パイ燒に油を敷き、底の中央附近に二三個所孔を作り、先づ「テンピ」にて五分乃至八分燒き、少し色着きたる時、牛乳コップに一杯、卵二個、（白味一個別に取置く）砂糖コップ半杯、「レモン」又は「バニラ」二三滴「バタ」大匙一杯、を能く攪き混せて注ぎ込み、（安全を計る爲め、「テンピ」の中に平らに入れ置きたる儘へ注ぎ込むを良とす）二十分燒く。

燒け上りたる時、殘し置きたる卵の白味を泡立たせ、粉砂糖を加へ、新聞紙の喇叭にて突き出し、適意に飾模樣を書き、再び「テンピ」にて二分間燒くなり。

看護の心得

○病室に入る時は喜怒哀樂の感情を顔色に現はすべからず。

○衣服はなるべく白色なるを着すべし是れ傳染毒を反射して之を吸收せざればなり。

○醫師の診察毎に患者の容體は勿論、之に與ふべき食物の可否を問ひ置くべし。

○患者に與ふる食物はすべて淡泊なるものを良とす、されど少しにても疑はしきは之を醫師に問ふべし。

○食物はなるべく患者の平素好むものを與ふべしと雖も病に害ありと認むるものは決して之を與ふこと勿れ。

○患者食事を終りたればその食器は直ちに取り片付て長くその坐右に置くべからず。

○看護人は患者の前にて決して食事すべからず、但し患者に與ふる食物の毒味は病人の見ざる處に於てすべし。

○三度の食事は勿論間食なりとも日々時間を定めて與ふるをよしとす、且又病人の目前にて決して食物を料理すべからず。

○牛乳及其他の飲料は藥液を除くの外過度の不平均のものを與ふべからず。

○病室内にて用ゆる器物、衣類、及び布片類は總て精良にして而かも清潔なるものを擇ぶべし。若し場合により古物を使用する時は之を消毒すべし。

○室内の光線は平素よく注意して食事時間には尤も明るくすべし且つ病室内の空氣は時々交換してなるべく清潔にすべし。

○藥用の時間幷に飲食の多寡は必ず醫師に聞き置くべし、而して時來れば睡眠中と雖も喚覺して之を服さしむべし。

○見舞人ある時は患者の容體によりて其對話の時間を斟酌すべし。

○病症によりて患者に臭氣ある時は室内の器具に臭氣止を施すべし。



父を慕ひて五千海里を航し來る 妾の愛兒

野口米次郎氏夫人
ミセス、ノグチ

◉他日小兒が成長　してから自分の三歳の時乳母車に乘つて五千哩の海路を遙々越えて日本へ來たとを追想したら感多少であらう、日本の子供が母親の脊を慕ふ如く妾の兒は乳母車を慕ふので、『此處にベビーの車がある』と云ふと今迄泣いて居ても直に聲を止めるのは不思議である、日本の汽車や電車に乳母車を乘せる所の無いのは母親の脊が乳母車の代用となるから不必要であらうが米國では乳母車を乘せる場所が供へてある、電車の車掌や汽車のポーターは手傳つて乘せて呉れる、日本の車掌やポーターは餘り親切らしとも見受けられぬのは殘念に思ふ、自分の子供は二月生の三歳で南部加州を出て海路桑港に來り桑港から横濱に渡る汽船中でも其乳母車の中で眠つて來た、船が横濱へ着いて東京へ來るにも其乳母車を忘れさせるとが出來無かつた、稅關も無事に濟んで横濱の停車場まで乳母車に乘せて小兒を連れて來たが汽車に乘せるのを許され無い、小兒の乳母車は日本で賣つて居る物とは異つて少く疊めるやうに成つて居て投げても壞れる等の心配は無いのであるのに、鐵道員は『破れ物』であり又車――こんな小い乳母車でも車の中であらうか――であるから客車の中へ持込むとは許さぬといふので『破れ物』として托した、日本は中々規則の八ケ間敷い所であると思つた

◉汽車が新橋　へ着いて小兒が『ベビーの車』と云つて泣き出すのですから、乳母車に乘せて銀座街へ出で夕飯を喫した、外濠の電車に乘らうとすると幸い客が少いので乳母車を布呂敷で包んでヤット乘せるとが出來たは良けれど飯田橋まで來て江戸川の電車に乘り

替へやうとすると車掌が『車を電車に乘せるのは許されませぬ』と大聲を發するので飯田橋から小石川久堅町の宅まで小供を其乳母車に乘せて推して行くとに決した、夜は九時頃にも成つて居たであらう、空氣は冷たかつた、一ヶ月以上の海上の旅行で病氣で食事もろく〳〵致さ無つたので肥えて丸〳〵して居た小兒は瘦せて血色は青く成つて居た、乳母車の中で毛布に包まれてさも憐れな樣子に見へた、時々眼をぱつちり開いては街上で立ち掛かる山の如き人を見廻はしては奇異の感に打たれて居た『お母さん、ベビーの家は何處』と尋ねる聲も虫の音の如しとも云ふ可しであつたでしやう。

◉船が横濱へ入つたのは日曜日の朝で晴天で紫色の伊太利亞の空とでもいふ可きであつた、一片の雲さへ無く、元より日曜日であるから烟筒には烟が無い、遙かに富士山の尖峯を認めたのは自分より小供の方が先きであつた『お母さん、見よ〳〵、幽靈が居る』と叫んだ、實に美なる幽靈は富士山の尖峯であらう『幽靈を捕へてお母さんにお呉れ』と云ふと、少い手を出して握つた手を『マ、〳〵』と云つて自分の手の中へ入れた、自分の子供は想像力に富んで居るのであるか手さへ出せば如何なる物でも捕へられると思つて居るし、又實際實物を見無くても左うだとさへ云へば滿足して居る、米國の家で夜小供と遊んで『砂糖一斤買つて來て呉れ』と云ふと小供は戸の側へ行つて小い手を出して砂糖を握つた積りで『お母さん砂糖一斤此處にある』とて握つた手を自分の手の中へ推し入れるのであつた、其れと同樣に少い手で以て富士山——神聖なる富士山を捕へたと思つたのであらう、妾は此の兒が富士の靈峰の精神を到着するや否や捕捉し得たと思つて非常に喜ばしく思つたのである。

◉事々物々　異體ならざるは無いので泣いてばかり居たのも無理は無い、自分の身でさへ不思議の念に打たれたのであるから況や小供の事であるから美なる日本の風景も何等の感觸を與へ無かつたであらうと思ふ、横濱の停車場へ入るとカラコロ〳〵と下駄の聲、

喃々として語る人語、小供は一々耳を峙てた、小石川の宅へ來ても泣いてばかり居て如何せうと思つたのである、日本の女中の言葉を聞いては驚いて泣き、少からぬ玩物が用意してあつたが皆な日本の玩物であるから玩物と思は無くて化物とでも思つたのであらう、少しも其等に手を觸れやうとせぬ、泣き出しては『いやだ彼方へ持つて行け』と叫ぶのであつた、女中の一人が『お菓子』と云つて日本の菓子を持つて來て與へたのを一口食べて『お母さんこれはべビーのブー(牛乳のことをブーと片言葉で云ふ)で無い』



と云つて泣き出した、小供の慕ふのは第一に乳母車で第二に牛乳のボツトル(罎)である、夜が更けて按摩が悲しげな笛を吹いて通行するのを聞きつけて『ヲヽお母さん、アンドリユウが來た』と云つて寢床から起ち上つた、米國の家庭に成るとアンドリユウといふ男が來て小供を遊ばせる爲めに音樂を奏したのを想起して眤みのアンドリユウが訪ねて來たと思つたのであらう、『べビー何處へ行く〱』と尋ねると、自分の耳を障子にくつ着けて按摩の笛の音をジツト聞いて居たのである、『ヲヽ、アンドリユウ〱』と叫ん

で家へ入つて來無いので又もや泣き出したが其中に疲れ眠て仕舞つた。

●到着　してから二日三日立つて泣くのは止まつたがまだ〱日本に馴れぬ、宅の障子の中央に玻璃の板が有つて其上に二枚の小い障子が嵌つて居て左右へ開くやうに成つて居るのを發見して其障子を開けたり閉めたりし初めた、「お母さん舟が行く〱」と云つて想像で舟を認めたのであろう小い障子を開けて顏を玻璃の板にくつ着けて眺めて居た、小供はまた船に乘つて居るものと思つて居たのであろう小い身體を浮かして腰を妙に曲げて歩いて居た船中のやうに倒れるのを心配して居るからであらう。

●到着　の五日目に「お母さん家へ歸ろう」と云ひ出した「ナヽは何處に居る」と聞いた、ナヽといふのは自分の母親(子供のお婆さん)で小供とは唯一の友であつたのを今思出したのであらう、自分が「ナヽは遠方に居る」と云ふと「ファー〱」の二三度繰返して見て悲しげな顏色をして泣き出した「お父さんへ行け」と云ふと父親の部屋の障子を一寸開けて見て「ノーノー」と云つて直ぐ閉めて「お母さん、お父さんは居無い」と云つて自分の所へ歸つて來た、小供はまだ〱父には昵ま無いのである。

●大隈伯　を訪問した所が子供は初めは稍々喜ば無つたけれども流石に大隈伯は如何に子供を取扱ふ可きかを知つて居られたので直に大なる盆の上に玩物を一杯載せて子供の眼の前に出された、小供は喜び初めて日本へ來て初めて大聲で歌をうたい初めた、歌と云つても唯だ調子を合はせて譯の分らぬ言葉を云ふのである、自然なるかな大隈伯には恐れ無つた、子供の嫌ふのは妙に飾り立てた物や立派に裝つた女や男を嫌ふのである、單純で最も自然なる物には直に昵むのは不思議と云つてもいゝ位である、大人には昵まぬけれども小供連には昵み易いのは自然であり、又單純であるからであらう、小供と小供との間では言葉の必用が無くて簡單なる情が通じ合ふからであらう。

●父が女中　を呼ぶのに手を打つと女中はハイと

返事をするのを知つて自分もハイと返事して父へ飛んで行くやうに成つた、女中共が『旦那さん』といふのを聞きつけて父を『ダナ〳〵』と呼ぶのは笑はずに居られ無いのである、自分は日本の食事には堪へられ無いけれども私等が朝食を濟まして小供は何處へ居つたらうと思つて居ると私共に知れぬやうに無言で女中共と一座して箸を握つて頻りに日本の食事をして居るのを發見した、小供はもう朝飯の味噌汁を食するやうに成つたのである、日本の米は喜んで食べる、米に牛乳と砂糖を掛けるのを非常に好むのである『御飯〳〵』と女中を見て叫び廻はるのを發見した、小供の馴れるのは早いものと云はねばならぬ、今に自分の通辯をして與れるやうに成るとであらうと思ふ。

◉毎朝飴屋がドンコ〳〵と大皷を敲いて來ると女中の脊にをぶさつて出掛ける最初は脊に乗るのを承知し無たつが今は喜ぶ様に成つた、女の帶が丁度椅子の様に成つているし日本の女の脊は寧ろ曲つて居るので心持が良いのであらう、飴屋か來ると女中が『ドンコ〳〵』と呼ぶと子供も『ドンコ〳〵』と返事して女中の脊に乗るのである、そうして其のドンコ〳〵といふのが子供には女中の脊に乗るといふ言葉と成つたので外出するのを小供は『ヲ、、お母さん、ドンコ〳〵』と云ふのである。

◉日本の旗を見て喜ぶのは非常で、之を見ては『萬歳〳〵』と呼ぶが其は何處で敎へられたのか知れ無いのである、日本人の客が來ると宅の書生が英語が分らぬので物を小供に與へるのに『ベビーさんサンキユウ』といふのが此の物を上げやうかといふとなのである『ベビー、サンキユウ〳〵』と云つて書生の手から物を取るのである、一日驚いたのは夕景他から歸つて來ると宅の門前で小供等が七八人集つて『眼隱くし』の遊をして居るのを見ると自分の子供が其中央に居て眼を手で隱くして『ヲ、、マ、〳〵』と呼んで居るのを發見した小供は小供等からベビーさん〳〵と呼ばれて、大に得意そうな顏をして居る、小供達も毛色の變つて居るの

を面白がつて愛するのと見へる、今に餓鬼大將と成つて遊んで歩くことであらうと思ふ、日本の下駄では歩けもしないのに非常に買ッて呉れと云ふので一足の小い下駄を買ッて足に紐で結び付けて遣た所が滿足に歩けぬのですから大道に倒れて顔に怪我をしたのである。そして子供の犬を愛するのは非常で『お母さん、犬々』と云つて自分の手を一疋の犬の口の中に入れて犬の齒を捕へて園庭へ曳いて來た、犬が自分を見て恐れて走らんとするので犬の首の鎖につかまつて轉つて溝へ落ちても寧ろ自分では喜んで居るのである、今に日本人だと云つて誇るやうに成るであらうと思ふと愉快である、『お前は支那人だらう』と笑談に云ふと『ノー、ジャパニース』と答へる。

◉日本人は　熱い湯に入るけれども米國人は微溫の湯に入る、又普通朝湯に入るのを例として居る、故に人々が熱い湯に入つてから女中に命じて火を入れさせて置くと翌朝まで溫かい、子供は朝大きな湯船に入つてヂャブ〳〵音をさせるのを喜ぶのである、『お母さん、私は龜でしやう』と云つて龜その儘だと云ふと笑つて水をヂャブ〳〵させるのである。

◉『さあ眠るのだ』　と云ふと『コヽまで月は出無いでしやう』と云ふ、月が出ると眠るものと思つて居るのであらう、戸に小い戸が二枚あつて園庭へ出られるやうに成つて居るので其戸を一寸開けては、『月はまだだ』と云つて眠ることを承知せぬ、所で此頃は夫が圓いランプを買つて來て座敷に點することとした、子供の眠る頃になると其ランプを點して小供に見せると『月が出た〳〵』と云つて滿足して寢室に入るのである、時時『月は何處に住む』などゝ聞くことがあるし『月は何を食ふ』などゝ尋ねる、夜中に眼をさまして『お母さん、月をもつて來て呉れ』と云つたこともある。

◉實際　朝から晩まで何にかしら食べずめであるから腹が中々大いので小供自身も其腹の大なるのが自慢である、腹を『麵包の籠』だなどと云つて居る、『べビー、麵包の籠はどうだ』と云ふと着物を一寸まくつて見て覗いて見て『フーライ、マヽ』と答へて笑ふ、朝裸體に

成つて浴室に行くにも兩手で自分の腹を隱くす様子にして駈け込むのである、何處かで聞いたお伽話に龜が猿の肝を取ろうとして失敗した話を聞いたことがあつたから子供は腹に趣味を感じて居るから其話の筋道を替へて話すと非常に喜ぶ、一日猿廻しが宅へ來て猿を連れて來て踊らした所が子供は猿の腹の有るが無いかを見ねば承知せ無かつた、少々でも横着をすると『父さんがベビーの腹を取るといふぞ』と云ふと直に大人しく成るのである、『御前の一番大切なものは何』と尋ねると『麵包の籠』だと云ふ、其は實際の事で麵包ほど大切なものは無いとて大笑したこともある。

◉是は何　彼は何と非常に尋ね廻はして研究したいとの念は盛んである、玩物でも動かぬものは厭つて何でも音を出したり又汽車の如く走るものを愛するのである、他から立派な大な犬の玩物を貰つたが音を出さぬものであるから大不平である、朝から晩まで螺釘で動く物をもつて喜んで居る、玩物に厭きると障子を開けたり閉めたりし初める、其に厭きると置時計の針を動かすので時計は幾程あつても時間の合つて居る事は無いといつてよい位である、動く物なら何でも喜ぶ、一日博覧會の水族館へ連れて入ると泣いて出るのを嫌ふには大閉口したことがある。



◉夜に成る　とランプの光で障子や壁にうつる影の大なる興味を以て居る自分の影を捕へんとして捕へることが出來ぬので怒る、『マヽ、影は何處へ逃げた、お母さん隱したサア出して出して』と云つて無理を云ふ、自分は『父さんの所へい

つて影を貰つて來い」と云ふと夫に請求する、夫が着物の袖の中にあるから手を入れて捕へよと云ふと一生懸命に成つて探し廻るのである、そうして自分の影を壁に寫して「べビー、お母さんの影は父さんの袖から出て此處にある」と云ふて大聲で歌ひ初めて笑つて又もや捕へようとするのである「お前の鼻は卑いからお母さんの鼻を取つてお前の鼻に付けた方がよい」と云ふと一生懸命で自分の影の鼻を手で取る眞似をして自分の鼻へ付ける眞似をする、而して「お母さん、高くなつて」と云つて其鼻を見せる「また／＼鼻が卑いからお父さんの鼻を貰へと云ふ」と夫の鼻を手で取ろうとする、夫が起ち上ると「バ、、鼻を頂戴よ」と大不平な聲をするのである。

小兒の質問力

小兒位質問力に富んで居るものは無からう、何んでもかでも眼に觸るゝものに對しては、必ず質問を發する、繰返し／＼根から葉から質問して、アー左樣かと合點の行く迄は決して止めない、恰ど饑ゑたるものが食を求むる如に、智惠の盛に發生する時代には、疑問の解答を唯一の食物として居るのである、如斯云ふ場合に多の子持は其質問を面倒臭がりて、充分な解答を與へることに努めぬ計か、「左樣なことをお前方に話しても分りませんよ」とか「うるさいよ默沈てお居でなさい」などゝ叱りつけるのが多い、小供は其口の利けぬ程に理解力に乏しいものでは無い、筋立つた談話は出來ぬ迄も、朧氣ながら物の道理を分別くるの力は持て居るから丁寧に筋を立てゝ談して聞かすれば良く合點するものである、幾ら敎へても宅の小供は譯が分らぬと云ふ人もあれども、夫は畢竟敎へる方の親が敎へ下手なので、小供の分らぬのでは無い、智惠づきの盛な時機を利用して、小供に物を敎へることを知らぬのは、取りも直さず小供を暗愚に導くのである。

メリケン針の話

一 記者

これはメリケン屋（新橋竹川町）主人高橋敬太郎氏の談なり、氏は多年英米にて專ら針の研究を積みし人、特に縫針の改良に就て最も苦心せし人なり。

△日本針とメリケン針

日本縫針の種類は大凡五十種位あります、即ち木綿針が十二三種、絹針が八九種、紬針が七八種、金巾針が十二三種、刺繍針が十四五種あります。然し之れは極く大體の區別で、若し精密に分けるならばまだ〳〵數が多くなります。我國に於て從來專ら此等の日本針を用ゐて居ましたが、今より二三十年前に、針はメリケンに限ると云ふので洋服屋、足袋屋などが之を使用するに至つたのを初めとして、此の七八年前よりは素人方の間にもボツ〳〵使用する者が出來て、近來はメリケン針は中々需用が多くなりました。此の針は一般にメリケン針とは呼ばれて居れども、其實多くは英吉利や獨逸邊から來るものです。メリケン針の中で最も品質の精良を以て名聲を博してゐるものは英國製の象印で、東京を中心として最も廣く用ゐられてゐます。之れに次ぐものは獨逸製の羊印です。其他に英國製の鳥印、人形印等五六種のものがあるけれ共、需用の多い點に於ては迚も右の二種には及びません。

△メリケン針の缺點

メリケン針は段々需用が多くなつたが、併し此の針を喜ぶ者は主に洋服屋などの社會で、一般家庭、普通の女學校、或は仕立屋の如き和服を仕立てる處では今日も尚ほ主として日本針を用ゐて居ます。之れは何故かと云ふに、メリケン針は頭部が甚く尖つてゐるので日本流の裁縫に向かないからです。御承知でもあらうが西洋人は針を使ふには金屬で造つた土耳其帽形の指貫を食指に被せて其の先で針をずん〳〵押して行くから、頭部が尖つて居ても些も不都合を感じないが、之れに反して日本人は指貫を中指に篏めて其の背で押すから頭部が尖つて居ては兎角針が辷り易くて、往々指を傷める恐がある。のみならず、革や厚紙などで造つた指

縮を用ゐる時などでも、強く押せば指縮を刺通すし、弱く押して居れば辷り易いなど色々な不都合がある。

△其の特長

メリケン針は日本人が使用するには色々不都合があるけれ共、其の品質に至つては遙かに日本針に勝つて居ます、從來の日本針は皆手工に依つて造るものですから、日本針としては隨分良く出來たものでも、燒や肉附が一定しないで、職人の如何に依つて針の良否に非常な差異がある。それ故日本針には良い職人の造つたものを特に區別して「印針」と言つたり、或は一等品二等品三等品等の區別も出來るのですが、メリケン針に限つて決して斯かることはありません、最も我國でも近來廣島、京都邊でボツ／＼器械製を初めたから、今はメリケン風の針も出來、品質も追々良くなるやうであるが、然し、未だ三年や五年苦心をした所で、迚もメリケンのやうな美しい針は出來なからうと思ひます

△改良のメリケン針

斯の如くメリケン針は日本針よりも慥に長所があるのですから、私は之を改良して日本向のものを造り、成るべく精良な針を日本へ供給したいと思ふのですが幸ひ英國ビクトリヤ製針場主のジヨンゼームス氏が大に贊成して與れて、製針の方は同氏引受けることになつたから、其後色々と研究して茲に改良のメリケン針を造ることになりました、其の改良の重もなる點を擧ぐれば、第一には在來のメリケン針の最大缺點とも言ふべき頭部の鋭角を丸くして日本人の使用に適するやうに致しました、又從來日本針にせよメリケン針にせよ針穴の内部が角張つてゐる爲に絲切をがして困るとは毎度承はる御小言でしたが、此點に就ても針穴の内面を丸めて絲の辷りを良くする等十分工夫を凝らしてあります。此等の點に改良を加へて而して在來のメリケン針の長所は十分保たせてあるのですから、自分は先づ理想に近いものと思つてゐるが、然し針の使用に就ては何分全く門外漢ですから、何卒平生之を御用ゐになる御婦人方から十分の御批評を承はつて一層改良の實を擧げたいと思ひます。



老いたる鶯

岡田貞子

私共の學校は、今春度から愈々幼稚園が設けられました。廣い、美しい運動場は、其爲め、何麼に面白く賑ひませう、愛らしい聲で歌ふ唱歌、小さな手拍子に揃ふ遊戲、何麼に可笑しく、可愛いでせう、私は、此等の神の子の樣な稚子の群中に加入つて種々の遊戲を爲さる女教師達は、何麼に愉快だらうと、羨しく思ふのです。

だから私は、私の受持ちの授業が濟むと、何時も運動場へ行つて、此等の遊戲を見るのが好きです。今日は、土曜日なので、日常よりも少しく早く授業が終つたので、二時頃には最う、廣い校内が靜寂として靜まり、運動場の隅の方に、殘つて居る、八九人の幼稚園生徒が、小さな聲で何か唱ふて居るのが、何とも云へぬ長閑さに聞えます。

私は徐に其傍へ歩いて行きますと、草花を持つた六歲許りの女の兒が、丁寧にお辭儀を致します、すると其後の三歲許りの圓々とした坊ちやんが、繪の本を下に置いて、轉ぶ樣に小さな頭を下げるのです、可愛いぢやありませんか。

私は頰笑みつゝ共に其柔い草の上に蹲むで、繪の

本を取上げました、其は「こども」と名づくる、鳥やら、獸やら、種々の無邪氣な畫を美しく彩色した、小形な本なのです。

「之は誰ですと。」私は其繪の一つを指して、坊ちやんに尋ねますと、

「桃から生れた桃太郎は…………。」と覺えた儘、樂譜を附けて答へるのです、すると隣の女の兒が、

「氣は優しくて力持ち…………。」と、直ぐに後を連けます、と彼方にも此方にも、皆其聲に誘はれて唱ひ出し、中には手拍子を取つて舞ふ者もあり、ぐる／＼廻る者もあり、其無邪氣な樣に、私は唯ほろりとして終ひました。

唱歌が終ると、私は再び坊ちやんに對ひ、

「坊ちやんの名は何と云ふの。」

「は、る、を…………。」

「春雄樣、まあ美い名だこと、お齡は何つ…………。」

と云ふと、いゝいもどかし相に小さな指を三つ出して、罪の無い顏で、私を見詰めます。

其眸！其唇元！眞に可愛いぢやありませんか、私は熟と見恍れるのでした…………刹那！胸に閃めいた或る賴母しい、懷しい記憶、私は唯夢かとばかり、驚愕の眸を瞠るのでしたが、

「まあ酷似…………。」と思はず口へ出して、我知らず其手を握つたのです。

春の光は、柔い草の上に輝いて、後ろの籔つゝきに、連りと鶯が囀いて居ります、けれども私の耳は最う感覺を失つたかのやう、世は唯夢のやうに思はれました。

春雄さんは手を握られながらも、尙ほ邪氣のない眸で私を見て居ます…………私は其時、何とも云へぬ懷らしさ、可愛ゆさを覺えて、犇とばかり胸に抑當てゝ、抱き〆めたのでございます。

今より丁度四年前の春でした、私は美術學校を卒業まして、間もなく、北國の或る梅に名高き都邑の學校へ、敎師として聘かれました。其頃は丁度一人の母が亡なつた後で、悲しき心に孤獨の身を憐れみ、左迄古鄕も戀しく思はなかつたものから、私は欣んで參る事

に致しました。

お差し乍ら、妾は其時廿四歳でしたが、初めて異郷の風に吹かれて、什麼に心細かつたでせう、親しい友も無ければ、慰め合ふ者もなく、いつ樂しと一日を送つた事もありませんでした、だから毎週の日曜には、必ず畫架を遠近の山野に運んで、獨り自然を友に自ら慰めて居りました。

一日、晴れたる日曜でした、彌生の末とは云へど、北國は未だ櫻に遠く、幽谷深く入れば、梅が香倘ほ高く匂ふて居る頃ですから、春の暖かさは無けれど、麗らかなる空は都も同じことです、私は早曉より起出でゝ快よく例日の用意を調へ、街から二里餘西南に方る、白梅村と呼ぶ名も床しき一小村を訪ひました。白梅村は實に稀なる佳境です、後に控へた幽邃なる綠木の山に、雪の如き白梅、紅の如き、紅梅が處々に咲き亂れ、深溪を洩る清冽なる水の、落花を浮べて村を繞れば、十戸の部村風や蕭しく、眞に仙境とも云ふべき處です、



私は此村に足を踏入れるや否や、心魂は既に神のやうに、恍惚として醉へる如、彼方此方を逍ふのでした。

白梅散る藁屋の軒に、鷄犬が仲善く遊べる。村嫂が負へる赤子が安らけき夢に、紅梅降りかゝるなど、種

種の趣味あるスケッチを數多く收めつゝ廻る中、長き日脚の傾く頃、私は村の中央なる嚴嚴しき或る屋敷の前に出ました。私は此小村に、此宏大なる城郭の如き屋敷を見るのを怪しむで、暫し、恍然として佇むのでした。

ふと仰げば、陽は山に落懸つて、半天は燃ゆるやうな美しい薔薇紅に染り、好ましき彩雲の姿は、明るき濃黄を溶かし、山の背の緑青、其影の鮮紫、まあ何と云ふ美しい眞畫でせう、私は今宵夜行するとも、此景を寫して歸らねばならぬと決心致しました。後を見れば、薄葡萄色の東の空に、夢のやうな十三夜の月影が、頼母しう懸つて居ります。

更に位置を撰ぶべく、私は梅の垣根を潜つて、屋敷の露地に入れば、何處に好妙の位置が得られるだらうと思ひました。枝美しき松の姿、景を倒にすべき池の水、近景としては何麼に適切な調子が取られるだらうと思ふと、直ぐにでも入り度い心地がするのでした。けれども、無斷で他人の構内へ入ると云ふ事が何うして出來ませう、と云つて此景を見捨てゝ歸る氣には猶更なれず、遂に……………鐵面皮しいけれども、私は、私の神聖なる娛樂、天職の爲に、屋敷の主人に許可を得るべく、心を決めました。

私は玄關に入つて、慇懃に訪ふた時、靜かな奥の方から、優しい應聲がして、十六七許りの美しいお孃樣がお出ましになりました。

「何方樣からでございます。」

「はい、否……………。」と、私は躊躇ふたが、沈着いてお願ひの旨を申しますと、

「暫らく、お控へ下さい。」と、奥へお這入りなさつた。

私は流石に胸騷ぎがするので、氣を沈めて待つて居ます中、今度は厳かな咳拂ひが聞えて、お出になつたのは、廿七八の口美髯の短い、立派な殿方―

「は、貴女ですか、さ、決して御遠慮なく、時子、お前表の庭門を開いてご案內申しなさい。」と云ふご親切なるお言葉、私は何とも云へぬ嬉しさを覺えて、時子樣に續いてお露地に入りました。

庭に面した廣い縁から、彼の若い殿方が雪下駄をひつ懸けて、飛石を傳ひつゝお來しになりました、すると其後から、七十許の崇高いご老人と、七歳許りの愛らしい坊ちやんとが、ぞろ〳〵とお出になつて、共に私を取巻き「さあどうぞ、ご隨意の位置をお撰び下さい。」と若いお方が仰在ると、

「むゝ成程美しい空ぢやの、之を書いたら見事ぢやろ。」と、老人が空を仰ぎ見なさる、

「はあ、實にどうもお筆が美しいです。」

「まあ折角お描きなさるが宜い、出來上つたら拜見しますぢや。」と、軈て四人共屋敷の方へ立去られました。

私は何だか急に責任が重くなつたやうな氣がして、怪しく胸が躍りました。が、刻一刻變り行く空を見て、猶豫も出來ず、此處ぞと思ふ處の、松の影を日傘の代りに、畫架を据付けました、水は清冽なる梅が香を汲み、パレットは銀の如く夕日に輝く……斯くして



私は、此偉大なる自然をモデルに、繪筆を揮たのです、要するに私は、既に世の中の凡てを忘れ、我身の何處に有るかを忘れ、丁度催眠せられた如く、筆は唯自然の暗示に伴ふて走るのみでした。

其深い〳〵催眠の狀態が、單なる一聲に因て覺醒されました、其は玉を轉すやうな鶯の聲でした、私は思はず筆の手を停めて振向くと、彼方の池水の邉に、彼の若いお方が鶯を浴びさせてお居でるのでした、小さ

き愛鳥の濡れたる翼は黄金のやうに輝いて、一種の懐しい色が其處に立迷ふ………私の心は再び散亂しました。

愚かよとばかり我身を叱し、再び繪筆を揮れば、知らず／＼の中に、私は舊の世もなき、人もなき、催眠狀態に陥るのでした。あゝ、世に自然に打勝つ力が何處にありませう。

日は落ちて、緋の如き眞紅が山廓を染むる頃、私は我ながら見事なる一面の風景畫を描き上げました。畫架を疊み、繪具箱を洗滌して居る間に、彼のお方は早速お越しになつて、手にせる鵞籠を松の小枝に懸け給ひ、

「出來上りましたか、どうぞ拜見を………。」

「否、誠に拙くなりまして、お羞しうございますから………。」

「はゝゝはご謙遜かね、どれ。」と畫架の上なるを、丁寧にお持上げなさいました。

傍の鷽は、連け樣に高音を上げて啼きました。私は何だか妙な心地がして、夢のやうな眸を夕暮の雲に放つのでした。

「むゝお見事、實に美觀ですな。」

「お羞しう………。」とばかり、私は答ふるに術もなや俯向きました、其中に、時子樣とご老人とが急ぎ足でお越しになり、先づ時子樣が、「まあ美しい。」とお賞め下さると、

「どれ／＼此方へも少し。」と、老人は、わざ／＼眼鏡を用意して來られたので「むゝ成程、之はどうも眞景のやうぢや、天晴の技倆……。」などゝ仰山なお賞め方をなさるので、私は穴へでも入りたい心地がするのです。

「時、どうぢや見たか、お前は過般庭の燈籠を描くちうて、入道のやうな物を描きよつたが、之とは些と違うぢやらう、あはゝは。」

「あらお父樣、入道だなんて餘り酷ひわ。」

「お前の燈籠には目玉が附いてあつたぢやないか。」

「なんとでも………。」と羞かむ、若いお方は微笑し

つゝ私に向ひ給ひ、
「其他、以前にお畫きになつたのが有りませんですか…………有りましたら何卒………。」
「はあ、誠に粗末なスケッチを七八枚持つて居ります。」
「其は是非とも。」
「スケッチなら尙は好いわ。」と、時子樣が仰在る、
「何ステッキが有る。」と、ご老人が滑稽を。三人が思はず噴出すのでしたが、若いお方が、
「まあ此處では可けないから、兎に角彼方の方へ、何れ日も暮れましたし、今晩は私宅でお宿泊りなさつて…………。」
「否、私もうお暇致します、幸ひ月夜ですから夜行致します、最初から其心算で取懸つたのでございますから。」
「あゝ否々。」と老人は慌てゝお制めなさつて、



「其れは可けませんぢや、夜々中、貴女の樣な婦人が、一人で歩くちう事は劔呑ぢや、決してご遠慮なく、娘も居ますぢや、是非お泊り下され、ぢやがお留守にご心配なさるお人でも御座るなら、お伴者でも上げますが、お見受申すちうと、まだ其麽人もござらぬ樣に見えますがな、あはッははゝ。」と、お戲れの裡にも、深いお情けが籠つて、私は、嬉しうも、涙が催されるのでした。」

「はい、父も母もない孤獨身でございます。」と、私は辛うじて之丈申しました。

「まあ其は氣の毒な事。」と、ご老人はお慈愛のある眼で私を、更めるやうにご覽なさつたが、

「まあ〳〵長い談話は後で悠然と伺ひますぢや、兎に角……これ、時、お前は未だ湯に入らんぢやろ、先生を一所にご案内申せ。」

「はい。」と時子樣はお優しう「先生、お來し下さい。」と、私をお誘ひなさるのでございます。

噫、私はどうして之をお辭み申す事が出來ませう、世に生れて父の顏も見知らず、唯一人の母にさへ先年死別れて、未だ樂しき一椀の夕餉を味ふた事のない、憐れなる孤身の私が、この親切なるお人達の、羨むべき、暖かき、團欒の端に一夜なりとも加はつたら、如何に今宵は樂しき、安らかなる夢が結ばれやうと、心から思ふたのです。

湯殿にある半時間の中に、私は時子樣と十年の知己となりました。お優しい、情の籠つたお言葉に、眞身の妹のやうに思はれて、幾度となく泣かれたのでございます。

湯を上つて、廣い茶の間に導かれると、丁度街からお歸りなさつた、廿五許りの婦人の方と、三ッ許りの坊ちやんと、赤さんとが居られました。私は其ご婦人樣が春三樣（若いお方のお名です）の奥樣かしらと、詰らぬ事が氣に懸るのでした、が其も暫く、坊ちやんが、「お叔父さん。」と、居間へお來しになつた膝に抱付いたのを見まして、何だか肩が輕くなつたやうな氣が致しました。後で聞けば、其婦人は、一番兄樣の奥樣なのでした。

軈て夕餉の仕度が出來ます、その又賑やかな事、ご老人の傍には警ちやん（七歳の坊ちやん）次が若い奥樣、膝の上に美ちやん（赤さん）孝ちやん（三つになるの）時子樣、春三樣とぐるり圓居して、春三樣はご老人とお並びなさる、私は時子樣と春三樣の間に坐る事になりました。

「さあどうぞお心置なく、ご覽の通り芋もあり、鰯も

あり、所謂山海の珍味と云ふご馳走ですからの。」と、ご老人が打解けて下さるお言葉の嬉しく、ご晩酌を酌まれるのでしたが、奥様のお手の逵かぬ春三様へは、私が、

「お酌致しませう。」と銚子を取上る。

「や、之は痛み入る、お客様にお酌をして貰ふとは些と順序が違ひます。」

「まあ好いぢや〳〵。」とご老人が話を挟まれて、

「こうなればお客様も皆内輪ぢや、互に遠慮は抜きにして、お酌して貰つたら宜いぢやないか、の貞子様。」と、意外にも私の名を御在らる、私は未だお酌をした經驗がありませんので什麼に氣を揉つたでせう、持方が違ひはせぬか、溢れはせぬかなど〻、氣がおら〳〵して、端なくも指先が震へました。



終日歩き暮した空腹に、私はこのご馳走が何麼に美味しうございましたでせう、暖いお汁の湯氣が浴々として居間に滿ち、一人の下婢が手の廻らぬ程の忙しさに、お椀を代へるもの、お汁を求むるもの、母の箸に吸附く孝ちやんの無邪氣さ、茶碗を叩いてご飯が遲いと下婢を苛める響ちやん、微醉を浮べて談笑し給ふご老人の機嫌、まあ何と云ふ賑やかな夕餉でせう、私は初めて人生の樂しさを知つたのです。

夕餉が終ると、皆寄集つて四方山の談話、先づ私のスケッチが持出されました。入枚とも皆この村の寫生

ですから、それは〳〵珍しくご覽でした、ご老人は朧ろなる醉眼を上の一枚に放ち給ひ、

「むゝ之は村の端れの、彼處ぢやの、之は面白い、是非一枚お貰ひせねばならぬ。」

「どうぞお持ち遊ばして下さい。」と私は少しも惜しい氣がしませんでした。

「次ぎは何かの、はゝあ靜花薫水と、成程之は又一段後ろの山の影ぢやの、流石美術思想のあるお人は、目の着け處が違ふ、之も一枚欲しくなるの。」

「お父様、ご戲談ぢやありませんよ。」と春三様が、輕く遮られて「さう無暗に欲しくなつては困るぢやありませんか。」

「ははゝは自分の物のやうに云ひよる、お前の書いたのは誰も呉れと云ひやせん。」

「と、驚きましたね、貞子様がお困りなさるぢやありませんか、漸う〳〵一日を費してお丹精なさつた物を、さう無暗に呉れ〳〵と仰在つては……。」

「はゝゝ隨分お前は親切ぢやの、些と今日は様子が變つてるやうぢやぞ、そは〳〵と……。」

「はゝはゝ困りますね、お父様、お客様の前で。」と微笑し給ふ、

「おほゝほゝ。」と奥様が、不意にお笑ひなさつたので私も思はず、ぽうッと耳が熱くなるのでした。其時、

「やあ、此處に美ちやんが居る〳〵。」と、慧ちんやが騒ぎなさる、八枚の中で私が最も上出來と思ふた「落花に子守」の畫は、意外にも此家の赤さんなのでした。

「まあ眞によく似て居ること。」と今度は奥様がご所望顔に「之こそ本當にお貰ひしたいわ。」

「どれ〳〵、やッ之は誠に可愛い。」とご老人が頻りに膝を打ちなさる。

「筆は粗いが、よく出來てるぢやありませんか。」と脇より覗きつゝ春三様が仰在るのです。

彼も之もと、ご所望なさるが儘に、私は悉く差上げる事に致しました。終りにお露地で描した十八切の一面、之はご老人も流石に云ひ出し兼ねられてか、

「何位見ても飽かぬ畫ぢや。」と、唯只管、感嘆の辭を繰返しなさるのでしたが、私は其お心を察して「お持ち下さい。」と快よく申しました。

「いや其は可けません。」と春三檪が「其では貴女が今日此村をお訪ひ下さつた、紀念と云ふものが全く無くなつて終ひます、是非この一面はお手元に……。」と優しう仰在います。

「否、決して、計らずも今晩このご親切なるお饗應を蒙りましたのが、何よりの心の紀念でございます。」と頰笑めば、

「心の紀念は淋しい、どうか之を永久にご保存を願ひます。」

「永久の保存は記憶よりの外はありません、心に印した紀念は、終生消滅する事はありませんかと思ひます。

「ご尤なお說です、けれども心には又、忘れると云ふ



不定の消滅期がありますからね。」と輕く仰在つて、「おや斯う致しませう、畫ご覽になつた鶯、彼は私の愛鳥として飼つて居るのですが、彼と此畫とを交換する事に致したらどうでせう、貴女が熱心にお繪筆を揮つて被居る最中に、彼が一聲啼きましたので、初めてお氣の着いたやうな、まあお擧動でしたが、其麽ところを見ると、鶯が餘つ程お好きのやうに、お見受け致しますが、如何です。」

何と云ふご念の入つたるお言葉でせう私は彼時の事を此麽にご存じとは思ひませんでした。私は尙ほ再三ご愛鳥を戴くことをお辭退申したけれど、ご老人も强いてとのお勸めなので、遂にお貰ひする事に致しました。

其から貴子様の、種々の畫のご質問がありまして、私

もご丁寧にお答ひ申しました。ご質問が濟むと、お話がお宅の事に移つて、時子樣が奥から大きな寫眞を取出してお出なさる、其は昨年ご家內一同でお庭でお撮影しなさつたので、ご老人が一々ご說明なさいます。

このお家は白梅と云ふ古家で、村の名は其に因つて附けられたとの事ご老人のお子には、男三人女三人ありまして、最も兄なる方は、代議士として世に現れ、次ぎは法學士となりて家の譽を擧げ給ひ、末なる春三樣は、昨年大學を卒業なさつた少壯の文學士で被居るのでした……女は二人嫁き、末の時子樣は尙ほ學に居て、目下歸省中です、とご老人が語られました、噫、何と云ふご名譽あるお家庭でせう。

私は一層尊敬の念が增して來るのでした。其時、お客樣がありましたので、ご老人が客間へお越しになり、私と時子樣とは美しい月夜を、お庭に散步しました。苔滑らかなる燈籠には、皆灯が點つて、池水の邊の夢のやうな景色に佇めば、何とも云へぬ床しい、懷しい感想が催されるのでした。時子樣が、

「先生、先生は新體詩がお好きぢやありませんの。」と仰在るので、

「好きですけれども、作る事も、吟ふ事も出來ないのですから。」と申しますと、

「兄樣はお上手ですわ、毎夜も此席へ出て吟ふて被居るの、月夜の晩などに聞いて居りますと、何だか氣が遠くなるやうですわ……。」

「さう、其は聞きたうございますことね、是非今晚吟ふてお貰ひせねばなりませぬ。」

「先生が仰在れば決度お吟ひなさいますよ、呼んで參りませうか……。」

「ですけれども、呼びに行くのは餘りお氣の毒ですから。」と話して居る中に、春三樣がお來しに成りましたので、時子樣が早速お願ひなさると、

「はゝゝは、平日とは違つて……お父樣に聞かれると極りが惡いから、門外へ出やうぢやありせんか。」と、子供のやうな無邪氣な事を仰在います。

其から三人は、村の外の田圃を逍遙しました、月影

は晝のやうに曠い野邊を照して、袂を吹く夜風寒う、灯影遠き村の森の方より、幽かな野大鼓の音が空に響いて聞えます、あゝ何と云ふ美しい、平和な夜景でせう、私は醉へるやうに佇むのでした。

思へば人の身こそ解らぬものなれ、見知らぬ異郷の空に迷ひ來て、孤身淋しさ、悲しさに泣きし昨日まで今宵の、樂しき、我身を知つたでせうか、何の因緣も見識もなき旅の者を、斯までご親切にお慰め下さる御心の、嬉しうも、慕しうも淚零れて、神よ、この慈愛ある人に幸福を與へ給へと、心の裡でみ空の星を拜むのでした。

其時、私の鼓膜に響く、貴き神の福音……春三樣の微吟なさる新體詩でした、何時か、時子樣も合唱して被居います、私は唯、心魂が遠い〱天國を迷ふて居るかのやう、うつとりとして聞き恍れるのでした。

「貞子樣」と吟詩ひ終つて、春三樣は和やかに、

「貴女は、今この靜かな、美しい景色に接して、何か心に感ずる事がありませんですか。」

「はい、何となく心が靜まるやうに、神の國とやらに、來て居るかのやうに思はれます。」

「………。」春三樣は、微かな溜息の中に垂頭れましたが、「唯それ丈ですか。」

「はあ……」と、私は其お問を怪しみました。

「即ち、幽遠なる自然の美に憧れて、人の世の何物をも、お忘れになつたと仰在るのですな。」

「………。」私は應ふる術も知らず俯向くのでしたが瞬間！怪しく胸が躍つて、はつと仰向けば、春三樣は私をご覽になつて、微に頬笑まれるのでした。

家に歸つたのが十一時、時子樣と床を並べて臥せりました。其時はもう、私は、初めてお庭に畫架を据えた時の心を、昔のやうに思ふのでした。

あゝ懷しいその夜の夢、今も心の底深くに沁み込んで、忘るゝ事が出來ないのです。

翌朝、眩しい朝日の光に眸を射られて、夢醒むれば時子樣はもう、お起きなさつて、連りに高く鳴き交ふ鶯の聲する方に、ご老人とお對話して被居います。我な

から鈍かりしと、寢亂れの髮も羞しう、縁に出づれば「や、お日ン成りですか、さぞ昨晩はお勞れでしたらう、未だ早いですぢや、も少しお寢んなつたら。」と、餌を磨り給ふ手を止めて、ご老人がお心附け下さる。

「は、何から何迄ご親切に……お禮の申上樣もございません、今朝八時に出校せねばなりませぬのですから。」

「八時なら未だ悠然間がありますぢや、此村から通ふ學生は、六時半に立ちます、、まあお急ぎなさらずに…………。」と、軒に懸けたる三つの籠を取下しになり、「それ、ご覽下され、良う啼きますぢやろ、此籠は私の樣に一番老鶯さんです、貴女の鶯も、二番目の鶯も、皆此老鶯に喉を矯めさせたのですぢや、もう良う馴れて居ます、それ。」と、ご老人は籠の蓋を放ちなさると、小さき愛鳥は翼を翻して、其掌の上に乘るのです。

「まあ可愛いこと。」と私は唯珍しう。

「決して逃げて行きませんぢや、はつは〻〻甘い餌の味を忘れ兼ねて、巢立つた谷間の故郷も戀しうないのでせう。」と語られる間に、鶯はご老人の袂へ入つて袖へ拔け、磨鉢の縁に止つて、澄した顏で新しい餌を食べて居ります。

「これ、何ちやな行儀の惡い、老鶯の癖に。」と我子のやうにお叱りになると、再び籠の中へ翔け込んで、脊伸びをするやうに體を凋めて居ります。

「だけんど、貴女の鶯を恁麼にすると、直に行つて終ひますぢや、あはは〻。」と快よげに、

「貴女の鶯は未だ若うござるぢや、去年の春、春三が梅狩りに行つて、此後山で愛らしい雛を捕まへて來たのを、私が餌附かしたのですぢや、今日らがまあ此鶯の誕生でせう、啼く事を云へば一番啼きます、どうか行末可愛がつてやつて下され。」

このお優しい、お慈愛のお心に、心なき小鳥すら、斯迄馴れるのでせうと思ふと、私は何とも云へぬ、床しい感が涌くのでした。

聽て口嗽ぐべく、時子樣に續いて中庭に降り、裏の袖垣を出ると、其處に山の澗から引かれた、玉露のや

うな筧の水が懸つて、大きな桶の周圍を、素絹を垂れたやうに溢れて居ります。

「どうです、綺麗な水でせう。」

との聲が、後の梅林の繁みから聞えて、寢衣姿の春三樣が、楊子を喰へつゝお來なさいます。

「清淨無垢、女神の涙を蒐めたものです、所謂自然が造せる蒸溜水、之で一度顏を洗へば、美顏水以上の効能がありますぞ、はつはゝは。」とお戲れ遊ばす。私も

「道理でこそ、時子樣は眞個にお美しう被居いますよ」

「あら嫌や……兄樣が惡いんですよ、餘計な事を仰在るんだものを……。」

「たがね貞子樣、光りが有つて美いのも品に因りますなあ、先天的容貌の成つて居らん處へ以つてきて、無暗に光澤があつて呉れると、却て氣味が惡いちやありませんか、ははつは。」



「善うございますよ兄樣何位でもお嬲りなさい皆お父樣に告げますから。」

と時子樣は手拭を振上げるにして「兄樣は好男子よ、おほゝほゝ。」

「おほゝほゝ。」と私も思はず釣込まれるのでしたが、心の裡では、お兄妹の睦しさを羨むだのでございます。

朝飯を戴いて六時頃、私は此お懐しい家をお暇申しました。厚く皆樣にお禮を申上げた後、互に固く再會を約して、お手づから賜はりたる春三樣のご愛鳥を小脇に抱き、村を出でまし

た。時子樣は橋の爪迄お見送り下さつて「先生、この次ぎの日曜にね、乾度々々。」と眸に涙を浮べて被居るのです、私はもう胸が一ぱいになつて「はい、必然、必然、ま、い、りますよ。」と聲を絞り、後髪引かるゝ思ひを、小脇の鶯に紛らしつゝ戀しき白梅村を離れました。

必然、必然と誓つた次ぎの日曜は、無情なや、雨となりました、口惜しうも、悲しうて、机に對ひ、時子樣に送るべき繪葉書を書いて居りますと、

「お客樣でございます。」と宿の婢の聲、名刺を受取れば、隷書嚴しき文學士白梅春三！

「丁寧にお通し申して下さい。」と言付けて、其處らに散らばつた雜物を取片づけて居る中。

「どうです、鶯が啼きますか。」と、默禮だけが却つて嬉しく。

「はあ、好く啼きますこと、私は毎晩も、お頭の上に置いて睡るんですが、朝は好い目醒しになりますよ、どうかすると、夢現の中にその美聲を聞いて居るので、此頃は種々面白い樂しい夢ばかり見て居ります。」と、實際さうなのでございました。

「はゝあ何麼夢をご覽になるのですか、お話して戴きたいね。」

「だけど……。」と私は躊躇ひ、「詰らんですから、又此次ぎに……。」

「又此次ぎに？はゝは其麼大切な夢なんですか。」と例の……微笑し給ひつゝ机の上を……。

「その繪葉書は、一寸拜見、むゝ綺麗ですな、其緣をお寫生しなさつたのですな。」と圓窓を通して中庭を覗き給ひ、見競らべつゝ、

「何か書いてありますな……時子樣、とう〳〵雨が降りました。私は今、此繪葉書の畫の中庭を眺めつゝ、泣くやうな春雨の音を聞いて、濕り勝なる鶯の聲に、懷しき貴女の姿を、胸に浮べて居ります、此次ぎの日曜こそ、乾度〳〵、乾度ね、さよなら……かね、情の籠つた筆だ、之を見せたら恐らく時子は泣くでせう、私が持つて歸りませう。」

「はい、何卒宜しう。」

「承知しました。」と傍に置き給ひ、軈て、更りたるやうにて、「處で貞子樣、私は今日、この黨に附いて趣味ある……と云へば可笑しいが、先づ面白い來歷談をお話すべく、わざ〳〵立寄つたんですが、どうです、お聞き下さるでせうか。」

「まあ、其は有難うございました、是非聞かして下さるやうお願ひ致します。」

「はゝはゝ其う嚴く出られると、一寸話り難いのですが。」と俯向かれて、「結句、何ですな、此黨ば、貴女と僕と斯う……お近附にならしむべく、ですな、世に生れて來たかのやうに私に思はれるのです、即ち貴女と私との、何です、友人としての交情を結んで呉れた、月下氷人とも云ふべき奴なんです。」

「おほゝほゝ。」と私は、其お話振りが可笑しなのに思はず噴出したのですが「何故ですか、其理由をお話して下さい。」

「ま、先づお待ちなさい、之からが面白いのです。」と

私の勸める薄茶をお啜りなさるのです。其時、「お客樣でございます。」と婢が再び參りましたので、「何んな方」と尋ねますと、

「袴をお着けなさつた女學生樣が三人、先生がお在宅ですかと仰在います。」

「さう……まあ拍子の惡い。」と私が思ひ惱む處を、

「ぢや私は失敬します。」と春三樣がお立ちになる、

「あら宜うござんすわ、生徒樣の方を歸します。」

「いや、其は可かんです、此方は遊びに來て居る者、向方は又生徒として必要ある質問があるのかも知れません、又參ります、若し其日までに來れなかつたら、貴女は是非次ぎの日曜に………。」

「は、有難う、だけどお氣の毒ですわ、漸々面白いお話を伺ふ處を……何うぞ之にお懲りなさらず可成くなら日曜迄に一度、お待申しますから。」

「はあ其時黨の來歷談を致します。」

「何卒。」と、私は再び婢に向ひ、「生徒樣を彼方の居間へお通し申して下さい。」と云つて、春三樣を送り出し

ました。

「屹度ね、兄様………。」

「え？」と春三様は振返へられましたが「貞子様、貴女は私を兄様と呼んで下さるのですか。」

「………。」私は無言で俯下くのです。

「實に滿足です、以來は何うか兄として交つて下さい」と、力を籠めたお聲です。

「はい、どうぞ呼ばして下さい……。」と、私は思ひ切つて、はつきり申しました。

春三様は暫時！熱と私をご覽なさるのでしたが、軈て輕く默禮なさつてお立歸りになりましたのです。

金曜日の夜、時子様から美しい繪葉書が參りました。要は兄様のご都合で來られなかつたこと、明後日（日曜）には屹度々々、兄様もお父様も皆待てますから、朝早くからと云ふのでした。この可憐なる筆に接して、私は知らず／＼夜具の袖を絞りました。

待ちに待ちたる日曜が來ました、空は珠の樣な快晴、私は嬉び勇みつゝ仕度をなし、今朝配達された新聞を持上ぐれば、何事ぞ！三號活字鮮やかに白梅村の失火と題するは　はつと躍る胸を制へて心も坐ろに讀行く朧ろの文字！

（昨夜午前二時白梅村なる本縣代議士白梅剛一氏留守宅令孃時子の居間より出火し村民等の獻身的消防盡力に依り幸に大事に至らず同四時鎭火したるも茲に氣の毒にも哀れなるは有名なる嚴父歸水老人の愛孃を救はむとして無慘の燒死を遂げられたる一事なり。）

わつとばかり、私は心臟が一時に破裂したかのやう、死人の如く其處に泣きくづをれました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此悲慘なる出來事の後、春三様は突然韓國に渡り給ひ、その年暮るゝ頃、私は安からぬ病の身となりて再び故鄕の者となり……茲に三年の秋は逝きました。時子様の嫁し給ひてより互の消息も疎うなり、今は懷しき春三様の、何地に居給ふさへ定かならず。あゝ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

この長き記憶より覺めると、私は何時か春ちやんと

別れて、獨り家路を辿るのでした。

居間に入れば、世は春、明るき光暖う照れど、晴れぬ心には何となく淋しく、障子に影指す鶯の、昔懷しき聲も老いたれ……………日も大分傾きました、徒然に餌でもしてやりませう。

（をはり）

一等　貳拾圓

越中高岡市坂下町一二二一番地
岡田定子

別選

若き妻

いさを女史

良人の君のうち解けて話しかけ給ふ御言葉に、充分の答へなしまつることもえせで、お氣にふれしにあらずやと後にてさとりて、ひとり心を惱すことさへありき。それも、今日は昨日より、明日は今日より馴るゝにつけては心もやう〳〵落付き、この家の樣子をつくづくと見定めたる時は、叔父君の癖にはあらねど誠にうれしう思ひぬ。見よ、夫はこよなう愛で給ふにはあらずや。世にあり勝の嫁には愁き舅姑の、始終にここにとして、梅子々々と隔てなくやさしうして下さるにはあらずや。その上、かく美しき家に何不自由なく暮さるゝにあらずや。

むかしを今になす由もがなと望みし事の今かなひきてかく貴き際の人となりぬ。思へばうれしからずやは。夫の机に凭り、書讀み給ふ傍に侍りて御茶すゝめつゝ、心にもなくほゝと笑まるゝとありて、其方は何がをかしきぞと問ひ返れしも幾度なりけむ。

かくて我れは、此の家を一生の身のおき所と胸にきざみて忘れざれば、心身共に碎きて仕へまつるに、夫を大切に、舅姑を敬ひつゝ、樂みの中に早くも一月をぞ過しける。

さはれ、あゝさはれ、一月經ちし今日此頃よ、父上母上の何となう隔てのまがき築き給ひ、何彼につけて、我れを避け給ふ樣のふるまひ、ほの見ゆるに心も心な

らず、如何なればかく情なくし給ふにか。ふつゝかなる此身の、早や飽かれしにはあらずやと、小さき心たゞ一すぢに、此の解釋を求めむとしたりしが、あゝ、今より思へば、これも淺ましき浮世の人の、さもしき根性よりなりしよ。

大凡、世間の嫁につらき舅姑の心の中を量り見るに、年甲斐もなく嫉妬の念を多少は含める者のやうなり。若夫婦の如何にもたのしげに睦まじき樣をよそ目に見ては、我等年老の手前もあるものをと呟き、夫が嫁を大切にすれば、その樣にしては圖に乘りて、如何なる事をするかも知れずと、わざと當付がましき小言を云ふなど、嫁を嫉ましく思ふ心よりにあらねば、何をか好んで口嘴容れむ。夫婦の和合は一家一門のさかゆる基なれば、その睦まじき交情を見ては、よろこび嬉しみ、猶も行末長うこのまゝにして續けよかしと斯るべきを、いとしき我が子が命に代へても愛する嫁の身なるにも拘らず、蛇蝎もたゞならず厭ひ苦しむるは、只管嫉妬の心深きと、かつは我が子が妻の愛に溺れて、親を疎んじはせずやとの、僻みたる廻り氣よりなるべし。我が父母として仕へまつる人々も、かゝる類の輩にて、一きは甚だしとは、あゝさても。

この事につきての憂き目、一度ならず二度ならず、日毎にまさり行きしなり。されど、慣れては始めの樣にもあらず。馴れて行く心の寛さ、さては、對坐の折折優しく、慰め給ふ夫を力にして、萬の苦を忘れ草、女郎花の風情いぢらしく、吹きすさぶ情なき風にも堪へたへて、なほも機嫌をとり參すより外に心はあらざりけり。

さりとは手の裏かへせし樣の御心共かな。今や我が身をば、憎らしく、顏見るもいとはしく思ひ給ふ程の父母なれば、かゝる心づくしも何の役に立つべきぞ。

あの樣な嫁を何時までも置かば、溫和しき我が子も手の中に丸められて、其の云ふがまゝにまかせ、遂には親を忘れ孝行の心を忘れ、如何なる事をなさむも知れずと、姑が恐しげにたきつくれば、固より同じ氣性の舅も相槌うちて、眞個に道理ぢや。

子でも出來てからは面倒なれど、今の内ならば譯もない事、一思離緣をして了うではないかと、甲斐なや、犬猫の貰ひやりの樣に、我が身を持ちなぶりて、手輕き談合の果ては、いよ〱離緣と云ふことに、陰ながら定められしぞ是非なき次第なる。

其二

或る日、夫と共に茶室にありしに、父上の召したまふに、夫は御室をさして行きましぬ。

置き去りにせられし我れ、夫には如何にしたまひしぞと氣遣ひながら、長き〱一時半ばかり待ち居たりしが、日頃のことを、それからそれへと思ひ廻して、おのづと流れ出づる涙を、庭に向へる緣に立ち出で柱に凭つゝ拭ひて、忍び音に泣き居たりしが、かなたに足音きこえ、進み來りしは夫の君なり。



見付けられまじと泣き顏かくして、固の座にかへらむとすれば、梅と呼びとめらる。傈として振むけば、傍にさし寄りたまひて我が肩に手をかけ、そなたは今こゝで泣いて居たなと、顏のぞき込まれてはづかしく、身をすくめ顏そむけながら、いゝえ、どうも致しませぬと紛さむとすれば、いやいやかくすな〱、日頃の事思ひ出してならむ。堪忍してくれ。親が何と云つても、決して氣にかけては吳

れるな。それにても、云ひきかすべき事こそ出來たれ。いざこなたへ來よとて、御机のかたへに坐せしめぬ。如何なる事をの給ふにかと、氣遣はしげに坐せば、外でもない、今日其の筋よりの達によれば、今度かの日露事件につきて、我れもかの地へ渡らねばならぬさうな。就ては、明後日あたりに此所を出發せねば間に合はず。親に分れ、最愛の妻をのこして、遠き旅路に登らむこと、いとも心苦しけれど、御國の爲めといへば是非もなし。それにつき、さらでだにそなたに優しからぬ父母、我れの留守ともなりなば、此の上如何なる目に合はむもしれず。されば、我れの再びかへり來るまで里にもどりて、叔父樣とやらの家に居てはくれずや。さすれば、我れの心も安かるべく、そなたも憂きこと少なからむ。どうだ梅子、さうしてはくれぬかとの御言葉なり。

このこと聞きし時、われは驚きて、かなしさに聲を惜まず泣きたりしが、かくてはならじとおくるゝ心はげましつ、御國の爲めと云へば是非もなき事、さらば行きませ、心弱き事は申しませぬ程にと云へば、おゝよく云つて呉れた、それでこそ我が妻として耻かしからぬそなた、身を大切にして待つて居よとの給ふに、忝なや、あなたもとばかり、流るゝ涙はせきもあへざりき。

かくて夫は長月の半頃、遠き征途に上りましぬ。父君母君と共に我れは停車場まで見送り參らせてけり。心なくも消え行く車の影を見失ひて、涙ながらに歸る途中、我れは伴の人々と別れ、淡路町なる家には行かで、小石川なる叔父君の家に車を走らせたり。父君母君に別れ參らする時、さらば御機嫌ようと云ひたりしが、御兩人共御いらへはし給はずに、おそろしげなる顏してにらみたまひぬ。

其三

今までの心にくらぶれば、叔父君とたゞ二人なる今、結句氣樂に思はれて、おのづと心の暇ふえけると共に、夫戀しと思ふこゝろ一入まさり、うらさみしき秋もいつしか過ぎ行けば、世は末枯のうらがなしう、冬ざれ

の月上野の森にさえて、亙れる寒雲の行足はやき夜も、君だにまさば、火桶かこみて樂しく打語らましをと、物思ふ夜半のさむしろに、枕うるほせしも幾度なりけむ。小雪はら〳〵と寢醒の窓にふりそゝぐ朝も、こひしき君、今頃は如何なる所に如何にして居給ふか。こゝよりは寒しとかきく北清の地、曉の淡夢に浮ばせ給ふは何ならむなどと、思ひ出でゝは思ひ入りつゝ日を送りしが、その年もいつしか暮れはて、新玉の年立かへる目出度さを、祝ひさゞめく春の始めとなりぬれど、そよとの御音づれなかりき。

軍の旅、筆とるひまとてなき故ならむと思ひ居たりしが、その春の暮れに近き頃、姑の君より御文ありき。うれしと思ひて讀みもて行けば、こは如何に。



こひしやなつかしの我が夫、まどろむともなき手枕の夢にも、その面影を浮べでは、後にのこさむことのいとほしく、庭の葉風にさめての後も、そのまぼろしにあくがれたりし我が夫は、かなしや、いたはしや、旅順城頭の一戰に、敵の流丸に中りて息きれたまひしとかや。情なや、死なむとばかり泣き叫びぬ。

長き文なほ讀行くに、かく事きれし上は、そなたが再び此の家に歸り來るとも用なき身なれば、離縁せるものと思ひて、よき口にてもありなば、他へ嫁つて呉れとの文言、我れも早やかの家に歸られぬかと思へばそれもかなしく、やさしき叔父君の、日夜なぐさめ給ふうれしさなかりせば、それよ我れは、研ぎすましたる剃刀に、あはや、花の命をまかせたり

しも知れざりしよ。
　何もかも、時よ世よとあきらめて、もう歎いては呉れるな。此の上そなたの病などにかゝる事あつては、このおれの浮ぶ瀬がないぞ。もうどうあつても他家へなどはやるまい程に、いつまでも此處に居て、老人の愚痴聞きづらからうが聞いても貰はうし、老人の手に出來ぬこと、蒼蠅からうがしても貰はう。これからのそなたの身は、すつかりおれにまかした者と思つて、昔の事はさらりと川へ流し、勝手に思ひ出して、氣ままに泣いてはいかぬぞ。散り殘つた向島の櫻もさぞ風情があらう、明日好い天氣にてもあらうなら、一所に見に行つてはどうだ、さうすればちと氣も晴れやう。そなたの樣に、いつもくよ〳〵して居ては、男の身でもさう長くは續くまいと、眞心こめて云ひさとし給ふに、分りました、もう泣きませぬと、涙ふき〳〵立ちあがりて、布ひきよせて縫ひ行くも暫時、叔父君かなたに去り給ひては、すまぬ事とは知りながら、又ふりかゝる涙の雨、縫ふ手止めて、二つの袖を顏におしあつるもあはれや。
　されど、思ひ返し見れば、親に分れ、家は絶ゆる程、我れは固より不幸の身に、かねて此の世は果敢なき者と、諦めきりたれば、この緣の末長う續かざりしも緣なり。思ひたえなむこと、いとやすき業ながら、さても痛ましき恩人の身の上、御面影の日毎やつれ行くは、そも誰が爲めぞ。
　今はなか〳〵に此の事のみ心にかゝりて、此の家今にも再興の榮を、只管諸神諸佛に祈りたりしが、女の身に生れたるが何よりも口惜しく、何かよきすべもとて、日夜思ひを惱まし居たりけり。
　どこまでも苦まねばならぬ我等が運命か。さても甲斐なしや、難澁いよ〳〵うち續き、活計は日增に不如意となりまさり、借家の荒庭花に色なく、雨降らぬ窓も曇りて、家内しめり勝に、叔父君の白髮卒に目立ちて、月々の支拂さへ苦しき程ともなれば、我れは早や得たへずなりぬ。
　さる程に、或る人より、さる華族樣の、姫君の爲め、

徒然なぐさむる御相手求めらるゝよし、其の者は、齡十七位より二十迄にて、素性賤しからず、容貌も醜からず、深くはなくとも多少は書よみ物もかくこと出來、行儀正しくして、氣質おとなしくあるべし。月給は十圓なりと云ふこと聞き付けつ、心嬉しく膝を進めて、此の奉公是非にと叔父君に願へば、拳もて涙を拂ひ給ひて、頓に言葉も出でざりしが、良ありて、梅子ゆるして呉れとばかり、面をそむけ給へり。

此の家離るゝこといと辛けれど、我が身奉公に出でなば、月給といふものあり。それを過半こなたに送らば、さこそ米鹽の資ともならめと、我れは平素の恩に酬うべき時の到れるを喜ぶ心叔父君には恨めしくてや、いとゞ聲をくもらし給ひて、身を大切にして行つて呉れ、零落れては、かく情なき目にも遇ふものかと泣き給ふに、我れもそゞろに涙のこぼるゝに、疊にふして叔父君よりは泣いたりき。



早くも話まとまりて、三月十四日、まだ忘れもせぬ其の日、行く先は本郷富士見町なる子爵藤澤家、いかめしき門をくゞりて、こゝに住まふ身とはなりしなり。

其四

やさしき姫君の何一つ難題申しかけて困らし給ふことゝてなく、折々は手づから御茶入れて、これ上れとすゝめ給ふとあり、又ある折は、御琴の合奏に過分なるほめ言葉頂きし事あり。今は却つて奉公のつらさもつく〴〵忘れ果てたる程となりて、何事もなく三月

が程を過しけり。

我れと朋輩なる女中共のやかましき口によれば、姫君の身の上に、めでたきことの今にもありなむよし、うわさありしが、我れある時殿樣の御前に召されて、明日は國子の見合なれば其の心せよと云はれし時は、あまりの早さに驚きたりしが、何食はぬ顔して、畏りぬと云ひて罷出き。

早くも其の日は來にけり。固より金にあかして飾り立てたる姫君の御姿、四邊を拂ふばかりにいと貴く、まこと天女とはかゝるきはの人をこそ云ふならめと、我れにもあらずうつとりと見惚れ居たりしが、梅、何して居るぞとの給ふこゑに氣付きて己れにかへり、しづしづと裾さばきして、歩ませ給ふ御後に隨ひ、應接室へと行きぬ。

西洋風の裝飾美々しく、輝くばかりの室の眞中あたりに、圓形のテーブル置きて、客と主人と何か物語り居る中へ、水色の帷幔横ざまにのけて、姫君と我れと入りにき。姫君はかろく會釋して、父上のかたへなる空きたる椅子へ、海棠の露重たげに腰下し給ふ。

今まではうつむき勝にて、頭も上げず、たゞ姫君の御姿のみ打守り居たりしが、この美くしき人の聟君ともなる幸福人は、如何なるお方ならむと見まくほりして、ふと目を彼方にやりし時、はつと驚きて、我れは一足すさりぬ。あはや、わき目もふらで我がこの見すぼらしき有樣を、見つめ居たまひし客の人、驚きしも道理や、この人こそ、早やなき者と思ひ居たりし夫の君なるにあらずや。

今にも飛びつき度き程の思ひを忍びて、己が室にかへりしに、さても亂るゝ思ひ哉。死せりと聞きしは僞りか、慥にそれと見たりしは、我が心の迷なりしか。あらじ、あらじ。まがふ方なきかの君なりき。なつかしき昔の俤につゆ變らぬ彼の君なりき。あゝ、如何にせし事ぞなどゝ思ひ廻らしては、胸いたく、頭重くて、夢見る心地の只ふらふらとしたりければ、其の夜直に少しばかりの御暇乞ひうけて、叔父君の家にかへりぬ。道すがら、種々の事胸に浮びて、足の進みもは

か取らず。あゝと苦しき溜息を洩して見あぐる空模様、いつしか曇りはて、心を照す月の出で來む氣合もなく、今にも雨の降り出でむ程に、いと／＼氣遣はしかりしよ。この事のみは流石に叔父君に語ることもえせず、たゞ少し頭痛のしてと云ふ事を口實として打ふし居たりき。

其五

我がふせる枕元に坐りて、我が手しかと握り給ひ、熱き涙ほろ／＼と、その上にそゝぎ給ふは我が夫なり。

さて徐ろにの給ふやう、我れの彼の地にありし間、片時もそなたの事を忘れしことなく、海山遠き故郷の、白雲たなびく空を望みては、冷ゆる外套に涙氷らして、心なやまし、夜毎に結ぶ夢は、暖きそなたの傍の事、



我が身ながらもをかしう思ひし程なりき。皇國の軍目出度勝ちて、待ちかまへたる歸郷の日も、やう／＼近づき來るうれしさに、心も勇み氣も進み、あれこそ我れ等の乘る船ぞと敎へられし時は、そゞろ飛び立つ思ひの、心は早も都の空に立ち歸りけり。

神戸まで船にて、それより汽車にて新橋に着きけるが、定めてそなたも、首長うしてこゝに待ち居るならむと思ひ居たりしに、父母君のみにてそなたの見えぬがいぶかしく、家にかへりて、まだ此家に來ぬならむと思はれしまゝ、迎ひの人を遣さむとしけるに、母君我れを呼び給ひ、まあ聞けとて語らるゝを聞けば、そなたは、我れの此の地を出發し後、叔父なる人の家に

ありしが、何思ひては離緣を申し越しぬ。あまりに乞ひて已まざれば、致し方もなう荷物など返して承諾の、旨を答へけるなり。またその後きけば、梅子共今は小石川の家にあらずして、其の行方分ずとかよ。如何にしたりけむ知らずとの給ふに、何も知らぬ身の、だまさるゝとはつゆしらで、その樣のこと侍りてか、さらば詮なきことと云ひたれど、心はたゞ夢とのみたどられて、解しかねたる節々、疑ひの晴れぬこと多くて日を送り居たりけり。

　さる程に父母がすゝむるうるさき緣談の事、妻は最う持たぬ心の、心になくも餘りの言葉默止難くて、先日かの藤澤の家に行きし時、はからずも認めたるそなたの姿、再度の驚に、主人が語る言の葉も、よくは耳に入らぬ程なりき。

　いぶかしさに堪へで、そなたの事を詳しく問ひ尋ねて始めてまだ此所に居る事を知りぬ。

　そなたの我れを捨てしは、如何なる心よりにてか知らねども、別るゝ際にかくまで云ひしものを、今かく情仕向くることのいと恨めしくて、一度對面して、思ふさま責めて〳〵責め拔かむと思ひつゝ今尋ね來りしなり。ゆるせ、梅子、我れ惡しかりしぞ。かゝる事露知らざりしといへ、あまりに卒氣なかりし始めの言葉、今や心に耻ち入るのみなれば、決して〳〵怨んでは與れるな。さるにても、心惡きは我が父母なり。飽きも飽かれもせぬ夫婦中を、かくしてまで割かむとする心憎くさ。梅子、我れはもう、あの樣なおそろしい親のそばへは、金輪際かへらぬ程に、何時までも此所にて昔の通り、世話してくれよ。

　かくして我が夫は、とこしへ我がむさくるしき家に止まり給ふやうになりぬ。叔父君の氣の張やゆるみ給ひけむ、病の床につき給ひしが、たゞかりそめと思ひ居しに、計らずも重り行きぬ、夫と共に住む樣になりて丁度二十日目の夕、我等の行末を幸多かれと祈りつつ、靜かに〳〵息引きとりぬ。海山もたゞならぬ大恩、少しだにかへすこと能はざりし我れは、今夫と共に睦じく暮し居るたのしげなる樣を見せまゐらせじぞ、せ

めてもの心安めと思ひけり。
其の後、如何に廣きとはいへ同じ都の内、我が家の人に見付られて、またもやはなれ〳〵の憂き目に遇ふやもしれずとて、一層心安き地を求め、二人をかしく暮さむものと、暮れ行く歳の都の人々、いそぎまわれる様を見捨てゝ、浪靜かに畫の様なる、こゝ和歌の浦へと來りしなり。

よしさらば、磯の苫屋に旅寢せむ、とて二人手に手を取り、小石川なる宿を後にせしが、都の空もなつかしからぬにあらねば、後髮引かるゝ思ひのなきにもあらず。雲迷ふ夕暮、富士の根ほの白き朝ぼらけ、汽車の馳すること矢よりも早く、長亭短亭の數々を過ぎ行けば、いつしか浪花の地へと着きにけり。是れよりはさまで遠からぬ和歌の浦、今一急ぎと車乘りかへて、やがて着きしはこれこの濱邊、和歌の浦しほみちくれば片男波、蘆邊をさして田鶴鳴き渡ると古歌口吟みながら來て見れば、聞きにしまさる海景色、たゞ見惚るるばかりなり。

夫も、目に喜悦の波をたゞへつゝほゝと笑み給ひ、かねて思ひし程の田舍にもあらず、そこ此所にならびて立てる家々なか〳〵に賑はし。これにては、松の聲波の音ばかり聞きても、流人の様な思ひする事もなからむ、我が口くせの如くほめそやしたる都あたりの景色とは、草木の形山川の容、おのづから様かはりて、海につき出でし洲崎の茂り立ちたる松林の風情、晴やかに廣やかに、氣も心ものび〳〵する様ならずや。春の海の、平に青き牧場に、行きかふ小羊の姿にも似通ひたる眞帆片帆の、それもさすがに捨て難けれど、よせては返す浦波に、碎けて砂の眞白なるは、また一入のながめならずや。今までは、苦勞のみ續きしそなた、今このけがれなき自然に、奇麗さつぱりと洗ひ流して、樂しき心にかへれよ。さるにても、住みなれし故郷ふりすてゝ、見も知らぬ磯邊の波にさすらふは、心細くは思はぬかと、なぐさめ給ふ御心のうれしさに、心は唯、立なびく霞の幕に包まれしごと、夢心地して、花と笑ひ、鳥と歌ふらむたのしの思ひ。

あゝ今や春の半、こゝに來てより早や百日ばかりとなりぬ。若草の萌えそろひし匂ひもゆかしう、見渡す海の果てのかすみもうれし。思ひ出の糸をたどりて、まぼろしの夢を浮べ行かば、これにてはつきざらむが、あまりのうれしさに心酔ひきて、思ひにまかせぬ筆のいとゞ進まねば、いざこれにてさしおかむ。さらばとて、さらばと、笑ひますな世の人々。

三月十五日

おち行く夕陽に向ひて　梅子

いさを女史の住所姓名を至急御報知あれ

おのが罪

秋湖

「オヤ、謙さん！」と呼止められた自分は、呼んだ其の人の餘りに意外なのに駭いた。十二月末の曇つた日の午後、商船學校に友人を訪ねて、其の歸途を永代橋の半程まで來て、女の聲で斯く呼ばれたのであるが、最早夕暮近い橋の上の風に、自分は兩手を深く外套の衣囊に突込んで、急足に來懸つたのを、聲に應じて、立て其の婦人を見たのである。

姉だ！七年前に別れた限、生死さへ明らなかつた姉だ！固より容貌などは痛く變つたもの〻、自分と同じ血を享けた天にも地にも唯一人の同胞、一目で姉と知る事は出來たが、それにしても其の變りやう。例の剃身屋とか云ふ三角形の筒袖の、盲縞の肩や肘の邊が白くなつて、補綴さへ見へる半纒を寒氣に着て、塵埃に穢れた素足には、鼻緒の弛んだ男下駄の、草履のやうなのを穿いて居る。

自分は言葉が出なかつた。姉も暫時は自分の顏を見詰めて居たが、

「謙さん、何から云つて可いのやら、妾はもう……」と言葉を切つて、「お父樣もお母樣も、謙さんも、嘸憎い奴とお怨みでしたらうね。最早足掛七年、妾は未だ恥を晒して生きて居たのですよ」と淚ぐむ姉の横顏、

これでも曾てはお孃樣と云はれた人か、十七八の時分、若々しく垂髮にして居た其の頭髮を、無造作に櫛卷にして、寒さに窄める肩の瘦を見ては、漫ろに苦勢の程も想はれる。

『然し妾にはまた云ふに云はれぬ事情があつてね、今の有樣も自分では自業自得と諦めて居ますが、お父樣もお母樣も御健全でせうね。』

『え〻、御健全です、御健全ですが姉樣、兩親の年を取るに付け、僕は姉樣を怨んで居ました。然しそれよりか姉樣は、今は什麼してお在でなんです？』

目の前に姉の姿を見るまでは、其の成行を氣遣ひながらも、實際姉を恨んで居たが、哀れな此の有樣を見ては、何ぞ其の罪を數へることが出來やう。



『謙さんが御覽の通りの姿、もう詳しく話せば氣を惡くさせる計りですよ。見れば謙さんは大學へお通ひの樣子、大學生の姉に乞食同樣な女、謙さんは此の姉をさぞ恨んでお在でだらうね。』と前と同じやうな事を云ひながら鯉口の袖で眼を拭ふ。

『恨むよりは案じて居たのです。今圖らず貴女にお目に懸つたのは嬉しいけれど、姉樣、失禮ながら其の御姿、僕は實際恨めしい！』と自分も何時か涙になつた。

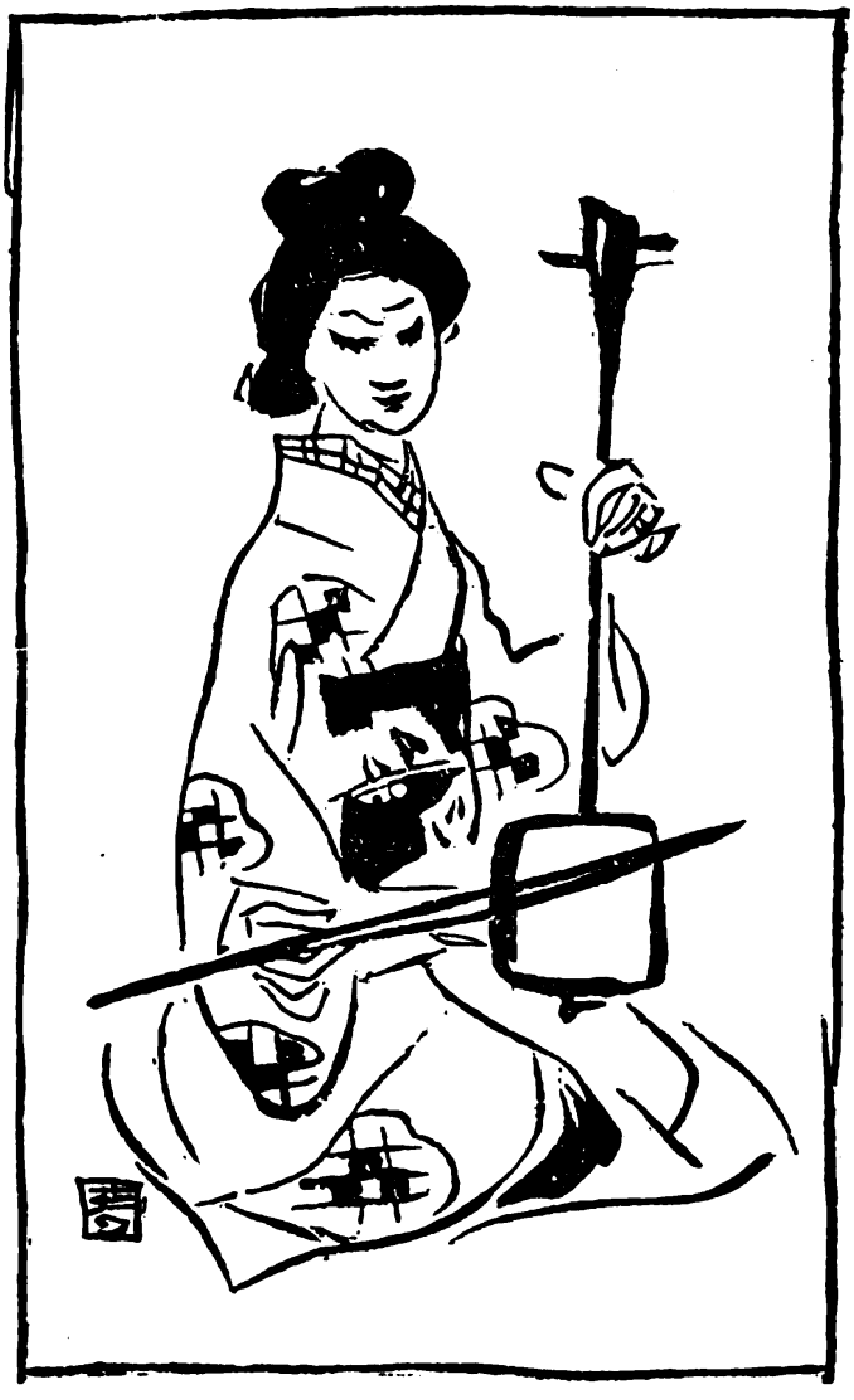
自分等同胞の父は、近頃まで某縣の書記官を勤めて

今も其の地に安靜に暮して居るのだが、老先長からぬ父母の念想の種は、實に此の姉である。不埒な娘、不屆な女と、今でも父は口癖のやうに云ふのだが、此の憤怒の聲の裡には、幾多の悔悟を含まれて居るのだ。縣の書記官と云へば、知事に次ぎ高級官吏ではあるが所詮は一個の俗吏に過ぎぬ。且つ藩閥の後援もなく、纒つた學歷のあるでもなく、唯年功で經上つた父は、久しく自分よりも年若な長官の下に齷齪して、自身も其の地位を昇進の極度として居た。それで能く老後の計と云ふことを氣にしたので、蓄財も出來るだけはした、兒等の教育にも力を入れた。覺悟の善い人とは恐らく父のやうなのを云ふのであらう。然し流石の父も姉に付いては此の老後の計を誤つたので、姉は却て父の老後の計の犧牲になつたやうなものだ。

姉は十九の秋嫁に行つた。娶家は俄分限でこそあるが、土地の素封家、知事さへ頭が上らぬと云はれた富豪で、老主人は貴族院の長者議員であつた。其の嫡男の嫁として姉を望まれた時は、父は如何に喜んだであらう。其の頃自分はまだ中學の腕白生で、其の消息を能くは知らぬが、何んでも姉は此の緣組に大不服で、泣いて拒んだのを遂に親の威權で、心ならずも結婚せしめられたのであつた。噫、富豪の嫁！　常から老後の計なるものに腐心して居た父が、之を娘の榮達として喜んだのは無理もないので、娘は大金持の嫁になつた、伜も之で得難い後援者を得たのだ、最早老後の心配はないと云つては、頻りに喜んで居たのだが、姉の結婚が父を喜ばせたのは僅か半年足らず、姉は遂に離緣になつて戾つて來た。唯美貌なるが爲めに望まれた姉の運命は、永く幸福なるものではなかつたのである。高利を貸して成功した老主人は、昔債務者に對して光らしたやうな、冷酷な眼を以て愛子の戀女房を見たのである。勝氣な姉は勿論舅姑と衝突したであらう。殊には配偶者たる嫡男の放埒、己が兒の暗愚は棚に上げて、之も亦嫁が至らぬ爲めとして、却て姉を責むる材料にされた。實に姉は不本意な婚姻の爲めに半歲を涙に暮して、斯くて圓かなるべき鏡は破れた。

癒えざる創痍を胸に受けて、歸つて來た姉は、子供同樣な自分にも哀れに見えた。折角力頼みとした富豪一家の冷淡極まる態度には、父も逾に忿懣して、深く彼等父子を恨んだが、去りとて憐べき娘を勞はる程の雅量はなかつた。母はまた今更のやうに緣談の最初から、想はしくなかつたことなどを云ひ出して、姉と共に泣くことが屢々あつたが、離婚後三月計過ぎた或る夜、姉は突然姿を隱したのである。抱への車夫と、二百圓程の有金も、姉と共に消えて了つた。

噫！ 涙の多き姉の半生、其の後杳として消息はなかつたが、今圖らず凩荒む橋の上に廻り會つて、零落を極めた姿を見た時は、亡き人の世に出でたかと思ふばかりに自分は驚いた。胸は唯云ひ知らぬ感想の犇と迫るのみで。



「僕も申上げたいとは澤山あるし。其の後の御動靜も伺ひたいのだが、何處か姉さん落着いてお話するやうな場所は……」

「左樣ね、落着いて話すやうな場所と云つても、妾が此の服裝では………」と躊躇つて、

「いゝえ謙さん、薄情なやうですが此の儘お別れしませう。それは妾とても生家の樣子やら何やら、聞かし

て貰ひたいことは澤山あるけれど、お父樣やお母樣が御健在と聞けばそれで充分、謙さんも立派に成人したのだし、それで大學を卒業すればお父樣達も御安心、もう其の上の喜びはありません。妾も蔭ながら安心します。萬望ね謙さん、此の不孝な姉に代つてね、お父樣お母樣を大切にして上げて下さいよ』と涙の顏を蔽ふのである。自分は此の悲しい聲に答ふる術もなかつたが、

『然し姉樣、それは酷い。實を云へば僕も貴女は最早此の世の人ではなからうと迄想つて居ました。お父樣達も左樣です。それが此處でお目に懸ることが出來たのですもの、此の儘別れやうとは餘り酷い。僕は貴女の唯一人の弟ですよ。貴女は僕の唯一人の姉樣ですよ』と念はず聲に力を込めた。

『謙さん、妾は嬉しい、這麼姉を夫ほどにまで念つてお呉れかと想へば妾は本當に嬉しいけれど、這麼姉があれば唯謙さんの恥になるばかり、ね萬望姉は死んだと想つてね、免して下さい』と涙を拭きながら『先刻謙さんと氣の付いたとき、寧そ默つて居やうかと想つた位でしたが、餘り懷かしさに呼び止めて、却て濟まないことをしたのです。それはもう、謙さんの居所も聞いて、話に行きたいは山々だけれど、這麼姿でお尋ねも出來ず……謙さん、薄情な姉と恨んで下さるな、妾も此の儘別れるのが何程憂いか知れません。』

『それでは姉樣、貴女の御住所だけでも聞かして下さいな。御迷惑ならばお尋ねはしません、默つて居ろならお父樣達にも云ひますまい。僕にだけ萬望御居所を聞かして下さい。』

『居所と云つて、矢張此の深川に居るのですが、それも免して下さいな、姉は死んだものと想つてね……』

噫と、自分は空を仰いだが、突然足許に、

『お母ア、早く歸れッて！父樣が怒つて居るよ』と叫ぶ小兒の聲、見れば襤褸に等しき服裝をした貧相な男の兒が、垂下るやうに姉の手に縋つて居る。自分は念はず、

『オヽ、姉樣、貴女のお兒ですか』と倉皇しく尋ねた。

然し姉は答へなかつた。

『では謙樣、是でお別れしませう』と笑顏を作つて小兒に對ひ、

『お前態々お迎ひに來てお呉れかい、寒いのに御苦勢だつたね』小兒は希見らしく自分を見ながら、

『己ア通過ぎて安達屋へ行つて了つたんだ。そうしたら安達屋で、お母アは先刻歸つたつて云ふから、己アまた驅けて來たんだ。お母アは先刻から此處に居たのかい、父樣は大變怒つて居らア。』

『左樣かい、濟まなかつたね。此の叔父樣に會つたものだからね……さア歸りませう。』

『此の叔父樣、何所の人よ？』

『此の叔父樣は大學校のお方、さア寒いから早く歸りませう、それでは謙さん、御健在でね………』

『左樣ですか、では姉樣も御健在で………然し僕は殘念です。』

姉はまた眼を拭いて居る。

『お母ア早く歸らうよ、己ア寒いや。』

『アヽ、歸りませう、謙さんそれでは』と僅かに腰を屈めて、小兒の手を引きながら名殘惜し氣に立去る姉の後姿、自分は氣の拔けたやうに立つたまゝ見送つて居たが、姉も見返り勝ちの歩みも遲く、やがて一町程行過ぎて、振返つて自分と顏を合せると共に、連れた小兒に何か耳語いた。小兒も自分の方を振向いて、

『叔父さーん』と呼ぶのである。

自分は唯涙ぐまれて、此の可憐な聲に應へることは出來なかつた。

吹荒む風は容赦もなく、一團の砂塵は哀れな二人を包んだのである。





夏のひかり

朝顏

牽牛花つくるこそ、いと樂しきわざなれ。早きは六月の末より咲き初め、九月の終り頃まで、新陳代謝して朝の眺のいと淸きは、外の花にもまして長き壽命なるを、槿花一朝の榮とか露の干ぬ間などいひて、盛り久しからぬ者に喩ふるは、いと心得ぬ事にこそ

珍らしき花、大いなる花咲かせて、人に見せ誇らんには下土のこしらへ施肥の加減、鉢の良否などさまざまの苦心もあるべく、むつかしき秘傳もあるべけれ、唯朝の樂みとして、花咲かすのみには、何程の手數をか要すべき。

自ら蒔きたる種の萠え出でんや否や、いと心もとなきに、掘りても見たくおもふ中に、少し土擡げて顏を出し、やがて貝割の萠え出でたるはいと嬉し。さて中の葉二三枚も出たるを、鉢にも植え、垣根にも移し。花銘の札附くるなど、彼のもろこしの陶侃とやらんいへる人が、甓を運びしにも似てよき運動となるべし。

折々に肥料を施し、朝夕に灌水を怠らず、竹を立て葉を摘むなど、注意のかひありて、葉がくれに、ふくらみたる蕾の見ゆるころとなれば、明日や紐解かん、明後日や咲き初むらんと、朝の寢覺もいと早し。

空には有明の月影淡く、曉風肌に快きに、白に紫に紅に瑠璃にさては斑入などの花、とり〴〵に露を帶びて、いき〳〵と咲きたるは、眼も覺むる心地す。夏より初夏へかけての眺め、これに勝るものあらじ。

かゝる淸き花つくる事を槖駝師が世事に係累なき閑人のわざとのみするはいと惜し。年わかき男女の學生も書讀む片手わざに培養せば、趣味いと多きが上に大に身の健康を增すならむ。

朝顏に釣瓶とられてもらひ水　千代

朝顏にわれは飯食ふ男かな　芭蕉

牽牛花の鉢植を送る

牽牛花二鉢持たせ上候黒人のやうに花も葉も見事に

は候はねど本年始めての培養、種蒔き苗分け施肥灌水一切人手を假らず私の手一つにて仕上げ候事とて人様の花よりも美はしう存じ居候こそ御笑ひの種と存じ候もはや肥料は此の上與へたまふには及び申さず唯土の色乾き候を見て水注ぎたまはゞ此の月の末ごろまでは咲き續きて朝の御目覺めを慰めんかと存じ候鉢數はまだ澤山これあり候間、御氣に召さばまた差上申すべき候かしこ



歸省

樂しき暑中休暇は來りぬ。明日こそ塵の都を去りて青山白水のわが故郷に歸るよと思へば、短き夏の夜も長きこゝちしぬ。

夜をこめて起き出で、朝餉もそこ〳〵に濟ませて停車場へと急ぐ。切符買ひて汽車中の人となれば幾十里の山河は轉瞬の間に過ぎ去りて、其の日の午後には、はや、わが家を距る一里餘なる停車場に着きぬ。去年は、唯一軒の茶店のみ物寂しげなりしを、一年の間に何〻運送店などいふ看版懸けたる家など多く立ち並び、人力車の帳場さへ出來て小市街の形をなす。山手には何の製造所にや赤煉瓦

の烟突も見ゆ。

こゝより我が家まで歩まんはいと易きけれど、手荷物などあれば車に乗りて稲葉靑みわたれる野道を行く車夫の歩みいと遅ければ今更に電車の利便を悟りながら進むほどに、やうやう我が村に近づきぬ。木立繁き中に我が家の屋根も白壁も見え初めぬ。中に田に降り立ちて稲の草取る村人は、物めづらしげに、わが車を眺めて、あれよ、何某の孃樣が東京より歸り來ませるなど語らふめり。やがて我車は我家の門前に止りぬ。

聲聞きつけて小妹小弟は逸早く駈け出で來て、あれ姉樣がといひつゝ、また直に家へ駈け込む、われは車夫に手荷物運ばせて家に入り、車賃拂ふ間に、祖母君、父上、母上、皆出で來たまふ。妹と弟とは、われ劣らじと荷物を奥へ運ぶ。

どなた樣もお變りなくてと挨拶すれば、よくも歸りしよと慰めたまふ。言葉は短かけれど、情はいと長し心ばかりの手土産をそれ／＼捧げまゐらすに、皆手に取り、と見かう見て、珍らしきものをと限りなう、うち喜ばせたまふ。妹と弟とは、そを持ちて室内を駈けあるく。さぞ暑かりしならん、とにかく湯浴みせよと、のたまはせたまふ、御言葉に従ひ、汗と垢とを洗ひ落すまも、嬉しさに氣もいそ／＼として例になく早やたち出づ。これをと母上がとり出したまへる新調の浴衣身に輕く心地もすが／＼し

やがて一家團欒して夕餉の膳に向ふ。妹と弟とは互にわが側へ座らんとて爭ひはてしなければ、つひに左右へと定められていと滿足顔なるぞ愛らしゝ。今宵はわが歸宅を祝ひたまふ心にや御馳走いとさはなり。彼の寄宿舎の日數經たる野菜、骨多き小魚に比べて、よろづ新鮮なれば、味いと佳し。さるを今日は何となう嬉しさ胸にこみあげて多くはえ食べざりければ、父上、都の人はげに少食よと笑はせたまふ。

食事はてゝ後、皆ゝ縁側に端居す。けふは陰暦十五夜とて月光ことの外清ければ、軒端に岐阜提燈つりたるのみ。父上母上、かたみに學校の有樣、女學生の風儀など問はせたまふ。われは日ごろの手紙に漏れたるふしを詳に話しまゐらす中に時ゝ女學生言葉の雑りて、咎めやしたまはんかと幾度か冷汗かきたり。弟ははや厭きたりけむ、母上の膝を枕に居眠る。妹も眠氣なり。話しに聞きとれ居たまひし祖母上、此の時言葉挿みたまひて、御身の結へる髪は何といふ結ひ方ぞとわが髪つく／＼と見上げたまふ。われはこれぞ世にい

ふ庇髪に侍るといゝつげまつるに、母上あまりに恰好よくもあらず、明日は結ひ直して遣らんとほゝゑみたまふ。



けふは疲れつらん、話しは明日の事にして早く寝よかしと父上が促したまふにぞ、さらばといひながらも、またいつか話の緒の出で來て、いつ果つべしとも見えず。十二時ごろふしどに入りぬ。此の時月光ます〳〵清く蚊帳の中までもさしこみて、涼しさいはんかたなし。明日はいづこへ行かん、誰を訪はんなど思ひける中に、いつしか黒甜の郷に入りて、夢だにもなし

歸省中都に在る友の許へ

歸國後さつそく文して御機嫌伺ひまゐらすべきを何がさて一年目の珍客として、こゝにもかしこにも大もてにこれあり、けふは伯母、あすはいとこ、さては兄弟朋友と、往きもし來もして忙しき事にこれあり夜は十時より早くふしどに入りしことはこれなく候、それゆゑ心ならずも御不沙汰致し

候段いくへにも御ゆるし戴きたく候一と通りの訪問も濟みて今日は珍らしくも机にむかひ始めて我が身のやうな心地して落ちつき候に付此の文認めまゐらせ候日中の暑さは都會とも變るまじと存じ候へども、さすがに朝夕は涼しく朝戸あけて風そよぐ早稻田に露の玉散るけしきを眺め、夕暮の打水したる庭に床几おきて樹の間より出づる明月を迎ふるなど氣も清々として夏知らぬこゝち致し候あなた樣には昨日今日如何に渡らせたまふや。

庇髮海老茶袴は都の空とのみ思ひしに、草深き田舍へもはや此の風の流行致し居候て庇髮は、東京のそれよりも一しほ軒深きにはうち驚き申候ことし三月より程近き市街に郡立の高等女學校出來候て我が村より通學の生徒も十四五名はこれあり候とかにて、夕顏咲ける窓のほとりより横文字讀む聲、やさしき唱歌の音も漏れ聞え候て東京歸りの女學生もさまで肩身廣くは覺え申さず候。

やがて七夕盆踊りなどお知らせ申すべきことは澤山にこれあるべく候へどもとりあへず右迄申上候都の土用、さぞ暑く候はむ御身御大切にいたはらせたまふやう遙に祈り上候かしこ

夏の夕暮

晝の暑さも夕暮近うなりては、さすがに薄らぎ、夕風身に涼し。火ともさぬ間にと行水を濟ませ、夕餉を終へ、湯上り浴衣身に輕う着なして、花茣座敷き蚊遣り置たる縁側に端居すれば、氣も清々として、一日の暑さも疲れもとみに忘れ果つ。

打水したる庭のやう／＼薄暗くなりゆけば、夕顏の花のみ白く。木蔭の燈籠に火點したるはまたなく涼しく、二つ三つ螢の飛びゆくもをかし。

明き燈火は要なしとて軒に吊したる岐阜提燈の下に、父なる人が得意の謠曲を聲低く口すさみ給へば、子らは烟草盆の火にて花火線香など燃して樂しむ。やがて團々たる明月、東の空にさしのぼれば清光樹々の梢を照らしやがて疊の上にもさしこむ。げに夏の夜や

蚊をきづにして五百両といはまし。

行水の捨てところなし蟲の聲
涼しさのかたまりなれや夏の月
米洗ふ前を螢の二つ三つ

廻り燈籠

夏の夜の端居に晝の暑さはまだ消えやらず樹々の梢にそよとの風だになく、月はまだ上らぬに、縁先に懸けたる走馬燈のすら〳〵と廻轉するはいと興多きものなり。水草山水などの模様あるは涼しく、浮き世のさまを現はしたるはをかし。

忽にして紳士車を馳せ、忽にして軍人、馬を躍らす。丁稚は自轉車に乘りて急ぎ、犬は按摩を追ひて走る。巡査、宙を飛ぶが如くに馳せ行くは、火事かはた盜賊か、編笠被たる法界節はいかなる人の身の果やらん。馬は枚を啣めるにや嘶かず。犬は好餌に釣られしにや吠えず。車聲も靴聲も絃聲も聞えざれども、浮き世のさまは急忽に隱れ急忽に現れ、反復 循環 して止まず。かくて油竭き火消ゆれば、萬象皆消えて痕なし。

夙に興き夕に憩ひ、食ひては眠り、眠りては覺む、人は毎日同じき事を反復す。昨日の子供は今日の親、老いたる者死すれば幼き者生れ、新陳代謝、萬古渝ることなし。盛なる者は必ず衰へ、滿つる者は必ず缺く。積善の家には餘慶あり積惡の家には餘殃あり。戰爭の後には平和あり。平和の間にまた禍機を含む。一起一仆、前因後果、歷史は古今常に同じき事を反復す。されば人間萬事いづれか走馬燈ならざるべき。

日は東より現はれて西に沒し、また東に現はれ。月は盈つれば虧け、虧くればまた盈つ。春去れば夏來り、秋過ぐれば冬迎ふ。寒暑冷溫反復 循環 して變ることなし。されば宇宙もまた一の大なる走馬燈ならずや。唯其の仕掛の餘りに大にして、油竭き火消え萬象皆滅するは何れの時なるかを知るべからざるを以て、人は皆わが走馬燈中の幻影たることを悟らざるのみ。



支那の芝居見物

藤葉女史

私は此頃當地（大連）に參ッていろ〳〵と支那の風俗上の興味を感じました、中に就て最も奇異の感に堪へませんかつたのは支那の芝居で厶いました元より言葉も碌に知らず、劇の筋も判らぬながら後日話の種になりませうとおもつて一と幕覗いて見たので厶います

芝居小屋に這入る前から調子の馬鹿に高い胡弓の様な音のするものや、明笛の様なもの丶音やら、大鼓や拍子木の音が入りまぢつてドンチャン〳〵と、聞えて居たが木戸を這入つてからはまるで之等の音の爲めに耳は聾になりそうである。

芝居はもはや初まつて居るので何かわからぬが色〳〵の服裝をした男女が五六人舞臺に出て居る、まづ舞臺の有様を云ふと。

三間四方位い有りそうな一段と高い臺で前の方の兩角に丸い大きな柱が立つて居る、此柱は種々な色で塗つて粗末な彫刻などがしてあるが、正面から見る人には別に差支は無いけれ共横から見る人には時々邪魔になつて眼障りな事此上なしである。

舞臺の周圍には低い欄干が付いて居る、花道と云ふべきものは別に無く、舞臺の後方の左右に半間位の入口が有つて長い幕が下つて居るが役者の出入に幕引の者もなく自分で押のけて出たり、這入つたりする、此入口の上に一方に海市一方に蜃樓と云ふ文字が赤地の額に白で書いたものをかかげ、正面の一段高い所に古今奇鑑と赤地に墨で書いた大きな額がか丶げてある、之れが今日の芝居の藝題で有らう、其すぐ下に大きな姿見がかけてある、まづ舞臺の有様はこんなもので、夫れから吾々の眼に異様に見えるのは、舞臺には只

役者のみが登場する事では無くて、後の方一體には例の驚くべきはやし方が居る、先一番八ヶましいのが寺でよく使ふものゝ樣な金屬製の丸い盆の樣なものを左右の手に持つてたゝき合すので此樂器を持つたものが二人舞臺の左手の方に居る、其次ぎには木と木をつなぎ合せたものをたゝくもの、夫れから少し右の方に寄つて笛を吹くもの、其前方に胡弓を持つものと之れだけがはやし方で少しも休みなしに騷々しい音を立てるまた其上に拍子木を時々入れる、實に其八ヶ間敷い事見物同志の話聲が聞えない位は勿論の事肝腎の役者が何をしやべるのか、少しも分らない、之れでは特別の耳の構造を持たぬ限りは支那人にでもキット解らないにちがいない。

之れからが役者の批評であるが勿論言葉の解らない上に前に述べた樣な仕末で有るから事柄の解る筈も無いが、何でも自分の見たのは軍人の家に何處からか敵が攻めて來た處で、大將の家に急いで注進が來ると、其處で大將は大勢の家臣をつれて戰爭に行くのである扨忽にして兩軍がある處に會したつもり、次ぎに起る戰爭が又滑稽である、大將たるもの馬にも乘つて居ないのかと不思議に思ふと、手には先きの方に毛のついた鞭の樣なものを持つて居る、側の人に聞くと支那芝居には馬と云ふものは出ない、手に鞭を持つて居るのは馬に乘つたつもりなので有ると、其處で漸く合點が行つて先馬に乘つて居るものと想像して置く事にした。

兩方の大將は其脊に小さい三角形に龍の繡のしてある一方は赤地、一方は白地の小旗を四本ならべてさして居る、此兩軍の内で戰ふものは只大將だけで家臣は皆鎗や、太刀の樣なものを持つては居るが双方から一寸入り亂れては直に又兩方に分れて引込んでしまふと一番あとに大將同志が各々獲物を振つて日本の芝居でもよくする試合の樣な事をするが、何方が勝つのか、負けるのか少しも分らない、先きに引込む方が負けなので有らふ。

此騷動が二度程舞臺から樂屋に出たり這入つたりし

て續いた後夫れがすむと、幕合もなく、裝飾附もなく只椅子を持ち出すとすぐに夫れが負けた方の大將の家で、婦人が小さな人形を抱いて一人出て來る、之れが其大將の妻で、大將と差向ひに椅子に腰かけてわからぬ問答が初まる、大將は身を振はして戰に負けて口惜しいと云ふ樣子、婦人は聲を擧げて泣き出した、併し情は少しもうつらない只ワイ〳〵とわめき立てるだけで、袖で以て淚をふくは好いが、其袖は顏から二三寸離れて居る、而して居る内に今度は婦人が大將の刀を拔いて自殺してしまふ、つまり自刎すると云ふ事がよく支那の書物に書いてあるが其樣子をするので一寸太刀で首を切るまねをして直に立つて樂屋に這入つてしまふ、其處で例の大將は大に奮慨して幼子を懷に入れて再び戰に出て終に勝利を得ると云ふのであるが、之れを日本の芝居になほしたら多少泣く處も、感ずる處も有るで有らふけれども之れでは寧ろ滑稽の感が起るばかりである。

第一切つても、突いても血も出なければ、死んだ人は悠々と平氣で歩いて引込む

顏は支那では何でも赤いのが一番好いとしてあると見えて無暗に頰を赤く彩つて而して光らして居るのでまるでうで、章魚の樣になつて今風呂から出たと云ふ顏つき。

眉は男は眉尻に行く程太くして殆ど眞直になる程逆立てゝ引く、夫れに五寸も有ろうと思はれる附髯を鼻の下に耳から釣つて居るので口は其下にかくれてしまふ、だから物を云ふ時にも口は少しも見へない、誰が物を云つて居るのか一寸分らない、併し此髯の無いものや、女が物を云ふ有樣は實に色消しである、何故なれば例の八ケ間敷い樂器に負けまいとして出來るだけ大きな、調子の高い聲を出すのであるからではあるが身振や、顏の造りこそ流石に女らしく優しげに見へても、物を云ふ時には出來るだけの大口をあけて、齒をむき出して、青筋立てゝ、しやべり立てるので實に愛相が盡きてしまふ。

今一つ愛相のつきる事は役者が舞臺で手鼻汁をかん

で居る事で此分では舞臺も定めしきたない事で有らふと思はれた、それも其筈で劇演最中に横から突然舞臺の眞中に小さな座蒲團の様なものを放り出した、如何するのかと見て居ると役者が跪く時に膝の下に敷くので之れでも如何に其邊のきたないかと云ふ事がわかる、夫からはやし方は勿論役者迄時々湯を呑む、熱いのを吹きながら呑むので其間は何となく間が拔けてしまふ、實につまらないもので役者が熱心になつてすると云ふ様な處は少しも無い



ので情はまるきり移つて居ないのみならず自分の用の無い時には自分勝手な事をして居ると云ふ有様であるから、見る方では只言葉が解らなくてつまらないと云ふばかりではなく、其身振りに表はすつまり表情に依つて動かされるなど〻云ふ事は少しも無いから趣味を感ずるとか、面白いとか云ふ感じはまづ自分には起らなかつた役者以外に役者の世話をするものが二三人ぶら〱ときたない着物を着て舞臺の端の方にうろついて居るのが眼ざはりになり、例の音樂(?)が耳ざはりになつ

て我々日本人には不快の感を與へ、もはや二度と見る氣にはなれない。

要するに看客側の方を見渡すと支那人ですらも左程感心して見て居る樣には思はれない

役者や舞臺の批評は之れ位にして今度は見物側の方を云ふと、場所は三等に分れて居る一等は兩側の二階で此處は日本のさじきに似て前に勾欄が有つて、人が一人通れる位の道をあけて七八寸位の巾の板が橫に長く渡してある、之れは丁度テーブルに當るべきもので之れに向つて腰掛とも云ふべき矢張り同じ位の巾の板が橫に渡してある、お客とお客とのしきりは一間半位置いては全く天井から板で隣との區分をしてあるけれども込んで來ると、遠慮なしに同じ、しきりの内に相客として這入つて來るのである。

二等席は日本の桝にあたる處で、此處には小さい四角なテーブルが幾干となく有つて其周圍に四角な木の椅子が置いてある、三等席は其兩側にある

一等と、三等とは只階上と、階下との差異だけの樣であるが夫れで一等は三十五錢、二等が二十五錢、三等が十五錢である。

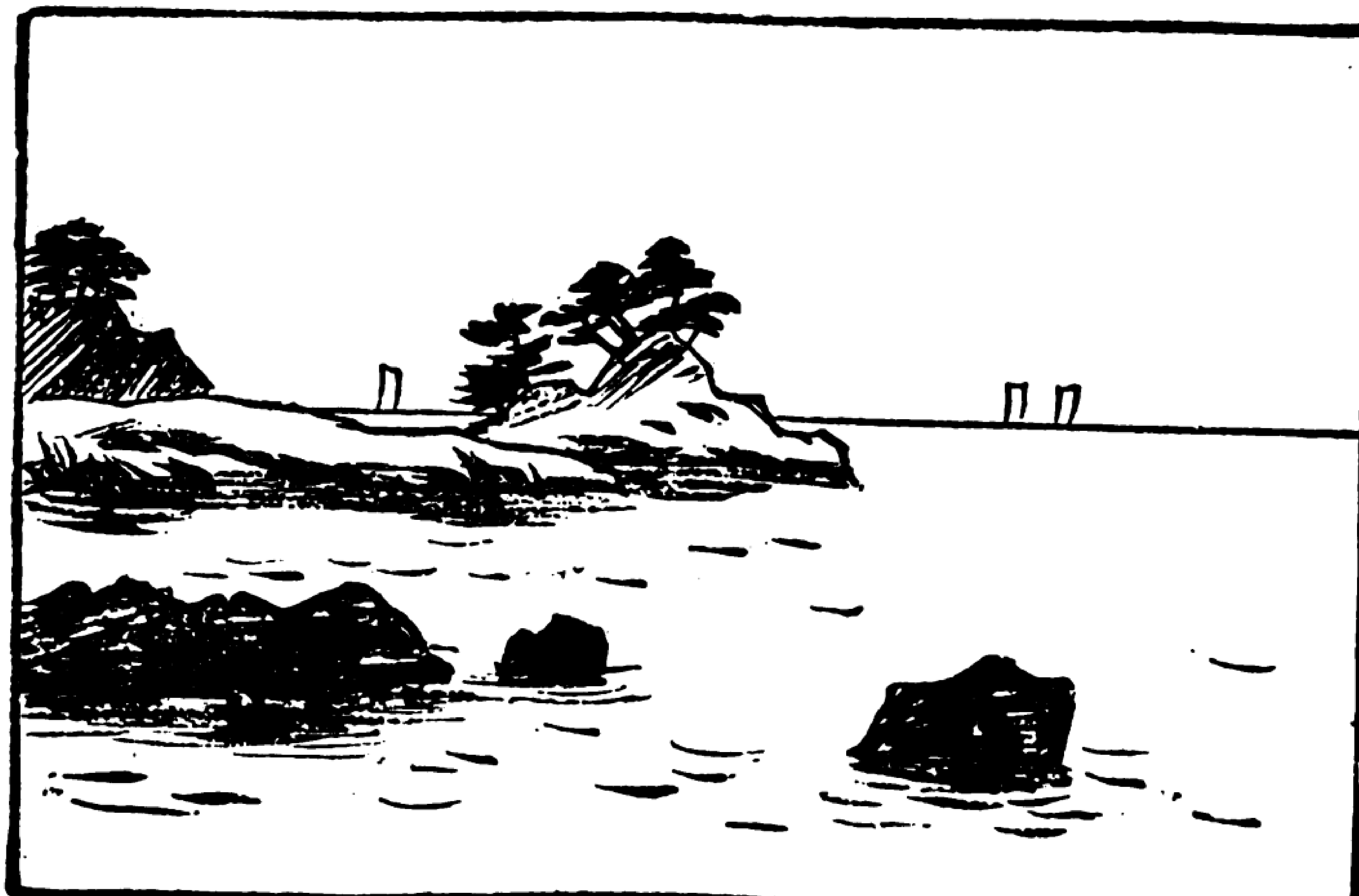
看客は勿論支那人が主であるが男子のみと云つても好い位で女は二人か、三人しか見えなかつた、二等席が一番見物人が多く、其テーブルの上には茶碗が備へ付けてある、茶は別に錢を出さなくても好いのらしいが何度でも注ぎにまいる、其他に西瓜の種子を油煎りにしたもの、密柑、駄菓子などを絶へず賣りに廻る。之等を大抵のものは買つてポチ〱と休みなしに皮を剝いてはかぢつて居る。而して茶を呑むと云ふ風で、半分は食べる方に氣を取られて居ると云ふ有樣

今一ッおかしいのは、ハンカチーフ位の大きさの西洋手拭を熱い湯で搾つたものを幾枚も〱重ねて持つてまはり、片端から一人々々に渡すと、夫れを受取つたものは直に帽子を取つて頭から顏から一面に拭く、然うすると其あとから又夫れを集めて廻るものが一々受取つて返る、又二十分間位もたつと搾り直して持つて廻る、定めし其手拭の鼠色になつて居るのを見ると

澤山の人の垢や、脂肪が一杯附いて居る事で有らふ、ポツ〳〵と湯氣が立つて居る位であるからバイキンは割合に少ないかも知らないが日本人にはとても氣味が惡くて持つて來ても使ふ氣にはなれない

斯樣なものを度々持ち廻る茶を注ぎ廻る、菓子を賣りに廻ると云ふ風に絶へず見物人の間を遠慮もなく廻つて歩く人が有るのでうるさくてたまらない

要するに支那の芝居は日本の乞食芝居よりも數等劣つて居る、成程衣裳などは上等な芝居小屋では立派なものを使ふかも知れないが、舞臺の装



飾と云ふものが少しも無い、椅子を出して後の方に三四尺巾位の布切を下げると直に夫れが座敷になる。

黒い五尺位の高さの幕の樣なものを二人の人が兩方から引張つて其後に椅子を置き、其上に人が乘つて半身だけ表はすと夫れが高い城から外に相手になる事になるのだ。

實に馬鹿氣て居てもう二度とあんなものは見に行くまいと思つた。併しある人の話ではあれでも見つけるとだん〳〵面白くなつて來ると云ふ事であるが何だか信じられない事である。

科學

かたつむりの話　荒川羽山

京都に平瀬與一郎と申す人がある生れは淡路で今から恰うど二十年前に一家を擧げて京都に移り、現今は烏丸通りの下長者町角に住んで居られるが、此方は日本には未だ類の多くない介類學者で介類に關した研究の廣い事と、其標本を多く持つて居る事とは世間に類のない位です一日此方を訪れ介類に關した色々な話を聞きましたが中に「かたつむり(蝸牛)」に關した話が誰にも判り易くて面白いから左に紹介致しませう

蝸牛の名稱

蝸牛は和名で加多都布利と申します、地方に依つてまい〳〵つぶろ(東京)やでん〳〵虫(京都)やだいろ(越後)めーめんちよ(甲斐)おば〳〵(下總)もーみ(伯耆)かた〳〵(土佐)などゝも申しまして目八譜と申す書籍には三十二計の稱呼を載せてあります

蝸牛の大さ

蝸牛は人の知る如く軟體動物中の有肺腹足類の一科であつて其種類は殆んど六千種にも上り、此外に旣に化石となつたものが五百種以上もあると云ふ事であります、此談話の話主なる前記平瀬氏の採集したものゝみで十七屬、二百六十七種の多類に及んで居つて此内平瀬氏自身に發見した者が百四十二種あるさうです。

大さは大は二寸位に及び、小は僅かに六厘位のものもある、肉眼では殆んど其形狀が辨じ兼ぬる程のものもあります、且つ螺塔が長圓錐形をなして居るものや丸で扁平になつて居るものもあつて左卷、右卷、毛生類無毛類、美麗なる、醜なる等其特色の異つて居る事は其種類の多い如く甚だしくあります、若し此異つて居る特色に就て一々學術的に話しますならば、其こと大部の一冊子が出來る位で、此には爲し得ぬ業でありますが只共通なる主點に就て申しますならば、左の各項に示す通りであつて眞に興味深いものであります

蝸牛の形狀

蝸牛の家は、螺旋狀の殼である事は誰も見て知つて居らるゝ通りである。此殼には蔕が附ふて無い、何時

も開放主義で體部は縮むれば全部を此殼中に收め得るやう出來て居るのであります。

頭には二對の觸角があつて上のが長く、下のが短かい、此角に關しては種々な話がある、莊子と云ふ支那の學者は觸氏と蠻氏との戰爭を冷評し、凡て小事に局齪して眼前の名利のみを追ふ小人の爭を蝸牛角上の爭と痛罵して居ります、又嵐雪と申す俳句の大家は

白つゆや角に目を持つかたつむり

など〻吐いて居る、まことに面白い句であります、右の通り蝸牛の目は上觸角の尖端にありますが此上觸角の右側の根基に近く兩性生殖器が一同に附いてあります、即ち蝸牛は雌雄同體であるのであります

生殖上の研究

生殖に關しましては、嘗てガスコインと云ふ介類學者が實驗した事實談があります

或時ガスコイン氏が一種の蝸牛を二年間程抽斗に蔵ひ込んで置き、更に他の抽斗にも同年限間を蔵ひ込んで置いた後で、水に浸しましたら蘇生つたから玻璃鐘の下に置き土壌と食物とを與へました處が六ヶ月を經た時三十餘個の幼蟲が内面を匍ふて居るのを見付けたと云ふ事であります、ソテ見ると蝸牛は一度受精すれば再び交尾せずとも、數年間は產卵の機能を減しないものと見へる

棲息の場所と其種類

蝸牛は日本全國至る處に棲んで居つて其種類も仲々多くありますが、實驗によればゆーろた(ゆーろてふ)いしみらりすはと稱するものが一番廣く棲んで居ると云ふ事であります、之は勿論小笠原、琉球、臺灣の諸島にも棲んで居りまして、斯く遠く離れて居れば自然に其種類を異にするが常なるに右二種のみは共通であるから奇妙であります、左巻のものは越後を中心として關東地方にも流行して居ります、此左右と申すのは臍を下にして頭を此方に向はした時見た形を云ふので其れが右であれば右巻と申します、關東でも武藏、安房の一部には左右巻兩種が雜居して居りまして、或學校の教員が生徒に、蝸牛は左巻であると話しました處が其後生徒の一人が右巻のものを見付けて來て教師に訊した處が教師も其返答に究したと云ふ笑談がありました、目八譜には左右の別は雌雄の別であらうと記され

てあるが勿論そんな區別の付べきものではありません

風土氣候上の關係

平瀨氏の現在所藏して居らるゝ左卷種は八種あるが其採集の經驗によれば、分布區域が甚だ狹くして其內のゆーろた、ぐらたなどの種は羽前西鄕に於て發見せるのみだと申して居られます、而して駿河以西には左卷は何種のものも產しないのであります、數年前平瀨氏は梅雨期にくゑした種の充分成育したものと不充分のものと打ち混じて五六百個程を生きた儘越後から取り寄せて庭內に飼養して居りましたが二年間に全部死滅してしまつたので駿河以西の風土氣候は此種に適して居らぬ事が判つたのであります、尤も濃飛地方及伊吹山附近には稀に此種が產して居ります

蝸牛の食料

蝸牛は植物や動物を食し嫩葉など殊に好む處であります、平瀨氏が三十七年二月中　江良部島からゆーろた、ですぺくたを紙に包んで送られたのを昨三十九年六月に發見し、水に浸して見ると暫時にして蘇生しました、之で見ると食無くとも久しきに堪ゆるものである事が判ります、

蝸牛を食物にするのは歐羅巴殊に佛國などで流行して居る事は時々雜誌などに散見する處であります、日本でも怯弱な小兒の藥だとか申して乾燥したものを煎じて飲せる處もあります、其効果して如何のものにや

共食種

蝸牛の食物に就ては前項にも記しましたが、肉食の蝸牛の內には共食するものがあります、ピンナー氏は此種を利用して、殼內から肉の出にくいものを取らして居ると云ふ話がある

蝸牛に關する實驗

其他蝸牛に關しては色々面白い話があります、先つ蝸牛の働き時でありますが、之は夜分でありまして凡て蝸牛は晝は休息し、夜になると働き出して食をあさる、其範圍はなか〳〵廣いものであります、曾て平瀨氏の採集人が某所で多くを採集し夜に入つて眠りましたが不覺にも採集箱の蓋をシッカリ〆て置かなかつた爲め夜中悉く匍ひ出して一疋も殘つて居らず天井や壁間から少しは見付けたが他は逃られてしまつたと云ふ事でした

市中看護婦隊の話

醫學士　兒玉修治

兒玉氏は數年前歐米に留學し去月中歸朝されたる人にて左は其土産談なり(記者)

▲細民窟の恩人

私が英米に滯在中これぞと別段珍らしく思つた事は見ませんでしたが、唯だ他國に類がなく加之慈善的事業として深く感服したのは米國に於る巡視看護婦隊であります、少し大い同國の都市を徘徊すると雨の日風の日を問はず、其邊に必ず、手に小き手鞄を提げた黑服の婦人隊が、如何にも忙しげに市中の最も憐むべき貧民窟を見舞ふのに遭逅ます、それが即ち近年組織された慈善看護婦隊と女醫とである。而して此婦人團體は普通の看護婦と全く其趣きを異にし、若し市民中で病氣になつたり負傷したりした者の生じた場合には、恰も消防夫が火を見て驅附ける樣に進んで其難に趣き、親切に治療と看護を施すのみならず、毎日細民の家を態々訪ねて病者のあると無しとに論なく、懇々と衛生上の注意を與へて歩くのですから、貧民の衛生思想が大に發達すると共に傳染病其他の惡疾も漸次減少するに至りました、去れば細民窟では我等の救世主又は恩人と稱して敬慕し、今や大市府に於ては缺く可からざる社會的勢力となつて居ります。

▲看護隊の任務

そこで此團體の任務は如何なるものかと云ふに大凡四ケ條に別ちてあります。

一　醫師たるの任務
二　看護婦たるの任務
三　衛生上の教師たるの任務
四　檢病的任務

第一の場合を言へば、行路病人或は醫師の診察を乞ふ資力なき病人に對して藥品を供し、凡て公立の病院に於けると同じ手當を施す事、第二の場合は、貧民の

家に疾病負傷等の生じたる際に、其修得したる衛生上の智識と看護上の熟練とを以て病者を取扱ふのであるが、其親切なる事は富豪が大金を投じて雇ふたものよりも却て優つてをるとの事です。第三の場合は、單に病者傷者を救護するに止まらず、進んで其病人の家族にも看護上の教育を施すのである。第四の場合は、若し細民の居住する周圍に衛生上有害の物があると認むれば直に之を所轄官廳に報告するのである。

以上の如く彼等の任務は個人的ではありますが、一部の社會若くは個人に對して盡す處の眞情は到底他の慈善團體の企て及ぶところではありません。曾て數年前紐育の貧民窟に腸窒扶斯と肺結核とが大流行を極めました時、隊の本部では臨時に百餘名の特志隊を募りまして病者の家毎に一人宛晝夜附き切りのものを遣はし、病人の汚れ物まで洗濯してやるといふ程に心勞を盡しました結果漸次蔓莚を防いで二ケ月程の間に全く傳染病を驅逐したので、紐育市長は大にその勞を謝し、其會頭なるウキリアム男爵夫人に黄金の賞牌を贈りました、又一昨年の事ですがボストン府の或小學校に火災の起つた時、階下の生徒は逸早く逃出たけれど二階又は三階に居た生徒の中で烟に捲かれて逃後れた者が二十名もあり、何れも悲鳴をあげて救ひを求めて居る最中へ驅付けて來たのが約十四五名の看護婦隊であります、而して其一人なるカーレンと呼ぶ十九歳の美人は其繊弱い身にも關はらず、突如猛火の中へ驅上つて今や燒死せんとする少女を二人まで救ひ出しました、此美人も亦た大統領から褒狀と金牌とを得ましたが、總て彼等が公衆衛生其他社會に變事のある毎に盡瘁する功績と熱心とは實に夥しいものです。

▲視察眼

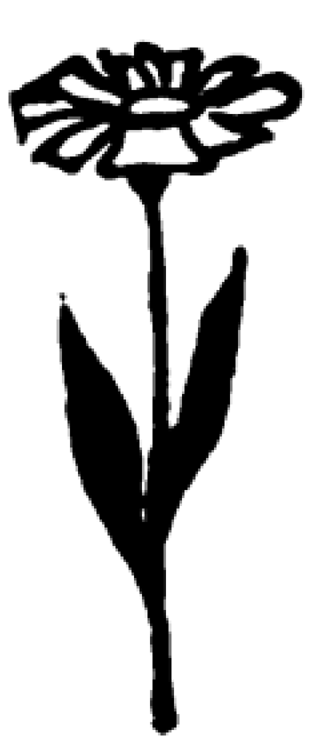
啻に以上の如き働きをなすのみならず、市の衛生官に與へた注意と功績とは非常なるものです、元來衛生官の眼中に映じない隱微の出來事でも此一隊の眼中には見認められる隱微の事は屢々あるといつて宜しい、そこで衛生官の知らざる不衛生の事柄があれば、彼等

は直ちに當局者に報告して注意を促すのであるから、看護婦隊は衞生官以上の視察眼を持つて居るものとして、上下一般の社會から大に尊重されて居ますで。此看護婦隊も現今では妙齢花の如き處女から六十以上の老媼に至るまで凡て信仰と慈惠とに固まつた特志の婦人が千餘人に及び、團體も各市を合して十數ヶ所に出來ましたが、先づ最初の成立から述べると、一千八百七十年に紐育傳道教會の婦人部によつて企られたのが抑もの原因で、今の名譽會頭ウキリアム夫人の主唱の下に、細民の疾苦を救はんとするには秩序的の團體が必要である、其に就ては慈善心に富んだ婦人達の力を藉りねばならぬと云ふので、各地を奔走した結果最初二十人程の同志を得て貧民救済會たるものを組織しました、而して其主旨は、『細民は病氣に罹つても病院へ入院するなどは容易に出來ぬのみならず普通の醫師にさへ診り得ぬ者が多くある、然すれば獨り其人の不幸ばかりでなく公衆の爲にも宜しくない、殊に傳染病者など若し隱蔽でもされた日には怖るべき害毒を流すのであるから、之は一々看護婦を派遣した方が一般の爲に利益である。』と云ふ樣な事でありました。



▲貴婦人の巡視隊

貧民救濟會が組織された當時はウキリアム夫人をはじめ二十餘人の特志婦人が、各々醵金して數十名の看護婦を雇入るゝと共に、日々各所の貧民窟を戸毎に見舞はしめ、窮民には金品を惠み、重病者は病院へ收容せしむるといふ有樣であつたが、何分にも限りある經費に多數の貧民だから遂には世間から寄附金を仰がねばならぬ始末になりましたけれども、それでは會の精神に戻るといふので、先に雇ふたのを悉く解雇して更めて會員自身が看護婦となつて貧民窟を訪問する事に決議しました、同時に男爵夫人、伯爵夫人上流の貴婦人達が精々と看護學を修めて、何か係か一人前の術が出來る樣になると、羅綾の服を粗末な黑服に被替て細民窟の軒別訪問を初めました。そして穢い、惡臭を放つ樣な裏店でも何でも病人があれば、そこへ附ききりで、體温や呼吸を計るとか、脉搏を數へるとか繃帶をさせ入浴をさせ、寢臺を掃除し食物を給する、病室を清める、それは／＼中々の世話で、大層世間の好評を博すると共に、貧民からは神の如く崇められました、併しそれには滿足せず、一千八百八十六年にボストン府で總會を開いた時『人を看護するは我等の責任なれど、其を受くる人民が衛生法を解せざれば未だ我等の任務は完成したとは云ひ難い、故に爾後看護に加ふるに一般細民に衛生上の敎育を施すにあり』と決議し先の貧民救濟會を巡視看護婦隊と改名して大に活動し出しました。其後ボストンと費府とに同一主義のものが組織せられ、更に千九百年以後に至つて各所に此團體が設けられて今では合衆國至る處の都會に之を見ざるなき有樣で、其爲め細民等は大助かりである、希くは我邦の婦人中にもウキリアム夫人の如き特志家があつて此種の慈善隊を組織されたいものであります。





女代診（其十）

糸左近

産婦の心得

▲女の一大事とは何か＝と問ふ者あらば誰しも出産であると必ず答へらるゝに相違無い然り出産である、嫁に行くと云ふも嫁を取ると云ふも皆出産の爲だと斷定しても可い位だ、此の出産あるが爲に億兆の民も生れ出で社會も有るのだ、されば女のみに限らず男に取つても女の出産は人生の一大事である然れども今爰に揭げた題の主意は斯る國家的を包含するのでは無くて極めて狹い意味の一大事を云ふのだ、抑々出産は女の生理的なるにも拘らず、往々之が爲に大疾病を醸したり或は一命を捨つるやうな厄難を來すことは珍らしく無い、故に「女の大厄は産だ」とか「案ずるよりも生むが易い」などいふやうな諺もあるのだ、これ一大事の一大事たる所以である、けれども退いて考ふれば生理的の出産に疾病を醸したり、或は一命を取らるゝやうな事はある可き道理の無いので必竟これ有るは三幅對の智識が乏しいからである。

▲三幅對の智識とは何か＝第一産婆の熟練第二産科醫の巧者、第三産婦及び家人の衞生思想に富む事である、此の三幅對さへ揃つて居れば決して大厄では無くて、平氣の平左で其日を待てば可いのである、然るに片山里であつたり又は或る事情の爲に舊式の産婆に罹つたり、専門醫ならぬ人に治療を乞ふたり或は産婦家人等の衞生思想が乏しいと飛でも無い事を惹起すのだ、併し今や醫學は駸々として進み、舊式の産婆は大抵此世を去つて了つたから、唯一幅だけの智識が要用なるのである、斯う申すと「産婆と醫師とさへ熟練ならば、産婦や家人は何うでも可からう、頻繁なる

世の中に出産の事まで研究してる暇は無い」と駁せらるゝかも知れぬけれども、家人等にして此の智識に暗ければ「無い事の有る事」といふ場合に泣いても追附かぬ悔がある、余は今其れを言ふのが今回の主意である。

△無い事の有る事とは――何時幾日頃が出産であらうと豫期し、前以て産婆に『何うか其折は宜敷願みます』『宜しう御座います夜々中でも飛んで參ります』と堅い約束をしておく、所が豫定より一週間も早まつて何と無く陣痛が附いて來る、『ア、最う生れさうだ、良人何うしたら宜う御座いませう』『下女の奴又道草を喰つてゐやがる、生憎なもんだ、チエッ己れが産婆を呼んで來る』『妾一人では困りますア、痛い生れさうだ』『御隣の奥様一寸來て下さあい』『オヤ生れた』オギヤ〳〵乃で髭武者先生隣の妻君に托して一生懸命に走る、所が産婆は留守だ、泣面に蜂で歸れば下女も歸つて居れど、皆々未經驗同志の寄合、マゴ〳〵するのみで何の役にも立たぬ、困るは産婦と赤ん坊、然う斯うする中に母子共非常なる迷惑を蒙つて色々の疾病に罹つたり、或は一命を危くするのだ、斯る場合は無いやうで往々有る事實だ、何うです讀者諸君以下述ぶる所の事柄を是非知つて居らねばなりますまい。

△産室の選定――臨月前になつたら豫て此處が出産場だといふ室を選ばねばならぬ、即ち可成南又は東に向ひたる六疊敷以上で清潔閑靜而も空氣の流通宜しく、且つ明るき室内が宜い、而して室内に必要ならざる器具雜品は悉く之を他室に移し、廣々清々としておき、産床は室の中央に設け、周圍に人の坐らるゝやう十分に開けておく可しである。

△産床の作方――産床は通常の敷蒲團を用ひ、若し其の蒲團が薄かつたら、二三枚も重ねておけば臥心地が宜い、蒲團の上は水が溢れても透らぬ桐油紙の様な物を敷き、更に其上に上敷を被ひ、上敷の四隅は布團と縫ひ合せ、脱れぬやうにしておく、尚其上に産婦のお臀や背の下に當る所には脱脂綿又は藁灰を入れて製したる褥をも設けておかねばならぬ、して又此褥は

排泄物の爲に汚れ、更に新らしき物と取換る必要が有るから、前以て其の候補者をも製へておくことが肝要だ、枕は硬からず且つ小さからざる「クヽリ枕」が宜い、倘、

▲出産時の必要品＝を列記すれば、

(一)剪刀。(二)臍帶を結紮る絲、之は太く軟かで切れ難き麻線樣の物。(三)驗温器二本、之は一は體温用一は浴用である。(四)百倍の石炭酸水二三升。(五)沃度仿謨。(六)ガーゼ。(七)脫脂綿。(八)繃帶、一は丁字帶、一は腹繃帶、一は臍繃帶。(九)金盥四個。(十)便器。(十一)亞麻仁油紙十枚。(十二)良質の石鹼。(十三)後産排泄物の容器。(十四)良好なる葡萄酒。(十五)石炭酸華攝林。

の類だ以上は産婆の携帶す可きもので、憖ひ素人の取扱ふ可き譯では無いが、前述の如く「無い事の有る事」の場合あれば衞生



を重んずる者は是非貯へおいて其用を待つが可い、之あれば産婆も持参する必要無くて、雙方便利である。

▲陣痛附いたら何うする――先づ産婦を産床に臥かしめ、一刻も早く産婆を迎ふ可きだが、一方にはドン〳〵湯を沸し、使用す可き器物類を適當に配置する、即ち溫湯の手桶、冷水の手桶（之には柄杓を附ける）赤ん坊の浴みする盥、手等を洗滌消毒す可き金盥四個、一は淸水二は溫湯を盛るもの、三及四は消毒液を盛るもの。而して鋏、臍帶の絲は消毒液中に浸しておき、石鹼及び淸潔なる手拭。ガーゼ。沃度仿謨。赤坊の着物。冬ならば二三の湯タンポ。産婦の飲用食物例へば牛乳鷄卵葡萄酒等の如きを取揃へ。無用の人や子供は一切室内に入れず、産婦には便器を以て大小便を排泄せしめ、櫛、笄、簪等は取り去り、尙カモジを入れてる人ならば之をも取つて髪を束ね、其他若し入齒あらば之をも脱し置くが可い。斯く何時でも差支無いと云ふやうにしてると、轆々車の音、さア産婆の入來『何うぞ宜しく願ひます』『マア御素人にしては能く整頓してること』斯う賞めてくれるに違ひ無い、而して後は凡て産婆の指揮に從ひ、醫者を招けと言へば『ハイ』之を買へと言へば『ハイ』何事も背いてはならぬ。又此際大に注意す可きは、

▲良人は在宅せよ――の一事だ良人は貴賤貧富に拘らず、使にも出ず産室にも入らず、次の室にゐて色々の世話をなすか、又は多勢の人の居る家ならば何も爲さずに煙草でも吸つてるが可い、煙草吸つてる位なら居らずもがなと思はるゝ方もあらうけれど、決して然うでは無い、良人の家に居るといふ事は産婦の身に取つて千萬人の醫者が保護してるよりも心強いものだ、心強きは頓て安産する一つの道だ、之に附けても夫の出征中に出産したる夫人の心根思ひ遣られて、余は此の原稿を書く時に思はず落涙したである。其れは扨置斯樣に準備してるけれど、産婆は金屬性の物では無いから急病又は留守等で間に合はず、又他の

▲産婆も來らぬ前に生れさうな或は生れたら何うする――家人たる者は先づ襷掛になつて其

手を石鹸を附けて洗ひ、更に石炭酸水にて消毒し、産婦の外陰部は矢張石炭酸水に浸したる「ガーゼ」にて能く拭ひ清め、段々生れさうになつて來たら、産婦をして口を閉ざゝしめ、手には適當なる支持を與へ、足にも物を支へしめてウーンと力を入れしむ可し、併し之は痛む時に乘じてのみ行はせるので痛みの歇んでる時は可成行はしめぬが宜い、痛みの無い時に力を入るゝは勞して効無きのみならず却つて疲勞を招き甚だ害あるものである、而して産婦の仰臥してる時は臀部に枕を入れ、横臥してる折は兩腿の間に枕を挿まねばならぬ。斯の如くにしてオギャーと産れたる場合には、其赤ん坊を溫めたる布片を以て其の全身を包み、顏面だけを露はし置く可し。



▲後産期

――赤ん坊が産れて後、子宮の收縮が漸く始まり、尋で臍帶の脈搏全く絶えたるときは、小兒と胎盤とを連絡せる所の臍帶を離斷せねばならぬ、其の方法を名づけて臍帶截離法と云ふ。

▲臍帶截離法＝赤坊の全く產れて了つてから臍帶の脈搏の止むまでは赤坊は尙母體から幾らかの血を受取つてるものであるから臍帶を截るは脈搏の絕えたる後に行はねばならぬ。乃で長さ三十仙迷許の臍帶結紮絲を取つて赤坊の腹を去ること大凡二寸位の部に一つの二重結節を作つて固く之を結紮り、更に此の塲所より二乃至三仙迷を隔てたる部分に前と同一なる第二の結紮を爲し、而して兩者の間に就いて剪刀を用ゐ之を截り離す、截り離し終れば赤坊は溫かく包みたる儘で傍に置くか或は手助する婦人の手に渡すも可い。斯くして赤坊の娩出後數分時間經つと、後產期の陣痛が起つて、後產を脫離するものである、脫離したる胎盤の陰裂間に現はれたるを認むる時は消毒したる兩手を以て之を取り、徐々と引出し之を胎盤容器に納む可し。

▲出產後の母體を何うする＝產婦旣に後產を了つてからは其の臀下に在る所の、汚れたる褥を除き去つて、新らしいのを敷き代へねばならぬ、けれど、此際產婦は可成靜かに臀部を擡げるやうにし、決して强く體を動かしてはならぬ、之より產婦をして仰臥せしめたる儘で、其脚を左右に開かしめ、陰部に損傷塲所無きかを確め、若し損傷有つたら勿論醫療を乞ふ可きではあるが、其までの手當として例の石炭酸水を以て洗ひ、沃度仿謨を撒布したるガーゼを貼て、其上に亞麻仁油紙を被ひ、丁字形繃帶即ち越中褌樣の物で繃帶し、且つ其の腹部にも同じく綿を當てゝ腹帶を施しておくが何よりの肝要だ。之が終ると大抵產婦は眠を催すものであるから四邊を靜かにし、暫らく安眠を取らしむるが可い、但し睡眠中は顏色其他の狀態に注意して異變無きかに氣を附けて居らねばならぬ。

▲分娩後の飲食物＝分娩後產婦の飲食物を欲するときは牛乳鷄卵ソップ或は一旦沸したる水又は粥汁を與へても差支無い。

▲產婦が眩暈を起したら何うする＝少量即ち十瓦程の葡萄酒に水を割りて與へ顏には冷水を噴く可し。

▲産婦の悪寒を覺ゆる時――は餘り夜具を多く重襲させずに可成重からぬ毛布の類を被ひ足元に二三の湯タンポを入るゝが宜い。

▲赤兒は何う處置する――疑人も手助する者有る場合は、赤兒に直樣初湯を爲さしむる方が宜いのであるけれど、何事も一人で行らねばならぬ時は、産婦の處置を了つてから初浴を行ふより仕方が無い、即ち豫て用意し置きたる溫湯を盛りたる盥の許に小兒を携へ行き、浴用檢溫器を用ゐて湯加減を爲し、攝氏の三十五六度を標準とし、



之に小兒を兩手に載せて入れ、己れの前膊を枕せしめ、一手に支へ頸より上だけを湯より出すやうにし、先づ顔頭を洗ひ、次第に軀幹四肢に及ぶ可し、其の皮膚に附いてる汚物は石鹼又は卵黃を塗けて十分に洗ひ清め眼の周圍と口内には別に他の器に盛りたる所の溫湯で洗ひ、他の清潔なる布片にて拭ひ清めねばならぬ。淸め終れば湯より出し、乾いたる大きな西洋手拭を以て能く拭ひ、衣服の中に運び、更に臍帶の異常無きかを檢べ、若し結紮の弛み居る時或は解けてる時は更に結

紮り直し、其腹壁の附着部へ石炭酸和攝林を塗り、斷端には沃度仿謨を撒布し、臍綳帶にて之を包み、之を臍の附着部より左側へ横たへて腹壁上に置き綳帶を以て輕く其上を纏うておくのである。

△赤兒が不具であつたら何うする――赤兒に衣服を着せる前に、全身を隈無く檢べて見て肛門又は尿道の閉ぢてる等の不具ある點が有つたら直ちに產婦の良人に告げ、醫士の治療を乞はねばならぬ、さうで無いと、完全に育つ可き赤兒をして無慘な最後を遂げしむる樣な事がある、又之に就いて一大注意は此由を產婦に必ず〳〵告げてはならぬ一事である、然るに若しも產婦に知らしめたとせんか、さらでだに腦に異常を起したる產婦は忽ち人事不省になるやうな危險を招くものである、返す〳〵も出產の家は平和藹々たる趣が無くてはならぬ。

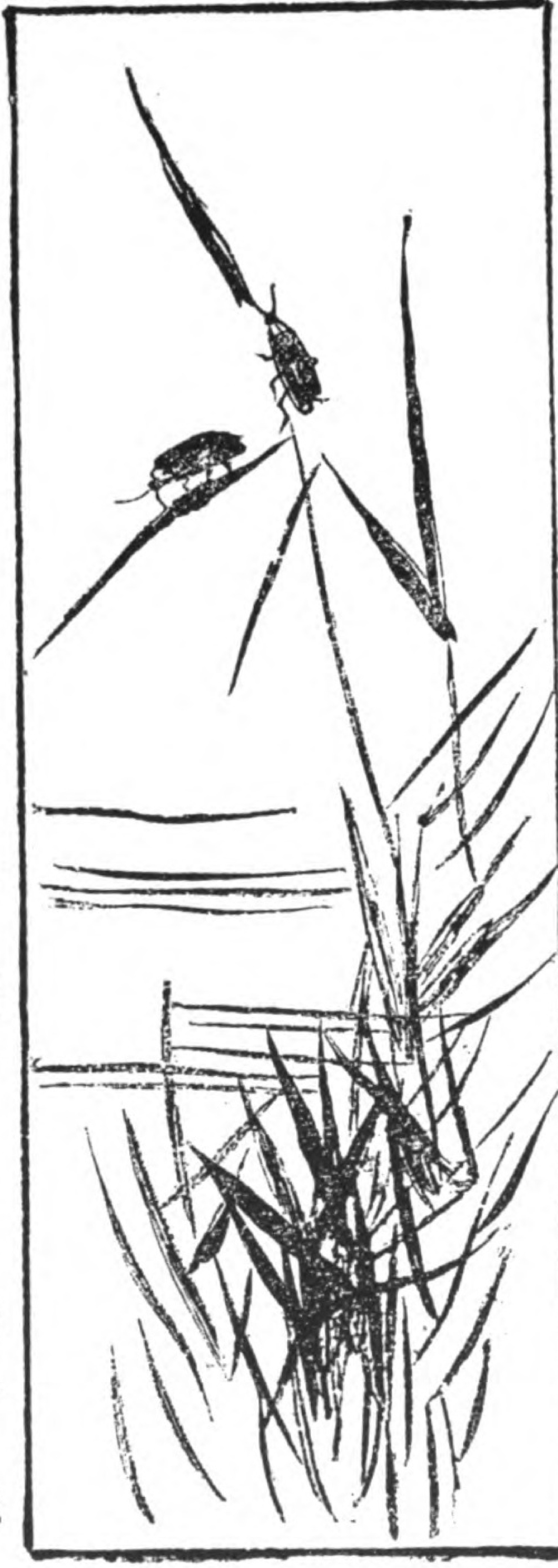
△產婦の眠覺めたる時――は更に外陰部を見て强き出血なきかを確め、產婦の求むると否とに拘らず、便器を以て大小便を洩さしめ、然る後更に石炭酸水に浸したる布片を以て能々拭ひ再び沃度仿謨を撒布したるガーゼを貼て、再び新らしき亞麻仁油紙及綿にて被ひ、以前の如く丁字帶を施しておくが肝要である。斯くして凡ての器物は取片づけ、汚れたる物は取纏めて他へ移し、分娩用の器物は清潔に消毒し、先々一安心、案ずるよりは產むが易い、と一家皆々喜んでる所へ『何うも遲なはりまして何とも申譯が御座いませぬ』と言ひながら入つて來たのは先約の他家を濟したる產婆である、『素人流に行つておきましたが、何分不行屆な所を御直し下さるやうに』產婆は取敢へず母子共一應取檢べて見て、『恐れ入りました之では黑人も跣足で御座います』めでたし〳〵〳〵。

季節衞生

季節衞生を書き初めましてから、滿一ヶ年になりますれば、昨年から續いて愛讀さるゝ御方は既に御承知でせうが、併し今年初めての新らしき讀者も居らるゝ

のみならず、其の説方も日進醫學の趨勢に驅られて多少添削或は改良したる點も有れば今年又更に繰返すことにしませう。

▲黴菌の種類――最早梅雨の節に迫り續いて夏向になると、言ふ迄も無く空氣の温度が高まつて來るから菌黴が次第に繁殖する、黴菌にも種類は有て大きく言ば虎列剌や窒扶斯の如き黴菌は身體に直樣害を及し又間接黴菌とて食物杯に附くと、先づ其の食物を腐敗せしめ、其腐敗した物を食すると、其の罰として急性胃腸加太兒を起す黴菌もある、夏向は右兩者何れも繁殖し易いとは申すもの丶、普通の年は其の間接軍のみ襲ふのである。乃て何うしたら此の敵を防がる丶かと申すに、一言に盡せば黴菌繁殖の源を絶つのである。



▲黴菌繁殖の源――は(一)氣温の高まる事(二)濕氣の有る事、(三)黴菌の養分有る事(四)日光の當らぬ事、此の四つである、金石は此の四つの中で水分も養分も無いから何萬年經つても腐敗せぬけれど、飯や肉は水分も養分等も甚だ富んでるから一日を越さぬ中に腐敗し始めるのだ。それから又其の物は腐敗せぬけれど、腐敗し易き物が附いて、其れが又人體に害をなすのも有る例へば汚き衣服夜具乃至は疊建具等の不潔な

る如きである。故に

▲黴菌の糧道を斷て――即ち右の元理元則に依て清潔を計るが最も肝要である、清潔は黴菌の糧道を絶たれたるが如しで、自然消滅に歸するものである、今清潔法の大要を箇條書にすれば、

一、一ヶ月に一度は疊建具から什器に至るまでを戸外に出して日光に曝すこと。

一、家の内外殊に床下を掃除し、生石灰を撒く事。

一、便所芥溜下水等を掃除し、其の周圍には同じく石灰又はアルボースを撒き、破損せるものは修復を加ふ可き事。

一、塵埃は東京等ならば塵埃屋に渡せばそれで可いが地方等では之を遠方へ持ち運びて、燒く可き事。

一、戸棚押入等の濕潤せる所は日光空氣を通じ、日光の通り難き所は火鉢を入れて乾燥せしむ可き事。

序に飲食物の注意もしておきますが、凡て能く煮燒したる而も新鮮なるを撰ぶ可きは勿論なれど、其の煮たての湯氣の立つてる物に直ぐ蓋をせぬといふ一事は夏の衛生に於て最も肝要である。飯に笊蓋をすると云ふも風通の宜い所に食物を置くと云ふも皆此の道理に依るのである。

尚申す可き事數多あれど、來月は色々の食物貯藏法衣服の洗濯法糊の附方、食當の豫防法療法等を悉く述べて今月の少きを埋合致しませう。

△忍耐は運命に勝つ
△明日爲すべきことは今日之を爲せ
△猶豫は時間の賊なり
△靜以て身を修め儉以て生を養ふ
△功詐は拙誠に如かず
△思ひ内にあれば色外にあらはる
△天道偏なし常に善人に與みす



衞生顧問

小兒科の部（來月より又婦人科へ戻る）

〔脳膜炎に就いて〕問 去月六歳なる女兒脳膜炎に相罹り、醫療も種々相盡し候へ共、遂に果敢無く此世を去り、悲歎の涙に暮れ居り候が、往きたる者は再び還らず、責めては殘る二人の子供をして健全に過させ度と存候、就ては脳膜炎の徴候及び應急の手當等御敎へ下され度願ひ上げ候。（博文館近藤婦）

答 能うこそ尋ねられたれ、十分に御同情申して少しく長くなれど、子を有たるゝ一般の親達の爲にもなれば詳しく御答へ申しませう。就ては學理的に言ふよりも、寧ろ實驗的に述ぶる方が素人方の爲に宜からうと思ふ。一昨年の暮私の長女四歳が何と無く食欲進まず、倦怠の模様にて常の如く遊戯もなさず、縱ひ遊戯をしても長く續かず、轉がつてのみ居たるが、頓て熱發三十九度流行性感冒にでもなつたのかと思つてると、約一週間色々治療を施せども依然として其熱去らざる揚句、突然四十度に上り嘔吐頻りに催して目も當てられぬ程慘酷である、是に於て余は始めて脳膜炎なることを確診し一刻も早く入院させる積りにて大學の小兒科へ伴れ行つた、擔任の醫士等は皆々口を揃へて『迚も助からぬ、之が素人の子ならば助からぬまでも入院させて出來る限りの治療も施して見るが、君は醫者では無いか、親たり醫者たる者が何ぞ他人に依賴するの必要あらん、晝夜ぶつ通しに手當を盡して見るさ』と是に於て余は成程と感じ、スゴ〳〵伴れ歸り、余等夫婦は三日三晩の間はマンジリともせずに治療兼看護したのである。乃で其の應急と手當及び治療の方法を云ふ前に、病狀は如何に進んだか記さう、嘔吐は二日の間暇無しに續きそれで咽は非常に渇き、飲む、吐く、

今にも息の絶えんずる有樣、便は秘結して熱は不正、
高低定り無きなり脈は其の初に百以上も搏つたれど次第に減じて
大小不正七十位になり眼は斜視の如き風をなし、瞳孔
は初め常よりも小さかつたのが後には散大して光線に
過ふも遲鈍になり、而して四肢を痙攣せしめて時々叫
ぶ樣は兩親をして忍び難きの感情に迫らしめ、其間我
等は幾度泣いたか覺えは無い。飜つて其の手當法を申
せば、第一に空氣の流通宜き室に臥かしめ、雨戶を閉
ぢて室內を暗くし、直ちに氷嚢三個を頭に充て、即ち
二つは頭の左右に一つは枕としたのである、斯くして
溫脚浴をなさしめ、灌腸を行ひ、尙下劑として甘汞〇
〇〇五大學の處方には〇〇〇一であつたを投じ、勿論便は便器で取り、水
は求むるが儘に冷水に氷を浸したる物を少し宛飮まし
め、麻睡劑として、抱水コロラール一、〇ゴム漿五〇、
〇單舍一〇、〇水五〇〇右五回分服」の積りで先づ一
回分だけ服ませると、同じく嘔吐して又水を求める、
『さう水を飮んでは宜しく無いから暫く我慢せよ』と余
は次なる室へ行き、妻は一寸便所へ行きたる暇に例の

魔睡劑を自らガブ〱と悉く服んで了つた、『さア大變
何うなる事か、斯る大病人を一人放棄つて而も藥液を
其の側におくとは素人に對しても面目無き次第だ』と
悲歎の涙に咽んだが、當人はスャ〱睡りに就き、其
れより十二時間は呼べども答へず、身體を動かして呼
べばウンと答へて又睡る、之が素人の方ならば左程の
心配は無いかも知らねど、藪ながらも醫者で有つて見
ると『さア昏睡期を求めたやうなものだ、此儘心臟麻
痺して死ぬのだらう、今更吐劑を飮ませた所で徒らに
病人を苦しめるのみだ、如かず徐かに撫でゝ居れば幾
分麻痺を防がるゝかも知れぬ、今は自然に任せんには
と、然れど此間の心配は筆にも言葉にも盡されませぬ、
然う斯うしてゐる中に、十二時間經つと眼を開いて『お
母樣』と呼ぶ、其時の嬉さは又何とも形容は出來ませ
ぬ、併し本病者は昏睡の揚句即ち死前一時間程から輕
快を覺えて兩親と談話することの有るものなれば、素
人の方なら滿腔の喜を以て叫ばるゝかも知らねど、余
は倘安心が出來ぬから爰に於て冷牛乳と甚少量即

ち三、〇の赤葡萄酒に水一〇、〇を交へて與へた、所が命數の盡きなかつたものか、日に増し輕快を覺へ、一ケ月餘にてし心身共に何の異常も無く全快し、前に診察したる醫士の一人は實に不思議であると驚かれた位であつた。此の實驗談は甚だ長くなつたが、予を有たるゝ親達及び開業してゐらるゝ醫士諸君の爲にも聊か御參考にならうと自ら信ずるのである、尚終りに臨んで一言したきは溫脚浴である、中には醫者が溫脚浴を命じても兩親は唯藥々とばかり言つてゐて之を左程に貴重がらぬ方もあるが、決してさうでは無い、啻に本病のみならず小兒の熱病には是非實行して貰ひたい。

▲溫脚浴の方法――は少し深い桶に攝氏四十度位の溫湯を盛り、之に膝より以下を入れしめ其上に桐油紙を以て被ひ、又夜具を掛け、十分時乃至十五分時を經てから、乾きたる手拭を以て拭き取り、風の當らぬやうにしておくのである。

（夜啼の療法）長男六歳は就寢後二時間程經つと眼を覺して啼き出し、如何に慰めても聞き入れず、斯すること約三十分時間にして又眠りに就きます、それが毎晩續いたり、又一週間も無いこともあります、身體は別に異常有りませぬやうですが、何卒之を止める療法を御敎へ下され。（新深なるＧＫ母）

答 異常無きやうにあつても或は腦胃腸或は心臓等に故障無きか今一應醫士の診察を受けられ、故障あらば先づ其の方より治療致さるゝこと肝要である。其他小兒の精神を感動或は恐怖せしむ可き事柄例へば嚴酷なる訓戒或は恐ろしき妖怪談或は慘酷なる圖畵の如きを禁じ食物の攝生を嚴重にし、藥劑としては左の處方を御參考までに記しておく、醫士監督の許に御試みあれよ、

鹽酸規尼涅〇、一　臭剝〇、三　甘草末適宜

右丸と爲し、臨臥頓服（但し六歳と見做しての分量）

（吃吶に就いて）問 長男八歳は昨月より不圖言語吃り、何と無く活潑ならぬやう相成り、心配罷在候が、如何致して宜しくや、前途の處置法を御示敎下され度切に願ひ上げ候。（信州深山の心配女）

【答】教育の過重嚴重なる訓戒朋友等に打擲せられたる事、試驗の落第或は親に別れたる等の悲哀驚怖が子供ながらにも心配になつて、爲に吃吶になることがある、若し其等の原因一つでも有らば之を除くやうにし、吃吶を眞似し或は笑ふやうな小兒とは交らしめず、務めて愉快に運動せしむるやう工夫し、次第〳〵に發語の演習を試みられよ、返す〳〵も當分の中は意見がましき事は必ず爲さらぬが宜い。

〔小兒の胃擴張〕【問】二男七歳は昨年より腹部非常に膨れ別に困苦の狀態も見えませぬけれど、心配の儘醫士の診察を受け候處胃擴張との事、其後療治を續け居り候へ共、今に効無く候が、何卒其の療法を御示教に預り度候。（日向の氣掛女）

【答】療法としては、先づ第一に藥劑であるが、之は素人療法の出來るものでも無く、又御地の醫士は既に用ゐ居らるゝことなれば、之を略し、其の攝生法に就いて申しませう、乃ち一般に飮食の料を減じ、殊に脂肪及び野菜類を可成取らしめぬことゝし、淡泊なる消化し易き滋養品を與へて之を挽回す可し、元來本病は左程食欲の缺乏せぬものなれば、一般の飮食物を控目にすると、仲々五月蠅く請求するものである、併し此際、兩親たる者は「小人ノ如レ愛レ子惡也君子如レ惡レ子愛也」の一語を是非味はつて頂きたいものである。

〔小兒の身長體重〕【問】滿五歳の娘と滿七歳の長男との二人居り候が、何れも人並より小形に候、普通の身長及び體重は何程に候や御教示を仰ぎ度候。（富士山麓の三保松女）

【答】文部省及び三島博士の調査に依ると、左の通である。

	身長		體重	
	男	女	男	女
五年	九七・四仙	九六・五仙	一四〇〇〇瓦	一四〇〇〇瓦
七年	一〇八・三仙	一〇七・二仙	一七五〇〇瓦	一六八〇〇瓦

仙に$\frac{1}{3}$を、瓦に$\frac{4}{15}$を乘ずれば我國の尺及匁に換算するる得。

〔小兒の喰初及び離乳時〕【問】小兒は何時頃食事を取り初め候て宜敷や、又眞の離乳は何時頃が適當に候や伺

度候。（赤坂のKO女）

答眞に有益なる質問である、喜んで答へませう、喰初及離乳に就ては東西の諸家先輩は各意見を異にしてゐる、ビーデルトは七ヶ月、ウッフエルマンは十ヶ月、バキンスキーは九ヶ月、エスピーヌピコーは小兒體重の增加すること緩慢になるを見て喰初とし、我國では大抵門齒發生を以て初めとし、又小笠原流の禮式には生後二百二十日を以て喰初とす。眞の乳離は之れ亦諸家の說一ならざるが西洋では生後十ヶ月乃至十二ヶ月、我國では甚だ遲く、二歲乃至五歲甚しきは再び懷姙する時まで、若し懷姙せねば七八歲まで嘗めさせてる習慣がある、乃で余は思ふに、西洋はいざ知らず、我國では生後七ヶ月位から極めて徐々に(一)牛乳(二)ソツプ(三)粥汁(四)水飴(五)半熟卵(六)粥(七)刺身といふ如き順序で與へ、若し此の喰初めが炎署の時期に當つてゐたら之を延期し眞の離乳は體質の强弱にも依れど十八ヶ月位が適度であらう、某博士は一ヶ年で宜なりと言はるゝが、實際行はれず、余の長女なども、余は一ヶ年半で止めしめんと思ふたれど、當人よりも母親の方が可愛さうだと淚を出してゐる、余も亦意志の弱い人間で遂々足掛四年の間嘗めさせました。

（嬰兒の涕泣）問赤兒の泣くは却つて衛生の爲に宜しと申さるゝ方も有之候へ共、餘り酷く泣く時は何と無く心配になり、つひ〳〵哺乳せしむるやうに相成候が。如何心得て宜しく候や、伺度候。（加賀の子煩惱女）

答泣方に就いて色々に形容したる文句を並べてさも診斷上價値あるものゝ如くに說いてる醫士も有るが余の經驗及び先輩の說に從へば之に依て確實なる判斷を下さるゝものに非ず、唯餘り强く泣く時は身體の諸部に蟲或は針の如き物でも無きかを調べるが必要である、其他斷嗄れてゐたら、氣管に故障あり、又急劇に泣いて下肢を腹の方へ牽くやうにしたら腹痛なり、其他大抵は之が爲に深呼吸を營み、所謂衛生上の利益となる者だと心得其度每に哺乳せしめては勿論害となります

（小兒の癡呆症）問長男八歲は身體の發育等は普通にして、又左したる病氣も無之候へども、精神の發達甚

だ遲く、白痴とまでには候はずも、他の同年小兒と比べては非常なる差ありて「四つを二人に分ければ幾つか」の問にさへ答ふる能はずゝ實に親の情として涙の種に候が、何とか治療の見込無きものに候や。（牛込の名避女）

答それは醫道で所謂小兒癡呆症と申すものでせう、普通の醫療とては無し、瘋癲病院長吳博士の診療を請うて御覽じませ。

恐るべき小兒病

▲毎年梅雨前後には腦膜炎と腸カタルを併發したる樣の症狀を呈する疫痢、俗にはやてと稱する激烈なる小兒病、流行する事なるが、該症は歐洲諸國にて濾泡性腸炎と稱する疾患が解剖上の變化、臨床上の徵候等酷似し居り三歳乃至十四五歳迄の小兒に多く大人に少なく最初は腸の一部に一種の黴菌を生じ血を交へたる下痢を起し其毒の全身に傳派し四十度内外の高熱を發し狂の如く苦悶し譫語を吐き遂に心臓に麻痺を起して斃るゝに至るものにて激しきは八九時間乃至十二三時間に斃るもあり最も激しきものは腦を冒されたる後に下痢を起すものありて是等は最も短時間に死亡するものなるが下痢を起すのみにて腦を冒されざる塲合もあり是等は輕症者なれば大抵二三周間にて全癒すれど總て短時間に斃るゝもゝ多く從來熊本地方名古屋界隈には著しく發生し疫痢或ははやての名稱を生じたる者にて先年千葉にも十數人の患者を出し東京にても毎年一二人宛は該患者を發見しつゝあるよし。

▲該症と赤痢の差異、該症の症狀は前述の如くなれば多く腦膜炎或は赤痢と誤診さるゝ塲合あれど赤痢は粘液血便を泄出すれど該症は濃狀の血便にて血の交り居る量も少なく殊に泄出の度數も少なければ少しく注意せば其區別明瞭なるべく其病源は不消化の不良食物により腸に疾患を生ずるに起因すれば食物の注意肝要なるべし殊に日光に直射され身體の疲勞せる塲合に不良菓物或は氷、水等を多量に飮ましむる事抔は最も注意して避けしめざる可からざる事なりと。

▲病源と患者の消毒、該症は濾泡性腸炎に酷似すれど果して同症なるや否やは尙ほ研究中に屬すれど兎に角本年の如く氣候の模樣によれば續出すべき模樣もある事故其取締方並に消毒の設備も必要なるべしと最も從來の經驗によれば散發性のもの多く系統を追ひて傳染したるものを發見せざりき。

少女趣味

お轉婆日記

小式部

(五) 御祭典

私、昨晩は色々の用事で遲くまで起きて居ましたのだから日記は今朝書いて居るの、太陽が上りました、アラ兄さんは最う御出掛になるの、まあ私驚いて了ひますわ、兄さんは太陽が上つた事許氣にして居て、兄さんには唯つた一人の妹のきいちやんが何をして居るかも知らないで居るんですもの、何故兄さんは那麼に忙しいのだらう、私は今寢衣にインキを溢して無暗と紙で拭いて居るのです、だが兄さんは知らないで早く御出掛に成つて却つてよかつたの、併し母さんは這麼に敷物なんか汚したから叱るかもしれん、臥て居て日記なんか書くもんでないと思ひますわ。

私今日も種々の事をしなければならんが、昨日の午後は隨分忙しかつたの、其は料理番が歯が痛いと言ふて休んだから、私喜んで料理法を學ばうと思ひまして勝手に行きましたの、而して旨しい物を拵へやうと思つたの、幸ひ乳母は座敷の掃除、母さんはお縫物。姉さんは音樂の練習に夢中でしたから、私こつそりと勝手に這入つて大きな料理法の本を見ながら行つて見ましたの、私食麵包を拵らへた處が旨相に見えても砂糖を入れる事を忘れたもんですから甚く不味かつたの失敗つたと思ひましたから、之へ曹達を二食匙入れた所が無暗に大きく成りましたから、種々の交せ物を入れたのです、而して一生懸命に攪拌した處が膨れて來て方圖もなく溢れるのです、而してスープが餘り熱過るものですから、溢れたのがチリ〳〵燒けて可厭な臭がしたのです、で此の臭が家中に廣がつたものですから、母さんも姉さんも皆んな火事が起つたのか知らんと思ふて飛んで來ました、姉さんは、例の早口で『アラ雞卵が少く成つて了つたわ、今度の音樂會に玉子燒

を揃へて貴樣に御馳走しようと思つて居たのに困つて了ふわ、吉ちやん幾つ使つたの」て訊きましたから、私、二十一を一度、あと十と三つと八つと四度交せ物に使ひましたと御答しました所、姉さんは料理番を叱つて吉ちやんなんか勝手へ入れてはならないと言ひました、而して私に以來勝手へ這入つては不可ぬと命じました。

昨日の事で特に書いて置かなければならぬ事は御祭典の事です、姉さんは御友達の次郎さんが迎ひに來て二人で出掛ました、兄さんは祭典に集る孃さん方に御馳走すると仰有つて一人で出掛ました、跡から私も松江さんと二人で出掛ました所が、人が澤山出て黒山の樣でした、會堂には金谷の孃さんも居れば、兄さんも來て居ましたの、其内に大勢の人と一個の若い女の人と連つて來ました、此の女の人は人樣から氣取屋と云はれて居る人です、之を見て金谷の孃さんは何うした譯か顏色を變へました、而して何とも仰有いませんでした、私兄さんの側へ行きますと、此の若い女の人が「貴郎の御妹子の吉ちやんて此の方」つて聞きましたから、私「さうです、私が吉子と申します、而して貴孃の事もよく承知して居ります、貴孃は評判の氣取屋さんですね」と叮嚀に御挨拶しました、でも家で常に人樣に叮嚀にせよと言はれて居ますから、叮嚀にやりましたの、さうすると兄さんと此の女の人とは笑はなかつたが、他の人は皆んなクス〳〵笑ひましたの、而して此の女の人は恐い顏しましたの、兄さんは一つ咳拂をして「甲田さん、何卒氣に留めないで下さい、何處で那麼惡口を覺えたか、此子にも困つて了ふですよさア花でも見物しませう」と言ひましたの、だが甲田の孃さんは辭退して他の男の人と一緒に成つて了つて兄さんには一言も話しませんでした、金谷の孃さんも兄さんには何とも言ひませんの、而して不快な風でした、兄さんは詰らぬ樣な顏付をして居りました、兄さんは皆んなの孃さん達に御馳走しようと言ひましたが誰も御馳走に成らうと言ふものはなく、皆な斷りました、兄さんは魂消た樣な顏をして居ました、水菓子屋

を出して居る孃さん達は兄さんに買つて下さいとは言ひませんでした、私兄さんに買つて下さいつて強請つた時、皆賣約濟ですよと、兄さんは斷られました、だもんですから兄さんは一人坊ちに成て詰らな相な顏をして居ました。



一時間許經ちますと兄さんが些度外に出て呉れと言ひますから、私隨いて出ました所兄さんは「孃さん方が何故私を仲間外れにするかお前知つて居るの」と言ひますから私「何も兄さんを仲間外れには爲ないのよ」と言ひますと、「でも私が御馳走しようと言ふのに誰も承知せんもの」つて言ひましたから私「其なら私解つてよ、私皆さんに御願ひして置いたのよ、兄さんに奢らせてお金を使はせては不可ませんよつて御願ひして置きましたの、ねえ斯う御願ひした方が可いでせう、惡くつて」と聞きますと、兄さんは溜息して「お前は不善い子だ、人を困らせて許り居るではないか、嗚呼お前は一日の中に私が一ケ月もかゝつて行るよりも惡い事をする奴だ、お前の御蔭で金谷さんと私と

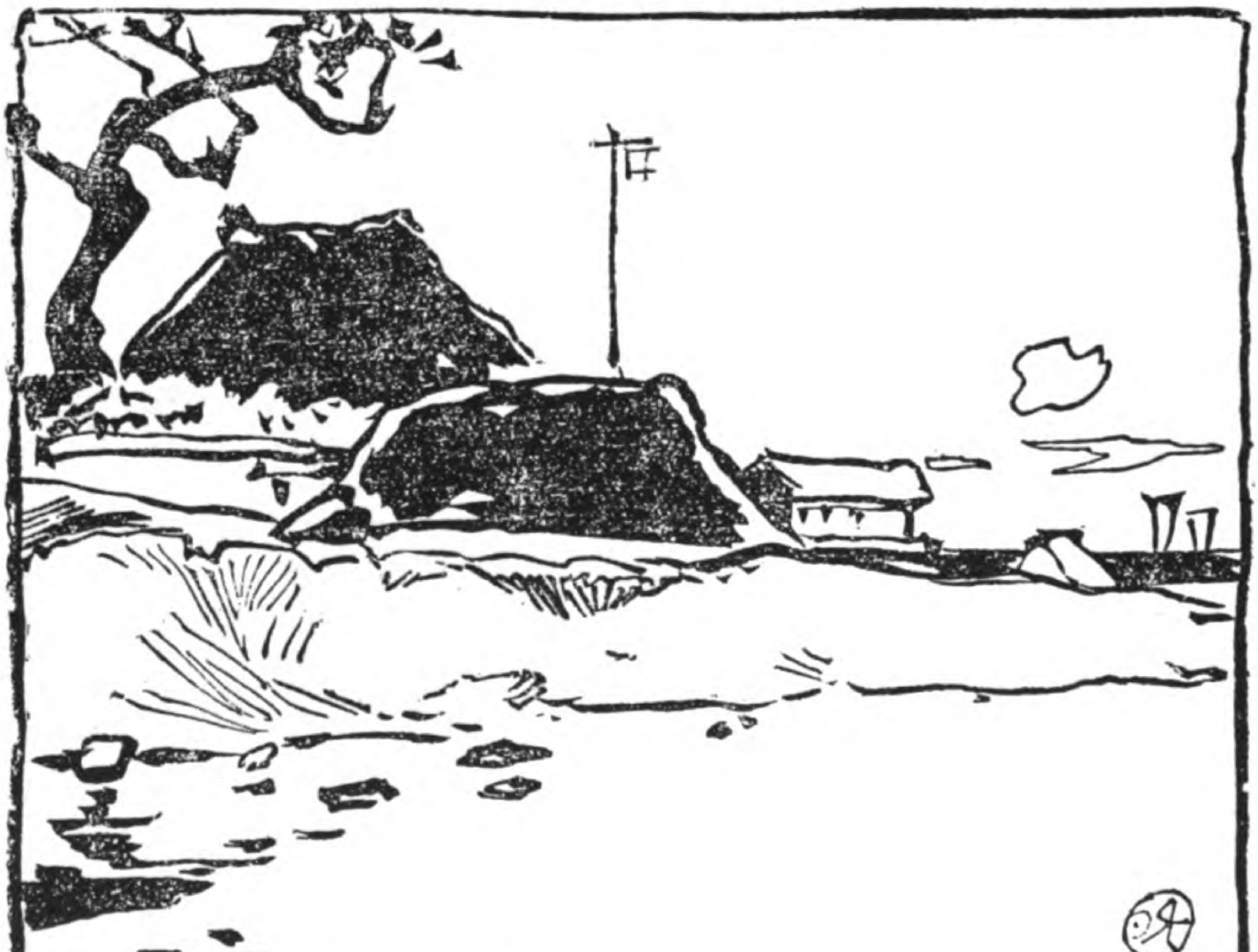
の仲も駄目になりさうだ、而して金谷さんは私には最う面會せんかも知れん、吉ちやん、お前が先刻甲田さんに言つた事は許してやるが、お前何か金谷さんに言つた事はない乎、私は全く失望して居るのだぞ」と言ふて哀し相に溜息を吐いて居ました、私何を金谷さんに言ふたやら分らぬ故一生懸命に考へて居る内に思出した事があつたの、其ではあるまいかと思ふて、私兄さんに言ひましたの「兄さん私も哀しく成りましたのでも兄さんは那麽に哀し相な風をなさるのですもの、私ね、二三日前に金谷さんの御宅に伺つた時に紙片を讀んで貰はうと思ふて、金谷さんに上げたの、其はね私ペン軸を拜借しようと思つて兄さんの机の中を捜した時に、書きかけの手紙が有つたの、其を金谷さんに上げたのよ、私其時は那麽に兄さんを困らせる事とは思はなかつたの、其手紙にはね「私の親愛なる親愛なる竹村孃よ、運命は恐しきものなるよ、人生は儘ならぬとは云ひながら、實に思ふ樣ならぬこそ哀しき極なれ、嗚呼察して賜べ、如何に吾は失望落膽して他と關係しつゝある事を悔いつゝあるかを、若し吾にして最初に孃を知るを得たりしならば、斯る苦は受けまじきものを、されど心長く待たれよ、吾は斷然他との關係を斷ち御身の……」つて書いてあつたのよ、だが兄さん何故親愛なんて云ふ字を二字も書いたの、而して此手紙にある關係つて何の事、何故兄さんは關係つて云ふ事御斷ちになるの、エ、兄さん何故那麽に哀しい顏をなさるの、金谷さんは此間手紙を見た時に言ひましたのよ（他と關係つて私の事だらうか知ら、いや併し）と言ひましたの、關係つて金谷さんの事、エ、兄さん仰有つて頂戴、でも私知りたいわ」

けれど兄さんは何にも答へて下さらず、默つて困つた樣な顏をして居ますので、私惡い事をしたと思ひましたの。

（十八）　花火の過失

オヤ〳〵私二三日日記をつけなかつたので、書くのが忙しいの、私武ちやんが始終言ふ樣に足で立つて居

るやら頭で立つて居るやら分りませんのよ、母さんは頭で立つ事なんか出來ないと仰有るが、私朝床の中で逆立する事が出來ますわ、武ちやんは私の事を男の子の友達として仲々よい人だと言ひますの、私は木登も出來ます、虫も掘ります、武ちやんの凧糸が紛糾つたのを直してもやります、武ちやんが忙しい時には武ちやんの道具箱を整理してもやります、花火を拵へる時にも御手傳が出來ますの、而して武ちやんが叱られる事を恐がつて御家に歸らないで御腹が減つた時には、私



お菓子だの色々の食物を上げます、昨夜の出來事なんぞ眞個に恐ろしい事でした私よくも燒死なゝかつたと思ふ位ですわ。

　其は斯うなんです、昨夕暗く成つて間も無い事でした、私が祖母さんの大事の眼鏡を踏み破した科によつて二階の部屋に閉籠められて窮屈な思ひを致して居りますと、武ちやんが私の處の庭にやつて來て、私を見上げて「何を爲て居るの、新築の家の前で花火を揚げたいが手傳つて呉ないかと言ひますから、「私外へ出られないの」つて言ひますと

武ちやんは階子を持て來て掛けて下すつたから、私直ぐに降りて了ひましたの、其から私と武ちやんと他の二三人の子供達とで、煙硝を山の樣に積んで火を點けては遊んで居ましたの。

　天氣の樣子が嵐にでもなりさうで、空は曇り、風は吹き始めました、けれども武ちやんは何とも思はずにマッチを摺つて焚き付けました所が熾んに燃え始めて私共大喜びでしたの「吉ちやん着物を燒くと不可いから御歸りなさい」と武ちやんは言ひました、其時恰度町の方から塵か風の爲めに捲くられて來て宛ら舞踏でもして居る樣でしたの、所が私共の火を吹捲り、大變に擴がつて了ひましたの、すると彼方からも此方からも人々が澤山やつて來る、其内に梵鐘は鳴り、喞筒はやつて來るといふ騷動に成りましたが、幸にも雨が烈しく降つて來ましたので、火は下火に成りました、其時阿父さんは私共を嚴く叱つた後で「十分間の雨がなければ町中燒けて了つたらう、一つ消防組位では七ケ所にも擴がつた火は迚も消せないのだが、雨の御蔭でよかつた」と仰有いました、だが幸にも新築中の家は一部分燒けた許しであるし、其他少しの損害で治つて何よりでした、是は武ちやんの惡いのぢやないのです全く風の爲です、でも武ちやんの阿父樣は武ちやんを叱らうとして居なさるの、武ちやんは逃げて田甫の枯草の中に匿れて了つたから好かつたのよ、私の家は、厩が燒けた丈で母屋は幸ひに助かりました、可哀相に祖母さんは驚いて御部屋に閉籠つて居ります、私御氣の毒でたまりません、祖母さんは私に「武ちやんとは餘まり遊ばぬようになさい」と仰有いましたから私「畏まりました」と御答したの、其から近所の人々は多勢して武ちやんを搜しに田甫の方へ出かけましたが、何うしても見付りませんでした。

　其より凡そ三時間程經つて私が寢ようと思つて居りますと、窓の外へ武ちやんが忍んで來て「吉ちやん、僕は今朝御飯を喰べたきりで御腹が減つて堪らないから、何か食物を下さい」つて宛で飢えてる犬の樣でしたの、而して武ちやんは目付かると不可ぬと思ふて低

い聲で、眞個に惡い事をしたと云ふ樣な風で言ひましたの「どうせ、阿父樣は家には入れまい、僕も亦た家に行かうとは思はんから、茲五六ヶ月は歸らないで、家の者が長く見付らなかつた子供を見たいと思ふ頃に成て歸れば、父樣も御打ちにはなるまい、だから僕年の暮に成て歸らうと思ひます、時に吉ちやん早く飛んで行つて麵麭とバタを持て來て下さいな私お腹の工合が變で仕方がないの、早くして下さい、ね、吉ちやん」て、だが私困つて了ひましたの、夏の事だから腐ると不可ぬと言ふて少しも殘物が無いのですもの、だが漸との事で戸棚の隅から麵麭だの、ヂャムだの、其から御菓子の瓶だのを搜し出しましたから、有る丈持つてつてやりましたの、武ちやんは手を合せて「難有う、這麼に喰物を頂けば最う大丈夫です、だ



が僕と茲で逢つた事を誰にも言はないと誓ひますか」と言ひますから、私は小指を鉤にして「私は武ちやんと逢つた事は何人にも言ひません」と言ふて誓ひました、さうしたら武ちやんは再び田甫の方へ去つて了ひました、大方今夜は枯草の中で寢るのでせう。

（七）海岸行

私と阿母さんとは明朝海岸の長濱に行く筈です、けれど母さんは私の行くのを反對なさるの、而して私が行くと費用が高まると仰有るのです、父さんは私が家に居ると却て費用が多くかゝるから連れて行けと仰有るのよ、祖母さんは私が行きたければ支障ない樣に費用など出して下さると仰有るの、祖母さんは眞個に善い人です、私祖母さんが一番好きですわ、だが姉さんは、祖母さんが餘まりお人好で吉ちやんを可愛がるから、吉ちやんは增長つて漸々惡くなる許しだ」と言ひましたの、だから私祖母さんに「貴女は御人好ですか」と伺つた所、誰が那麼事言ひますかつて仰有いましたから、姉さんですつて言ひましたの、左うすると祖母さんは「藤姉さんも憎らしい口を利く樣に成つた、そんな惡まれ口を言ふと御嫁に行く時に好い衣服を買つて上げない」と仰有いました、姉さんは其後私の事を密告者だつて呼びますの、私只だ祖母さんに御聞きして見た許しだのに、密告者だなんて言ふんですもの、私いやに成て了ふのよ、兄さんは氣候が餘り暑過るから吉ちやんも漸々黠く成るつて言ひました、武ちやんは一晩中枯草の中に匿れて居りましたが到頭家の人に見付かつて連れて行かれましたが、大層哀し相な顏して居ました、態と爲た事ではないけれど惡い事をしたと後悔して被居る樣ですわ。

だが私最う眠らなくてはなりませんの、而して明朝は早く起きて海岸に行くのよ。

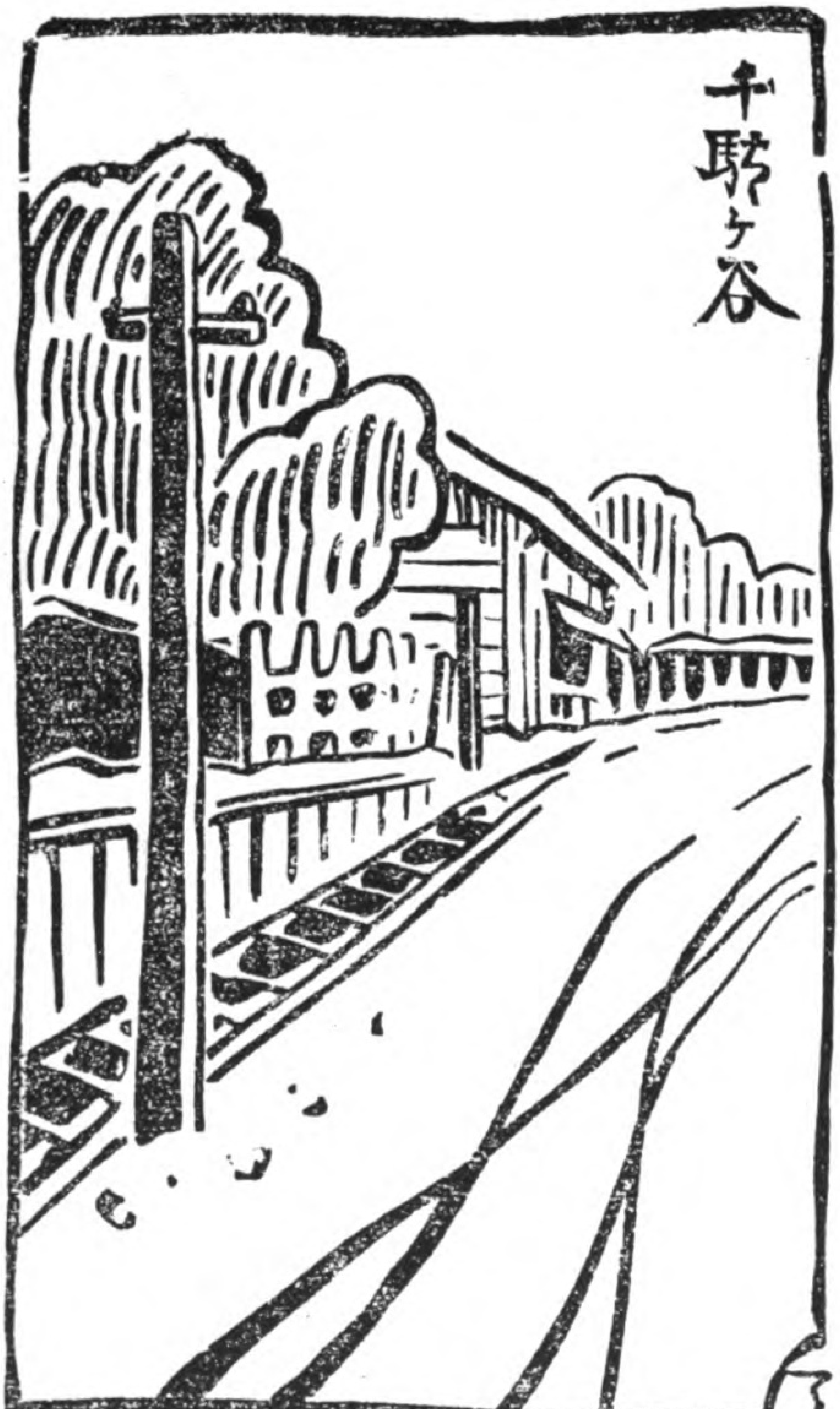
おゝ海よ海、快活なる海よ、靑く凊らかなる常に自由なる海よ。

＊　＊　＊　＊　＊

私最う此の海邊に居るのよ、私は初めて大洋を見た

の、大きくて平らで全く鏡の樣ですわ、海水浴には恰適と云ふ處よ、私共は西側の宿に居るのですが、此處からは海が一面に見えるの、而して廣い砂場があつて其處には女の子や男の子が多勢遊んで居ますわ

あゝ武ちやんが被居ると私什麽に面白いだらうだが私澤山新しい御友達が出來ましたの、而して初終樂しく遊んで居りますの、私僅つた三日許しにしかならないけれども餘まり面白い事許しですから、最う三週間も居つた樣な氣がしますの。



隣りの宿に一人の少女が居ますの、私此の人とは十一度も喧嘩しましたけれども、一番仲好しですの、此の少女の名は百合子つて言ひますの、百合子さんは氣が短いけれども眞個に愛らしいのよ、母さんは百合子さんの事を私と同じ樣に御轉婆だつて言ひますの、百合子さんは大きく成つた姉さんがありますが、此の姉さんは毎日十二時になると海水浴をなさいます、而して浴場に行く時など總のある美しい衣服を着、立派な帽子を冠つて、髮の毛は長くお下にして被居るのよ、誰も此の姉さんが濱邊に下りて來るのを見惚れて居ますの、而して海の中で泳い

て居なさる時など實に美しいのよ、而して遊泳が上手で魚の樣に泳げます、昨日の事でした、此の人が脱衣場の鍵を百合子さんに渡して、御自分は海の中に這入りましたの。

　私百合子さんに言ひましたの「姉さんの衣服を着て濱邊を散歩しませんか」つて、左うすると百合子さんも「面白いでせう、私も左う思つて居たのよ」つて仰有つたものですから、直ぐに入つて二人して衣服を一つ宛分けて着、帽子も冠つて出掛けましたの、すると其の近邊に居た娘さん達は私達を見て羨んで居ました、私達は非常に愉快でしたの、百合子さんの姉さんが海から出て脱衣場に飛込んだ時に、私達は砂山の蔭に隠れて了ひましたの、而して暫らく經つてから靜かに歩き出しました、姉さんは戸の孔から私達を見ながら柔しい聲で言つてましたの、「百合子さん私風邪を引いて了ふわ、早く私の衣服を持つて來て頂戴ね、ねえ百合子さん」だが私共は聞えない風をしてズン／＼歩いて居ましたの、「百合子ちやん、餘まりですね、私阿父様に言付けますよ、這麽濡れた物を着て居て惡い風邪でも引くと困るぢやありませんか、直ぐに此處に來らつしやいつて、言つてましたが、天氣は暑過る位に照つて居ますから風邪なんか引く事はあるまいと思ふて半哩許の處を彼方此方歩いて居ましたの、濱邊を散歩して居た人々は百合子さんの姉さんが脱衣場に閉籠られて困つて居るとも知らずに私共を見て笑つて居ました、百合子さんは「吉ちやん面白いのね、私這麽面白い事ないわ、でも姉さんは外に出ることを羞しがつて海から上つた儘、あの中で困つて被居るんですもの」つて言ひながら愉快相に歌つて、私と一緒に又た脱衣場の處までやつて行つたのです、所が姉さんが「百合子覺えて居らつしやい、あゝ私何うしよう、眞個に困つて了つた」と言つて居る聲が、泣いて被居る樣に聞えましたが、私共は此の姿で寫眞を取らうと思ふて寫眞屋へ行つて了ひましたの。

　寫眞を撮つて歸つて來ますと、百合子さんの姉さんが被居らないのです、百合子さんは母さんに叱られる

かも知れんつて大變恐がつて居ました、そこで私共は此の姉さんの衣服を釘に掛けましたが、汚れて砂などどつさり着いて居ました、私共は屹度叱られると思ひましたから、宿には歸らないで店屋で御菓子や果物を買つて喰べて匿れて居ました、而して私共の罪が忘られ



た時分に歸らうつて言つて居ましたの、すると直きに百合さん處の女中が私共を搜しに來ました、百合子ちやんは打たれるかも知れぬとつて、大層恐がつて居ましたが、其時丁度船が着いて、人々が多勢船に乘りましたから、私共も其の人々の中にかくれて船に乘つて了ひましたの、而して女中が歸つて了ふまで船の中に居ようと思ふて居ました、で船の上から見て居ました所が、女中が到頭私達を搜す事が出來ないで歸つて行きましたの、私共は可笑くつて大笑ひして居ました所が、船が動き出したので笑ふ所の話ぢやありませんでした、百合子さんは「オヤ、此の船は遠方の港に行く船ですよ、私何うしたら可からう」と言ひましたの、私吃驚して了つて泣出さうとしましたの、所が百合子さんは「赤坊の樣に泣くなんて御止

しなさい、吉ちやん此の船は横濱に寄りますから、而して其處には別莊が在つて留守番が居るのよ、だから心配しないで被居い、私横濱に着けば父さんの方に電報を打ちますわ、斯うすれば猶は面白いのよ」つて言ひますから私も安心しました、而して晩の八時に百合子さん家の別莊に着いたが、最う戸が締つて居ました百合子さんが門の處に立つて呼びますと、留守居の婦人が出て來て戸を開けて、私達を内に入れ、ランプを點けて吃驚した樣な顔で私共を見ました、私の顔は涙で濡れて、私の着物は裂けて汚れて居ました、是は今朝から砂場を駈廻つたからです、此の婦人は私共の話を聞いた時大層氣の毒がつて御茶を出しました、私大變に疲れて睡くつて仕方がないと言ひましたの、すると床を展つて呉れて百合子さんと私を一緒に好い鹽梅に臥かして呉れました。

小兒の死亡率

日本の小供より西洋の小兒の方が死亡率が高いと聞て居たが一寸歐米の割合を紹介しやう、英國の大都會を合せると、一夏に二萬二千八百二十七人といふ澤山の小兒が死んだことがある丁度千人に對する二百七十五人の割合で倫敦の小兒科病院などは夏になると患者を收容し切れぬことが度々ある、又バーミンガハム市では一年に三百人からの小兒が死ぬそうだ、それから獨逸の婦人は家庭の仕事に熟練の批判か高い位だから定めて小供の死亡率は低いだらうと思はれるけれども事實はこれに反して一年の出產二百萬人の中一歳未滿で死亡するものが四十萬人乃ち丁度人口に比較すると二百人の割合だ、ミユーニツヒ市は市街も淸潔で健康地として目されて居るがそれでも一年に四百十九人乃ち千人に對する二十四人の割合だ、米國になると少し好くなり華盛頓及其附近一帶の區の死亡數は二百七十五人其他の諸州は各差等ありといふ有樣でマサツチユセツツ州八市の死亡率は百八十六人乃至三百四人で紐育州は約百五十九人。小兒の死亡率の高いのは育て方が不適當といふことに歸着する。現に千九百三年獨逸ミユーニツヒ市で死亡した小兒の數の四千人の中三千三百人は瓶で牛乳を與へたためだといふ、之に依て見れば母乳を與へずに牛乳で育てるのは隨分危險の多い事が判かる。

食卓作法

▲食卓‖饗宴を催ふす家にてはまづ來客の人數を見積り食卓の大小長短を定むべし、第一に窮屈ならざるを要すれどもあまり食卓を大にして談話に不便を感ぜしむべからず、大抵客と客との間は二尺位を適度とす、其裝置は成可く雅美風流を旨とし、卓上には純白の布を蔽ひ、盃、皿の戛々の響を防ぐ爲め其下にフランチルの如きものを置くをよしとす、其他よく磨きたるナイフ、肉叉、匙及び美麗なる陶皿、布巾の類を用意し其他藥味、バタ、鹽等の諸品は卓の中央に配列し、酒盃は客の便利の處に置き、花瓶の裝飾も美麗にし、食後に出す菓物は皿數少くして澤山盛るよりは、量少くとも品數多きをよしとす、又來客の數に應じて給仕人の數を供へ置くべし。

▲客‖來客は定時に先ち、十分前に集り食卓に就く、但し、周章て椅子により又は、著るしく食卓に接し、或は離るゝは禮にあらず、心氣を靜め、容儀を正し、閑雅、靜謐を旨とし、左邊に供へたる布巾を胸部にかけて食物の至るを待つべし。而して順序を經て我前に來るまでは卓より手を遠ざけ、決して待兼たる風情をなし、肉叉又ナイフを以て食卓などを叩く如き擧動あるべからず、此間は隣人と閑話するはよろしけれど、放言、高談を謹むべし、主人主婦は相對して食卓の中央を占む、是れは用事を便じ兼て應對に便ならんが爲めなり。

▲献立‖第一(ソップ)を始めとして燒肉、煮魚、野菜等普通は七皿より鄭寧なるは十皿以上に及ぶ、食品の代る毎に飲料(シャンパン酒若しくは葡萄酒)ビールを用ひるを常とす、食後には菓物、糖菓、夏ならばアイスクリームを用ゆ、最後に珈琲又は好みによりて茶を用ゆるもよし。

▲心得‖食品の好惡を評すべからず、若し好まぬ品來らば少しく食して可なり、餘り早く食し了るは不可なり、空皿を捧へて人の遲きを待ち又は食品の早盛を望むが如き風情あるべからず、又遲過ぐるも不可なり。その爲め他の献立遲滯すればなり)給仕來る時は皿を下ぐべし。ソップを啜り終らば匙を皿の上に安んじて皿と共に持ち去らしむべし。其他の食品にあつては皿を更ゆる毎に匙、ナイフを新にするは稀なれば、ナイフと肉叉を十字にせず且つ卓布を汚さゞるやう心すべし、液物を自他の身體及び食卓に滴す勿れ、烈しき物音又は見苦しき樣子を爲す勿れ。

▲禁物‖食物を滿口に含む事。大口を開くこと。食物を含みて席を立つ事。同じく談話する事。果實其他食物の筋核等を、器皿外に吐き出す事。口や咽喉を鳴らす事。食事中に、齒ほぢり又は口中に手指を入るゝ事。食席に下着のまゝにて出又は手指を汚し又は頭髮をふり亂して臨む事等。

▲注意‖飲食の時は意味淡泊なる閑話をなすべし、思慮を要する熱談をなすべからず、卓布にて手又は口を拭ふべからず、(自己の胸部にある布巾を以てすべし)、塵などの食物に附着し居る時は人目を避けてソット撮みて皿の緣に置くべし。背を椅子に寄せ又は食卓に寄りかゝるべからず、給仕を呼ぶに高聲を發し又は荒々しき擧動をなすべからず、會食の時人より先に席を立たんと思はゞ一應會釋すべし、食卓につきては、痰を吐きクサミをなすべからず。

活く日

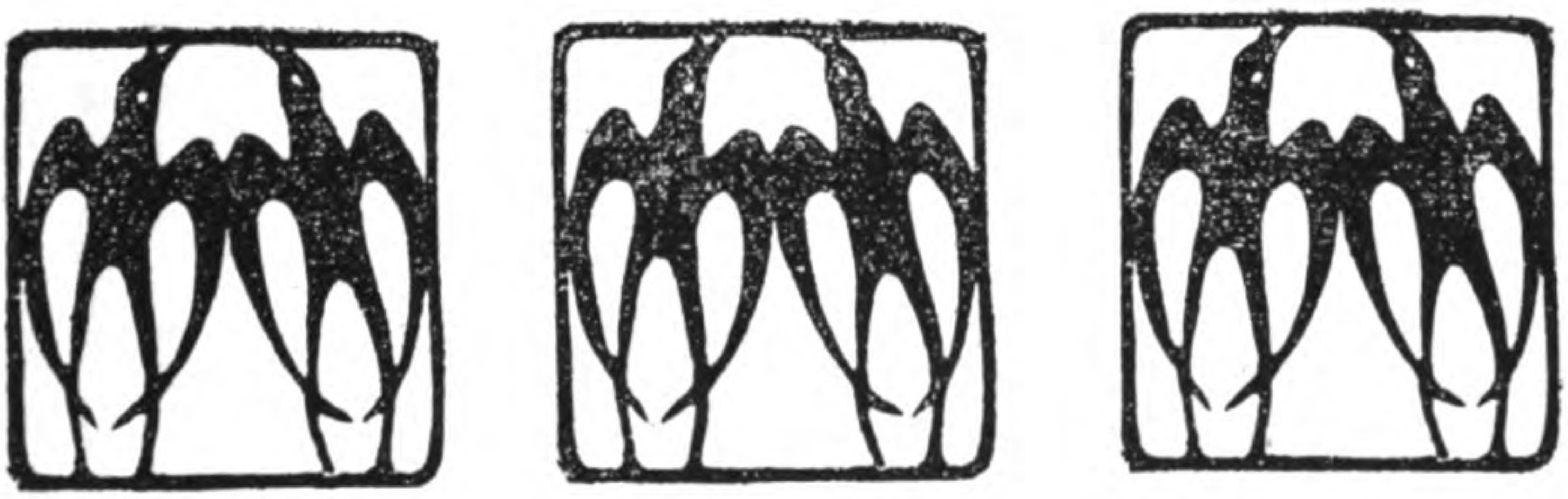
吉野臥城

◎麥の穗

夏は綠の波を搖り、
風は綠の野に戯れ、
綠の野らの麥の穗は、
風に靡いてふさふさと。

伸びた麥の穗風に搖れ、
靡く麥の穗起き返り、
返る綠の波の穗に、
朝の活日がてらてらと。

照るや綠の野らの巢に
こもる雲雀は、「風薫る



今日は、巢立に美い日ぢや」と、
麥の穗越にはたはたと。

伸すや翼の日に照りて、
舞の姿のあでやかさ、
「私も私も舞ひたい」と、
麥の穗蔭にぴいぴいと。

鳴くや雲雀は巢におりて、
おりて飛び立ち、飛び舞ひて、
「係うぢや茲ぢや」と子を呼べば、
麥の穗越にはたはたと。

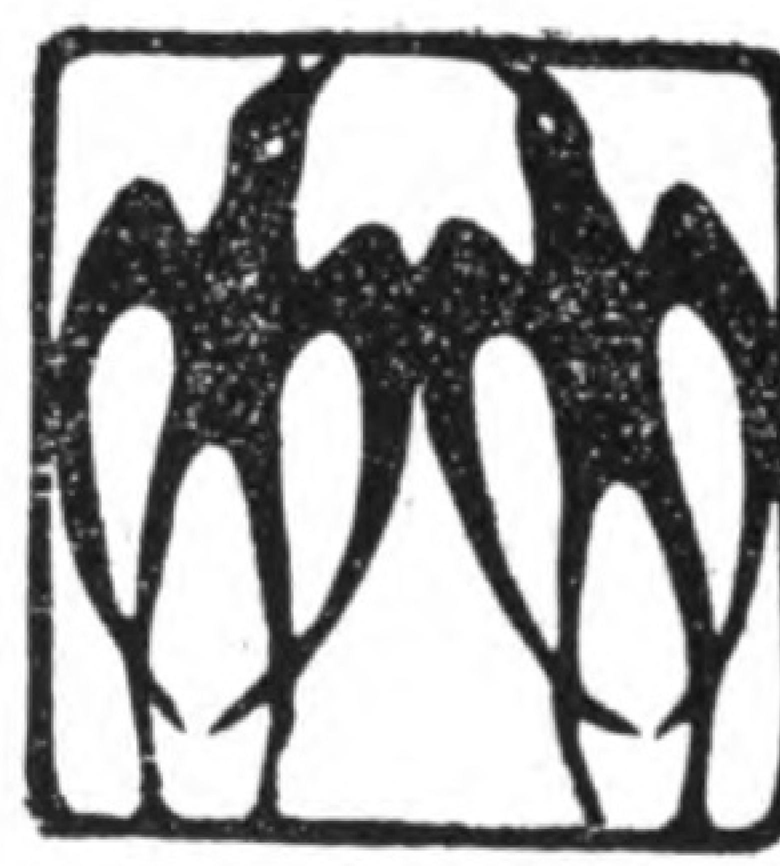
飛んで從ふ子雲雀は、
綠の波に見え隱れ、
麥の穗搖れに腹をすり、

漸々高くぴいぴいと。
どこぞへ連れて飛んでゆく、
嬉しい聲を見送つて、
靡く麥の穗起き返り、
返る朝波さわさわと。

◎煙突のけぶり

見よ、工場の煙突の、
けぶりは、稼ぐ若き女が、
胸の惱みに似たるかな。

空衝く煙出づるとき、
いたう苦しき溜息に、
辛き宿世やかこつらむ。







煙うすれて出づるとき、
思に疲れ、骨つかれ、
呻吟くがやうに歌ふらむ。

ゆふべ煙の絶ゆるとき、
薄るる影を顧みて、
誰か運命に泣かざらむ。

夜半を休息の床に就き、
慕鄉の夢におどろけば、
あしたの汽笛叫ぶかな。

「疾く苦みの場に出よ、
そこに汝を待つ器械あるに。」
けぶり、昨日のごとくなり。

料理と科學

肉類は人身に於ける最上の滋養品なれど、我國の如き寒暖中正を得たる温帶の地方に於ては穀菜と合せ食すること必要なり、彼の寒帶地方の住民は脂肪分多き食物を嗜み、熱帶地方の人民は果實蔬菜等の淡泊なるものを好むも自然の理にて、皆その身體の榮養に適合せるものなり、肉類の貴重なる勿論なれど、五味の調和、煮熟の程度宜しきを得ざれば却て害を招くことあり、さはいへ强壯なる人や、年少の輩はなるべく平素無味粗雜なる食物に馴れしむべし、然らざれば偶々他所に於て、强き飯、粗末なる菜を喰ふて忽ちに腹痛を感じ嘔吐を催ふす事あり、かくては奈何でか僻遠の地に旅行し不時の災厄に堪ふることを得べき、況てや衞生法の應用を誤解して徒に高價の滋養品をのみ撰み調へんとするが如きは誠に笑ふべきことなり、亦有害無益なる菓子類の多く砂糖を含みたるなどの間食は嗜まざるをよしとす。又習慣上不馴の食物は容易に食ふべからず、食物の味ひよきは强ち高價の品のみに限らず、要は調理法の如何にあり、調理其法叶へば佳品ならざるも其味ひの佳なるを覺ゆ、故に酒、醬の鹽梅煮炙の適度を得る時は粗食、菜蔬却て佳味を覺ゆべし。凡て食物は大抵よく煮、よく熟して喰ふがよし、不熟のものは眞の味ひ出づることなし、凡そ生物の味を助くるには香氣のもの、又辛味のもの爽りて力あるものなれば漿汁に青柚山椒などを入れ、肉類に山葵、胡椒等を加ふるは必要の事なり。料理は又割目正しく配置の麗はしからざる時は、感覺上其味ひの幾分を減ずと知るべし、故に食器は殊に清潔にしてその切目配置等も成可く正しくうるはしくして色形の配合に注意すべし。尤も只觀場を作らん爲めに彩色を施し、煮炙の不十分なるべからず、滋養の原質を大別すれば蛋白質(肉類の纖維、鳥卵の蛋白、乳汁の乾酪素及び豆類等)澱粉(動 植 物の脂肪、米、麥、蔬菜等の澱粉、果實の種類)及び石灰質(常用の食鹽、動植物等の食品中に含有する燐酸鹽、石灰鹽、苦土鹽の類)この三種の滋養品は身體精神の基礎にしてその第一は人身の組織となり第二は燃燒質にして人身中の薪炭の如く、專ら體溫を發生し、人身活動の燃料物となるべく、而して第三は專ら骨骼の構成を主るもの、此三種を適度に合せ食して始めて身體の營養を取るべきなり。



不幸なる貴婦人

某子爵家
家庭教師の談

▲模範的家庭

私が女子大學を卒業して、模範的華族との評判ある松野子爵家（假名）へ家庭教師に入つたのは、昨年の秋で御座いました實は田舍の高等女學校に奉職の口があつたので御座いましたが、暫らくの間上流社會の行儀作法を見習つて置くも好からうと云ふ、父兄の希望もありましたから、夫れには評判の好い松野家なら好からうと云ふので、此方から望んで、傳手を求めて子爵家へ入つたので御座います、實際其の當時、否な今でもさうですが、子爵家の評判は大變好かつたのです當子爵は子供の教育に熱心で、其の上趣味も高尚で、道樂は讀書とか美術とか云ふ類の外、普通今日の上流人士に有り勝ちの、折花攀柳とか云ふ、行ひは露程もなく、其の上夫人も非常に賢い方で愛國婦人會とか、慈善會と云ふ方へは、非常に熱心で缺かさず出席もされるし、又た奔走もなされるが、其の他見物遊散とか芝居とか云ふものへは、只の一度も御出掛けになつたことはなく、全力を擧げて、家政と御子供衆の教育に力を注いで御居でになり、加之ず御夫婦仲は、大變好くて被居て、何かの會に御出席なさる時は、屹度御揃ひで、外の見る目も羨ましい程で、隨つて、家の裡は何時も春風和氣で、極めて圓滿平和であると、マア斯う云ふ評判でしたから、私も非常に床しくおもひまして喜び進んで、入ッたのですが、一ヶ月も經つか經たぬかに、私の心は全く疑惑の雲に蔽はれて了いました。

▲疑惑の雲

と云ふのは、事實が全く豫想に違つて、腑に落ちぬことばかりであるからです、で第一に私の心に起つた疑惑は、此の子爵家は何故斯う評判が好いのだらうと云ふことでした、其の次ぎに起つた疑惑は、斯樣に一

家中が、冷かなる空氣に充ち満ちて居る、此の子爵家でさへ、彼のやうに、評判の好いのを見ると、事によると、一般の上流社會、貴族社會は、此の子爵家よりも、更に悪しき不愉快なる生活を爲して居らるゝではあるまいかと思つたのでございます。

▲疑問の一

それはさてをき、さて其の疑惑の第一は、果して當子爵が、子供衆の敎育に御熱心であるか、どうだかと云ふことで御座います、成る程學校敎育意外、二人も家庭敎師（私の外に今一人男子の家庭敎師が居りました）を置くと云ふのですから、夫れは勿論、御熱心には相違ありますまいが、併し私が初めて參りました時に、子爵に一寸、奥方から御引合せ下すつた切りで、其の後異の時偶、御目にかゝる位で、私が御子様方に何を敎えて居るか、何んなお話しをして居るか、又たお子様方の、進歩の具合は何うであるか、其様ことは全く御頓着遊ばさないので御座います、夫れから私を御信任下すつて、一切委せて下さる御考へであるかといふにさうも思はれないので御座います、僻目か知れませんが、私の目には子爵の頭腦の中には、子供の敎育などと云ふことは、全くないやうにしか思はれないのです、夫れから次に奥方で御座いますが、奥方は固より豊かな御家庭で御座いますから、臺所のことは一切老女が受け持ち、財政のことは、殘らず家令が取り扱ひますから、極く〱閑散の身の上ですから、お子供衆の敎育に御熱心で御居でになるかと云ふに、子爵も御同様、御子供衆が學校へ御出でても、又た御歸りになつても、其んなことは、露御氣に御掛けなさる、御様子も御座いませんのです、で學校に於ける御子供衆の成績などは、只の一度も御聞きになつたことは御座いません、お兩方共非常に敎育に熱心であると云ふ、評判を聞いて參りました、私が、疑惑の念に打たれたのも、强ち無理では御座いますまい。

▲疑問の二

御子様方の敎育についての、私の疑惑と云ふのは、以上の通りですが、夫れにも勝して、私の不思議に堪

へなかつたことと云ふのは、子爵御夫婦の間柄で御座います、成る程世間の評判通り、何かの會に御出での時は、何時も馬車で御兩方共、御相乘りで、一寸見にも如何にも御仲が至極睦まじくて、御出でのやうに見受けられますが、よく〳〵御摸樣を見ますと、夫れは夫れは冷かと云うか、睨み合ひと云はうか、塲合に依りては、御兩方共十日も二十日も、御言葉を丸きり代されぬやうなことも尠くありませんのです、云はゞ全くの敵同志ででもあるかのやうで御



座います、夫れは下層社會の夫婦の關係のやうに、口爭ひなどはなさつたことはありません、否な稀れに御言葉を換すやうなことがあれば、互ひに極物靜かな丁寧な口のきゝやうを爲すつて御居でですが、夫れで居て御兩方の間は何かかう越ゆることの出來ぬ、溝でも出來て居るやうな鹽梅で何時も秋風が吹き荒んで居やうに思はれるので御座います、で奥樣は四季を通じて、母家から一丁許り隔だつて居る、離れ座敷に一人切り、起臥なすつて御座で、實際上の、夫婦別居で御座います否チト婦

激ですが島流しと云た方が、適當かも知れませんのです。

▲事の眞相

何故御兩方の間が、斯う冷かで、越ゆることの出來ぬ、溝を穿つて居るかと、深く立ち入りて、探ねて見ますと、夫れは全く子爵に如何はしい行ひがあるからで御座います、成る程子爵は、世間の評判通り、花柳の酒に醉ふとか、折花攀柳の遊びに耽るとか云ふことは、露御座いません、併し子爵には、夫れにも優して感心の出來ぬ行狀が（斯樣のことを申しますのは、高士は國を去つて其の君を譏らずと云ふ、訓言に對し恥入る次第ですが、是れをお話し致さぬと、其の事の眞相が分りませんから、其のお積りで御聞きを願ひます）あるので御座います、其の感心の出來ぬ行ひと云ふのは、一寸言ひ惡ふ御座いますが、子爵の其の不行跡を說明する證左としては、子爵家の九人もあるお子樣方の中で、奥方の實際の御子樣は、只だ二人ぎりで殘りの七人の中一人が先妻の子であるばかり其の外は皆な小間使ひとか、召使ひとかの生んだ子であると云ふことで御座います、是れで事の眞相は分るので御座いますが、夫れで其の奥方が實際御腹を痛めないお子樣でも、皆戶籍面は、奥方の御子樣としてあるので御座います、で奥方が、御子樣方の御教育に餘り熱心遊ばされないのも、畢竟斯う云ふことに、原因するのではあるまいかと、私には爾う思はれるのでムいます。

▲境遇の罪

私の見ました所では、奥樣は非常の幽鬱性で、絕えず何か煩悶して御居でなさる御樣子が、外の見る目も、御痛はしい程で御座いますから、私はもう御氣の毒で堪りません故、眞心を籠めて、同情して上げますと、奥方も大變私を、御力に遊ばされて、何にくれとなく、話し相手寧ろ相談相手となさるのです、夫れで奥方の御話し遊ばすことは、だん／＼深く御聞き申すと誠に御痛はしい境遇で、同情せずには居られないので御座います、で奥方の御話しと又た私の見聞した他の事實を綜合すると斯うなのです、奥方は最初當子爵の非常なる懇望で、松野家へ御輿入れになつたので御座

いますが、御輿入れの當時は、御夫婦の間も、至極睦まじくて、一家は何時も、花咲き鳥歌ふと云ふ光景でしたが、其の中にだん〳〵子爵の亂行が募るに連れて家の中は宛で砂漠のやうになつてしまつて、二六時中木枯しが吹き荒んで居ると云ふのです、單に夫ればかりでなく小間使ひや召使ひの類が、子爵の寵愛を鼻にかけて、奥方をあるがなしに扱ふやら、先妻の御子と云ふのが、事毎に御隱居樣(姑)に奥方の讒訴をすると云ふのです、夫れで今奥方は、疑はれ讒せられ、愛を求めて得ず、自由を求めて得ずと云ふ、情けない御境遇で、迚も家庭の趣味を味ふ所ではないと被仰るのです、奥方の御話しと云ふのは、先づザット斯うなのですが、御話しを聞いて、私は爾う思ひましたのです、奥方の幽鬱性は、先天でなくて、境遇の罪であると。

▲道理ある述懐

斯樣に奥方は、良人とは冷かに、子供とは親しまれず、婦人の身に取りて、第一の慰藉である所の、家庭の情味と云ふものを、味ふことが出來ませんので、心細いやうな、淋しいやうな感情が、絶えず胸の中に蟠つて居りますから、終始世の中を悲觀して、私に色々と話しかけられましたが、何時も斯んなことを云つて御居でになりました、子爵夫人などゝ、外へ出ては持て囃されて立派な家に住み、立派な衣物を着、美しい物を食べて居ても、家庭の快樂を味ふことの出來ぬ者が、此の世で一番不幸者だと仰つて、下層社會の、夫婦共稼ぎの暮らしを、非常に羨ましいものと、想ふて居られるのです、何時かも奥方の御供をして、上野の美術館に參つたことがありましたが、歸途は御歩いで下谷の貧民窟を、通つたことがありました其折、九尺二間の棟割長屋に、家族が、笑ひ興じて居るのをお羨み遊ばした樣子をもよく私は承知して居ります、誠の金殿玉樓に居られても親子、食事を別にし寢所を別にし、言葉を交すことすら稀れであると云ふ、情けない境遇に居られる、奥方としては無理のない、次第であります。

▲鬱さ晴し

成る程奥方は此間の評判通り、月に何回となく、方方の會へ御出掛けになります、それも、世間一般の夫人方のやうに、單に公共の爲め名誉の爲めに斡旋なさるのではなく、全く家庭の寂寥と無味とに堪へ兼ねて其の鬱さ晴らしに御遣りになるので御座います、で奥方自身でも、よく爾う云つて御居ででした、今日の色々の婦人會などは大抵衣服の共進會で趣旨は立派でも、實質は少しも有難くない。實際國の爲めとか人の爲めとか云ふ考へを以つて居る會員は指で數へる程しかない、で世間では自分



などが新聞で名前を唄はれたりするのを、見て、名誉だとか何とか云つて羨んで居る人もあるかも知れないが、其の實羨まれる當人こそ、家庭の幸福も何にもない、此の世の一番不仕合せ者であると、絶えず述懐して居られるのです、併し奥方とは反對に、子爵は極めて華美好きで、又た名誉心なども盛んで、何か會などから招待でも受けると、何時も進まぬ奥方を無理強いに同伴して、御出掛けになりましたやうです。が是れが、夫婦間の仲が極く睦じいと云ふ、世間の評判を取つた原因かと思ひます。

以上は私が、松野家に居た三ヶ月間の見聞ですが、

世の中の婦人方には、無暗に上流の生活を羨んで、自分の不幸を喞つ者がありますが、夫れ等の人には、私の三ヶ月間の見聞は、好い教訓にならうと思ひますから、忍び難きを忍んで御話し致したので御座います、有體に申せば私自身も三ヶ月間の家庭教師生活で悉皆自分の考への誤つて居たことが分りました、で私の其の短い月日の間に得ました、尊い教訓は、『世間の身分の貴いとか、賤しいとか云ふことは、人生の眞正の幸福には、何の關係も價値もない』と云ふことで御座います。

（胡劍生筆記）

洗濯

△絹布を洗ふには先づ石鹼を溶したる温湯、或は微温の灰汁に浸し置きて、其絹を能き程に摑みて打ちながら擦るやうにして洗ふべし、綿布の如く揉む時は甚しく地質を損ふ、洗ひ終れば湯にて濯ぎ、更に水にて能く濯ぐべし、されど絹類は何品にても一度洗へば其色地質をも多少損ずるものなれば綿布類の如く屢々洗濯すべからず。

△白色の絹類を洗ふには石鹼の湯、又は米泔汁と灰汁とを交へて微温に沸したるに能く浸し置きて洗ふべし、灰汁は垢を除くこと速かなれども、其品質の軟弱なるものには用ふべからず、濯ぎ方は前と同じ。

△染色の絹類は雨水の温湯に石鹼を溶して洗ひ、又は豆腐の搾り湯にても洗ふべし、各種の色の中其二三を擧ぐれば紅色の絹は燒酎を加へて洗ひ、紫色は灰汁を用ひ、靑色、赤色には少量の酢を和したる石鹼水にて洗ふべし。

△フランチル類も雨水の温湯に石鹼を溶してその中にて柔かに揉り、捏れて洗ひ、水にて濯ぎ、晴天の日少し日蔭の方にて乾かすべし、強き日光と餘りに冷たき水とは避くべし、烈しき冷熱にあへば忽ちに收縮すべし。

△手巾の如き小さきものは白絹を洗ふ如くにして洗ひ、濡れたる儘を疊みて平手にて能く打ち、乾かして後火熨斗をかくべし。

△油垢を落すには熱湯に鹽一握りを入れ、能く振りて少しさめたる時に洗ふべし、又饂飩の湯、ぬるき灰汁にて洗ふもよし。

△垢の附着したるものを洗ふには、熱灰汁、最もよしと雖も地質を損ふこと多ければ、大抵の物は冷灰汁、或は微温の灰汁にて洗ふべし。

△糊には數種あり、姫糊、飯糊、海蘿等、姫糊は一夜米を水に浸し置き、擂鉢にて舂き絹篩にて漉したる後に、煮て用ふ、飯糊は飯を水に漬けて糜爛せしめ、綿布の袋に入れて漉すなり、海蘿は弱き火にて煮絹篩に漉して用ふ。

彼女は醜業婦にあらず 傳道女なり

木村美與子の實話

曾ては嬌名を名古屋に馳せ、翠帳紅閨の中に曉の鐘を恨みし身の、今は一卷の經典に想を凝て、雨にも、風にも立盡す傳道女、是又立志の一つならん今其經歷を叙するに當つて、妥く彼が口を假らんか、

一　生れながらの不仕合

儂は遠州濱松の生れで、生れながらの不仕合せは、十八の年に母を喪しました。すると間もなく父は商業で失敗致しまして、表通りへ住むどころの騒ぎではございません、どうにもかうにも遣切がつきませんところから、儂を名古屋の花柳界へ賣る事になりました、前の晩に父は儂を膝近く呼びまして、

「さて、おみよ、お前には氣の毒だが、俺の今度の失敗はどう考へても俺の惡いには違ないが、お前も見る通りの有樣だから、どうか、一二年と思つて藝妓に出てくれ、其中には乾度借金の耳を揃へて家へ連れて來るやうにするから」

と云はれました。儂は何と云つて可いか解りませんから只默つて俯向いて居ますと、父はまた、

「ぢやア、明朝一番の滊車で名古屋へ行くから」

是には驚いたのです。賣られるにしても今日や明日ではあるまいと思つてましたから、聲を擧げて泣ますと、

「お前の泣くのも道理だが、什麼か此俺を助けてくれ、其代り一年もしたら乾度迎ひに行くから」

と繰返し〳〵云はれまして、其翌る日儂は名古屋へ行き、前借は若干だつたか存じませんが、兎も角藝妓になつたのでございます。

二　醫師の妻君

藝妓と云ふものは只藝が出來ればそれで可い、と思つて居た儂は、一生懸命に藝を研いて、さていよ〳〵出

て見ると大進です、藝よりは先づ容貌が主で、それは誠に申難い辛い――淺猿しい勤めをしなければならないのです。僕はもういつそ死んでしまはうと思つた事が幾度あつたか知れません、其上あれ程堅く約束した父は一年距つても迎ひに來てくれず、凡そ一年半ばかりと云ふ者は毎日泣いて暮したのでございますが、馴れると云ふ者は酷い者で、後には結句面白い境界のやうに思ふやうになりました。今から考へますと、これが墮落の第一歩でもございましたでせう、丁度三年醜業をして居る中に、岡山の或醫師が大層僕の境界を可哀想に思召して下さいまして、とう〳〵此方に落籍されて、醫師の奥様になり濟したまでは可かつたのですが、さうです一年半も一緒に暮して居る中に、子供が出來る、直ぐまた死ぬ、不幸が續いたところへ、醫師の親類から故障が出て、僕はとう〳〵離縁される事になりました。

三　義俠心

岡山に居ましたのも丁度一年半、離縁されて見るともう岡山の風を吸ふさへ不好になりましたから、それからまた名古屋へ歸りまして、暫らく元へ返つて居りますと、確かあさとか云ひました、それは僕の朋輩でしたが、東京仕込みのところへ縹緻がいゝので、名古屋でも大層流行ました女でございました。するとある銀行の頭取が、大層この女を可愛がりまして、ある年の正月なんか、春着の仕度にと云つて、千圓の金をくれた程でしたが、其後什麽云ふ事でか其銀行が破綻しまして、右の頭取も今迄とは打つて變つて詫しい境界になりました。それをまた其女は今まで隨分深い恩になりながら、宛然古草鞋を捨てるやうに構ひつけもしなくなりましたから、僕はまた何となく其頭取が氣の毒で堪らないやうな氣がしまして、とう〳〵此方から尋ねて行き、種々慰めて上げたりなんぞしたものですから、それが桎梏になつて、僕はまた其頭取の内緣の妻といふ樣な事で一緒に暮す事になりました。

四　頭取とも別れる

何分今までお金と云ふものを塵か埃かのやうに思つて居た人が、急に零落れたと云ふものですから、萬事

に鷹揚で、苦しい世帶を張りながら結句暢氣なやうな氣もしました、炊事の業を覺へたのは此時で、またお米の價や、お味噌の値を知つたのも此時でございます。これが儂の爲めには大變な藥になつたのでございます。丁度この關係は五年ばかり續きましたが、不思議に飽きもしませんでした、ところがこゝにまた此頭取と別れなければならない事が出來ました、と云ふのは、

五　二百圓で出稼



と云ふ事件が持上つたからでございます、それは儂の父がまた商業に失敗しまして、四百圓程、借金を埋めなければならなくなりまして、儂に什麽かしてくれまいか、と云ふ相談を持込まれましたから、この事を義妹に申しますと、義妹は暫らく考へて、

『ちやア姐さん、儂も姐さんにはこれまで長い間恩にもなつて居るから、儂が二百圓だけ出して上げやう、姐さん、お前、後の二百圓だけ工面すればいゝぢやないか』

と云はれまして、そこで種々考へて見ましたけれど、什麼しても二百圓と云ふお金の出さうな筈もありませんから、父にこの事を申ますと、

『ぢやア仕方がない、けれどもお前さへ承知なら隨分二百圓の金は得られない事もない』

『什麼すれば可いでせう』

と聞くと、それは今丁度俺の知つて居る男が滿洲行の婦人を募集に來て居る。其男は滿洲へさへ行つてくれゝば二百圓の金は其男がくれると云つて居るが、什麼だ一番奮發して滿洲へ行つてくれないかとの頼みです、先にもそんな事を云つて、欺かされた覺へがありますから、容易に聞かなかつたのですが、種々と口說かれまして、愈々滿洲へ行く事になりました、其時の悲しさは口にも言葉にも盡せません。

六　船中の苦惱

何處を什麼誤魔化したものか、其男と云ふのは儂の外に三人の女を連れて大阪から船へ乘り出しました、何と云ふ名の船でしたか、判然覺えて居ませんが、何でも外國船のやうでした。三等の苦しさは一通りではありません、儂等始め皆醉つてしまつて什麼する事も出來ません、それをまた平氣な顏で、別に介抱をするでもなく、酒を飮みながら見て居る其男の顏を見ると、儂は何だか鬼のやうに想ひました、鬼には違ありません、これから滿洲へ行けば、直ぐに儂等の血を絞り、肉を殺いで食べやうとする惡魔ですもの。

七　地獄で佛

すると同じ三等船室に一人の西洋人が居ましたが、心切に世話をしてくれるのです、儂等始め何だか氣味が惡い西洋人だと思ひましたが、別にいやらしい事もなく、能く心切に介抱してくれましたが、やがて儂に向つて、

『貴孃は先刻から見てると、酒を飮んだり、煙草を喫んだりして居たやうだが、あれは廢した方がいゝ、それから貴孃はあの仲間から離れなくつては不可ない』

と云ひますから、不思議な事を云ふ人と思ひましたが、

『僕は十五の年からお酒と煙草を飲みましたが、もうこれつ切廢してしまひませう！』

すると西洋人は大層僕を褒めた揚句、「神樣」の難有い事を說き始めました。僕のやうなものが普段神樣の事を說かれましても、別段氣にとめて聞く筈もございませんが、かう云ふ悲しい羽目だつたものですから、何となく神樣を祈つたら、神樣がお助け下さるやうに思ひまして、僕は心からこの西洋人の道話を聞きました。それからまた其人は鞄の中から「誠の救世主」とか云ふ本を出して貸してくれましたが、僕は好くイエスと云ふ事が解りませんでした。けれども地獄で佛とは此事でせう、僕は尠なからぬ慰安を此本の中から得たのです。西洋人、それは僕にとつての大恩師で、マックワウレーと云ふ人です。

八　いよ〳〵神の婢

マックワウレーさんはイエスと云ふ事に就いて、長〳〵と講釋をして聞かさせて下さいましたが、「平民の福音」などゝ云ふ假名のついた讀いゝ本を出して貸して下すつて、

『さてお前はこれから滿洲へ行く積りですか』

と云ひますから、

『もう身を切られるより辛うございますが、賣られた體ですから、什麼も仕方がございません』

『そんなら若干ばかりあつたら滿洲へ行かずに濟みます？』

『さうですね、まだいくらも借りては居りません、汽車賃と此船賃だけですから、二十五圓もあればよからうと思ひます』

『ぢやア私拾圓上げます、後は船客に事情を打明けて義捐して貰ふ事に致しませう』

其處でマックワウレー師は僕の事を船客に話して下さると、上等船客ばかりでもう百圓お金が寄りました、僕のその時の嬉しさは譬へやうがありませんでした。

それからまたマックワウレーさんは僕に向つて、

『これで貴孃の償身は出來たと云ふものゝ、あの惡漢が、容易な事で貴孃を手放す氣づかひはないから、

船が何處へか着いたら、直ぐに領事の手へ貴孃を預けて保護する事にしませう」
實にこの時のマックワウレーさんの御心配は一通りでなからうとお察し申します。

九　領事の心切

さて船が滿洲の港へ着きますと、檢疫とでも云ふのでございませう、警官が見えました。マックワウレー師は巡査部長に向つて、
「この婦人は木村美與子と云つて、彼の男に誘拐され、これから醜業の目的で滿洲へ出稼ぎに行く途中ですが、ある事情から今は非常に前非を後悔して、什麼か今の境遇を脱したいと望んで居るのです、貴郎は巡査部長で被入る、だから職權を以て此婦人を彼誘拐者の手から離し、日本へ送り歸して下さる譯には行きますまいか」
すると巡査部長は大きな眼を睜りながら、
「そんな事を云つても駄目だ、俺はあの婦人を什麼する事も出來ない、また貴郎はあの婦人に欺されて居るに違ひない、あの婦人は貴郎を欺して、償ひなしに逃げやうとするのだ、そんなものに同情が出來ない」
と其儘ふいと行つてしまつたのでございます。後でマックワウレー師は大層腹をお立てになりまして、
「あの男は警官と云ふ職務を忘れて居るのだ」
と被仰いましたが、此上はもう領事にかゝるより外はないのでございます。
「あア困つた事になつた、もう此上は領事へ談判して、貴孃を惡魔の手から拯ふばかりだが、私はこゝの領事を知らない、また自分を領事へ紹介してくれるものもない、けれども領事は耶蘇信者であるから、この點から一つ面會して話して見やう」
とこれから領事へ儂の事を能く話して下さいますと、其領事と云ふのがまた大層御心切な方でして、儂の身を不愍に思召したのでせう、助けてやるやうにッて、御朋友の信者の方へ儂を紹介して下さいましたから、儂が其方のところで種々難有いお話を伺ひ、さてまた

支那人の信者の方へ紹介されまして、其方から全く誘拐者の手を切つて戴いて、日本へ歸る事が出來ましたが、儂はまた此間種々の經典を讀みまして、耶蘇の難有い事、未來の福音の事なども覺る事が出來ましたから、二度ともう醜業婦などにはなるまいと臍を固め、一心に傳道の方へ心懸けまして、東京の慈愛館へ入り矯風會の會務に携はる身になりましたが、以前の事を考へますと、實に何故あんな畜生のやうな眞似が出來たものだらうと、空恐ろしいやうな氣が致します。

十　大恩人

儂が今の身の上になりまして、神樣の福音を享けるやうになりましたのは、偏へにマックワウレー師のお蔭でございます。儂はかう思つて居ります、もしあの時、マックワウレー師にお目にかゝらず、よしまたお目にかゝつたところで、神樣の難有い事が譯らなかつたら、儂は今頃什麼なつて居るでせう、滿洲へ行つてそれは〳〵酷い目にあつて居るでせう、墮落の上に墮落して、二度と人間らしい生活が出來なかつたに違ひありません、それが際どいところで助けられて、苟くも神の婢になる事が出來ましたのは、全くマックワウレー師のお蔭であります、ですから儂は第一に尊いものが　陛下と神樣、第二に難有く思ふのがマックワウレー師です、儂はマックワウレー師に墮落の淵から拯はれたのでございます、人間の一生も考へて見ると不思議の因緣のあるものではございませんか！

流行

流行の浴衣地

春塘

目に青葉山時鳥初松魚と云ふ、初夏の景物も取り揃つた今日此頃ですから、市内に散在の各呉服店では新陳代謝に店飾りも一變して花と見擬ふ友禪縮緬は、新緑のやう見るから涼し氣の浴衣地と取り換つた、其の浴衣地の流行一斑を紹介致しませう。

△當年の浴衣地

中形浴衣地と云つたら、之迄は眞岡本綿と木綿縮の二種に限られて居たやうなもの〻、需要者の嗜好が向上主義となつたから、其の要求が一般に贅澤品となり地質に染色に模樣等に嶄新の意匠を凝し、在來の中形模樣では匆々に滿足しないで、單調な浴衣地の革新時代が來つたのである、當年の流行中形は總て有禪擬ひとも見るべき、濃厚の染色で、奈良晒しと云つた、江戸式の瀟洒時代は過去となり、總ての嗜好が關西式に流れて、見るから暑苦しい二重染—三重染となつた、併し浴衣を着て足袋を穿く今日ですから、意氣がるやうな昔風俗よりは、却つて濃厚とした浴衣地の方が却つて歡迎されるのでせう。

△中形模樣の中心

元祿模樣や、桃山模樣も何時か去り、最近の流行中形模樣と云つたら、昆蟲の中で天然の美を有して居る、胡蝶に基き種々の模樣を案出し、浴衣地の意匠を各呉服店で凝して居るのです、其の胡蝶模樣の種類を大別したら、千羽胡蝶、胡蝶桐、胡蝶絞り、胡蝶鹿の子、胡蝶霰、胡蝶の草花と云つた按排で、孰れも胡蝶を基礎にして變化させてある、此胡蝶の範圍外は相變らぬ萩、桔梗と云ふ秋草模樣を始め、四君子の中の菊や蘭、偖は破竹に雨

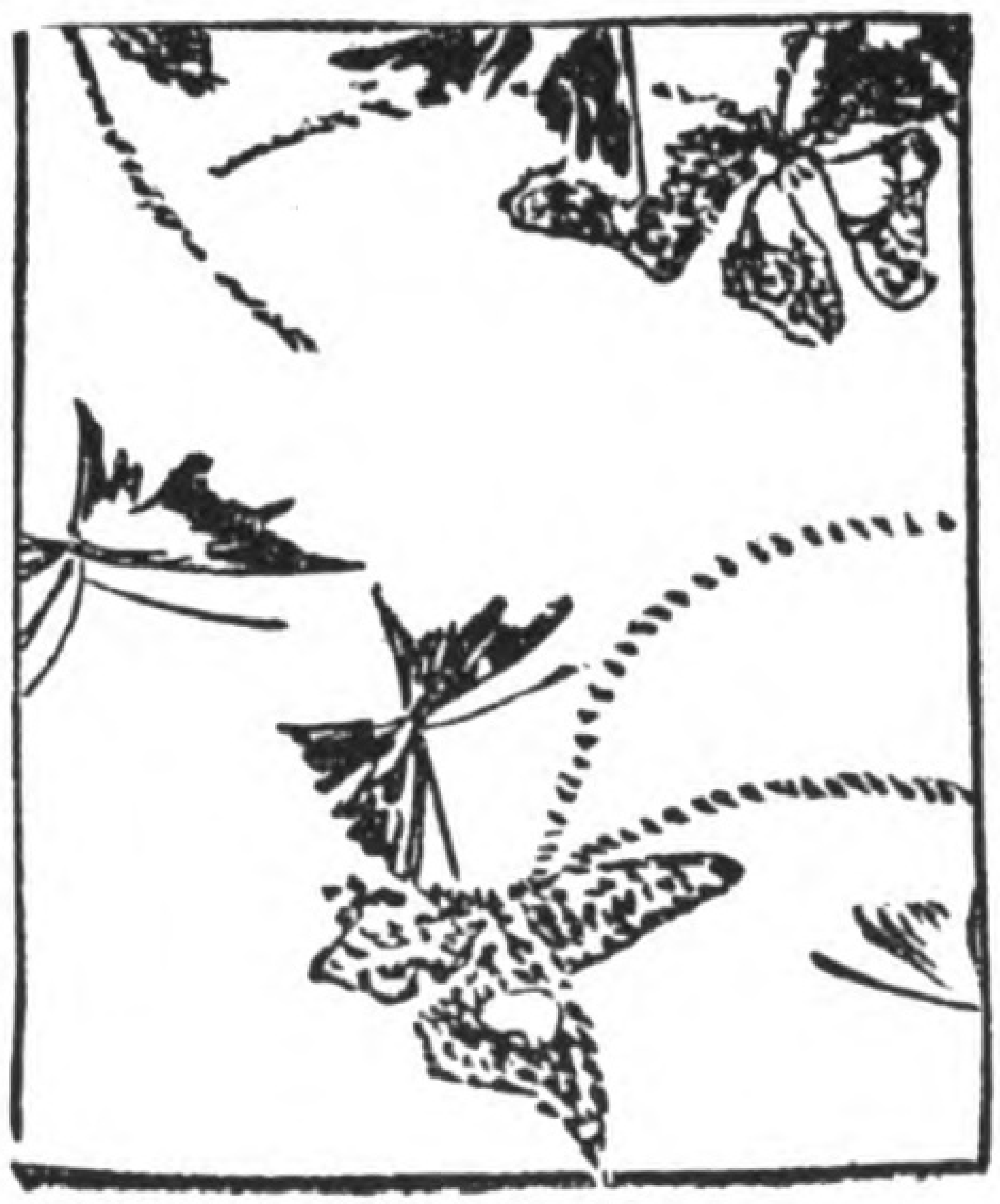


と云ふ好み、其の模樣も陰と陽に顯はし線や格子を夫へ配つてあるから、頗る複雜した中形模樣となつたのです、が、中形模樣の圖案は光琳風、洋畫寫し等で、千代紙式の昔模樣はなくなり、高尙な圖案が歡迎されて居るのです。

△流行の染色は何?

當年の流行染色は春衣裳と同じやうに、強い色を好むと云ふ傾向で、浴衣地も矢張り藍鼠が流行中堅を占め、在來の藍染や淺黃染と云ふ單純な染色では需要者の嗜好に適さぬとやらで呉服屋側は浴衣地へ濃厚なる染色を鼓吹して居る、併し濃厚の染色と云つた所で、夏物だから冬衣裳のやうに、溫かい紅や緋と云ふ色は無論好まず、藍染





淺黃染の所へ藍氣鼠、納戸、勝色、寂色等を配色し、中形模樣を有禪のやうに、巧みに染色する事となつたのである。

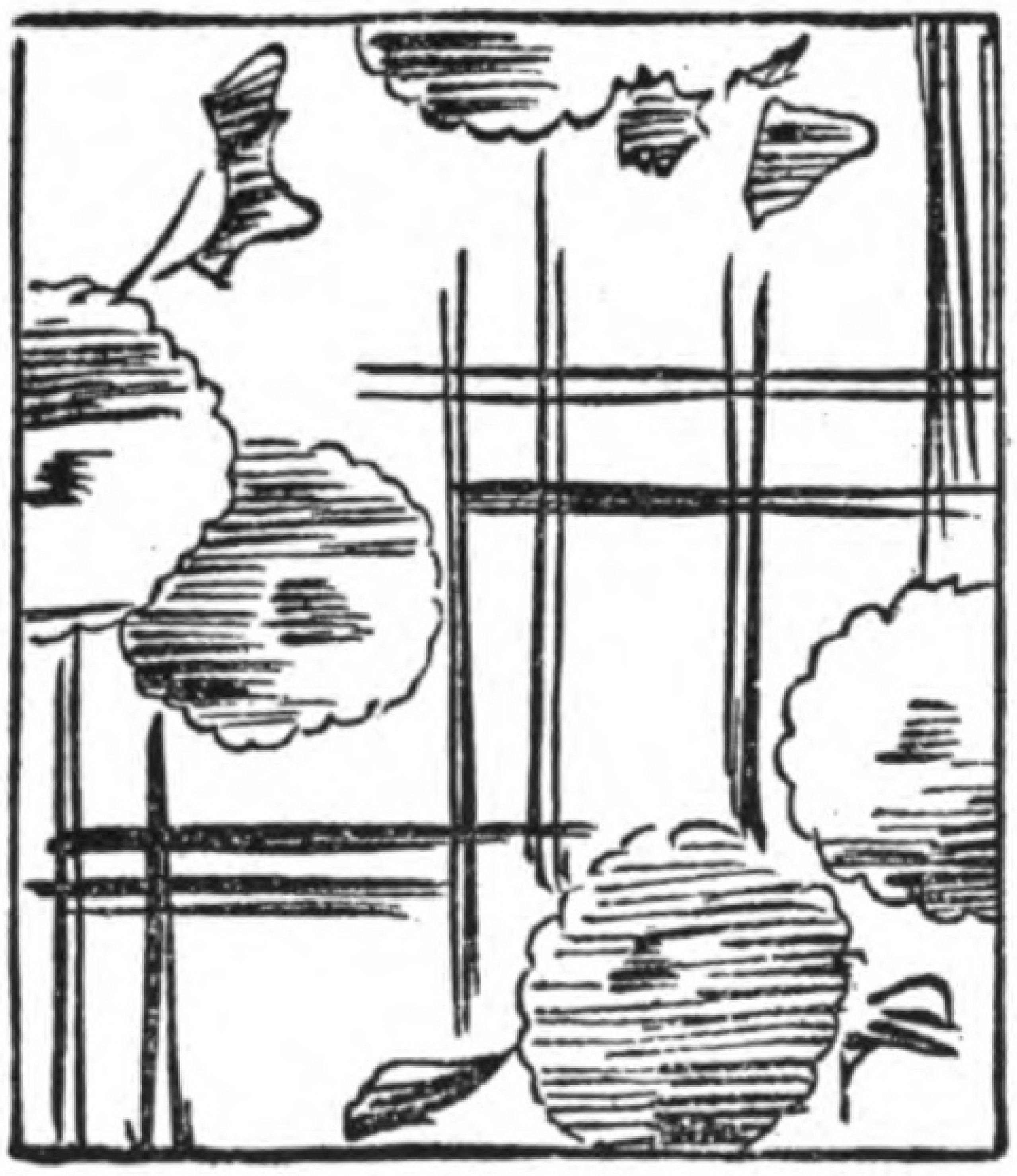
△純然たる有禪染

單に中形模樣や染色のみを吟味した所で、肝腎な地質を選擇せねばならぬ、地質を眞岡本綿や木綿縮では不可とて、眞岡木線へ縞を織出し、縞を地模樣の雨に見立て、夫へ竹の葉や芭蕉を染色する、夫から木綿縮も機業が巧みになつて、縮緬擬ひの地質を織出すのである、其種類を擧たら瓦斯縮、鶉縮、段縮、立しぼ縮山繭縮、金糸入縮、金糸入絽縮、山繭絽縮と云ふので、山繭縮以下は絹綿混織と云ふ趨勢、孰れも縮緬を木綿に摸したと見れば可なりで、此變り生地へ奇拔な中形模樣の意匠を凝して居

る、三拍子が揃ふので縮緬を凌く程の、美化した木綿縮緬有禪が出來るのである。

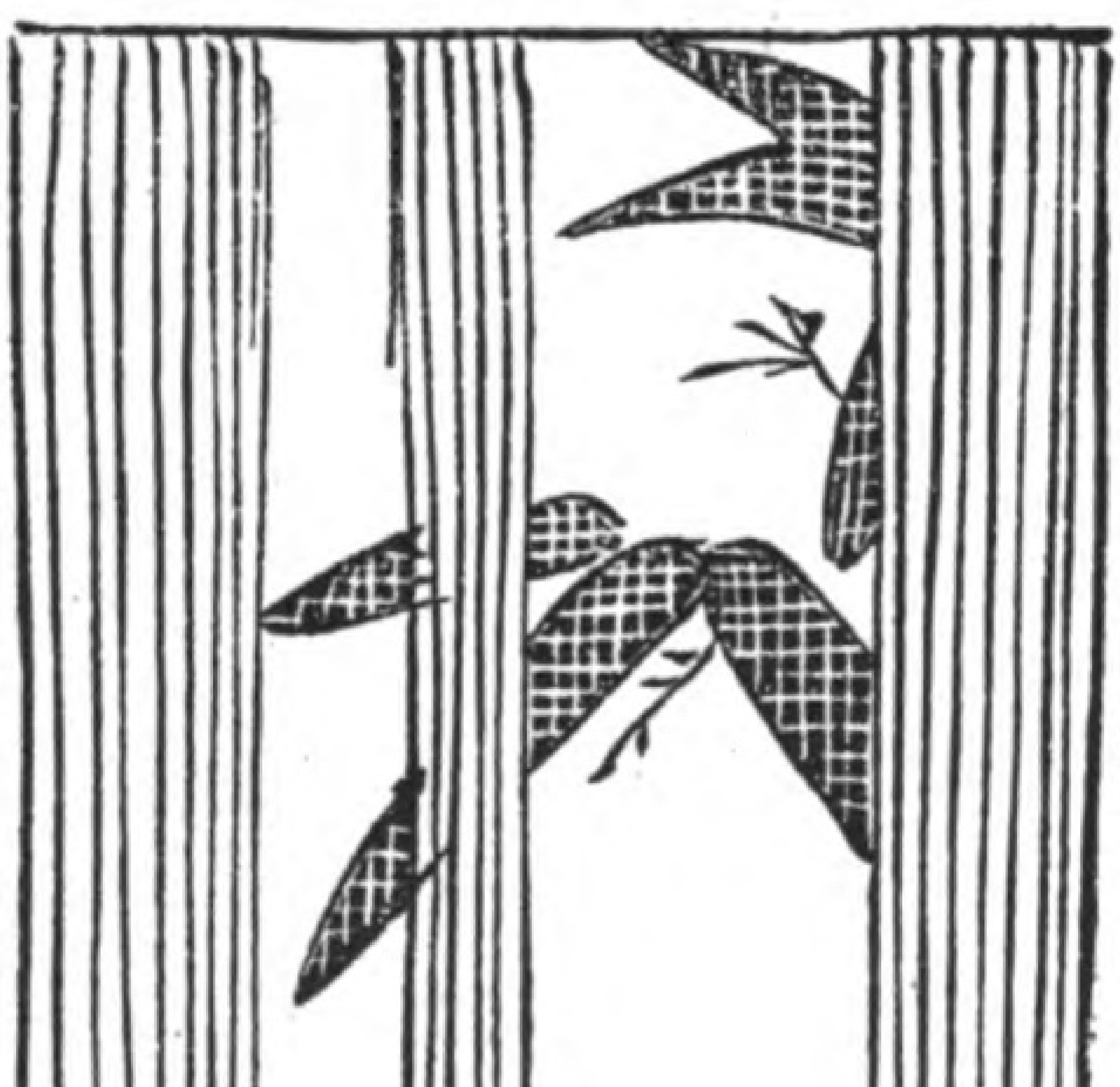
△地染と地白中形

地染は摸様を白く顯し、地白は所謂白地中形である地染よりは地白の嗜好者が多い、假に地白中形と見て挿畫の格子に亂れ萩の如きは萩の葉を濃藍で見せ、花は淡藍、格子は藍氣鼠の淡濃で、配色するやうな傾向だから、染揚つた所の體裁も殆んど縮緬有禪の如く、染色と變り生地が調和をするから、外見は頗る美麗なものである、又小紋類の地色は生壁、寂色と云ふ、藍氣鼠の側が大數を占め、染縞の物の中でも捻搦みなどは、淡濃の色料で染色する事となつて居る、此染色法を俗に本染と云ふ



のだ。

△浴衣地の相場



乃で本年の新形浴衣地の相場であるが、地質と柄行きに由つて價格が異なる各呉服店で反賣の小賣相場は中形絽縮三圓五十錢、中形縮三圓、中形竹しぼ三圓縞入中形二圓、眞岡中形一圓五十錢と云ふ呼び聲なれど、如上は孰れも上等品の標準相場で、同じ地質…同じ染色でも、柄行き則ち意匠の善惡に由り區別してある、思はしからぬ柄行きなれば、此標準相場より二割乃至、一割五分方の廉價である、夫に特等の金糸入や山繭入縮は、三越呉服店の嶄新意匠で、他の呉服店では余り見掛ないから同品の價格表は不必要だから省くとした。

△中形以外の浴衣地

流行中形の外の浴衣地と云つたら絣類の白絣で本薩摩と來たら一番、夫に次ぐが久留米絣、伊豫絣、鳴戸絣、佐々絣、飛龍絣、大和絣、一本絣等で、又縞縮では銚子縮、瓦斯縞縮、明石縮、阿波縮、熨斗目織、紅梅織の種々である、夫から絞類では博多絞、有松絞、乃で先づ浴衣地としたら、藍勝よりは白地物の方が流行と見て可い、だが、今日の趨勢では一班に華美となつて居るので、質素な縞物浴衣よりは、流行中形摸様の浴衣地を好むのだから、市内の各呉服店は中形摸様に、嶄新の意匠を凝しつゝあるとやら。

當今の髪風

女髪結の中で新橋のお愛、お千代、お文などは有名です、お愛の話は前に述べた事がありますがこゝにはお千代の話を伺ひませう。

△髷入

髷入と云へば、新橋の榮治の雀形とか、榮治形とか云ふ様なものそれで矢張新橋附近に人に知られて居るのは、木挽町の佐渡屋の髷入です。

甚麼な髷入が好いかと申すと其れは人々の好みで、一概に是れと云ふことはいへませんが、私共髪結が使つて見て、一番入れ工合の好いのと云ふは、紙が柔らかで幅を狭めに拵へて山のこんもりしたのに限ります。斯う云う拵への髷入なら、見たところの形は、餘り好くないので毛で恰好をつけますから、結ひ上げると、屹度好い形になります。

雀形も榮治形も、誠に好い髷入ではありますが、難を申せば、紙が丈夫で確乎して居る故か、少々紙が堅いです、ですから初めて使ふ時には能く紙を揉んで耳を柔らかにして入れなければなりません、佐渡屋の髷入ですと初めから柔らかに出來て居りますから、別に揉む世話もなく髪結に取つては誠に使ひ工合の好い拵へです。

何處の髷入にしても眞新らしいのよりも、二三度ぐらゐ使つた頃が一番工合が好いです。新らしい間は、何しろ頭に馴染ないから、思はしく行かないところがありますが、二三度入れると、十分頭に馴染んで來るから其れで自然と工合が好くなるのです。其處になると初めから紙の柔らかなのよりも、少々堅いくらゐなのが、何うしても永保がする道理です。

△丸髷の恰好

今流行の髷の恰好ですか、近來は一體に上品にと云ふ好みで、それ

いゝやの側でも、以前の様な薄べつたい髷は、殆ど結はなくなりました。上品と云ふと、肉のある髷ですが、併し一としきりはやつた様な、デコ〳〵の大きな髷ではありません。それで現今流行の丸髷と云ふは、こんもりとして、耳に肉を有たせ、すつとした恰好で、それから根は少々下げめにして、マア一體に低い方です。

恰好の事は、口では十分にお分りになる様に申し難う御座いますから此寫眞を御覧ください、後ろ向きになつて居るのは雀形の髷で、是なんかは。却々品の好い髮でせう。また此方の鏡に向つて居る方の髷は、襟治形を入れて結つたのです。何らも私が結つたのですが先刻申しました通り、初めて結つた時には、緣を悉皆摘んで柔らかにして入れたのです



▲鬢、髱、前髪

鬢や、髱や、前髪などの恰好も、此二枚の寫眞を御覧になれば、今の流行が能くお分りになります。

併し、夫れ〳〵に就いて、一寸お咄しいたしますと、先づ鬢の取り方は、あまり上げないやうに、マア中邊にして、鬢尻を出ぬやうにするのです。次に髱は孰らかと云へば今の流行は、長く出した方です、尤も人々の好みで、少々約め加減にと云ふ方もあれば、成べく長く出してといふ方もありますから無論一體に長めとは云へません。現に此後ろ向きの寫眞の髱なんかは、餘り長く出した方ではありません。だが上品に見えるのは、

先づ此位ゐのところでせう。

人樣の好みも好みですが、人樣に依つては、成るべく長めにした方が好いです。夫れは頸の短かい方のことで、髱を長く出して結ふと、自然と拔き衣紋にしますから、從つて頸筋が長く伸びて見えます。

前髮は、大きく廣く取つて、此鏡に向つて居る寫眞のやうに、低くふつくりとさせたのが、今の流行で、日本風の髮も現今では、幾らか廂髮風に似ております。



△其他の髮

中流以上の御婦人方の髮は、丸髷や高髷を除きましては、束髮が相變らずの流行で、マガレットとか、Sだとか云ふやうな結び方もあれば、其他にもいろ／＼の結び樣がありまして、謂はば皆さんが御勝手な結び方をして居らしやるのです。

日本風の髮の種類を申すと、丸髷、高髷、中高髷、結綿、藝子、つぶし、ゝ、おばこ、銀杏返しなど、上品向の髮もあれば、意氣筋向の髮もありますが丸髷、高髷などの外に、堅氣向にも意氣向にも、行はれて居る髮は、銀杏返しで、今流行の銀杏返しは、輪を餘り大きくしない樣に結ふのであります、鬢や髱や前髮の工合は、前にお噺し申したところと、別に變りはありません。

まだ年の行かない方には、御承知の通り桃割だの、唐人髷だのと云ふ髮がありまして、女學生方の中にも、桃割を結つてお居でになる方が、此頃では能くありますが、唐人髷となると、今は主に半玉の髮となつて、堅氣な方の小供衆

には、此髪を結ふ方が殆んど無くなつた様です。

髪飾りいろ〳〵

観風子

▲櫛笄

櫛笄は、相變らず黒鼈甲製が流行ですが、櫛の峯は金蒔繪でも芝山入りでも、夏季用のものは總て淡泊とした模様です、其他昨年頃から、黒甲の歯形に銀の粱を嵌込んだものが大分流行界に勢力を得て來た樣であります、而して形は、遠州形、新橋形、都形などが、最も廣く持囃されて居りまして、總じて峯の細いものが、一般の嗜好に適して居るやうです。

笄は、黒鼈甲の蝶貝入りや、蒔繪研出しの外に、翡翠平形の兩天が、其挿への乙なところから、近來大分賞美されて居るさうです

金張彫刻及無地櫛笄一組の價は、大形四十圓以上百二十圓▲中形は三割安▲小形は五割安銀張彫刻及無地櫛笄一組の價大形、十二圓以上三十圓▲中形、八圓以上二十圓▲小形、五圓以上十五圓。

蒔繪彫刻櫛笄一組の價

黒鼈甲製大形、八圓以上▲甲張製大形、三圓以上▲黒鼈甲製中形、六圓以上▲甲張製中形、二圓以上▲黒鼈甲製小形、六圓以上▲甲張製小形、一圓以上

黒鼈甲生地金銀及青貝芝山入り櫛笄一組の價

大形、十圓以上▲中形、七圓以上▲小形、五圓以上

▲釵

一般に流行の釵は、玉物です。此好みは四季共に變りなく而して玉は、薄色の珊瑚玉の四五分と云ふところが、最も持囃されて居るさうです、金脚は松葉形のが廣く行はれて居りますが、笹形のを好んで挿す人も尠くはないやうです。

翡翠玉に金脚の釵も、夏向には殊に好いもので、昨年も相應に流行を見ましたから、今年は一層の流行となるのでせう。澁い好みと云ふは、金と赤銅との張分けの脚に、四五分位の翡翠玉を附けたものです。

平打釵は金の彫刻物は少し衰へ氣味で昨今は、黒鼈甲臺に蒔繪または淡泊とした芝山入りのものが流行です。併し蒔繪は一時歡迎された彼の元祿好みのものは全く廢れて、今はハツキリとした光琳風のものとなりました。

若向の後挿は、十八金か、銀臺金消しの透かし彫で、紋は五分位から八分位、年増向の方は、三分から五分位の紋です。

若向の貴婦人社會に流行の平打は、二十金乃至廿二金製で、之れにはダイヤモンド又は其他の寶石を以て裝飾としたものが多く用ひられて居ります。

黑鼈甲臺平打釵及び金銀金消し脚珊瑚玉附釵の價

黑鼈甲臺平打六分位より八分位の丸形彫刻物二圓以上三十圓位迄▲金銀金消し脚丸髷挿玉附四分より五分位の土佐玉、二十圓以上▲同伊太利産の玉附、二十五圓以上▲同島田挿土佐玉五分位より六分五厘止り、二十五圓以上▲同伊太利産の玉附、五十圓以上

金銀透かし彫、象眼、肉彫等の釵價

十八金又は二十金の五分位透かし彫及び白金象眼平打釵、二十圓前後▲銀臺にて右同樣のもの、二圓乃至四圓位▲十八金製肉彫年增向、九圓五十錢▲二十金製白金象眼片切彫、三十八九圓位▲銀臺透かし彫にふろびを掛けたる澁き物、一圓六七十錢位

▲根掛

流行の根掛は、珊瑚の四五分丸玉、翡翠、金の引結び、銀臺金消しの彫刻物に七寶を流込みたるもの等で、就中金の引結びは、年若き婦人方に丸髷に用ゐて、頗る見榮えがあるので、昨今流行界に非常の勢力を有つて居るさうです。珊瑚の根掛は、島田物は四分から五分位の玉が八顆位、丸髷物は、三分から四分位の玉です。

また三管折の金屬製の根掛も、廣く行はれて居ります。丸髷用ものは幅二分五厘から三分五厘、島田用のものは、幅五分より七分位で、模樣は、菊水、蔦、唐草などを高彫にしたものや、寶石を嵌入したものが持囃されて居ります。

珊瑚及び金屬製各種根掛の價

珊瑚土佐玉、十五圓以上▲同伊太利産八十圓より▲金製彫刻ダイヤモンド入り、三十圓以上▲同彫刻ルビー、眞珠入り、十圓以上▲同彫刻及び象眼入り、十圓以上▲同金製平結び、四圓以上▲同松葉透かし、六圓以上▲銀製彫刻鍍金高髷用、三圓以上▲同彫刻鍍金丸髷用二圓以上▲赤銅及び朧銀製の品も右同樣。

▲束髮用一枚櫛

鼈甲製と、護謨製との二種で、唐草、百合の花などの彫刻、及び寶石入りが相變らずの流行であります。

黑鼈甲製一枚櫛の價

唐草に透かし彫に蒔繪を配ひたるもの、三圓前後▲ハート形に唐花の透かし彫、三圓五十錢▲新ダイヤ其他の寶石入り、五圓五十錢▲百合の

彫刻生地磨き真珠四五顆を配ひまはりを無地金蒔繪にしたるもの二圓八十錢。

▲束髪用三枚櫛

三枚櫛も、一枚櫛と同じく、黒鼈甲と護謨製との二種で、模様も猶貝唐草、唐花等の透かし彫り、及び寶石入り、または青貝の活込みなどであります。

黒鼈甲及び護謨製三枚櫛の價

ダイヤモンド其他の寶石入り及び金地黒甲盃に青貝活込み彫刻物、一組五圓以上▲舶來護謨製唐花透かし彫金地蒔繪、一組二圓以上▲黒田舎浪千鳥透かし彫蒔繪、一組八圓以上▲無地鼈甲製彫刻物、十二圓以上

▲黒鼈甲製金彫刻物、六圓以上▲護謨特製品、六十錢以上。

▲束髪用ピン

束髪用の簪は、本鼈甲散斑製、金銀製及び銀臺鍍金で、花物の彫刻、蒔繪、寶石入り等が相變らずの流行であります。上流社會にはブローチ兼用の寶石入りのものが昨今大いに持囃されて居るさうであります。

金屬製及び鼈甲製ピンの價

金製ダイヤモンド入り、三十圓以上二千四五百圓▲同寶石入り、十二圓以上▲同彫刻物、十圓以上▲銀製大形寶石入り、二圓以上▲同小形彫刻物、一圓以上▲無地鼈甲製、三圓以上▲同蒔繪彫刻物一圓五十錢以上。



金鱪飼育法

春塘生

△冬圍と水換の法

金鱪の冬圍は極月の二十日過ぎ、快晴の日和を見て水を換、水槽の北側の方へ六分通り、板で蓋をし、殘つた南側の所へは、竹簾を掛け翌年三月二十日過ぎまで、其の儘置きます、其の季節が來たら板蓋を除き、竹簾のみを置き寒い日には此竹簾で蓋をするです、冬圍中は何程水が汚れて居ても換てはならぬ、快晴の日を選んで、注水をするに限ります、それから平日の水換標準は

三月は二十日過ぎ冬圍を取除きし時に一回
四月五月は十日目毎に水換
六月入梅中は水換無用
七月は十日目毎に水換
八月は七日目毎に水換
九月十月は十五日目毎に水換
十一月は水換するに及ばず
十二月は二十日過ぎ冬圍の時に一回

所で雨水は魚の害にならないけれど、木の葉や軒端の雨垂は害となりますから、爾う云ふ所へ水槽を置ぬやうにせねばなりませぬ、それに水換の水は汲置きの水で、以前あつた水の溫度と同じやうにするのです、

△魚の選擇法に就て

金鱪の良魚は頭大きく、顔巾が廣くつて獅子頭の如く背は、櫓形にして凹凸なく尾筒太く、尾附が緩かで尾先の柔かに開き、姿勢の尤も正い魚を最上とするのです此良魚に反し不合格と稱するのは、口疊、腮まくれ、脊鰭、脊曲り、瘤、凹凸、尾心の曲り、抓み、尾の曲り、剛張りは片張り、つぼみ、不揃、曲み、外出揖尾などが、金鱪としての不具者です。

△尾鰭の名稱と流行

金鱪の姿勢は五百羅漢と同じやうに、素人眼には一樣に見えますが斯界で研究した者には整然譯る相です、頭の格好にも角形、丸形、兜胄形、鮒形とあるのだ、尾鰭も三ツ尾四ツ尾との種類があり、楫尾にも一枚尾二枚尾と云ふのがあつて、楫尾は外から見えぬのだ、良魚としてあります、それから金鱪の流行ですが、之までは稍胴長を嗜好されて居たのですが、本年は昔に歸り、胴迫りが歡迎される傾向ですそれに關東では獅子頭の角形が流行ですが、關西では頭より鱗の模樣に重きを置き、嗜好が自から異なつてゐます。



紹介

△少年百科事彙　岩谷小波閲

開卷まづ驚かるゝ口繪の美麗、四季の草花、動物界の現象、交通機關、地理の一覽等いづれも美彩鮮麗眼を喜ばすの料たり、其他天然界の現象を一幅の裡に集めたる各種の科學的圖畫、誠にこれ趣味と智識の寶藏を展じたるがごとし、編纂上の用意既にこの口繪の上に顯はれたり、さて本文は五十韻の順序により少年の修養に尤も必要なる事項を網羅し、冗を省き要を摘み、取捨の上に細心の用意あるところ流石は多年叢書編纂上に實驗ある竹貫、木村兩氏の手になりしことゝて、杜撰のあらう筈はなし印刷鮮明紙質精良何にせよ、これ丈の大著述にて僅か一圓五十錢とは勿體なきほどの廉價なり、(博文館)

△通俗衞生顧問　羽太鋭治著

表題は極めて平凡なれども內容の價値あること此の書のごときは尠し、凡て衞生上に關する一切の事項は悉く網羅して缺くる處ろなく、人體の生理より百般諸病の事情を詳密に說明して之れか醫療の方法を解示し、丁寧親切、何人にも了解し易くして而かも面倒なる醫學の分類を明かにしたり、素人にも讀まるべく又醫師の參考にもなるべし、(久彰館)

△精力增進法　堀田新泉著

精力は人間生活上の最要件なり、生存競爭上に勝敗の分るゝは必竟この精力の增減に基くこと何人も知る處ろなり、此書人間精力の增進を說いて尤も痛快銳利を極む、苟くも世に成功せんと欲する、青年は必らず一本を供へざるべからず價五十錢、(實業日本社)

△杏葉牡丹

閨秀作家伊藤まさ女の小說なり、婦人の作としては覇氣縱橫、眞に心ゆくばかりの書きぶりなり價五十錢、(也奈美書房)

△黃金嵐

小說界の流行兒德田秋聲の作なり、冒險小說の毛色を帶びて而かも人情の婉轉流麗する處ろ極めておもしろし、定價四十錢、(吾妻書房發行)

△現代青年論

痛文、快筆の聞へある伊藤銀月の當代青年觀を集めたるものなり、流石は銀月なり學究の寢言とは大に相違せり、價二十八錢、(京華堂發行)

○裁縫實習學校卒業式

先般來神田北神保町に新築中なりし同校々舍は此程いよ〳〵落成したるに依り、去月廿三日其落成式を兼ね第四回卒業證書授與式を擧行したり。花房校長の開會の辭に、次で監督藏原惟郭氏より卒業生一同に證書を授與し卒業生に對する告辭として、昔は何時も天空を望みて步行したる爲め遂に池中に陷りたる天文學者あり、迂も亦善しからずや、裁縫の事も素より女子に必要なれ共、たゞ此の一技に偏して他を忘却するが如きは決して諸姉の爲に採らずとて、女子の特性を最も圓滿に發揮すべきを述べ、次に船越男爵の演說卒業生の答辭等あり、式終つて一同撮影餘興として種々の奏樂ありたるが、就中生徒の箏曲は最も喝采を博したり。

○閨秀文學會開講

時勢の必要上、今回文界の重立ちたる諸氏の首唱にて設立せられたる同會は、女流文學者を養成し、兼て一般の婦女子に文藝趣味を鼓吹する爲め、毎週(土曜、日曜兩日を除き)午前八時より同九時まで、市內麴町區九段中坂下成美女學校內に於て授業し、日本文學には與謝野晶子女史の源氏、大鏡、新古今和歌集、作歌法、及和歌添削、泰西文學には馬場孤蝶氏の近代小說及戲曲、生田文學士の詩學美學及美術史、森田文學士の各國文學史等の講演あり、今六月十四月より始業し、夏季中も開會して、何人も入會せしむる由。月謝は金壹圓、從來稀有なる講演なれば既に女子大學其他の女學校生徒を初め、夫人令孃達の入會續々あり、猶開講の日には地方よりも上京して入會する女生徒諸氏あるべしと云ふ。



和歌

與謝野晶子選

（天） 東京 鈴木千代子

けふこの日白き紫二もとの勿忘草を襟にひめけれ

（地） 姫路 梶美白子

しら雲は山のいくつを越えてゆくおのが心は君にはしりぬ

（人） 品川 鈴木歌子

黄昏は涙ぞおつる人待たる牡丹かつちる雨ほそくふる

（佳作）

通ひ路や夕闇ながら君をしもほのにてらしてとぶ螢かな

尾張 井口豊子

鐘しばし空にいざよふ青原や日の入る方に鳥とびてゆく

岩代 菅野廣子

いつ方とさす方わかぬ河舟をしばしとゞめぬ山吹の岸

伊勢 佐々木らく子

君にくし笑みて語りし春の夜の二人を思ひなぐさめながら

薩摩 近藤八重子

琅玕の柱かあらず白枯れて並立つ杉にほととぎす啼く

京都 河合蝶子

ゆく春のおばしま近く君とわれおなじくるしきこと思ひ居ぬ

御社の老いし欅の朽ち枝に春の鳥啼く朝ぼらけかな　京都 泉 たき

君嫁ぐ調度にかけしうす色の布そよめきぬ春かぜの道　下野 高塩かつ子

のどかなる春の日ここに影さして餌飼ひのあらむ君をよぶかな　美濃 山田愛子

柳はら細き雨してほのぼのと明けぬ後朝の人かへるころ　大阪 森柾春子

虹立ちぬ彩なす橋のあなたには戀しき人のありとこそ思へ　播磨 森かつ子

柴の上につつじ一もとゆひつけて家にかへりぬ山少女ども　東京 わかくさ

麥苅き畑の中ゆく獅々の子が緋母衣はらはら夏の風ふく　伊勢 佐々木樂子

鳴瀬川清きながれに舟うけて若あゆつらむ少女子まじり　越後 坪井わか子

水さわぐ谷の板橋渡りみぬ梅咲く山のありあけ月夜　讃岐 赤井かめよ

うきことのその日よりして多ければ逢ひも見ざりし昔をこひぬ　大阪 榎原英野

春の島紫なしてくれにけり小琴をひきて君をまつかな　大阪 吉田頼子

夕ぐれやおもひ出おほき古さとの路をあゆみぬ白百合の花　備中 高草てい子

しら藤の松をからめる寺の門法華經きこゆ春雨の日に　播磨 柳田白百合

夏はきぬ人こひしくばかざし見よ池のほとりのしら花あやめ　豊後 吉松初枝子

五月雨の家の垣根にくれなゐの撫子見ては人をしのばゆ　東京 村田新子

曉の星かげ涼し若葉する丘を越えゆくほととぎすかな　東京 平宮外江

青森　三浦愛子

春の家雨ふるまどのうたたねに顔をおほへる舞の扇よ

横濱　中枝かず枝

佐保姫の御ぐしに似たる青柳に春風ふきて夜あけぬるかな

伊豫　山崎くま

岩はしる瀧に袖ひぢ手折りけるしら藤の花かざしゆかむ

越後　中野好

野がへりの君が忘れし花束に雨そぼふりぬ草の家の椽

讃岐　香川藤枝

たらばなの木かげの庭におりたちて接木しましぬ髭白き伯父

上野　金山秀子

わが泣くに涙はかれぬ五とせを市のちまたにもの賣る少女

備前　近藤さかえ

ほととぎす泣きし涙かわか葉する山のふもとに丹つつじの咲く

東京　平塚白百合

もの思ひなげく少女のやわ手もて琴の緒絶ちし春の雨の夜

大阪　後閑八重子

夏の夜に君がたまひしかきつばた色なつかしき色にもあるかな

近江　植村むめ子

わが家は山吹ちりて山百合の白きをめづる夏ともなりぬ

備後　立神峰子

紅紫いろうつくしき春の野に今日もきくなり少女子の歌

東京　遠藤義子

ものおもふわが身をもたせおばしまにしばし昔の君を夢見し

伊豫　渡邊梅子

おとうとの小さき膳に土やきの牛と馬とがうづくまるかな

美濃　傍島敏子

むらさきの君がみ衣の袖もるる御手としおもふ白百合の花

越後　北本歌子

をやみなく降る五月雨に思ふどちおとづれかねつ川をへだてて

今年また松にかゝりて咲きにけりたれか見るべき藤波の花　東京　藤波萬佐子

西の京祇園の夜の舞姫のあやのたもとに花ちりかかる　美濃　井川松枝子

青やなぎ里のわたしに舟まてはなつかしく吹く河の風かな　京都　齋藤ゆかり

あやめさげて行く君遠くけぶりたり雨ふりくらす五月の軒よ　伊勢　下村しづ代

夕ぐれは絹をはりたる籠さげて螢うつ子のうつくしきかな　姫路　柳田ゆり子

いと長う裾なびかして早苗とる少女が髪に朝の露ちる　岩代　菅野和子

おん墓にただ一人たつ夕月夜若のにほひの胸にしむかな　東京　平岩外江

似し人も見すてかへりぬ青葉みち笛を吹く子の馬につれだつ　下野　流藻の花

美くしき藤の葉ごしに雲見えて夕となりぬ五月の十日　越前　新保浪子

紫の雲たなびくと見ゆるかな佛いますや山のふぢ花　長崎　佐田秀子

うつくしき朝日の光あびながら露にきらめく白の牡丹よ　神戸　今西操子

雨やどり櫻ちる家にしばし居て春の行へをしのびけるかな　河内　竹内敬子

芍薬の花さかりなる夕庭にしろき單衣の人うつくしき　肥後　大野喜美子

山の鳥ちりし櫻の枝にゐて並びうたひぬ春おくる歌　熊本　安田文子

桃すもゝ櫻のちるををしむらむ野にも山にもうぐひすの啼く　京城　原野みきえ

大方はさかりすぐして少女子の折る枝まどふ丹つつじの花　伊賀　服部うた子

伊賀　服部春江

青葉山古き社の軒くちてさつきの雨のふりつゞくかな

周防　安田清子

そし鳥の遊ぶながれに影見えて白ふぢ咲きぬ丹つつじもえぬ

播磨　きん子

少女子の歌にうたはゞふさふべし若草もゆる春の野の原

奈良　馬場昌子

うなゐ子が水せきとめて遊ぶなる里の小川にひるの月見ゆ

近江　花漣

蝶まへど菜の花咲けどなにとなくわれは一人の人のうらめし

大阪　森柾あい子

世をすてし身なりと云へどものがなしさくら花ちる夕ぐれの庵

羽後　はな子

嵯峨の山花にもよろし青葉よし草の家たてゝ君と住へば

京都　波多野松枝

妹は琴とりいでぬすみのぼる今よひの月に笛の音ぞする

備中　柚木民子

葭屋にもすだれかけたり須磨の浦八月すゞし君とある宿

美濃　みゆき

山の井に女神ぬぎける衣のごとながう咲くなり紫のふぢ

遠江　宮城蝶々子

春の夜や都大路もあけがたは田舎おぼゆる鷄の聲かな

安房　和田きん子

若草の夢をこめてもかすむらむ菫咲く野の春のあけぼの

上野　池野まつ子

いつしかと春はいにけむ岡の邊の木々のこずえは青葉しにけり

東京　神代いと子

あれはてし庭の面なる山吹の花にしのばる昔しの人よ

東京　小笹千代

起きいでて雨の戸くれば白たへの卯の花ごろもかづける垣根

短文

◎印は入賞

◎初清書

栃木 玉野とし子

なつかしの背子が、南山役に陣沒してよりもう三年、可愛の坊やは、今年學齡に達せしため、村里の尋常小學校へ入學いたさせましたのです、ある日のことでございました、「かあちやんこれ二重圓えらいでせうと持ち來りし初清書」僞瓊なる背子のうつしゑに一言物言はせたく思ひました。

◎家の鷄

長門 吉山いは

雌が四羽、其中三羽は大かた毎日一ツづゝ玉子を產むのに白いのは二週ばかり少しも產まぬ、昨夕、其白いのが寢屋に歸らぬから皆がもしや鼬でも取はしないかと大心配翌日久しぶりに橙々畑で落ちた橙々をひろつて居るとけたゝましくコケーッコッ……と飛び出したのは 昨夜居なかつた、白、先づ居て安神と云ひながら逃げた後を見ると美しひ玉子が十六ほどならんで居た、可愛いと

◎花賣少女

伊勢 淸子

左手に花籠提げつゝ中には賣り殘りの旗子の花束二つ三つ。家路を急ぐ可憐の少女!!!

來ぎ幼き身のと姿はそゞろ哀れを催しぬ さらば殘りの花を買わんものなと呼び止むれば「アノお氣の毒ですが之れは賣れませんの家へ歸つてお母さんのお墓へお供へ申すのです」

◎入浴の寸感

北海道 黑澤すみ子

湯の中では貴賤貧富の別なく上下の取扱ひなく 何人も同じ假出し同じ湯を用ゆ實に平等集會場である 又身には一點の虛飾なく手拭一本にて滿足す是虛榮心なき處併して幅なきに迷へば己れの幅を貸すは仁 熱き温きに湯水を差すは義、互に流し合ふは信、石鹼で淸めるは智、互ひに挨拶なし合ふは禮なり 斯く湯の中に有りて皆知らず〳〵五常の道に叶ふて居るを一日に見る外へ出て此の樣な處は又と有るでしよか

◎弟のいたづら

金澤 岡崎とら

私には今年やつと六つになる弟があります、涼しい黑目勝ちの眸、豐かな頰、苔の樣な口もと、 それは〳〵可愛い男の子であります、 それがまた大の腕白もので、前程も庭へ出た苔の弟があまり靜かですから、 そつと障子を開けて見ると、餘たまもはなさぬ大切の夏帽を阿彌陀にかぶり猫の背のように丸くなつて、庭石のそばで何かして居るのです、 その無心の風のあまり可愛いので、つい、 何をして居るのかとそつと後に廻てのぞき込むと、驚きました、 何か獨言しながら可愛想に何處から捕えて來たのか、一匹の蟹の鋏や足をもぎ取りて胴ばかりにしたのを庭石の下の田鼠の穴へ捻切れでつゝき込んでるのでした。

◎嬉しき爭ひ

河内 田中八須子

昨日の夕暮でして、兄嫁さんが臺處の板間で、置ランプに油を注がんとせられしに、油が入物に乏きてあつたから倉へ出しに行かれた後、母が

奥から出て來られて、其ランプに驚きホヤと蓋とをコナ微塵、倉から返られた兄嫁さんは夫を見るより、母の前に兩手をつき、妾の置處が悪ふござりました、どこも御怪我はござりませんか、と詫られると母は、イヤお前が悪いのじやない全く私の不注意からじや、イエ妾が……、イヤ私が……、と互に粗忽の詫合を傍に聞いて居られた兄さんが、ソリヤ双方共に悪いのじやない、置ランプが腹を减して物を言はなかつたからだとの中裁に、忽ち上る家内の笑聲……

露ちやん

福岡　是松英子

今まで裏の花園のまはりを、きツきツいツて、蝶を逐ひまはして居つた露ちやんは、もういつか疲れて、涼しい木陰の搖籃の中に、すや〳〵と眠つてるのです、するとさつき逐ひまはされた蝶々は、恨らみもせずに其のあいくるしい手に、しつかり握りしめてる苺の花をたづれて來て、時々其の鬢かほを、うかゞつています、あゝかあいゝ露ちやんの今の夢は。

◎鯉

羽前　谷山たに子

ザヤボンといふ水音に烏渡針の手を止めて庭を見た。池の緋鯉が藤の花の影に戯れてゐる。數々の鯉はそれに隨つて楕圓形に行列を始めた。揚々と先に立つた緋鯉が得意の尾を棹つた。今年六つになる悪戯な弟は。見かれてか小石をポンと放り込んだ。すると殘らず深みに潜んで仕舞つた。咲き亂れた藤棠は再び水鏡を寫してゐる。椽側の猫がこの騷ぎに目を覺して頸に脊を伸してゐた。

梅雨

和歌山　島田千代子

降りつゞく梅雨に訪ひくる人もなく 水かさまさりし小川の流るゝ音のみすさまじう、さらぬだに青葉小暗き窓のうちよむ文にもあきて障子おしあけ見渡せば時を得顔なる蝸牛の庭の飛び石に 角出すもいとにくし

友の許に

滋賀　岩崎操子

文さんあなたは私に當つた女學世界に福引籤があつたなら 御天氣がかわると御云ひでしたが抽籤が付いて居ましたしかし 昨日も今日も御天氣はかわりませんよ六月十五日發行の定期增刊に 何等かしれます立派な景品でしたらうらやましてあげましよー

夏の朝

大阪　磯まさ

裂帛の如き杜鵑の聲きゝてより後れむりもやらで歌に悶へしが、ならず曉の風涼しう襟に吹き入るに、外見れば南の峯巒、地塘漸く薄墨の色とはなりぬ。心地よき儘に野川に下りて洗面すれば心氣すみて亦一片の邪智なし、次第に明るうなりし東の空に森を離れしカアの一聲、オウ同じ烏にと、昨夜の興を更に覺えて可笑し。

片田舍

芝區　新野壽枝子

花の都に程遠からぬ村落に病める身を養ふべく昨日より來りぬ、紅黄歛きたる畑にまだ浦若き乙女の姉様かぶりに赤だすきに持つ鍬さへ 重たげに空には雲雀の節おもしろき 凱歌を唱ひ夕べ散策の畔路には可憐の蛙平和の御代をうたふ 都に住みし其の時は片田舍よなどあなどりいみ

しに今この風景をみては何にたとへん樣もなく　やかて歸京の其時は淚きながらも筆にうつして家庭とせんと思ひさだめぬ

詩的

芝まつ子

或日風が大變吹て日はポツ〳〵と照ていやにむし〳〵した午後　私は室で仕事をして居りましたが餘り暖たゝかくて　頭痛がして來たので其のゑんに在つた下駄を履て庭へ下りました。なまぬるい風にふかれてあちこちと步て居ました。ふと日頃大事にして手をかけて居る草花に水を遣ろうと思ひ立つて井戶に水をくみに行きました、是れは父上の御氣に入りの洒落た庭井戶であります上がつて來た釣瓶の中には、やつと咲いた彼岸櫻が風にもまれて折れた小枝が其の中に浮て居ました其れが、餘り可愛らしく美くしかつたのでそばに植木の根分をして入らした　從兄に「一寸御覺なさいよ可愛わ詩的でしよう」と云つたら「なにが」つて見に入らしたが「へ、、、」と笑つて「そんな事云つて云ろ君が詩的だよ」とからかわれてはづかしくつて美麗と思たのも忘れて大急ぎで水を「ロロ」にあけて花床の方へ逃る樣にして行つてしまいましたその後で何と思て入らしたか知らないけれどもほんとにきまりがわるくつて―

田植上り

岩代　菅野廣子

四日がかりの田植もすんで、お誂ひの雨が、そぼ〳〵と降つて來た。まだ稲はうなだれ、水は濁つて居ても、何となく、すが〳〵しい晴やかな眺よと思えば、蛙の聲まで新らしく、其處の小川、彼處の農家も、知らぬ里を見るやう。秋を待つ迄もなく、豐かな出來作が、目前に來たやうに、、濡るゝも構はず廻り步く村人のにこやかさ。拔ぎ捨てた乙女笠と、泥まみれ

の着物を着て、姿も思はず発育した。

青葉若葉

伊勢　清子

花は根に鳥は古巢に歸り來ていつこともなく夏めきぬ。昨日まで美しと愛でし庭の櫻も何時しか散りて。青葉若葉にかはりて色濃き松の翠と打交りたる樣なんど云はん方なし。夕立も名殘りなく晴れて明月庭の面を照らし青葉に殘れる露に宿りて其樣得も云はれれば　木の下近く步み行きける時。一陣の淸風若葉にそよぎてはら〳〵と亂れ散り輕く我が面を打つもうれしく忽ち日頃の憂さを忘れぬ

草餅にそへて

和歌山　山口文枝

ぽか〳〵と暖かい風に、垣根の芝、萌え出でしかば、妹の竹子と、二人がかりにて、裏の山や、谷間を、かけ廻り、やつと、ざるに、一ぱい、摘み取り美くしい、色の、草餅を、搗きましたの、ほんの、少し斗りですが、序手に、折つて、來ました、節端に、そへて、差上ますから、御賞味ください、妹にもたんと、賞めて、やつて頂戴よ、

晴れ間の庭

青森　三浦愛子

しめやかに降り暮したる五月雨のよう〳〵に晴れ渡りぬ。軒端を傳ふ玉水のとたえんとしてつゞけざまに二つ三つ、露繁きかなたの築山には濡れそぼちたる海棠淚含みて笑顏つくれば、池の汀に影うつせる柳も亂れし糸を掛けじれり。破れし籬に、いはぬ色ほのめかして咲く〳〵山吹のたわみたる下枝を、ざれがほの風ゆら〳〵とゆり動せば眠りし胡蝶のゆくりなくも驚うたれて舞ひ出づ。

溫泉より

信濃 春野みつ

宿の庭に栗と海棠とが各一本、女夫のやうに並んで咲いてゐます。朝霞の晴るゝ頃、二階から見ますれば、柔かい日の光りを浴びて、はにかむやうに紅い方見えまする。夕霞のかゝる頃、溫泉のガラス窓から覗きますれば、かうかうしい月の光りに照れて、白い方がいきいきとして居りまする。妾が愛に逗留して居りますのも、これが嬉しい許りなのです。

虫の宿

肥後 喜美子

夕飯散歩の歸り一枝の萩を手折つて机上の瓶に挿して置いた 讀書も終つてふと見ると一疋の夏蟲が宿つて安らかに眠つて居る 其様が如何にも可憐に見えたので平生きらいの蟲ながら 其儘にして自分も臥床に入つた

ひなぎく

岡山 岡崎ナカ

今朝もまだ雨は降ていた、ふんに出て庭を見ると雨をうけた、さつきは花にくれないをまし紅葉は葉に色を加へておる中に、まあ、なんといふ可愛い事でせう石のほとりに一株の ひな菊花に露をやどして一しほやさしく笑ひ初めておりました 私はかはゆくてゆくて「きす」してやりたく思ひましたが蓋につんで机の上にかざりました

初袷

栃木 落合ノブ子

花は眼に殘りて、耳に時鳥、聞く此頃の暖かさ、父も袷を着始め、前合せては不審顔、お父さん綻びですかと問へば、イナ、仕立が違ふた前が良いといふに尺度を改むれば、違ひにあらで父の肺、寧といふ字を三つ過ぎぬ

手紙の終りに

神戸 泉陰子

私は父母君に別れて五十里の海離して、學びの窓に居りますが、來た三日目に、何と無く淋しく思つて居りました、すると門口に「郵便〳〵」の聲と共に、投げ込みましたので、拾ひ見ましたら、父君のお手紙で有りました。私は喜んで開封して見ましたら、其終りに「姉さんお勉強なすつて早う歸つて頂戴よ」とやさしい妹が文字、思わずホロリと涙が一滴二滴

福引

香川 山地玉子

朝な夕な、我が心を慰めて、片時の間も、傍はなれぬ程に、親ひし、此女學世界もこゝに 第百號の紀念として、福引の興を、我等に與へられたり、あな幸多さ、今日の我身には、博多帶側にも、畜らまほしきものを、さて

郊外散歩

韓國 廣瀨よし

櫻も櫻も散り果てゝ山野一面青毛布を敷いたようになりました 今日は丁度日曜で天氣もいとうらゝかに 照り渡り春風袂を拂ひ霞たなびく好天氣見渡す限り青々と氣も爽やかにのどかなり ヒバリわ嬉しそうに近く空にとまい上りるあずり 鳴く音も面白し小山の上より眺むれば田野は丁度地圖をゑがいた如くはるかに沖を見渡せは 黑き煙を吐きながら走りける 或は白帆を掛けて走るも有り鏡の如き海にかゞやく太陽の光りは金の星かと疑はるげに心地よき時節かな

白ゆり

越前 新保勝子

おゝ白百合私はこの白百合と言ふ語を聞く毎に一種言ふ可からざる感想が胸に湧いて來て、いつも愉快で堪へられ無いのです、何故だらうとの疑問はこの感想に就て起つて來るのですが、之にはいつも適當な解釋を下した事がないのです、凡そ花といふ花の中で私は白百合が一番すきで極端にいへば、白百合は私の命であるので、あの純潔な色、清潔な薫り白百合は決して地上の物でないのです、どうしてあの白百合がこの低い地上の物である可き筈がありませう。

さやう、白百合は決して地上の物ではないので、白百合はたしかに薄命なる天使に外ならぬのです。

悲しび

大分 加納豊子

祖父の君は逝き給ひぬ、噫我が懐かしの祖父の君には終にみまかり給へり、蕭々と青柳に糸の如き雨靜なる此夕、豫て期したる事乍ら今更に我身も絶ゆらむばかり嘆けど、悲しめど逝きて歸らぬ人の玉の緒、噫何時の世にかは歸り來給ふべき、餘りに心痛めば聊紛らはさんとそと庭の面に下りたちて翔雨霎々たる老松の下に佇めば又しても……思ふも詮なき事乍らげに褒ましきは汝の榮、春や千年の昔祖先の君の此宿に移り住みましゝ時手植え給ひしと聞く此老松、春毎に若緑色添ひていよいよ榮ゆく其姿、オヽ老松よ汝をめで慈しみ給ひし祖父の君には今宵しも失せ給ひしなるぞ、汝心あらば何とて救ひまつらんとはせざりし、あはれ汝が幾千年にも餘りぬる 其齢などて分ち奉らざりし、思へば情なの汝老松や。

兇してよ若松悲しさの餘り徒に汝のみを怨み憤りし事の恥かしさよ、朝の露の尖よりも果敢なく消え給ひし君を……汝の心は切なるも救ひまつるに術なかりしならんおゝそれよ 我とても我生命かけてもと祈りしものを、何事も儘ならぬは浮世とや、日頃めでまし丶花と共に敢なくも散り給ひし事中々に悼ましや、オヽ懐かしの祖父の君、知らず今宵靈魂の行衛や何處！止みなんとすればいとど倚ハフリ落つる涙を 拭ふ折しも何處よりともなく聞え來る落花の曲 しめり靜なる春雨の空を縫ひて風のまにまに遠く近く高く又低く。

繼子

山口 しな子

「姉さん此花母さんに上げやうれ－」

と云ふ聲がするのでふりむひて見ると十許な女子と 七つ許な男子が手を引き合て優しい手にレンゲの花を持て居る

「あゝも少し摘むといゝのだけど今日は早く歸らないこいけないかられ－武ちやん今宵は母さまがいらしやるのよ だかられ－明日からは御墓には參られないよ

と云へば男の子は暫く無言でいたが早泣き聲で

「じやあれ－姉さん日に一度ならいゝだらうか」と

誕生日

東京 廣守千能子

今日は第十七回の妾の誕生日……。

一ト月も前から、福引、あてもの、絵探し、幻燈、其れ〳〵工夫を凝らしたもの、ことに福引では松戸の文子様が丁度、兄様の寫眞を、兄様が文子様のを引當てるやう、弟と二人一生の智惠を振ふつて、工夫してまつてゐ

のに肝心要の文子樣がお見えにならない、今か今かと立たり居たり、氣はそは〳〵足音のする度每、庭へ走つたり、門へ出てもお出でが無い、オヤ〳〵此んなお約束ではなかつたが若しや　突然にお用が出來てこられないのでは有るまいか、吁左樣だつたら折角の事も水泡となつてしまうのに。ヂヤラ〳〵敷石の鳴る音……此度こそは……まあ厭やな、ザヨンか頸に付いた鎖を引づツて居るの。吁々文子樣!!!早く〳〵と用も無い書齋へ出たり這入たり、氣はいら〳〵折柄、竹やの頓狂聲?、オヤ！松戶のお孃樣がお孃樣〳〵

小兒

筑後　野本たつ子

われ長崎にありし時　誠の妹の如くいつくしみし愛らしき小兒ありけり彼女は不幸にも襁褓の中に慈母を失ひ　寂しき家庭に生ひ立ちつゝありしなり　然れと彼れはそは少しもかへりみぬ如くにして日々我家に來たりてわれの學校返りを待ちつゝありていつも　愛らしき笑みをたゝえて喜びさわぐなりきわれ裁縫すればかたはらに　小聲にうろ覺えの唱歌うたひつゝ遊び暮すこともありき

然るに一とせわが一家は彼の愛らしき小兒を殘して　轉宅することゝはなりぬあゝその折の悲しかりしことよ　今思ひ出づるもいと心苦し彼れはやさしき眼に露をやどし姉樣遠き御國へ行き給ふとは　誠にやといひて泣きぬわれは只僅かにうなづくのみにて淚に袖はうるほひぬ、あゝ愛らしきは小兒なるかな　あゝ淸けきは小兒なるかな彼れの前には名譽なく黃金なく僞なく罪惡なし　その笑むや愛らしき桃色の頰にかぎりなき歡喜をたゝえ　その淚や朝の野邊の草の葉末に結べる露の如しあはれこの笑みこの淚實に天界の福音ならざらめや。

寫生

靑山　平井靜子

もう此海の景色も近々で　再び眺める事は出來ぬと思ひ折よく潮も大分干て居るから磯の上に腰をかけ　海士の子供等が何やら海草を取て居るから拙いけれども寫生をなさんと用意のはがき帖出し　そろ〳〵書初めたがやゝ半分位と思し時後の方にてしきりとくるしそうに咳をする　物が有るより思はずふり返り見るに　いつの間に來たか靑ざめた顏色した一人の男子やはり手に筆紙を持しきりと　こちらを見何やら書て居る樣子しかし自分を書て居るとは知らず平氣で自分も寫生をする　また見返るとどうやら自分をかいて居るように見へしかば　いそぎ一段ひくき岸へ降りそつとのぞき見るにこなたを　じいつと見つめしまゝ妙なかほして居たさて又書ふと思へば子供等は　がや〳〵わめきながら陸へ上ていつてしまふとう〳〵自分も書けずに終ふ

妹

岐阜　度會よし子

學校から歸へると、今年四つになる妹が、くす〳〵と泣いて居た、なぜ泣くのかと尋ぬると、姉さんのお歸りが、餘り遲かつたのだからと、我は思はず抱きあげて、しばし接吻せざるを得なかつた、あゝ、かゝる妹をもてるわらはの幸福は幾何ぞ

節儉

埼玉　佐久間白菫

信夫が今日學校から歸宅してすぐしやぼんをふところに　をしこみて居るので母が「信夫やしぼんをなぜ　ふところへなんか入れるのです人が笑ひますよをよしなさいと言へば、信夫は不平そをにダツてお母さん學校の先生が生徒は節儉「石鹼」をむれとしなければ　いけないと申しましたよ

謎々

◎印は入賞

「小姑」、「諸國名産」、「活動寫眞」とかけて

◎小姑……近火のとび火と解く、心は小さくても油斷が出來ぬ　後志　黒澤隅子

▲活動寫眞……啞の芝居見物と解く、心は物音は少しも聞へれど只動いてるのを見る　後志　黒澤隅子

◎活動寫眞……こはれかけた柄杓と解く、心は繪(柄)がうごく　静山　太田かめの

▲小姑……假名ばかりの手紙と解く、心は讀め(嫁)にくい　下野　永井喜久

▲小姑……墓場の燐火と解く、心は夜目(嫁)にはこはい　京都　砂川澄子

◎小姑……美しい籠の鳥と解く、心はうちあけて放(話)しにくい　四谷　とめ椿

▲諸國名産……絹屋の見本と解く、心は皆それ〴〵に變つて居る　四谷　右同人

◎小姑……海上の黒雲と解く、心は波風がたちそうな　京都　中條こま子

▲諸國名産……諸宗の末寺と解く、心は官廳(管長)が保護する　同　同人

▲活動寫眞……流行品と解く、心は移り(寫)かはりが速い　同　同人

◎活動寫眞……海上の月と解く、心はうつッて動く　麻布　池田百合子

◎小姑……博覧會の雨漏と解く、心は技師(義姉)を責める　門司　青木みよし

▲活動寫眞……梟と解く、心は闇くならなければ見へぬ　同　同人

◎小姑……路傍の石地藏と解く、心は夜目(嫁)には鬼と見える　下野　石井蝶子

▲小姑……紙鳶と解く、心は氣(木)にさはると大變

▲活動寫眞……正直な雇人と解く、心は陰(影)でもよく働く、

▲小姑……老人の手紙と解く、心は讀にくい(嫁憎くい)　美濃　彷島敏子

▲活動寫眞……秋の天候と解く、心はかはりがはやい　同　同人

▲活動寫眞……死だ虫と解く、心は蟻の飯(ありのまゝ)　大坂　[illegible]まさ子

◎活動寫眞……ハイカラの女學生と解く、心はしきりに寫眞を交換する　駿河　大村菊子

◎小姑……登山者の息杖と解く、心はたよりに成つたり、邪魔に成たり　京都　神村富久子

▲諸國名産……決死隊の人々と解く、心は都市([illegible]死)に集まる　同　同人

▲活動寫眞……合せ鏡と解く、心はうしろから寫して見る　同　同人

來月の課題

△銀貨の縮小とかけて

△長い手紙とかけて

△みだれた家庭とかけて

ものはづくし

◎印は入賞

奥ゆかしきもの

▲立鏡にうつれる廣間　赤阪　西川よね子

▲令孃の振袖姿　千住　篠山菊代

▲松風の音　麻布　池田百合子

▲みえを飾らぬ令孃　赤阪　西川よね子

▲もの識で差出口せぬ人　濱町　吉川秀

▲二重橋より皇居を拜す　奈良　穗川みさ子

▲伊勢の大廟　横濱　中なにかし

外に同案十種

▲清涼殿に風煮る　大坂　林美子

▲木蘭の香り　日本橋　吉川秀

▲某音家の質素なる暮し方　尾張　氷室けい子

▲誇らずして氣品そなはる人　伯耆　長田ふみ子
▲奥樣のまろまげすがた　奈良　毛利きよの
▲御濠の松　東京　平岩外江
▲老木の立茂れる神社　岐阜　度會よし子
▲功をゆづり合ふ軍人、分限より少し低くめた服裝　京都　小西多津
▲舊師の墓に手向くる少年の心　紀伊　黒柳三子
▲高野山の奥の院　和泉　谷郡久能子
▲襖に擦れる衣の音　旭川　吉住沖月
▲籬の梅　神戸　水野てる子
▲賤が家のまがきの白菊　韮山　諏訪清子
▲人の話を中から取らぬ人　山口　中山秀子
◎高殿の琴の音　備中　江見定子
▲流行を追はぬ優姿　大坂　落合花子
▲深窓を漏るゝピアノの音　三重　神田清子
▲英雄の墳墓　神奈川　長瀬きく子
▲東郷大將の御挨拶　京都　藤田靜枝
▲禁苑を洩る鶴聲、神苑の御雅樂　岐阜　櫻井育子
▲何事も出過ぎぬ人　山田　細野ふみ
▲老杉深き中の神社　羽前　谷山たに子
▲深山の中の小社　山口　梅田正子
▲人の來て居る時友達から手紙貰つて封を開かぬ迄　周防　河津才子
▲密樹の奥に見える櫻花　新潟　大塚代根子
▲生垣をもれて聞ゆる琴の音　京都　中條こま子
▲廻り道して老人を導く孃の心　上野　小川さと子
▲高倫にかざりたる座敷　京都　砂川澄子
▲貴婦人のホータイ卷　群馬　栗原庫子

花々しきもの

▲古武士の一騎打　千住　篠山菊代
▲草花に霧　東京　西川よね子
▲巴御前の武者振り　大坂　磯まさ
▲名乘りあげたる新手の豪傑　大坂　同人
▲敷島の大和心　長野　小田しげ
▲散る櫻花婚禮の裝　伯耆　長田ふみ子
▲端艇競漕　東京　平岩外江
▲梅ヶ谷の土俵入　後志　黒澤隅子
▲博覽會のイルミ子ーション　駿河　大村菊子

外同案三十種

▲觀艦式の皇禮砲　大坂　淺岡政子
▲はれの場所にて名高き鬪とりのかちどきの聲　和泉　谷部くの子
▲廣瀬中佐の最後　旭川　吉住沖月

外同案五十種

▲芝居の仇討　仙臺　荒つる子
▲馬上の軍人　小石川　柳澤てい
▲大功ありし軍人歸鄉の時　備中　江見定子
▲嵐に散る櫻　信濃　足立照子
▲櫻花の散りぎわ　越後　阿部常子
▲國旗行列　京都　藤田靜枝
▲螢合戰　岐阜　櫻井育子
▲日本海の海戰　三重　細野ふみ
▲童の雪合戰　周防　河津才子
▲春の野に嫁入行列　紀伊　川俣たれ子
▲仕掛花火とイルミ子ーション　京都　中條こま子
▲敵前の格鬪　茨城　古谷ふみ

聞いて快からぬもの

▲米國人の日本人排斥　青森　棚田まち子
▲母校の醜聞沙汰　千葉　佐藤たけ
▲下品な言葉　横濱　中なにがし
▲重患者のうめき聲　尾張　氷室けい子
▲自分と同じ病症の人の死去　越後　笠井きよ

▲寡婦の閑話　奈良　吉村八重子
▲姑のあて言、ひそ／＼話　伯耆　長田ふみ子
▲來客の去つた後の惡口　本郷　小林　榮枝
▲親の惡口云われた時　大阪　淺間　政子
▲隣町のペスト騒ぎ　京都　藤田　藤枝
▲花柳界の俗謡、金滿家の話し　岐阜　櫻井　育子
▲深夜の足音　羽前　谷山たに子
▲あてこすりを云はれる時　四谷　乙女椿
▲繼母に亡き母を惡しざまに云はるゝ　上毛　三吉　亮子
▲前をこされた妹の餘談　上野　小川さと子
▲しめらるゝ鷄の聲　京都　砂川　澄子
▲夜店のお神の畜生呼はり　小樽　大杉　久子
▲借金取りの口上　群馬　栗原　庫子
◎嫁の里じまん　江州　島村　壽子

ものはづくしは暫時休題として來月よりは

▲比較萬物智惠くらべ

と題するものを募集致します、これは何でも題に因みたるものをいろ／＼に考へて面白く取合せてつけるものです、たとへば橋と出題せば、鋲とつけ、由め字と題せば、鐵とつけ、鉄路と題せば麦酒とつける様な趣向のものです、いづれも奇抜にして意想外の妙味あるものを特撰と致します、そこで來月の新題は

△紫式部　△西洋料理
△忠臣藏　△金鵄勲章

一口噺

◎印は入賞

▲　京都　武部すみ子

妹「ねえさん今日といいた婦人博覧會はれ、何の定期増刊です、姉「あれはれ女學世界のよ、妹「そんなら東京や大坂の博覧會は、何の定期増刊なの。

▲　横濱　河原　よし

母「坊やもし熱いものにさはつて手が熱かつたら直(すぐ)に耳に手をあてるとなをるよ」坊「そんならあつい物を食べてのどが熱かつたらどこへ障るとなをるの。

▲觀月橋　中田　清子

でも文士　甲「博覧會の觀月橋は餘程詩的だゾーダ子」デモ文士　乙「そりやそうだとも何時でも月が見えるから。

▲　芝　新野　壽枝

渡米醫學者に謝ひ　甲「君米國は隨分進歩してるときいたか本統かれ、乙「進んでるとも僕は驚いた、甲「何故、乙「たつても乞食でも英語を使つて居たよ。

▲　門司　齊木みよし

裁縫教師「お仕事の終りには皆さん針の數を檢べますか、生徒「先生檢べても駄目で御座いますよ、教師「何故ですか、生徒「最初檢べて置ませぬもの。

◎　岐阜　度會よし子

子「お父さん／＼昔の武者は餘程大きかつたのと見えますれ、父「今の人と格別違はないさ、子「それでも城を枕に討死したと此本に書いてありますもの。

▲　德島　いち子

生徒「先生基督は水よりも血が清らかなものでしようか、田舎先生「ソリャア水が清いでせう、生徒「デモ神よ願くは尊き血汐を以て我を淨め給へと唱へて居ました。

▲　德島　射場げん子

子供「お母さん今度救世軍のブース大將が日本へ來られました、母「そんなら又日本の兵隊さんが行て手傳て上げるのかゑ、

▲大發明家　伊勢　下村　靜子

細君「貞人は大發明家で御座ります、某「何を御發明になりました、細君「それは未だ秘密なんで

御座います。

▲　讃岐　向井ちゑ子

甲「新聞記者も館節も同じ事れー」乙「馬鹿いへいやしくも天下の耳目と云はるゝ新聞記者がなんで館節なものか」甲「でもかゝればくへないもの。

◎正直な答　福井　片山　千里

教師が奢侈と云ふ言を生徒に說明して、もし私が立派な首飾手飾或は指輪等をはめて、美しい衣服を着て來たとすれば、諸君はそれを何と申しますかー、一生徒答へて曰く「大方先生は借りておいでになッたのでせうと申します。」

▲

甘酒屋「オイ君甘酒と新聞とかゑないか」新聞や「よし替ゑましよう、」とぐつと飲干して「それもう一枚どうですか。」

▲　埼玉　小林美代子

子「夏の朝祖父の庭に立てるを見、お祖父様つめたいでしよう」祖父「なぜ」子「でもお祖父様の御つもりに霜が降つてるもの。

▲　越後　笠井きよ子

母「これ娠何故腹と云ふ字を横に書くのだ、娠「それでも隣家の叔母さんが腹ばかりは立てないが可いと申しましたから。

▲有料便所　横濱　齋藤いと子

田舍者「博覧會の有料便所にて小用をなし行かんとするを、掛りの人モシ〳〵「二錢頂きます」と言へば、田舍者顏色を變へて何!!二錢だと、馬鹿を言へ、我等の國では一杯十錢で買ふぞ。

▲　近江　平田與惣子

子供「無學の祖母に向ひ、此の字は何んと讀むの、祖母「嫁惡い。

▲　岐阜　度會よし子

甲、音讀と默讀と、どちらが覺えやすいだらふ甲、無論音讀さ、甲、なぜ、乙、自分で讀みつつ自分で聽く事が出來るから。

◎ハイカラ娠　大坂　田村　重子

ハイカラ娠寫眞を取らんとして、先づ鏡に向ひ髮リボン眼鏡を直し、其の位置に就く、寫眞師レンスの蓋に手をかけ、寫「ハイ寫ります ヨー娠「ア、一寸待つて下さい、未だ香水かけるのを忘れて居つた。

▲　岡山　村上　國子

娠、父上さん是から金を借る時は秋になさいよ、父何故と問ふ、娠其でも秋の借金(雁)は和歌にでも詠じて居るではありませんか「父成程。

▲白粉　うめ子

妹「姉さん、おしろいをつけると、色が黑くなるの」姉「なぜよ」妹「だつて姉さんは、夜るねる時おしろいをつけても、朝、顏を洗ふと色が黑いからよ」

▲きにいる仕方

男「貴方のためなら、どんなことでも、いたします女「きッとそうですか」男「御れんには、およびません、何なりともいつて御らん」女「それではあなたこれから、かへつてください」

▲　すみれ

母「オヤ伯母さんの處へお手紙が書けましたれお菓子一折差上げ候と云ふのは何かお前が買つておあげかネ「イイエ作文で習つた通りなの。

▲運動會　石川　房子

妹「私去年の運動會には一番だつたけど今年はだめよ。姉「なぜ。妹「でも昨日天神樣のお宮へお參りしておサイセンを上げたられカタンカタンと云つたもの。

追加短文

愛らしい戰爭　伊藤　さう

築山の軍は、今、全力を注いて防いて居る、攻擊軍の指揮官らしい、芳坊は、軍刀を振つて、進め〳〵と號令してゐる、衆に抽んでゝ將に山に攀ぢ登らうとした一刹那、山上より打下した小太郞の毬に端なく右股を打たれた、芳坊は從卒の文吉に舁かれて後方約二十間程退却して、椰の蔭に收容せられた、此處は野戰病院であらう、お花とお千代とが、紙を裂いて、すぐ繃帶に取り掛つた。程なく鳴り響いたのは休戰の喇叭であるそ。

▲人事活斷▼

△深山櫻子へ＝＝豫期する所に緣無くして豫期せざる所に幸あり、故に思はるゝ所の緣談は纏まらず。今年の暮頃良緣あり。髪を厚くする法は「衞生顧問」へ御尋ねあれ。

△賴み女へ＝＝良人は鍋にて貴女は其蓋の大なるものなり、然るに其鍋を大きくせんとするは到底望む可からざる事なれば先づ其の蓋を削りて之に合ふやうにす可し、此の心懸あれば行末必ず出世繁昌疑無し。

△青山栄の花女へ＝＝虎を蓄へるが如し、之を放てば必ず災來る、寧ろ愛育して益々其恩に感せしむ可し、破約は大に不可なり。

△ねがひ娘へ＝＝大旱に雨を待つが如きの卦なり、大に望む可くして如何とも爲し能はず、されば今の所自然に運を待て心を燥る可からず、燥れば燥る程災有り燥らざれば大に運來るの兆あり。五十五六歳にして危く之を凌げば大吉なり。

△小盛女へ＝＝婚期早々纏まる可し、元來貴女は仲々忍耐熱心なる所の美質あれども、剛に過ぐるの失なしとせず、又良人たらんとする方は腹の立つ事も笑に紛らすといふ英質あつて他人より慕はるゝ趣あれども物を秘して打明けざるに過ぐる弊あり、結婚の上は互に其失を愼しまれよ、運勢次第に向ふ。

△神田愛讀者へ＝＝貴女と貴女の良人との間柄を物に譬ふれば淸水の涓々流るゝが如し、淸水なるが故に魚住まず、百年の偕老遂に子無し、然れども福運は次第に來るなり。

△越路の淚婦へ＝＝小資本を以て礦山發掘を企つる人の身上に能く似たり、目的を達すること困難なれば、如かず、今の中に御兩親の言葉に從ひ他へ緣附かる可し。

△山里の美人へ＝＝逃ぐる人を追うが如し、刻一刻も早く急ぎて其人を捕へ以て確乎たる約束の繩にて縛らる可し、然らざれば後に悔ゆとも詮無し。

△神戸片田舎ハイカラ女へ‖不足と思へば益々不足し、之を以て足れりと爲せば、福運徐々に來る、今年中は六かしけれど、二三年の中には着々目的を達せらる、子は二人あり。

△秦野の是非伺度女へ‖貴女の御尋ねは活斷にて判ずる程の事にもあらず、即ち中學程度の學科を三年も勉强せられたる事なれば今二年大に勉强なさるれば小學正敎員の檢定は必ず合格なり、愈々勵みて愈々目的を達せらる可し。

△大阪心配女子へ‖靈鳥の雌雄を籠に入れたるの卦あり、されば御身等御夫婦も鬱々閑居的ならずして須らく心身の活動を計らる可し、二年の中に健兒を設けらるゝなり。

△羽前煩悶女へ‖此處に得られずんば彼處に求む可し、何をか憂へ何をか悲まん。獨立生活は甚だ面白からず、貴女の煩悶は貴女の身を削るの刄にして、此の煩悶を除かんとせば、更に他の緣を求めらる可し、前途大に望あり。

△なには一隅生へ‖御良人は沈着にして物を控目にするの風あるに引換へ貴女は却つて才氣縱橫進んで取るの質なれば之と反對になるやう御心懸あらば四年の中に姙娠せらるゝに至る。

△道棠女へ‖姑御は敢て氣に入らずと思はるゝに非ざれど、貴女は斯く疑はるゝが故に、其心自然に通じて姑御も亦貴女を疑はるに至るなり、故に御身は洒々落々赤心を以て盡さるゝを可とす、何の事も無きなり。

△村松つゆ子へ‖貴女の欲せらるゝ人は花なり、貴女の欲せられざる人は實なり、花は散るの憂あれども實は近き中に圓熟するや疑なし、宜しく御兩親の言葉に從はる可し。

△東北の桃子へ‖貴女の身の上は恰かも車の一輪破損せるに似たり、之を修繕すれば立派に用立つ可しと雖も、一輪にては何の役にも立たず、故に一旦婚約せられたる方と更に確き約を結ばる可し、獨立は求めて水火の中に投ずるが如し。

△ふじ女へ‖活斷にて判ず可き問題に非ず即ち國家

の大法に從はる可し、國家の大法は其家に生れたる長男の相續す可きもので、若し長男無んば長女之に代るが至當なり、然るに貴女他へ嫁し、繼母の連子相續せんか、何れも我國の美風を無視することになつて前途禍運無きや必せり、何ぞ活斷に待つの必要あらんや。

△卯年女へ――本年中には六かし、五年の後なる可し。

△西海のあやめへ――最初思はず心懸けられたる目的は天の命じ玉ふ所なりと御心得あるべし、即ち齒科醫にならんとの心懸必ず成就するなり、更に他を顧みる可からず。

△神田の顯女へ――良人たる可き方は物事に淡泊にして而も人に欺かれ易き風あり、貴女は怜悧にして技藝に巧みなる質なれども短氣なり、故に何れも其の短所を注意すれば相互に平和圓滿目出度し、滿韓の渡航は面白からぬ結果を來す可しと雖も後に幸福ある可ければ憂ふるに足らず。

△西都の若菜女へ――父上の言に從ひ、開業醫の方と結婚せらる可し、親讓の資產は浮雲の如く何等の價値無し、寧ろ無資產の人にして成功するなり。

△隱憂女へ――叔母樣の死去せられたるに付き其の後妻として御身を求めらるゝの緣談、一刻も早く赴かる可し、貴女は形醜しとて世を怨み我身を怨むよりも斯る人に身を任せ一心に赤誠を盡されなば人は木石に非ざれば互に情緒纏綿家庭圓滿疑無し、一刻遲ければ一刻の悔あり。

△知らぬ火女へ――凡て緣談は急に求めて求められず求めずして却つて良緣有るものなれば、忠實に職務を勉勵し、敎育の爲め盡瘁せらる可し、來年の中に天自ら良偶を與へ玉ふなり。

△越野うつり子へ――貴女は糸氏の所謂血の道病に罹れるものなり、一家經營の都合上にて夫婦の別居縦ひ十年を越すも其心に於て相愛すれば何をか悶へ何をか憂へん、早く氣を取り直して醫療を乞はれよ、今二年の中に同棲するを得て目出度きこと此上なし。

△東京しらはぎ女へ――先方の心は「逢へば惡からず離るれば日に疎くなる的」にして健康無事なれど、今

や殆んど貴女を忘れたるの姿なり、絕望に非ざるも待つだけの甲斐無し。

△橫濱二十歲女へ‖貴女が求めらるゝ所の商家勤務中の人を御兩親に懇請せらる可し、必ず末吉なり。

△豆州修善寺鈴子へ‖日影に在りし桃李を南窓の下に移植したるが如き趣あり、日を待たずして花咲く否良媒來るなり。

△弘前心弱女へ‖前女と同じく故障物に被はれたる樹木を日光の能く照す沃土に移したるが如し、福運日に增し月に進む可ければ、取越苦勞などせずに行先を樂まれよ。

△越の國田舍女へ‖貴女と御良人とは水魚啻ならざるの良緣なり、百年の末までも樂しかる可し、今年中に姙娠し他の會社勤務も來年中に望みあり。

△江戶櫻子へ‖天は今二三年の中貴女を艱難の中に修練せしめ、然る後幸運を與へんとし玉ふなり、意中の人との結婚六かし又結婚するも面白からず。

△つる女へ‖貴女の希望せる人に早々結婚を申込まるれば、必ず成立す可し、何をか躊躇し何をか惑はん、

△臺北の迷心女へ‖活斷に判を乞はるゝよりも常識に訴へて考へられなば自ら分明なる可し、夫婦年齡の差殆んど二十にして一方は三回目の緣、而して酒亂の癖、一方は無垢の處女、第一に情緖濃かならず、第二に不姙娠を來し易し、其他の事は請う自ら判斷せられよ。

△春野花子へ‖貴女は今始めて山間を流れ出でたる岩清水なり高きを求めずして低き處に就かば終に漫々たる大海に入らるゝなり、必ず目上よりも目下の人から婚を求められたる時に快諾あらまほし。此心あらば近々の中に申込あり。

△田舍乙女へ‖進んで取らんとするは凶、退いて良緣を待たるゝは吉なり、待たるれは待つ甲斐ありて來年二三月頃に妹君よりも一層の福運に向はるゝなり。

△白菊齋女へ‖今年中に緣談あり、緣談あらば躊躇なく取極めて直ちにホームを作らる可し、一步々々に開運の見込あり。

△浪花苦む生へ＝十重二十重に圍まれたる籠城兵が數萬の援兵を得たるに似たり、益々奮闘すれば最後の勝利疑ひ無し、但し一點驕る心を生ずれば幸運永續せず、父上は長命なり。

△市川きよ女へ＝今年中に良き縁談あれども再び妨害物の來る兆あり、前以て豫防せられなば幸運疑なし。

△那古野すみれ子へ＝理學士工學士の縁は所謂梅と櫻にて何れも可なれども、工學士の方尚一層可なり、早々婚を結ばる可し。

△北越の當惑女へ＝貴女は折を見時を計らひ良人の大酒を諫めらる可し、良人も心中には大酒の不可なるを思はざるに非れば貴女の優しき赤誠を盡さるれば必ず其の甲斐ある可し、然る上は男子の姙娠疑ひ無く家庭も亦和平靄々春の如くなるなり。

△深山雪子女へ＝「良縁は時を待つ可し」とは貴女に當篏らず、貴女は寧ろ自ら求むる的に進んで求めらる可し、其の心になられれば近々に申込あり、然れども「聘すれば妻となり奔れば妾となる」の一語を忘れ玉ふ勿れ。

△葉櫻生へ＝普通に婦人が從ふ可き夫に嫁するが道なれど、貴女は之に反して從はせる的の柔順なる良人にして而も實業家最も適當なり、御尋の如く自身の職を取りつゝ氣長に求めらるゝは大賛成なり。

△中國師走おとめへ＝貴女に限らず凡て獨身生活云云との問は此頃頗る多くあるが、易の極意は「天理に適ふ事は吉、天理に背く事は凶」此の一語に盡きることなれば、何人も特別なる例外を除く外は獨身生活を以て天理に背くことゝなす、故に今後其心を改めて敎育若くは醫業の如く他人に敬意を受く可き人に一生を捧げられよ。

△赤坂心配女へ＝天候將に變ぜんとするの象なれば今年秋頃に良緣の申込ある可し。

△隣の世話燒姥へ＝相應はしき所へと思へば容易に非るも、不足なる所を忍んで行く心になられれば近々の中に緣談自ら來り、而して末必ず吉なり、決して

此期を逸す可からず。

△山形ゆり子女へ＝早々良偶を求めて今の心を家庭の樂しさに移さしむるを以て得策とす、然すれば自ら夜深して讀書するの習慣も亦止む可し。

△不幸の俊子へ＝今一ヶ年を待たる可し、急げば急ぐ程事遲れて而も望む通りにならず。

△山の櫻子へ＝今年の暮若くは來春早々良媒者の來る可ければ、此の良媒者を天使なりと信じて我意を挾む可からず、我意を挾めば後に至つて嗚呼誰彼の言に從へば宜かりしものをとの悔必ずあるなり。

△近江湖邊の橘女へ＝病氣は未だ眞の全快に至らず眞の全快は翌々年の春なり、然る上にて養子を迎へらるゝは吉なり。

△九州迷子へ＝如何に父母の命令なればとて天理に背きたる事に從ふは却て不孝の罪を免れず、されば斷然血族婚姻を謝絶して他方面の養子を迎へらるゝを吉とす。

△在布哇伺女へ＝今年十月頃に受胎せらる可し、運勢は恰も太陽の東天に出でたる象にて愈々盛んに愈々目出度し。

△豊後の十八女へ＝近々良媒あり、或は此の雜誌を見らるゝ頃は既に結納の濟みたる後ならん、何事も柔和婉曲を以て世に處せらるれば幸運益々至る。

橘の袂

三年振で懷しい故郷へ歸つた。小褄からげて岸邊の櫻だり摘んだ邊、今も尚昔の歴史を、さゝやく樣、蛇籠の上を鳥が樂しそうに飛んで居る、村の太郎兵衛が嫁貰ふて、新屋の鼻たらしが今は立派な小學校の教師に成つて居ると、渡しの老爺が、世間話をあとに自分は限りない空想にあこがれながら堤を迴ると、昔なつかしい俤、橘の袂でバッタリ出逢ふたのがお隣の義ちやん、中學の制服制帽今更にきりゝと目に立つ、「オヤ義ちやん」と呼びかけると俄に顔を紅くして去つた。義ちやんは幼夭た弟に酷似なので、自分は今もなつかしくなつかしく慕ふて居るのに………。（みれ子）

◉レモン水は化粧に用ひらる

家庭に於てレモン水を使用するの有効なる事は、是迄あまり認められざりしが、今獨逸專門學者の實驗せる處によれば、レモン汁に依つて一切の黴菌を殺す作用あり、餘程激烈なる黴菌も該液に三十分間浸す時は死滅す、殊にレモンは化粧品として驚くべき効力あり、皮膚を美はしくし、且つ柔かくならしむ事は、夙に英國貴婦人社會にも賞用せられ居れり即ちレモン液の作用によつて、皮膚の脂肪や表皮細胞等要するに垢滓を溶解せしむる効あり、次きには収斂の作用に由り、皮膚の血管を收縮せしめ、皮膚の抵抗力を增さしむるものにて、之れが爲めに霜やけ紅斑などを治し、脂肪や汗の分泌を減じ腐敗を防ぐ事が出來るゆえ、顔面の脂滲みたるもの膚の汗臭きものは此れに由つて、治さるゝのみならず少しく濃くして用ゆる時は、皮膚のあざを拔きそばかすなども薄くする効　力ありといふ。

◉クラブ洗粉の効用

同品は尤も衛生的美身術に適し、亦頭髮の垢を除く事　速にして皮膚の光澤をまし、芳烈なる香氣を放ち、坊間にありふれたる品とは異なり、同品は米國の藥學博士其他化學專門家が多年の研究によりて製造したるものにて帝國化粧品倶樂部の手に輸入されたるものなり

◉夏の前髮じんへヤロール

京橋區館屋町の日加商店にて發賣する束髮用前髮じんへヤロールは最近の米國流行品を輸入したるものにて、從來の如く頭髮を以て製したるに非らずして、尤も細き針金を以て製し髮の格向によりて伸縮自在なれば英吉利卷、夜會結廂髮エス卷等にも用ゆる事を得、且つ價も格安なれば婦人社會に流　行せんとしつゝあり、

毎月五日發行

定價表

一　册（紙數二百八頁）…金二十錢	
四　册（三ケ月分）………前金七十五錢	
八　册（半ケ年分）………前金一圓四十五錢	
十六册（一ケ年分）………前金二圓八十錢	內（定刊數……十二册 增刊四回…一、四、七、十月價格同一）

郵稅　一册　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	四十圓
一等	五十八錢	十七圓	三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

◉本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
◉御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
◉郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
◉總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治四十年六月五日發行　第七卷第八號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

香油
八千代油

煉すき油
油びん付

本舗
東京市日本橋區堺町
井筒屋香油店

根治確證 新治療ラピヨシン

わきが

必ず全治して決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ

價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を深く消除し遂に惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ゐよ

毛のはへる

毛髪發生液 原名ベグネス

有力なる最新液にして毛をはやしたき人は早く試みられよ●わけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髪増生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

化學製品 バシトーコロン液

色の白くなる

盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女紳士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝な

根治確證 新治療

梅毒

キネール

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便にとり如何なる劇烈のばい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこねかんそ骨うづき其他如何なる惡性の梅毒も必根治す

輕症は半劑惡症重症も二劑用ゐて奏效す世間種々雜多の無效なる驅黴藥の比に非ず藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑三圓郵券代用一割増

電話 下谷二五三五

專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舖

女（後付の一）

（後付の三）

文學博士姉崎正治君　文學士齋藤信策君共輯

界の光明に接してより猛然として身を妙法の宣傳に委し、三世の預言者としてその短き一代を終れり、その時々の論議、不朽の述作、收めて此全集五卷の中にあり、日本文明の將來と人生の光明とに焦慮する人士はこの中に一條の大天火を見ん……

樗牛全集第三卷　文藝及史傳

下編

装幀大判金縁金模様附頒美本紙數七百七十頁

（五版）

正價壹圓五拾錢
小包送料拾五錢

釋迦

○緒言○佛陀の誕生○宮中の生活○三苦○佛陀の決心○佛陀の出城○車匿及佛陀の道○成道○佛陀の布教

平相國

○平家興隆の由來○清盛の前半生○一門の榮華○重盛論○源氏の勃興○入道の最後○清盛論▲附○平家雜感○清盛骨相考

菅公傳

○序論○菅原氏の傳統及少時○菅公の性格○政治上の菅公○詩人菅公○管公の崇拜○菅公年表○大隈伯が菅公談の後に書す○菅公論に就て

史傳雜纂

○南歐美術談○ナポレオン三世○ジャヌ、ダルク○ハイネが事○冠鎧日記○豪傑の半面

文藝評論補遺

樗牛全集第四卷　時勢及思索

全

装幀大判金縁金模様附頒美本紙數千百十四頁

（五版）

正價壹圓五拾錢
小包送料貳拾錢

第一期　倫理、問題、研究の時代

人生終に奈何○厭世論○老子の哲學○人生の價値及び厭世主義外に十目

第二期　國家主義の時代

日本主義○日本主義と哲學○國民的哲學○自殺論外に廿六目

第二期　雜篇

歷史と人種○成敗と正義○社會問題○私立學校を論じて當局者の注意を論ず外に八十一目

第三期　信仰覺醒の時代

美的生活を論ず○日蓮上人とは如何なる人ぞ○日蓮と基督○吾が好む文章外に八目

第三期　雜篇

樗牛全集第五卷　想華及消息

全

著者墳墓の圖
原稿筆蹟
寫眞銅版挿入

（四版）

正價壹圓五拾錢
小包送料拾五錢

◎瀧口入道（歷史小說）

◎感想＝吾妹の墓▲戀情論▲故郷論▲雪中梅▲今樣三首（敦盛、忠度、小督）▲淮亭郎の悲哀▲傷心錄▲思ひ出の記外十二項

◎雜篇＝鳥海山紀行▲序詞▲夏季の學生▲海の文藝▲潟見潟日記

◎消息＝仙臺より國元實父へ▲病院より姉崎博士へ▲大磯より笹岡臨風氏へ▲其池消息百餘通

◎外篇＝倫理教科書（社會總論、皇室に對する本務）▲世界文明史（文明とは何ぞや、羅馬帝國と基督教）▲論理學▲近世美學

（後付の五）

(後付の六)

(後付の七)

紅葉山人　尾崎徳太郎君遺著

紅葉全集

全部六册總紙數五千六百頁全部完成

洋裝大判　總クロース　上製　金文字金模樣表紙

正價一册壹圓八拾錢　小包送料一册拾五錢宛

全部六册　正價金拾圓　全部小包料金八拾錢

麗、春日の如く、清、秋月の如きもの吾紅葉山人の文章也。山人一生を文章に托し、奇思縱橫字々靈快を極めざるなし。曾て文壇革新の急先鋒となりて硯友社を創め、後群英を養ふて藻社の名一世を壓す。山人が明治文學に寄與するの勢天下の齊しく知る所にして、仰いで以て泰斗と爲すは之が爲め也。今や山人逝て、文壇頓に寂々たり。山人の逝くや命也。而も山人の精神は萬古常に新也。蓋し山人の文章の如きは傳へて以て後代に貽し、長く河嶽に藏すべし、則ち親朋同人相謀りて十千萬言を蒐み、凡そ山人が述作に係るものは、其長と短とを問はず、悉く之を網羅して完璧と爲し、名けて紅葉全集といふ。思ふに七寶の散りて點數せらるは纏れて一環と爲すの美に若かず、全集分ちて六、其作年の順を追ふて之を收め、謹みて江湖の文を愛し才を憐むの淑女紳士諸君に薦む。

目次

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の八）


健腦丸
腦病
神經病全治良劑
本劑の赫々たる信認は
世既に定評あり
迷ふ勿れ腦病患者
腦病藥の覇王
▲●●一日早く本劑を服せば。
●●一日早く不快なる病苦を脱
して。爽快なる健康を得るの
である
▲常に持藥として連服せば。逆
上を引下げ。恐るべき腦充
血を全治し。中風卒中を未
發に防ぎ。記臆力を增進する
特効あるは獨り健腦丸のみで
ある
効能
腦充血
腦膜炎
頭痛
大便秘結
逆上症
中風
卒中
五週分 金貳円
郵税 十戔
三週分 壹円廿戔
仝 十戔
二週分 八拾五戔
仝 六戔
一週分 四拾五戔
仝 四戔
三日分 貳拾戔
仝 貳戔
一日半 金拾戔
仝 貳戔
本舗 大阪市心斎橋 丹平商會藥房

女學世界
第七卷第八號
明治四十年六月五日發行（毎月一回五日發行）
明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可



（定價金貳拾錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界(じょがくせかい)　明治期復刻版52
明治40年5月(第7巻第7号)、6月(第7巻第8号)

2008年12月10日　第1刷発行　　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業]　03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3507-3　C3321